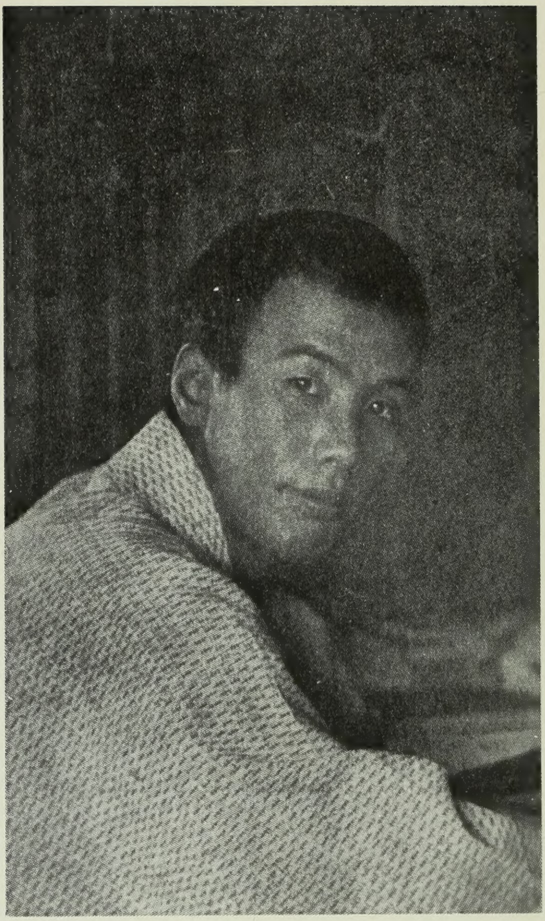
芥川龍之介全集

第一巻



大正六年八月撮影



「羅生門」出版記念會（大正六年六月二十七日）

第一卷目錄

老年

橋場の玉川軒と云ふ茶式料理屋で、一中節の順講があつた。

朝からどんより曇つてゐたが、午ごろにはとうとう雪になつて、あかりがつく時分にはもう、庭の松に張つてある雪よけの繩がたるむ程つもつてゐた。けれども、硝子戸と障子とで、二重にしめきつた部屋の中は、火鉢のほてりで、のぼせる位あたゝかい。人の悪い中洲の大將などは、鐵無地の羽織に、茶のきんとうしの御召揃ひか何かですましてゐる六金さんをつかまへて、「どうです、一枚脱いぢやあ。黒油が流れますぜ。」と、からかつたものである。六金さんの外にも、柳橋のが三人、代地の待合の女將が一人來てゐたが、皆四十を越した人たちばかりで、それに小川の旦那や中洲の大將などの御新造や御隱居が六人ばかり、男客は、宇治紫曉と云ふ、腰の曲つた一中の師匠と、素人の旦那衆が七八人、其中の三人は、三座の芝居や山王樣の御上覽祭を知つてゐる連中なので、この人たちの間では深川の鳥羽屋の寮であつた義太夫の御浚ひの話しや山城河

岸の津藤が催した千社札の會の話しが大分賑に出たやうであつた。

座敷は離れの十五疊で、此うちでは一番、廣い間らしい。籠行燈の中にともした電燈が所々に丸い影を神代杉の天井にうつしてゐる。うす暗い床の間には、寒梅と水仙とが古銅の瓶にしをらしく投げ入れてあつた。軸は太祇の筆であらう。黄色い芭蕉布で煤けた紙の上下をたち切つた中に、細い字で「赤き實とみてよる鳥や冬椿」とかいてある。小さな青磁の香爐が煙も立てずにひつそりと、紫檀の臺にのつてゐるのも冬めかしい。

其前へ毛氈を二枚敷いて、床をかけるかはりにした。鮮な緋の色が、三味線の皮にも、ひく人の手にも、七寳に花菱の紋が抉つてある、華奢な桐の見臺にも、あたゝかく反射してゐるのである。其床の間の兩側へみな、向ひあつて、すわつてゐた。上座は師匠の紫曉で、次が中洲の大將、それから小川の旦那と順を追つて右が殿方、左が婦人方とわかれてゐる。其右の列の末座にすわつてゐるのが此うちの隱居であつた。

隱居は房さんと云つて、一昨年、本卦返りをした老人である。十五の年から茶屋酒の味をおぼえて、二十五の前厄には、金瓶大黑の若太夫と心中沙汰になつた事もあると云ふが、それから間

もなく親ゆづりの玄米問屋の身上をすつてしまひ、器用貧乏と、持つたが病の酒癖とで、歌澤の師匠もやれば俳諧の點者もやると云ふ具合に、それからそれへと微祿して一しきりは、三度ののにも事をかく始末だつたが、それでも幸に、僅な緣つゞきから今では此料理屋に引きとられて、樂隱居の身の上になつてゐる。中洲の大將の話では、子供心にも忘れないのは、其頃盛りだつた房さんが、神田祭の晚肌守りに「野路の村雨」のゆかたで喉をきかせた時だつたと云ふが、此頃はめつきり老いこんで、すきな歌澤もめつたに謠はなくなつたし、一頃凝つた鶯も何時の間にか飼はなくなつた。かはりめ毎に覗き覗きした芝居も、成田屋や五代目がなくなつてからは、行く張合がなくなつたのであらう。今も、黃いろい秩父の對の着物に茶博多の帶で、末座にすわつて聞いてゐるのを見ると、どうしても、一生を放蕩と遊藝とに費した人とは思はれない。中洲の大將や小川の旦那が、「房さん、板新道の――何とか云つた…さうさう八重次お菊。久しぶりであの話でも伺はうぢやありませんか。」などと、話しかけても、「いや、もう、當節はから意氣地がなくなりまして。」と、禿頭をなでながら、小さな體を一層小さくするばかりである。

それでも妙なもので、二段三段ときいてゆくうちに、「黑髮のみだれていまのものおもひ」だの、

「夜さこいと云ふ字を金絲でぬはせ、裾に清十郎とねたところ」だのと云ふ、なまめいた文句を、二の上つた、かげへかげへとまはつてゆく三味線の音につれて、語つてゆく、さびた聲が久しく眠つてゐた此の老人の心を、少しづゝ目ざませて行つたのであらう。始めは背をまげて聞いてゐたのが、何時の間にか腰を眞直に體をのばして、六金さんが「淺間の上」を語り出した時分には、「うらみも戀も、のこり寢の、もしや心のかはりやせん」と云ふあたりから、目をつぶつたまゝ、絃の音にのるやうに小さく肩をゆすつて、わき眼にも昔の夢を今に見かへしてゐるやうに思はれた。しぶいさびの中に、長唄や清元にきく事の出來ないつやをかくした一中の唄と絃とは、幾年となく此世にすみふるして、すいもあまいも、かみ分けた心の底にも、時ならない情の波を立てさせずには置かないのであらう。

「淺間の上」がきれて「花子」のかけあひがすむと、房さんは「どうぞ、ごゆるり。」と挨拶をして、座をはづした。丁度、其時、御會席で御膳が出たので、暫はいろいろな話で賑だつたが、中洲の大將は、房さんの年をとつたのに、よくよく驚いたと見えて、

「あゝも變るものかね。辻番の老爺のやうになつちやあ、房さんもおしまひだ。」

「いつか、あなたが仰有つたのはあの方？」と六金さんがきくと、

「師匠も知つてるから、きいてごらんなさい。藝事にやあ、器用なたちでね。歌澤もやれば一中もやる。さうかと思ふと、新内の流しに出た事もあると云ふ男なんで。もとはあれでも師匠と同じ宇治の家元へ、稽古に行つたもんでさあ。」

「駒形の、何とか云ふ一中の師匠——紫蝶ですか——あの女と出來たのもあの頃ですぜ。」と小川の旦那も口を出した。

房さんの噂はそれからそれへと暫の間つゞいたが、やがて柳橋の老妓の「道成寺」がはじまると共に、座敷は又もとのやうに靜かになつた。これがすむと直、小川の旦那の「景清」になるので、旦那は一寸座をはづして、はゞかりに立つた。實は其序に、生玉子でも吸はうと云ふ腹だつたのだが、廊下へ出ると中洲の大將が矢張そつとぬけて來て、

「小川さん、ないしよで一杯やらうぢやあ、ありませんか。あなたの次は私の「鉢の木」だからね。しらふぢやあ、第一腹がすわりませんや。」

「私も生玉子か、冷酒で一杯ひつかけやうと思つてゐた所で、御同様に酒の氣がないと意氣地が

ありませんからな。」

そこで一緒に小用を足して、廊下づたひに母屋の方へまはつて來ると、どこかで、ひそひそ話し聲がする。長い廊下の一方は硝子障子で、庭の刀柏や高野槇につもつた雪がうす青く暮れた間から、暗い大川の流れをへだてゝ、對岸のともしびが黄いろく點々と數へられる。川の空をちりちりと銀の鋏をつかふやうに、二聲ほど千鳥が鳴いたあとは、三味線の聲さへ聞えず戸外も戸内もしんとなつた。きこえるのは、藪柑子の紅い實をうづめる雪の音、雪の上にふる雪の音、八つ手の葉をすべる雪の音が、ミシン針のひゞくやうにかすかな囁きをかはすばかり、話し聲は其中をしのびやかにつゞくのである。

「猫の水のむ音でなし。」と小川の旦那が呟いた。足をとめてきいてゐると聲は、どうやら右手の障子の中からするらしい。それは、とぎれ勝ちながら、かう聞えるのである。

「何をすねてるんだつてことよ。さう泣いてばかりゐちやあ、仕樣ねえわさ。なに、お前さんは紀の國屋の奴さんとわけがある……冗談云つちやいけねえ。奴のやうなばゞあをどうするものかな。さましておいて、たんとおあがんなはいだと。さあさうきくから惡いわな。自體、お前と云

ふものがあるのに、外へ女をこしらへてすむ譯のものぢやあねえ。そも〱の馴初めがさ。歌澤の淩ひで己が「わがもの」を語つた。あの時お前が……」

「房的だぜ。」

「年をとつたつて、隅へはおけませんや。」小川の旦那もかう云ひながら、細目にあいてゐる障子の内を、及び腰にそつと覗きこんだ。二人とも、空想には白粉のにほひがうかんでゐたのである。

部屋の中には、電燈が影も落さないばかりに、ぼんやりともつてゐる。三尺の平床には、大德寺物の軸がさびしくかゝつて、支那水仙であらう、青い芽をつゝましくふいた、白交趾の水盤が其下に置いてある。床を前に置炬燵にあたつてゐるのが房さんで、此方からは、黑天鵞絨の襟のかゝつてゐる八丈の小搔巻をひつかけた後姿が見えるばかりである。

女の姿は何處にもない。紺と白茶と格子になつた炬燵蒲團の上には、端唄本が二三冊ひろげられて頸に鈴をさげた小さな白猫が其側に香箱をつくつてゐる。猫が身うごきをするたびに、頸の鈴がきこえるか、きこえぬかわからぬほどかすかな音をたてる。房さんは禿頭を柔な猫の毛に觸れるばかりに近づけて、ひとり、なまめいた語を誰に云ふともなく繰り返してゐるのである。

「其時にお前が來てよ。あゝまで語つた己が憎いと云つた。藝事と……」

中洲の大將と小川の旦那とは默つて、顏を見合せた。そして、長い廊下をしのび足で、又座敷へ引きかへした。

雪はやむけしきもない。……

（大正三年四月十四日）

青年と死

×

すべて背景を用ひない。宦官が二人話しながら出て來る。

——今月も生み月になつてゐる妃が六人ゐるのですからね。身重になつてゐるのを勘定したら何十人ゐるかわかりませんよ。

——それが皆、相手がわからないのですか。

——一人もわからないのです。一體妃たちは私たちより外に男の足ぶみの出來ない後宮にゐるのですからそんな事の出來る訣はないのですがね。それでも月々子を生む妃があるのだから驚きます。

——誰か忍んで來る男があるのぢやありませんか。

――私も始はさう思つたのです。所がいくら番の兵士の數をふやしても、妃たちの子を生むのは止りません。

――妃たちに訊いてもわかりませんか。

――それが妙なのです。色々訊いて見ると、忍んで來る男があるにはある。けれども、それは聲ばかりで姿は見えないと云ふのです。

――成程、それは不思議ですね。

――まるで嘘のやうな話です。併し何しろこれだけの事が其不思議な忍び男に關する唯一の知識なのですからね、何とか之から豫防策を考へなければなりません。あなたはどう御思ひです。

――別に之と云つて名案もありませんが兎に角その男が來るのは事實なのでせう。

――それはさうです。

――それぢやあ砂を撒いて置いたらどうでせう。その男が空でも飛んで來れば別ですが、歩いて來るのなら足跡はのこる筈ですからね。

――成程、それは妙案ですね。その足跡を印に追ひかければきつと捕まるでせう。

——物は試しですからまあやつて見るのですね。

——早速さうしませう。（二人とも去る）

×

腰元が大ぜいで砂をまいてゐる。

——さあすつかりまいてしまひました。

——まだ其隅がのこつてゐるわ。（砂をまく）

——今度は廊下をまきませう。（皆去る）

×

青年が二人蠟燭の灯の下に坐つてゐる。

B　あすこへ行くやうになつてからもう一年になるぜ。

A　早いものさ。一年前までは唯一實在だの最高善だのと云ふ語に食傷してゐたのだから。

B　今ぢやあアートマンと云ふ語さへ忘れかけてゐるぜ。

A　僕もとうに「ウパニシヤツドの哲學よ、さやうなら」さ。

B　あの時分はよく生だの死だのと云ふ事を眞面目になつて考へたものだつけな。

A　なあにあの時分は唯考へるやうな事を云つてゐただけさ。考へる事なら此頃の方がどの位考へてゐるかわからない。

B　さうかな。僕はあれ以來一度も死なんぞと云ふ事を考へた事はないぜ。

A　さうしてゐられるならそれでもいゝさ。

B　だがいくら考へても分らない事を考へるのは愚ぢやあないか。

A　併し御互に死ぬ時があるのだからな。

B　まだ一年や二年ぢやあ死なないね。

A　どうだか。

B　それは明日にも死ぬかもわからないさ。けれどもそんな事を心配してゐたら、何一つ面白い事は出來なくなつてしまふぜ。

A　それは間違つてゐるだらう。死を豫想しない快樂位、無意味なものはないぢやあないか。

B　僕は無意味でも何でも死なんぞを豫想する必要はないと思ふが。

A　併しそれでは好んで欺罔に生きてゐるやうなものぢやないか。

B　それはさうかもしれない。

A　それなら何も今のやうな生活をしなくつたつてすむぜ。君だつて欺罔を破る爲にかう云ふ生活をしてゐるのだらう。

B　兎に角今の僕にはまるで思索する氣がなくなつてしまつたのだからね、君が何と云つてもかうしてゐるより外に仕方がないよ。

A　（氣の毒さうに）それならそれでいゝさ。

B　くだらない議論をしてゐる中に夜がふけたやうだ。そろ〳〵出かけやうか。

A　うん。

B　ぢやあ其着ると姿の見えなくなるマントルを取つてくれ給へ。（Aとつて渡す。Bマントルを着ると姿が消えてしまふ。聲ばかりがのこる。）さあ、行かう。

Ａ（マントルを着る。同じく消える。聲ばかり。）夜露が下りてゐるぜ。

×

聲ばかりきこえる。暗黒。

Ａの聲　暗いな。

Ｂの聲　もう少しで君のマントルの裾をふむ所だつた。

Ａの聲　ふきあげの音がしてゐるぜ。

Ｂの聲　うん、もう露臺の下へ來たのだよ。

×

女が大勢裸ですわつたり、立つたり、ねころんだりしてゐる。薄明り。

――まだ今夜は來ないのね。

――もう月もかくれてしまつたわ。

――早く來ればいゝのにさ。

――もう聲がきこえてもいゝ時分だわね。

――聲ばかりなのがもの足りなかつた。

――えゝ、それでも肌ざはりはするわ。

――はじめは怖かつたわね。

――私なんか一晩中ふるへてゐたわ。

――私もよ。

――さうすると「おふるへでない」つて云ふのでせう。

――えゝ、えゝ。

――猶怖かつたわ。

――あの方のお産はすんで？

――とうにすんだわ。

――うれしがつていらつしやるでせうね。

——可哀いゝお子さんよ。

——私も母親になりたいわ。

——おゝいやだ、私はちつともそんな氣はしないわ。

——さう？

——えゝ、いやぢやありませんか。私はたゞ男に可哀がられるのが好き。

——まあ。

Ａの聲　今夜はまだ灯がついてるね。お前たちの肌が、青い紗の中でうごいてゐるのはきれいだよ。

——あらもういらしつたの。

——こつちへいらつしやいよ。

——今夜はこつちへいらつしやいました。

Ａの聲　お前は金の腕環なんぞはめてゐるね。

——えゝ、何故？

Bの聲　何でもないのさ。お前の髮は、素馨のにほひがするぢやないか。

――えゝ。

Aの聲　お前はまだふるへてゐるね。

――うれしいのだわ。

――こつちへいらつしやいな。

――まだ、そこにいらつしやるの。

Bの聲　お前の手は柔いね。

――いつ迄も可哀がつて頂戴な。

――今夜は外へいらしつちやあいやよ。

――きつとよ。よくつて。

――あゝ、あゝ。

女の聲がだん〳〵微な呻吟になつてしまひに聞えなくなる。

沈默。急に大勢の兵卒が槍を持つてどこからか出て來る。兵卒の聲。

――こゝに足あとがあるぞ。

――こゝにもある。

――そら、そこへ逃げた。

――逃がすな。逃がすな。

騷擾。女はみな悲鳴をあげてにげる。兵卒は足跡をたづねて、其處此處を追ひまはる。灯が消えて舞臺が暗くなる。

×

AとBとマントルを着て出てくる。反對の方向から黒い覆面をした男が來る。うす暗がり。

AとB　そこにゐるのは誰だ。

男　お前たちだつて己の聲をきゝ忘れはしないだらう。

AとB　誰だ。

男　己は死だ。

AとB　死？

男　そんなに驚くことはない。己は昔もゐた。今もゐる。是からもゐるだらう。事によると「ゐる」と云へるのは己ばかりかも知れない。

A　お前は何の用があつて來たのだ。

男　己の用は何時も一つしかない筈だが。

B　その用で來たのか。あゝ其用で來たのか。

A　うんその用で來たのか。己はお前を待つてゐた。今こそお前の顔が見られるだらう。さあ己の命をとつてくれ。

男　(Bに)お前も己の來るのを待つてゐたか。

B　いや、己はお前なぞを待つてはゐない。己は生きたいのだ。どうか己にもう少し生を味はせてくれ。己はまだ若い。己の脈管にはまだ暖い血が流れてゐる。どうか己にもう少し己の生活を樂ませてくれ。

男　お前も己が一度も歎願に動かされた事のないのを知つてゐるだらう。

B　（絶望して）どうしても己は死ななければならないのか。あゝどうしても己は死ななければならないのか。

男　お前は物心がつくと死んでゐたのも同じ事だ。今迄太陽を仰ぐことが出來たのは己の慈悲だと思ふがいい。

B　それは己ばかりではない。生まれる時に死を負つて來るのはすべての人間の運命だ。

男　己はそんな意味でさう云つたのではない。お前は今日迄己を忘れてゐたらう。己の呼吸を聞かずにゐたらう。お前はすべての欺罔を破らうとして快樂を求めながら、お前の求めた快樂其物が矢張欺罔にすぎないのを知らなかつた。お前が己を忘れた時、お前の靈魂は餓ゑてゐた。餓ゑた靈魂は常に己を求める。お前は己を避けようとして反て己を招いたのだ。

B　あゝ。

男　己はすべてを亡ぼすものではない。すべてを生むものだ。お前はすべての母なる己を忘れてゐた。己を忘れるのは生を忘れるのだ。生を忘れた者は亡びなければならないぞ。

B　あゝ。（仆れて死ぬ）

男　（笑ふ）莫迦な奴だ。（Ａに）怖がることはない。もつと此方へ來るがいゝ。

Ａ　己は待つてゐる。己は怖がるやうな臆病者ではない。

男　お前は己の顏をみたがつてゐたな。もう夜もあけるだらう。よく己の顏を見るがいい。

Ａ　その顏がお前か？　己はお前の顏がそんなに美しいとは思はなかつた。

男　己はお前の命をとりに來たのではない。

Ａ　いや己は待つてゐる。己はお前の外に何も知らない人間だ。己は命を持つてゐても仕方ない人間だ。己の命をとつてくれ。そして己の苦しみを助けてくれ。

第三の聲　莫迦な事を云ふな。よく己の顏をみろ。お前の命をたすけたのはお前が己を忘れなかつたからだ。しかし己はすべてのお前の行爲を是認してはゐない。よく己の顏を見ろ。お前の誤りがわかつたか。是からも生きられるかどうかはお前の努力次第だ。

Ａの聲　己にはお前の顏がだん〳〵若くなつてゆくのが見える。

第三の聲　（靜に）夜明だ。己と一緒に大きな世界へ來るがいゝ。

黎明の光の中に黑い覆面をした男とＡとが出て行くのが見える。

×

兵卒が五六人でBの死骸を引ずつて來る。死骸は裸、所々に創がある。

――龍樹菩薩に關する俗傳より――

（大正三年八月十四日）

ひよつとこ

吾妻橋の欄干によつて、人が大ぜい立つてゐる。時々巡査が來て小言を云ふが、すぐ又元のやうに人山が出來てしまふ。皆、この橋の下を通る花見の船を見に、立つてゐるのである。

船は川下から、一二艘づゝ、引き潮の川を上つて來る。大抵は傳馬に帆木綿の天井を張つて、其まはりに紅白のだんだらの幕をさげてゐる。そして、舳には、旗を立てたり古風な幟を立てたりしてゐる。中にゐる人間は、皆醉つてゐるらしい。幕の間から、お揃ひの手拭を、吉原かぶりにしたり、米屋かぶりにしたりした人たちが「一本、二本」と拳をうつてゐるのが見える。首をふりながら、苦しさうに何か唄つてゐるのが見える。それが橋の上にゐる人間から見ると、滑稽としか思はれない。お囃子をのせたり樂隊をのせたりした船が、橋の下を通ると、橋の上では「わあつ」と云ふ哂ひ聲が起る。中には「莫迦」と云ふ聲も聞える。

橋の上から見ると、川は亞鉛板のやうに、白く日を反射して、時々、通りすぎる川蒸汽かその

上に眩しい横波の鍍金をかけてゐる。さうして、その滑な水面を、陽氣な太鼓の音、笛の音、三味線の音が虱のやうにむづ痒く刺してゐる。札幌ビールの煉瓦壁のつきる所から、土手の上をずつと向う迄、煤けた、うす白いものが、重さうにつゞいてゐるのは、丁度、今が盛りの櫻である。言問の棧橋には、和船やボートが澤山ついてゐるらしい。それが此處から見ると、丁度大學の艇庫に日を遮られて、唯ごみ〳〵した黑い一色になつて動いてゐる。

すると、そこへ橋をくゞつて、又船が一艘出て來た。矢張さつきから何艘も通つたやうな、お花見の傳馬である。紅白の幕に同じ紅白の吹流しを立てゝ、赤く櫻を染めぬいたお揃ひの手拭で、鉢巻きをした船頭が二三人櫓と棹とで、代る〲漕いでゐる。それでも船足は餘り早くない。幕のかげから見える頭數は五十人もゐるかと思はれる。橋をくゞる前迄は、二梃三味線で「梅にも春」か何かを彈いてゐたが、それがすむと、急に、ちやんぎりを入れた馬鹿囃子が始まつた。橋の上の見物がまた「わあつ」と哂ひ聲を上げる。中には人ごみに押された子供の泣き聲も聞える。「あらごらんよ、踊つてゐるからさ」と云ふ甲走つた女の聲も聞える――船の上では、ひよつとこの面をかぶつた背の低い男が、吹流しの下で、馬鹿踊を踊つてゐるのである。

ひよつとこは、秩父銘仙の兩肌をぬいで、友禪の胴へむき身絞りの袖をつけた、派手な襦袢を出してゐる。黑八の襟がだらしなくはだけて、紺獻上の帶がほどけたなり、だらりと後へぶら下がつてゐるのを見ても、餘程、醉つてゐるらしい。踊は勿論、出たらめである。唯、いゝ加減に、お神樂堂の上の莫迦のやうな身ぶりだとか、手つきだとかを、繰返してゐるのにすぎない。それも酒で體が利かないと見えて、時々は唯、中心を失つて舷から落ちるのを防ぐ爲に、手足を動かしてゐるとしか、思はれない事がある。

それが又、一層可笑しいので、橋の上では、わい〳〵云つて、騷いでゐる。さうして、皆、哂ひながら、さま〳〵な批評を交換してゐる。「どうだい、あの腰つきは」「いゝ氣なもんだぜ、何處の馬の骨だらう」「をかしいねえ、あらよろけたよ」「一そ素面で踊りやいゝのにさ」――ざつとこんな調子である。

その内に、醉が利いて來たのか、ひよつとこの足取がだん〳〵怪しくなつて來た。丁度、不規則な Metronome のやうに、お花見の手拭で頰かぶりをした頭が、何度も船の外へのめりさうになるのである。船頭も心配だと見えて、二度ばかり後から何か聲をかけたが、それさへまるで耳

にははいらなかつたらしい。

すると、今し方通つた川蒸汽の横波が、斜に川面をすべつて來て、大きく傳馬の底を搖り上げた。その拍子にひよつとこの小柄な體は、どんとそのあほりを食つたやうに、ひよろ〳〵前の方へ三足ばかりよろけて行つたが、それがやつと踏止つたと思ふと、今度はいきなり廻轉を止められた獨樂のやうに、ぐるりと一つ大きな圓をかきながら、あつと云ふ間に、メリヤスの股引をはいた足を空へあげて、仰向けに傳馬の中へ轉げ落ちた。

橋の上の見物は、又どつと聲をあげて哂つた。

船の中ではそのはずみに、三味線の棹でも折られたらしい。幕の間から見ると、面白さうに醉つて騷いでゐた連中が、慌てゝ立つたり坐つたりしてゐる。今まではやしてゐた馬鹿囃子も、息のつまつたやうに、ぴつたり止んでしまつた。さうして、唯、がや〳〵云ふ人の聲ばかりする。何しろ思ひもよらない混雜が起つたのにちがひない。それから少時すると、赤い顏をした男が、幕の中から首を出して、さも狼狽したやうに手を動かしながら、早口で何か船頭に云ひつけた。すると、傳馬はどうしたのか、急に取舵をとつて、舳を櫻とは反對な山の宿の河岸に向けはじめ

た。

橋の上の見物が、ひよつとこの頓死した噂を聞いたのはそれから十分の後である。もう少し詳しい事は、翌日の新聞の十把一束と云ふ欄にのせてある。それによると、ひよつとこの名は山村平吉、病名は脳溢血と云ふ事であつた。

× × × × × ×

山村平吉はおやぢの代から、日本橋の若松町にゐる繪具屋である。死んだのは四十五で、後には痩せた、雀斑のあるお上みさんと、兵隊に行つてゐる息子とが殘つてゐる。暮しは裕だと云ふ程ではないが、雇人の二三人も使つて、どうにか人並にはやつてゐるらしい。人の噂では、日清戰爭頃に、秋田あたりの岩緑青を買占めにかゝつたのが、當つたので、それ迄は老鋪と云ふ丈で、お得意の數も指を折る程しか無かつたのだと云ふ。

平吉は、圓顏の、頭の少し禿げた、眼尻に小皺のよつてゐる、何處かへうきんな所のある男で、誰にでも腰が低い。道樂は飲む一方で、酒の上はどちらかと云ふと、まづいい方である。唯、醉

ふと、必、馬鹿踊をする癖があるが、之は當人に云はせると、昔、濱町の豊田の女將が、巫女舞を習つた時分に稽古をしたので、その頃は、新橋でも芳町でも、お神樂が大流行だつたと云ふ事である。しかし、踊は勿論、當人が味噌を上げる程のものではない。惡く云へば、出たらめで、善く云へば喜撰でも踊られるより、嫌味がないと云ふ丈である。尤も之は、當人も心得てゐると見えて、しらふの時には、お神樂のおの字も口へ出した事はない。「山村さん、何かお出しなさいな」など丶、すゝめられても、冗談に紛らせて逃げてしまふ。それでゐて、少しお神酒がまはると、すぐに手拭をかぶつて、口で笛と太鼓の調子を一つにとりながら、腰を据ゑて、肩を搖つて、瓢吹面舞と云ふのをやりたがる。さうして、一度踊り出したら、何時までも圖にのつて、踊つてゐる。はたで三味線を彈いてゐようが、謡をうたつてゐようが、そんな事にはかまはない。

所が、その酒が祟つて、卒中のやうに倒れたなり、氣の遠くなつてしまつた事が、二度ばかりある。一度は町内の洗湯で、上り湯を使ひながら、セメントの流しの上へ倒れた。その時は腰を打つただけで、十分とたゝない内に氣がついたが、二度目に自家の藏の中で仆れた時には、醫者を呼んで、やつと正氣にかへして貰ふまで、彼是三十分ばかりも手間どつた。平吉はその度に、

醫者から酒を禁じられるが、殊勝らしく、赤い顏をしずにゐるのはほんのその當座だけで、何時でも「一合位は」からだん〳〵枡數がふえて、半月とたゝない中に、いつの間にか又元の杢阿彌になつてしまふ。それでも、當人は平氣なもので「矢張飮まずにゐますと、反て體にいけませんやうで」など〻勝手な事を云つてすましてゐる。

× × × × × ×

しかし平吉が酒をのむのは、當人の云ふやうに生理的に必要があるばかりではない。心理的にも、飮まずにはゐられないのである。何故かと云ふと、酒さへのめば氣が大きくなつて、何となく誰の前でも遠慮が入らないやうな心持ちになる。踊りたければ踊る。眠たければ眠る。誰もそれを咎める者はない。平吉には、何よりも之が難有いのである。何故之が難有いか。それは自分にもわからない。

平吉は唯醉ふと、自分が全、別人になると云ふ事を知つてゐる。勿論、馬鹿踊を踊つたあとで、しらふになつてから、「昨夜は御盛でしたな」と云はれると、すつかりてれてしまつて、「どうも醉

ぱらふとだらしはありませんでね。何をどうしたんだか、今朝になつてみると、まるで夢のやうな始末で」と月並な嘘を云つてゐるが、實は踊つたのも、眠てしまつたのも、未にちやんと覺えてゐる。さうして、その記憶に殘つてゐる自分と今日の自分と比較すると、どうしても同じ人間だとは思はれない。それなら、どつちの平吉がほんとうの平吉かと云ふと、之も彼には、判然とわからない。醉つてゐるのは一時で、しらふでゐるのは始終である。さうすると、しらふでゐる時の平吉の方が、ほんとうの平吉のやうに思はれるが、彼自身では妙にどつちとも云ひ兼ねる。何故かと云ふと、平吉が後で考へて、莫迦々々しいと思ふ事は、大抵醉つた時にした事ばかりである。馬鹿踊はまだ好い。花を引く。女を買ふ。どうかすると、こゝに書けもされないやうな事をする。さう云ふ事をする自分が、正氣の自分だとは思はれない。

Janus と云ふ神樣には、首が二つある。どつちがほんとうの首だか知つてゐる者は誰もゐない。平吉もその通りである。

ふだんの平吉と醉つてゐる時の平吉とはちがふと云つた。そのふだんの平吉程、嘘をつく人間は少いかもしれない。之は平吉が自分で時々、さう思ふのである。しかし、かう云つたからと云

つて、何も平吉が損得の勘定づくで嘘をついてゐると云ふ譯では毛頭ない。第一彼は、殆、嘘をついてゐると云ふ事を意識せずに、嘘をついてゐる。尤もついてしまふとすぐ、自分でもさうと氣がつくが、現についてゐる時には、全然結果の豫想などをする餘裕は、無いのである。

平吉は自分ながら、何故さう嘘が出るのだかわからない。が人と話してゐると自然に云はうとも思はない嘘が出てしまふ、しかし、格別それが苦になる訣でもない。悪い事をしたと云ふ氣がする譯でもない。そこで平吉は、毎日平氣で嘘をついてゐる。

× × × × × ×

平吉の口から出た話によると、彼は十一の年に南傳馬町の紙屋へ奉公に行つた。するとそこの旦那は大の法華氣違ひで、三度の飯も御題目を唱へない内は、箸をとらないと云つた調子である。所が、平吉がお目見得をしてから二月ばかりするとそこのお上みさんがふとした出來心から店の若い者と一しよになつて着のみ着のまゝでかけ落ちをしてしまつた。そこで、一家安穩の爲にした信心が一向役にたゝないと思つたせゐか、法華氣違ひだつた旦那が急に、門徒へ宗旨替をして、

帝釋様のお掛地を川へ流すやら、七面様の御影を釜の下へ入れて燒くやら、大騒ぎをした事があるさうである。

それから又、そこに廿迄ゐる間に店の勘定をごまかして、遊びに行つた事が度々あるが、その頃、馴染みになつた女に、心中をしてくれと云はれて弱つた覺もある。とう〳〵一寸逃れを云つて、其場は納つたが、後で聞くと矢張其女は、それから三日ばかりして、錺屋の職人と心中をしてゐた。深間になつてゐた男が外の女に見かへたので、面當てに誰とでも死にたがつてゐたのである。

それから廿の年におやぢがなくなつたので、紙屋を暇をとつて自家へ歸つて來た。半月ばかりすると或日、おやぢの代から使つてゐた番頭が、若旦那に手紙を一本書いて頂きたいと云ふ。五十を越した實直な男で、其時右の手の指を痛めて、筆を持つ事が出來なかつたのである。「萬事都合よく運んだからその中にゆく。」と書いてくれと云ふので、その通り書いてやつた。宛名が女なので、「隅へは置けないぜ」とか何とか云つて冷評したら、「これは手前の姉でございます」と答へた。すると三日ばかりたつ内に、その番頭がお得意先を廻りにゆくと云つて家を出たなり、何時迄た

つても歸らない。帳面を檢べてみると、大穴があいてゐる。手紙は矢張、馴染の女の所へやつたのである。書かせられた平吉程莫迦をみたものはない。……

これが皆、嘘である。平吉の一生(人の知つてゐる)から、これらの嘘を除いたら、あとには何も殘らないのに相違ない。

× × × × × ×

平吉が町内のお花見の船の中で、お囃子の連中にひよつとこの面を借りて、舷へ上つたのも、矢張何時もの一杯機嫌でやつたのである。

それから踊つてゐる内に、船の中へころげ落ちて、死んだ事は、前に書いてある。船の中の連中は、皆、驚いた。一番、驚いたのは、あたまの上へ落ちられた清元のお師匠さんである。平吉の體はお師匠さんのあたまの上から、海苔卷や、うで玉子の出てゐる胴の間の赤毛布の上へ轉げ落ちた。

「冗談ぢやあねえや、怪我でもしたらどうするんだ。」之はまだ、平吉が巫山戲てゐると思つた町

内の頭が、中つ腹で云つたのである。けれども、平吉は動くけしきがない。

すると頭の隣にゐた髪結床の親方が、流石にをかしいと思つたか、平吉の肩へ手をかけて、「旦那、旦那…もし…旦那…旦那」と呼んで見たが、やはり何とも返事がない。手のさきを握つてみると冷くなつてゐる。親方は頭と二人で平吉を抱き起した。一同の顔は不安らしく、平吉の上にさしのべられた。「旦那…旦那…もし……旦那……旦那……」髪結床の親方の聲が上ずつて來た。

すると其時、呼吸とも聲ともわからない程、かすかな聲が、面の下から親方の耳へ傳つて來た。「面を……面をとつてくれ……面を。」頭と親方とはふるへる手で、手拭と面を外した。

しかし面の下にあつた平吉の顏はもう、ふだんの平吉の顏ではなくなつてゐた。小鼻が落ちて、脣の色が變つて、白くなつた額には、油汗が流れてゐる。一眼見たのでは、誰でも之が、あの愛嬌のある、へうきんな、話のうまい、平吉だと思ふものはない。たゞ變らないのは、つんと口をとがらしながら、とぼけた顏を胴の間の赤毛布の上に仰向けて、靜に平吉の顏を見上げてゐる、さつきのひよつとこの面ばかりである。

（大正三年十二月）

仙人

上

何時頃の話だか、わからない。北支那の市から市を渡つて歩く野天の見世物師に、李小二と云ふ男があつた。鼠に芝居をさせるのを商賣にしてゐる男である。鼠を入れて置く嚢が一つ、衣裝や假面をしまつて置く笥が一つ、それから、舞臺の役をする小さな屋臺のやうな物が一つ――その外には、何も持つてゐない。

天氣がいいと、四つ辻の人通りの多い所に立つて、まづ、その屋臺のやうな物を肩へのせる、それから、鼓板を叩いて、人よせに、謠を唱ふ。物見高い街中の事だから、大人でも子供でも、それを聞いて、足を止めない者は殆ない。さて、まはりに人の墻が出來ると、李は嚢の中から鼠を一匹出して、それに衣裝を着せたり、假面をかぶらせたりして、屋臺の鬼門道から、場へ上らせてやる。鼠は慣れてゐると見えて、ちよこちよこ、舞臺の上を歩きながら、絹絲のやうな光澤

のある尻尾を、二三度ものものしく動かして、ちよいと後足だけで立つて見せる。更紗の衣裳の下から見える前足の蹠がうす赤い。――この鼠が、これから雜劇の所謂楔子を演じようと云ふ役者なのである。

すると、見物の方では、子供だと、始から手を拍つて、面白がるが、大人は、容易に感心したやうな顏を見せない。寧、冷然として、煙管を啣へたり、鼻毛をぬいたりしながら、莫迦にしたやうな眼で、舞臺の上に周旋する鼠の役者を眺めてゐる。けれども、曲が進むのに從つて、錦切れの衣裳をつけた正旦の鼠や、黑い假面をかぶつた淨の鼠が、續々、鬼門道から這ひ出して來るやうになると、さうして、それが、飛んだり跳ねたりしながら、李の唱ふ曲やその間へはいる白につれて、いろいろ所作をするやうになると、見物も流石に冷淡を裝つてゐられなくなると見えて、追々まはりの人だかりの中から、嗓子大などと云ふ聲が、かかり始める。すると、李小二も、愈、あぶらがのつて、忙しく鼓板を叩きながら、巧に一座の鼠を使ひわける。さうして「沈黑江明妃青塚恨、耐幽夢孤雁漢宮秋」とか何とか、題目正名を唱ふ頃になると、屋臺の前へ出してある盆の中に、何時の間にか、銅錢の山が出來る。………

が、かう云ふ商賣をして、口を糊してゆくのは、決して容易なものではない。第一、十日と天氣が惡いと口が干上つてしまふ。夏は、麥が熟す時分から、例の雨期へはいるので、小さな衣裳や假面にも、知らないうちに黴がはえる。冬も亦、風が吹くやら、雪がふるやらするので、兎角、商賣がすたり易い。さう云ふ時には、外に仕方もないから、うす暗い客舍の片すみで、鼠を相手に退屈をまぎらせながら、何時もなら慌しい日の暮を、待ちかねるやうにして、暮してしまふ。鼠の數は、皆で、五匹で、それに李の父の名と母の名と妻の名と、それから行方の知れない二人の子の名とがつけてある。それが、嚢の口から順々に這ひ出して火の氣のない部屋の中を、寒さうにおづおづ歩いたり、履の先から膝の上へ、あぶない輕業をして這ひ上りながら、南京玉のやうな黑い眼で、ぢつと、主人の顏を見つめたりすると、世故のつらさを馴れてゐる李小二でも、流石に時々は涙が出る。が、それは、文字通り時々で、どちらかと云へば、明日の暮しを考へる屈託と、さう云ふ屈託を抑壓しようとする、あてどのない不愉快な感情とに心を奪はれて、いぢらしい鼠の姿も眼にはいらない事が多い。

その上、この頃は、年の加減と、體の具合が惡いのとで、餘計、商賣に身が入らない。節廻し

の長い所を唱ふと、息が切れる。喉も昔のやうには、冴えなくなつた。この分では、何時、どんな事が起らないとも限らない。――かう云ふ不安は、丁度、北支那の冬のやうに、このみじめな見世物師の心から、一切の日光と空氣とを遮斷して、しまひには、人並に生きてゆかうと云ふ氣さへ、未練未釋なく枯らしてしまふ。何故生きてゆくのは苦しいか、何故、苦しくとも、生きて行かなければならないか。勿論、李は一度もさう云ふ問題を考へて見た事がない。が、その苦しみを、不當だとは、思つてゐる。さうして、その苦しみを與へるものを――それが何だか、李にはわからないが――無意識ながら憎んでゐる。事によると、李が何にでも持つてゐる、漠然とした反抗的な心もちは、この無意識の憎しみが、原因になつてゐるのかも知れない。

しかし、さうは云ふものの、李も、すべての東洋人のやうに、運命の前には、比較的屈從を意としてゐない。風雪の一日を、客舍の一室で、暮らす時に、彼は、よく空腹をかかへながら、五匹の鼠に向つて、こんな事を云つた。「辛抱しろよ。己だつて、腹がへるのや、寒いのを辛抱してゐるのだからな。どうせ生きてゐるからには、苦しいのはあたり前だと思へ。それも、鼠よりは、いくら人間の方が、苦しいか知れないぞ……」

中

雪曇りの空が、何時の間にか、霙まじりの雨をふらせて、狭い往來を文字通り、脛を没する泥濘に滿さうとしてゐる、或寒い日の午後の事であつた。李小二は丁度、商賣から歸る所で、例の通り、鼠を入れた嚢を肩にかけながら、傘を忘れた悲しさに、ずぶぬれになつて、市はづれの、人通りのない路を歩いて來る――と、路傍に、小さな廟が見えた。折から、降りが、前よりもひどくなつて、肩をすぼめて歩いてゐると、鼻の先からは、滴が垂れる。襟からは、水がはいる。途方に暮れてゐた際だから、李は、廟を見ると、慌てて、その軒下へかけこんだ。先、顏の滴をはらふ。それから、袖をしぼる。やつと、人心地がついた所で頭の上の扁額を見ると、それには、山神廟と云ふ三字があつた。

入口の石段を、二三級上ると、扉が開いてゐるので、中が見える。中は思つたよりも、まだ狹い。正面には、一尊の金甲山神が、蜘蛛の巣にとざされながら、ぼんやり日の暮を待つてゐる。その右には、判官が一體、これは、誰に惡戲をされたのだか、首がない。左には、小鬼が一體、

綠面朱髮で、猙獰な顏をしてゐるが、これも生憎、鼻が虧けてゐる。その前の、埃のつもつた床に、積重ねてあるのは、紙錢であらう。これは、うす暗い中に、金紙や銀紙が、覺束なく光つてゐるので、知れたのである。

李は、これだけ、見定めた所で、視線を、廟の中から外へ、轉じようとした。すると丁度その途端に、紙錢の積んである中から、人間が一人出て來た。實際は、前からそこに蹲つてゐたのが、その時、始めて、うす暗いのに慣れた李の眼に、見えて來たのであらう。が、彼には、まるで、それが、紙錢の中から、忽然として、姿を現したやうに思はれた。そこで、彼は、聊、ぎよつとしながら、恐る恐る、見るやうな、見ないやうな顏をして、そつとその人間を窺つて見た。

垢じみた道服を着て、鳥が巣をくひさうな頭をした、見苦しい老人である。（ははあ、乞丐をして歩く道士だな――李はかう思つた。）瘠せた膝を、兩腕で抱くやうにして、その膝の上へ、鬚の長い頤をのせてゐる。眼は開いてゐるが、どこを見てゐるのかわからない。矢張、この雨に遇つたと云ふ事は、道服の肩がぐつしより濡れてゐるので、知れた。

李は、この老人を見た時に、何とか語をかけなければ、ならないやうな氣がした。一つには、

濡鼠になつた老人の姿が、幾分の同情を動かしたからで、又一つには、世故がかう云ふ場合に、こつちから口を切る習慣を、何時かつけてしまつたからである。或は、又、その外に、始の無氣味な心もちを忘れようとする努力が、少しは加はつてゐたかも知れない。そこで李が云つた。

「どうも、困つたお天氣ですな。」

「さやうさ。」老人は、膝の上から、頤を離して、始めて、李の方を身た。鳥の嘴のやうに曲つた、鍵鼻を、二三度大仰にうごめかしながら、眉の間を狹くして、見たのである。

「私のやうな商賣をしてゐる人間には、雨位、人泣かせのものはありません。」

「はあ、何御商賣かな。」

「鼠を使つて、芝居をさせるのです。」

「それは又お珍しい。」

こんな具合で、二人の間には、少しづゝ、會話が、交換されるやうになつた。その中に、老人も紙錢の中から出て來て、李と一しよに、入口の石段の上に腰を下したから、今では顏貌も、はつきり見える。形容の枯槁してゐる事は、さつき見た時の比ではない。李はそれでも、いい話相

手を見つけたつもりで、嚢や筥を石段の上に置いたまま、對等な語づかひで、いろいろな話をした。

道士は、無口な方だと見えて、捗々しくは返事もしない。「成程な」とか「さやうさ」とか云ふ度に、齒のない口が、空氣を嚙むやうな、運動をする。根の所で、きたない黃いろになつてゐる髯も、それにつれて上下へ動く、——それが如何にも、見すぼらしい。

李は、この老道士に比べれば、あらゆる點で、自分の方が、生活上の優者だと考へた。さう云ふ自覺が、愉快でない事は、勿論ない。が、李は、それと同時に、優者であると云ふ事が、何となくこの老人に對して濟まないやうな心もちがした。彼が、談柄を、生活難に落して、自分の暮しの苦しさを、わざわざ誇張して、話したのは、完く、この濟まないやうな心もちに、煩はされた結果である。

「完く、それは泣きたくなる位なものですよ。食はずに、一日すごした事だつて、度々あります。この間も、しみじみかう思ひました。『己は鼠に芝居をさせて、飯を食つてゐると思つてゐる。が、事によるとほんとうは、鼠が己にこんな商賣をさせて、食つてゐるのかも知れない。』實際、そん

なものですよ。」

李は憮然として、こんな事さへ云つた。が、道士の無口な事は、前と一向、變りがない。それが、李の神經には、前よりも一層、甚しくなつたやうに思はれた。(先生、己の云つた事を、妙にひがんで取つたのだらう。餘計な事を云はずに、默つてゐればよかつた。)――李は、心の中でかう自分を叱つた。さうして、そつと横目を使つて、老人の容子を見た。道士は、顏を李と反對の方に向けて、雨にたたかれてゐる廟外の枯柳をながめながら、片手で、しきりに髮を搔いてゐる。顏は見えないが、どうやら李の心もちを見透かして、相手にならずにゐるらしい。さう思ふと、多少不快な氣がしたが、自分の同情の徹しないと云ふ不滿の方が、それよりも大きいので、今度は話題を、今年の秋の蝗災へ持つて行つた。この地方の蒙つた慘害の話から農家一般の困窮で、老人の窮狀をヂヤスティファアイしてやりたいと思つたのである。

すると、その話の途中で、老道士は、李の方へ、顏をむけた。皺の重なり合つた中に、可笑しさをこらへてゐるやうな、筋肉の緊張がある。

「あなたは私に同情して下さるらしいが、」から云つて、老人は堪へきれなくなつたやうに、聲を

あげて笑つた。烏が鳴くやうな、鋭い、しはがれた聲で笑つたのである。「私は、金には不自由をしない人間でね、お望みなら、あなたのお暮し位はお助け申しても、よろしい。」

李は、話の腰を折られたまま、呆然として、唯、道士の顔を見つめてゐた。（こいつは、氣違ひだ。）――やつとかう云ふ反省が起つて來たのは、暫くの間瞠目して、默つてゐた後の事である。が、その反省は、すぐに又老道士の次の話によつて、打壞された。

「千鎰や二千鎰でよろしければ、今でもさし上げよう。實は、私は、唯の人間ではない。」老人は、それから、手短に、自分の經歴を話した。元は、何とか云ふ市の屠者だつたが、偶、呂祖に遇つて、道を學んだと云ふのである。それがすむと、道士は、徐に立つて、廟の中へはいつた。さうして、片手で李をさしまねぎながら、片手で、床の上の紙錢をかき集めた。

李は五感を失つた人のやうに、茫然として、廟の中へ這ひこんだ。兩手を鼠の糞と埃との多い床の上について、平伏するやうな形をしながら、首だけ上げて、下から道士の顔を眺めてゐるのである。

道士は、曲つた腰を、苦しさうに、伸ばして、かき集めた紙錢を兩手で床からすくひ上げた。

それから、それを掌でもみ合せながら、忙しく足下へ撒きちらし始めた。鏘々然として、床に落ちる黄白の音が、俄に、廟外の寒雨の聲を壓して、起つた。――撒かれた紙錢は、手を離れると共に、忽、無數の金錢や銀錢に、變つたのである。……

李小二は、この雨錢の中に、何時までも、床に這つたまゝ、ぼんやり老道士の顏を見上げてゐた。

下

李小二は、陶朱の富を得た。偶、その仙人に遇つたと云ふ事を疑ふ者があれば、彼は、その時、老人に書いて貰つた、四句の語を出して示すのである。この話を、久しい以前に、何かの本で見た作者は、遺憾ながら、それを、文字通りに記憶してゐない。そこで、大意を支那のものを飜譯したらしい日本文で書いて、この話の完りに附して置かうと思ふ。但、これは、李小二が、何故、仙にして、乞丐をして歩くかと云ふ事を訊ねた、答なのださうである。

「人生苦あり、以て樂むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脫し得て甚、無聊

なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに。」

恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ、苦しい事を、探してあるいてゐたのであらう。

（大正四年七月二十三日）

羅生門

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。唯、所々丹塗の剝げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。

何故かと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災がつゞいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。舊記によると、佛像や佛具を打砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に賣つてゐたと云ふ事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てゝ顧る者がなかつた。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて來て、棄てゝ行くと云ふ習慣さへ出來た。そこで、日の

目が見えなくなると、誰でも氣味を惡るがつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉が何處からか、たくさん集つて來た。晝間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまはりを啼きながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕燒けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに來るのである。――尤も今日は、刻限が遲いせゐか、一羽も見えない。唯、所々、崩れかかつた、さうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、點々と白くこびりついてゐるのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗ひざらした紺の襖の尻を据ゑて、右の頰に出來た、大きな面皰を氣にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云ふ當てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ歸る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年、使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、實はこの衰微の小さな餘

波に外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。その上、今日の空模樣も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下りからふり出した雨は、未に上るけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差當り明日の暮しをどうにかしようとして――云はゞどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐたのである。

雨は、羅生門をつゝんで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて來る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段を選んでゐる遑はない。選んでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、饑死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて來て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば――下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかた

をつける爲に、當然、その後に來る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつてゐた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちゞめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風の患のない、人目にかゝる惧のない、一晩樂にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つたからである。すると、幸門の上の樓へ上る、幅の廣い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちゞめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、

かすかに、その男の右の頬をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持つた面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にゐる者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其處此處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、搖れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出來る丈、平にしながら、頸を出來る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の内を覗いて見た。

見ると、樓の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄てゝあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狹いので、數は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるといふ事である。勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その死骸は皆、それが、嘗、生きてゐた人間だと云ふ事實さへ疑はれる

程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがつてゐた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に唖の如く默つてゐた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭氣に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、殆悉この男の嗅覺を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて其死骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その死骸の一つの顔を覗きこむやうに眺めてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れてゐた。舊記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に插して、それから、今まで眺めてゐた死骸の首に兩手をかけると、丁度、猿の親が猿

の子の虱をとるやうに、その長い髮の毛を一本づゝ拔きはじめた。髮は手に從つて拔けるらしい。

その髮の毛が、一本づゝ拔けるのに從つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に對するはげしい憎惡が、少しづゝ動いて來た。――いや、この老婆に對すると云つては、語弊があるかも知れない。寧、あらゆる惡に對する反感が、一分毎に强さを增して來たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、饑死をするか盜人になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であらう。それほど、この男の惡を憎む心は、老婆の床に插した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髮の毛を拔くかわからなかつた。從つて、合理的には、それを善惡の何れに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髮の毛を拔くと云ふ事が、それ丈で旣に許す可らざる惡であつた。勿論、下人は、さつき迄自分が、盜人になる氣でゐた事なぞは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の太

刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云ふ迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも彈かれたやうに、飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、かう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、暫、無言のまゝ、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめからわかつてゐる。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭ぢ倒した。丁度、鷄の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を拂つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は默つてゐる。兩手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出さうになる程、見開いて、啞のやうに執拗く默つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。さ

うしてこの意識は、今までけはしく燃えてゐた憎惡の心を、何時の間にか冷ましてしまつた。後に殘つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿に成就した時の、安らかな得意と滿足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し聲を柔げてかう云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し方この門の下を通りかゝつた旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようと云ふやうな事はない。唯、今時分この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさへすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ぢつとその下人の顏を見守つた。瞼の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになつた脣を、何か物でも嚙んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉佛の動いてゐるのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髮を拔いてな、この髮を拔いてな、鬘にせうと思うたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎惡が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて來た。すると、その氣色が、先方へも通じたのであら

う。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、蟇のつぶやくやうな聲で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。ぢやが、こゝにゐる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ賣りに往んだわ。疫病にかゝつて死ななんだら、今でも賣りに往んでゐた事であろ。それもよ、この女の賣る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、缺かさず菜料に買つてゐたさうな。わしは、この女のした事が悪いとは思うてゐぬ。せねば、饑死をするのぢやて、仕方がなくした事であろ。されば、今又、わしのしてゐた事も悪い事とは思はぬぞよ。これとてもやはりせねば、饑死をするぢやて、仕方がなくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。」

老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘にをさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を

聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頰に膿を持つた大きな面皰を氣にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて來た。それは、さつき門の下で、この男には缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、饑死をするか盜人になるかに、迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、饑死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくやうにかう云つた。

「では、己が引剝をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、饑死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剝ぎとつた檜皮色の着物をわきにかゝへて、またゝく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

（大正四年九月）

鼻

禪智內供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顋の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はゞ細長い腸詰めのやうな物が、ぶらりと顏のまん中からぶら下つてゐるのである。

五十歳を越えた內供は、沙彌の昔から內道場供奉の職に陞つた今日まで、內心では始終この鼻を苦に病んで來た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顏をしてすましてゐる。これは專念に當來の淨土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが惡いと思つたからばかりではない。それより寧、自分で鼻を氣にしてゐると云ふ事を、人に知られるのが嫌だつたからである。內供は日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て來るのを何よりも惧れてゐた。

內供が鼻を持てあました理由は二つある。――一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鋺の中の飯へとゞいて

しまふ。そこで內供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食ふ間中、廣さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貰ふ事にした。しかしかうして飯を食ふと云ふ事は、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる內供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚔をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。――けれどもこれは內供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重な理由ではない。內供は實にこの鼻によつて傷けられる自尊心の爲に苦しんだのである。

池の尾の町の者は、かう云ふ鼻をしてゐる禪智內供の爲に、內供の俗でない事を仕合せだと云つた。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中には又、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さへあつた。しかし內供は、自分が僧である爲に、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたと思つてゐない。內供の自尊心は、妻帶と云ふやうな結果的な事實に左右される爲には、餘りにデリケイトに出來てゐたのである。そこで內供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようと試みた。

第一に內供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のゐない

時に、鏡へ向つて、いろ〳〵な角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換へるだけでは、安心が出來なくなつて、頬杖をついたり頤の先へ指をあてがつたりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも滿足する程、鼻が短く見えた事は、是までに唯の一度もない。時によると、苦心すればする程、却て長く見えるやうな氣さへした。内供は、かう云ふ時には、鏡を箱へしまひながら、今更のやうにため息をついて、不承不承に又元の經机へ、觀音經をよみに歸るのである。

それから又内供は、絶えず人の鼻を氣にしてゐた。池の尾の寺は、僧供講說などの屢〻行はれる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て續いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしてゐる。從つてこゝへ出入する僧俗の類も甚多い。内供はかう云ふ人々の顔を根氣よく物色した。一人でも自分のやうな鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらない。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣なぞは、見慣れてゐるだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、唯、鼻を見た。――しかし鍵鼻はあつても、内供のやうな鼻は一つも見當らない。その見當らない事が度重なるに從つて、内供の心は次

第に又不快になつた。内供が人と話しながら、思はずぶらりと下つてゐる鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤めたのは、全くこの不快に動かされての所爲である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようとさへ思つた事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの經文にも書いてない。勿論龍樹や馬鳴も、人並の鼻を備へた菩薩である。内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かつたと云ふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位自分は心細くなくなるだらうと思つた。

内供がかう云ふ消極的な苦心をしながらも、一方では又、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざこゝに云ふ迄もない。内供はこの方面でも殆出來るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと脣の上にぶら下げてゐるではないか。

所が或年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己の醫者から長い鼻を短くする法を教はつて來た。その醫者と云ふのは、もと震旦から渡つて來た男で、當時は長樂寺の供僧に

なつてゐたのである。

内供は、いつものやうに、鼻などは氣にかけないと云ふ風をして、わざとその法もすぐにやつて見ようとは云はずにゐた。さうして一方では、氣輕な口調で、食事の度毎に、弟子の手數をかけるのが、心苦しいと云ふやうな事を云つた。内心では勿論弟子の僧が、自分を說伏せて、この法を試みさせるのを待つてゐたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに對する反感よりは、内供のさう云ふ策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであらう。弟子の僧は、内供の豫期通り、口を極めて、この法を試みる事を勸め出した。さうして、内供自身も亦、その豫期通り、結局この熱心な勸告に聽從する事になつた。

その法と云ふのは、唯、湯で鼻を茹でゝ、その鼻を人に踏ませると云ふ、極めて簡單なものであつた。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしてゐる。そこで弟子の僧は、指も入れられないやうな熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで來た。しかしぢかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯氣に吹

かれて顔を火傷する惧がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云つた。

――もう茹つた時分でござらう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは氣がつかないだらうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食つたやうにむづ痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯氣の立つてゐる鼻を、兩足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見てゐるのである。弟子の僧は、時々氣の毒さうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云つた。

――痛うはござらぬかな。醫師は責めて踏めと申したで。ぢやが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振つて、痛くないと云ふ意味を示さうとした。所が鼻を踏まれてゐるので思ふやうに首が動かない。そこで、上眼を使つて、弟子の僧の足に皸のきれてゐるのを眺めながら、腹を

立てたやうな聲で、

――痛うはないて。

と答へた。實際鼻はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て氣もちのいゝ位だつたのである。

しばらく踏んでゐると、やがて、粟粒のやうなものが、鼻へ出來はじめた。云はば毛をむしつた小鳥をそつくり丸炙にしたやうな形である。弟子の僧は之を見ると、足を止めて獨り言のやうにかう云つた。

――之を鑷子でぬけと申す事でござつた。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、默つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない譯ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のやうに取扱ふのが、不愉快に思はれたからである。内供は、信用しない醫者の手術をうける患者のやうな顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めてゐた。脂は、鳥の羽の莖のやうな形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがて之が一通りすむと、弟子の僧は、ほつと一息ついたやうな顏をして、

――もう一度、之を茹でればようござる。

と云つた。

內供は矢張、八の字をよせたまゝ不服らしい顏をして、弟子の僧の云ふなりになつてゐた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、何時になく短くなつてゐる。これではあたりまへの鍵鼻と大した變りはない。內供はその短くなつた鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが惡るさうにおづおづ覗いて見た。

鼻は――あの顋の下まで下つてゐた鼻は、殆ど嘘のやうに萎縮して、今は僅に上脣の上で意氣地なく殘喘を保つてゐる。所々まだらに赤くなつてゐるのは、恐らく踏まれた時の痕であらう。かうなれば、もう誰も哂ふものはないのにちがひない。――鏡の中にある內供の顏は、鏡の外にある內供の顏を見て、滿足さうに眼をしばたゝいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻が又長くなりはしないかと云ふ不安があつた。そこで內供は誦經する時にも、食事をする時にも、暇さへあれば手を出して、そつと鼻の先にさはつて見た。が、

鼻は行儀よく脣の上に納まつてゐるだけで、格別それより下へぶら下つて來る氣色もない。それから一晩寢てあくる日早く眼がさめると内供は先、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書寫の功を積んだ時のやうな、のびのびした氣分になつた。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事實を發見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しさうな顔をして、話も碌々せずに、ぢろぢろ内供の鼻ばかり眺めてゐた事である。それのみならず、嘗、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子なぞは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらへてゐたが、とうとうこらへ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまつた。用を云ひつかつた下法師たちが、面と向つてゐる間だけは、愼んで聞いてゐても、内供が後さへ向けば、すぐにくすくす笑ひ出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は始、之を自分の顔がはりがしたせゐだと解釋した。しかしどうもこの解釋だけでは十分に説明がつかないやうである。――勿論、中童子や下法師が哂ふ原因は、そこにあるのにちがひ

ない。けれども同じ哂ふにしても、鼻の長かつた昔とは、哂ふのにどことなく容子がちがふ。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えると云へば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

――前にはあのやうにつけつけとは哂はなんだて。

内供は、誦しかけた經文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々かう呟く事があつた。愛すべき内供は、さう云ふ時になると、必ぼんやり、傍にかけた普賢の畫像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまふのである。――内供には、遺憾ながらこの問に答を與へる明が缺けてゐた。

――人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出來ると、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して云へば、もう一度その人を、同じ不幸に陷れて見たいやうな氣にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に對し

て抱くやうな事になる。――内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

そこで内供は日毎に機嫌が惡くなつた。二言目には、誰でも意地惡く叱りつける。しまひには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさへ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきく程になつた。殊に内供を怒らせたのは、例の惡戲な中童子である。或日、けたたましく犬の吠える聲がするので、内供が何氣なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまはして、毛の長い、痩せた尨犬を逐ひまはしてゐる。それも唯、逐ひまはしてゐるのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囃しながら、逐ひまはしてゐるのである。内供は、中童子の手からその木の片をひつたくつて、したゝかその顏を打つた。木の片は以前の鼻持上げの木だつたのである。

内供はなまじひに、鼻の短くなつたのが、反て恨めしくなつた。

すると或夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさい程枕に通つて來た。その上、寒さもめつきり加はつたので、老年の内供は寢つかうとしても寢

つかれない。そこで床の中でまじまじしてゐると、ふと鼻が何時になく、むづ痒いのに氣がついた。手をあてて見ると少し水氣が來たやうにむくんでゐる。どうやらそこだけ、熱さへもあるらしい。

――無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

內供は、佛前に香花を供へるやうな恭しい手つきで、鼻を抑へながら、かう呟いた。

翌朝、內供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺內の銀杏や橡が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたやうに明い。塔の屋根には霜が下りてゐるせゐであらう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる。禪智內供は、蔀を上げた緣に立つて、深く息をすひこんだ。

殆、忘れようとしてゐた或感覺が、再內供に歸つて來たのはこの時である。

內供は慌てゝ鼻へ手をやつた。手にさはるものは、昨夜の短い鼻ではない。上脣の上から顋の下まで、五六寸あまりもぶら下つてゐる、昔の長い鼻である。內供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなつたのを知つた。さうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれした心もちが、どこからともなく歸つて來るのを感じた。

――かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。

内供は心の中でかう自分に囁いた。長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら。

（大正五年一月）

孤獨地獄

この話を自分は母から聞いた。母はそれを自分の大叔父から聞いたと云つてゐる。話の眞僞は知らない。唯大叔父自身の性行から推して、かう云ふ事も隨分ありさうだと思ふだけである。

大叔父は所謂大通の一人で、幕末の藝人や文人の間に知己の數が多かつた。河竹默阿彌、柳下亭種員、善哉庵永機、同冬映、九代目團十郎、宇治紫文、都千中、乾坤坊良齋などの人々である。中でも默阿彌は、「江戸櫻清水清玄」で紀國屋文左衞門を書くのに、この大叔父を粉本にした。物故してから、もう彼是五十年になるが、生前一時は今紀文と綽號された事があるから、今でも名だけは聞いてゐる人があるかも知れない。――姓は細木、名は藤次郎、俳名は香以、俗稱は山城河岸の津藤と云つた男である。

その津藤が或時吉原の玉屋で、一人の僧侶と近づきになつた。本郷界隈の或禪寺の住職で、名は禪超と云つたさうである。それがやはり嫖客となつて、玉屋の錦木と云ふ華魁に馴染んでゐた。

勿論、肉食妻帶が僧侶に禁ぜられてゐた時分の事であるから、表向きはどこまでも出家ではない。黃八丈の着物に黑羽二重の紋付と云ふ拵へで人には醫者だと號してゐる。――それと偶然近づきになつた。

偶然と云ふのは燈籠時分の或夜、玉屋の二階で、津藤が厠へ行つた歸りしなに何氣なく廊下を通ると、欄干にもたれながら、月を見てゐる男があつた。坊主頭の、どちらかと云へば背の低い、瘦ぎすな男である。津藤は、月あかりで、これを出入の太鼓醫者竹内だと思つた。そこで、通りすぎながら、手をのばして、ちよいとその耳を引張つた。驚いてふり向く所を、笑つてやらうと思つたからである。

所がふり向いた顏を見ると、反つて此方が驚いた。坊主頭と云ふ事を除いたら、竹内と似てゐる所などは一つもない。――相手は額の廣い割に、眉と眉との間が險しく狹つてゐる。眼の大きく見えるのは、肉の落ちてゐるからであらう。左の頰にある大きな黑子は、その時でもはつきり見えた。その上顴骨が高い。――これだけの顏かたちが、とぎれとぎれに、慌しく津藤の眼にはいつた。

「何か御用かな。」その坊主は腹を立てたやうな聲でかう云つた。いくらか酒氣も帶びてゐるらしい。

前に書くのを忘れたが、その時津藤には藝者が一人に幇間が一人ついてゐた。この手合は津藤にあやまらせて、それを默つて見てゐるわけには行かない。そこで幇間が、津藤に代つて、その客に疎忽の詫をした。さうしてその間に、津藤は藝者をつれて、匆々自分の座敷へ歸つて來た。いくら大通でも間が惡かつたものと見える。坊主の方では、幇間から間違の仔細をきくと、すぐに機嫌を直して大笑ひをしたさうである。その坊主が禪超だつた事は云ふまでもない。

その後で、津藤が菓子の臺を持たせて、向うへ詫びにやる。向うでも氣の毒がつて、わざわざ禮に來る。それから二人の交情が結ばれた。尤も結ばれたと云つても、玉屋の二階で遇ふだけで、互に往來はしなかつたらしい。津藤は酒を一滴も飲まないが、禪超は寧、大酒家である。それからどちらかと云ふと、禪超の方が持物に贅をつくしてゐる。最後に女色に沈湎するのも、やはり禪超の方が甚しい。津藤自身が、これをどちらが出家だか解らないと批評した。――大兵肥滿で、容貌の醜かつた津藤は、五分月代に銀鎖の懸守と云ふ姿で、平素は好んでめくら縞の着物に白木

の三尺をしめてゐたと云ふ男である。

或日津藤が禪超に遇ふと、禪超は錦木のしかけを羽織つて、三味線をひいてゐた。日頃から血色の惡い男であるが、今日は殊によくない。眼も充血してゐる。彈力のない皮膚が時々口許で痙攣する。津藤はすぐに何か心配があるのではないかと思つた。自分のやうなものでも相談相手になれるなら是非させて頂きたい――さう云ふ口吻を洩らして見たが、別にこれと云つて打明ける事もないらしい。唯、何時もよりも口數が少くなつて、ややもすると談柄を失しがちである。そこで津藤は、これを嫖客のかかりやすい倦怠だと解釋した。酒色を恣にしてゐる人間がかかつた倦怠は、酒色で癒る筈がない。かう云ふはめから、二人は何時になくしんみりした話をした。すると禪超は急に何か思ひ出したやうな容子で、こんな事を云つたさうである。

佛説によると、地獄にもさまざまあるが、凡先づ、根本地獄、近邊地獄、孤獨地獄の三つに分つ事が出來るらしい。それも南瞻部洲下過五百踰繕那乃有地獄と云ふ句があるから、大抵は昔から地下にあるものとなつてゐたのであらう。唯、その中で孤獨地獄だけは、山間曠野樹下空中、何處へでも忽然として現れる。云はば目前の境界が、すぐそのまゝ、地獄の苦艱を現前するので

ある。自分は二三年前から、この地獄へ墮ちた。一切の事が少しも永續した興味を與へない。だから何時でも一つの境界から一つの境界を追つて生きてゐる。勿論それでも地獄は逃れられない。さうかと云つて境界を變へずにゐれば猶、苦しい思をする。そこでやはり轉々としてその日その日の苦しみを忘れるやうな生活をしてゆく。しかし、それもしまひには苦しくなるとすれば、死んでしまふよりも外はない。昔は苦しみながらも、死ぬのが嫌だつた。今では……

最後の句は、津藤の耳にはいらなかつた。禪超が又三味線の調子を合せながら、低い聲で云つたからである。――それ以來、禪超は玉屋へ來なくなつた。誰も、この放蕩三昧の禪僧がそれからどうなつたか、知つてゐる者はない。唯その日禪超は、錦木の許へ金剛經の疏抄を一册忘れて行つた。津藤が後年零落して、下總の寒川へ閑居した時に常に机上にあつた書籍の一つはこの疏抄である。津藤はその表紙の裏へ「菫野や露に氣のつく年四十」と、自作の句を書き加へた。その本は今では殘つてゐない。句ももう覺えてゐる人は一人もなからう。

安政四年頃の話である。母は地獄と云ふ語の興味で、この話を覺えてゐたものらしい。

一日の大部分を書齋で暮してゐる自分は、生活の上から云つて、自分の大叔父やこの禪僧とは、

全然沒交渉な世界に住んでゐる人間である。又興味の上から云つても、自分は徳川時代の戲作や浮世繪に、特殊な興味を持つてゐる者ではない。しかも自分の中にある或心もちは、動もすれば孤獨地獄と云ふ語を介して、自分の同情を彼等の生活に注がうとする。が、自分はそれを否まうとは思はない。何故と云へば、或意味で自分も亦、孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だからである。

（大正五年二月）

父

自分が中學の四年生だつた時の話である。

その年の秋、日光から足尾へかけて、三泊の修學旅行があつた。「午前六時三十分上野停車場前集合、同五十分發車……」から云ふ箇條が、學校から渡す謄寫版の刷物に書いてある。

當日になると自分は、碌に朝飯も食はずに家をとび出した。電車でゆけば停車場まで二十分とはかからない。――さう思ひながらも、何となく心がせく。停留場の赤い柱の前に立つて、電車を待つてゐるうちも、氣が氣でない。

生憎、空は曇つてゐる。方々の工場で鳴らす汽笛の音が、鼠色の水蒸氣をふるはせたら、それが皆霧雨になつて、降つて來はしないかと思はれる。その退屈な空の下で、高架鐵道を汽車が通る。被服廠へ通ふ荷馬車が通る。店の戸が一つづつ開く。自分のゐる停留場にも、もう二三人、人が立つた。それが皆、眠の足りなさうな顏を、陰氣らしく片づけてゐる。寒い。――そこへ割

引の電車が來た。

こみ合つてゐる中を、やつと吊皮にぶらさがると、誰か後から、自分の肩をたたく者がある。

自分は慌ててふり向いた。

「お早う。」

見ると、能勢五十雄であつた。矢張、自分のやうに、紺のヘルの制服を着て、外套を卷いて左の肩からかけて、麻のゲエトルをはいて、腰に辨當の包やら水筒やらをぶらさげてゐる。

能勢は、自分と同じ小學校を出て、同じ中學校へはいつた男である。これと云つて、得意な學科もなかつたが、その代りに、これと云つて、不得意なものもない。その癖、ちよいとした事には、器用な性質で、流行唄と云ふやうなものは、一度聞くと、すぐに節を覺えてしまふ。さうして、修學旅行で宿屋へでも泊る晩なぞには、それを得意になつて披露する。詩吟、薩摩琵琶、落語、講談、聲色、手品、何でも出來た。その上又、身ぶりとか、顏つきとかで、人を笑はせるのに獨特な妙を得てゐる。從て級の氣うけも、教員間の評判も、惡くはない。尤も自分とは、互に往來はしてゐながら、さして親しいと云ふ間柄でもなかつた。

「早いね、君も。」
「僕は何時も早いさ。」能勢はかう云ひながら、ちよいと小鼻をうごめかした。
「でもこの間は遅刻したぜ。」
「この間？」
「國語の時間にさ。」
「ああ、馬場に叱られた時か。あいつは弘法にも筆のあやまりさ。」能勢は、教員の名前をよびすてにする癖があつた。
「あの先生には、僕も叱られた。」
「遅刻で？」
「いいえ、本を忘れて。」
「仁丹は、いやにやかましいからな。」「仁丹」と云ふのは、能勢が馬場教諭につけた渾名である。
――こんな話をしてゐる中に、停車場前へ來た。
乘つた時と同じやうに、こみあつてゐる中をやつと電車から下りて停車場へはいると、時刻が

早いので、まだ級の連中は二三人しか集つてゐない。互に「お早う」の挨拶を交換する。先を爭つて、待合室の木のベンチに、腰をかける。それから、何時ものやうに、勢よく饒舌り出した。皆「僕」と云ふ代りに、「己」と云ふのを得意にする年輩である。その自ら「己」と稱する連中の口から、旅行の豫想、生徒同志の品隲、教員の惡評などが盛に出た。

「泉はちやくいいぜ、あいつは教員用のチョイスを持つてゐるもんだから、一度も下讀みなんぞした事はないんだとさ。」

「平野はもつとちやくいいぜ。あいつは試驗の時と云ふと、歴史の年代をみんな爪へ書いて行くんだつて。」

「さう云へば先生だつてちやくいいからな。」

「ちやくいいとも。本間なんぞは receive の i と e と、どつちが先へ來るんだか、それさへ碌に知らない癖に、教師用でいい加減にごま化しごま化し、教へてゐるぢやあないか。」

どこまでも、ちやくいいで持ちきるばかりで一つも、碌な噂は出ない。すると、その中に能勢が、自分の隣のベンチに腰をかけて、新聞を讀んでゐた、職人らしい男の靴を、パツキンレイだと批

評した。これは當時、マツキンレイと云ふ新形の靴が流行つたのに、この男の靴は、一體に光澤を失つて、その上先の方がぱつくり口を開いてゐたからである。

「パツキンレイはよかつた。」かう云つて、皆一時に、失笑した。

それから、自分たちは、いい氣になつて、この待合室に出入するいろ〳〵な人間を物色しはじめた。さうして一々、それに、東京の中學生でなければ云へないやうな、生意氣な惡口を加へ出した。さう云ふ事にかけて、ひけをとるやうな、おとなしい生徒は、自分たちの中に一人もゐない。中でも能勢の形容が、一番辛辣で、且一番諧謔に富んでゐた。

「能勢、能勢、あのお上さんを見ろよ。」

「あいつは河豚が孕んだやうな顏をしてゐるぜ。」

「こつちの赤帽も、何かに似てゐるぜ。ねえ能勢。」

「あいつはカロロ五世さ。」

しまひには、能勢が一人で、惡口を云ふ役目をひきうけるやうな事になつた。

すると、その時、自分たちの一人は、時間表の前に立つて、細い數字をしらべてゐる妙な男を

發見した。その男は羊羹色の背廣を着て、體操に使ふ球竿のやうな細い脚を、鼠の粗い縞のズボンに通してゐる。緣の廣い昔風の黑い中折れの下から、半白の毛がはみ出してゐる所を見ると、もう可成な年配らしい。その癖頸のまはりには、白と黑と格子縞の派手なハンケチをまきつけて、鞭かと思ふやうな、寒竹の長い杖をちよいと脇の下へはさんでゐる。服裝と云ひ、態度と云ひ、すべてが、パンチの插繪を切拔いて、そのままそれを、この停車場の人ごみの中へ、立たせたとしか思はれない。――自分たちの一人は、又新しく惡口の材料が出來たのをよろこぶやうに、肩でをかしさうに笑ひながら、能勢の手をひつぱつて、

「おい、あいつはどうだい。」とかう云つた。

そこで、自分たちは、皆その妙な男を見た。男は少し反り身になりながら、チヨツキのポケツトから、紫の打紐のついた大きなニツケルの懷中時計を出して、丹念にそれと時間表の數字とを見くらべてゐる。横顏だけ見て、自分はすぐに、それが能勢の父親だと云ふ事を知つた。

しかし、そこにゐた自分たちの連中には、一人もそれを知つてゐる者がない。だから皆、能勢の口から、この滑稽な人物を、適當に形容する語を聞かうとして、聞いた後の笑ひを用意したが

ら、面白さうに能勢の顔をながめてゐた。中學の四年生には、その時の能勢の心もちを推測する明がない。自分は危く「あれは能勢の父だぜ。」と云はうとした。

するとその時、

「あいつかい。あいつはロンドン乞食さ。」

から云ふ能勢の聲がした。皆が一時にふき出したのは、云ふ迄もない。中にはわざわざ反り身になつて、懷中時計を出しながら、能勢の父親の姿を眞似て見る者さへある。自分は、思はず下を向いた。その時の能勢の顔を見るだけの勇氣が、自分には缺けてゐたからである。

「そいつは適評だな。」

「見ろ。見ろ。あの帽子を。」

「日かげ町か。」

「日かげ町にだつてあるものか。」

「ぢやあ博物館だ。」

皆が又、面白さうに笑つた。

曇天の停車場は、日の暮のやうにうす暗い。自分は、そのうす暗い中で、そつとそのロンドン乞食の方をすかして見た。

すると、何時の間にか、うす日がさし始めたと見えて、幅の狹い光の帶が高い天井の明り取りから、茫と斜にさしてゐる。能勢の父親は、丁度その光の帶の中にゐた。――周圍では、すべての物が動いてゐる。眼のとどく所でも、とどかない所でも動いてゐる。さうして又その運動が、聲とも音ともつかないものになつて、この大きな建物の中を霧のやうに蔽つてゐる。しかし能勢の父親だけは動かない。この現代と緣のない洋服を着た、この現代と緣のない老人は、めまぐるしく動く人間の洪水の中に、これもやはり現代を超越した、黑の中折をあみだにかぶつて、紫の打紐のついた懷中時計を右の掌の上にのせながら、依然としてポンプの如く時間表の前に佇立してゐるのである……………

あとで、それとなく聞くと、その頃大學の藥局に通つてゐた能勢の父親は、能勢が自分たちと一しよに修學旅行に行く所を、出勤の途すがら見ようと思つて、自分の子には知らせずに、わざ

わざ停車場へ來たのださうである。

能勢五十雄は、中學を卒業すると間もなく、肺結核に罹つて、物故した。その追悼式を、中學の圖書室で擧げた時、制帽をかぶつた能勢の寫眞の前で悼辭を讀んだのは、自分である。「君、父母に孝に、」——自分はその悼辭の中に、かう云ふ句を入れた。

（大正五年三月）

虱

一

元治元年十一月二十六日、京都守護の任に當つてゐた、加州家の同勢は、折からの長州征伐に加はる爲、國家老の長大隅守を大將にして、大阪の安治川口から、船を出した。小頭は、佃久太夫、山岸三十郎の二人で、佃組の船には白幟、山岸組の船には赤幟が立つてゐる。五百石積の金毘羅船が、皆それぞれ、紅白の幟を風にひるがへして、川口を海へのり出した時の景色は、如何にも勇ましいものだつたさうである。

しかし、その船へ乘組んでゐる連中は、中中勇ましがつてゐる所の騷ぎではない。第一どの船にも、一艘に、主從三十四人、船頭四人、併せて三十八人づつ乘組んでゐる。だから、船の中は、皆、身動きも碌に出來ない程狹い。それから又、胴の間には、澤庵漬を鮪桶へつめたのが、足のふみ所もない位、ならべてある。慣れない内は、その臭氣を嗅ぐと、誰でもすぐに、吐き氣を催

した。最後に舊暦の十一月下旬だから、海上を吹いて來る風が、まるで身を切るやうに冷い。殊に日が暮れてからは、摩耶颪なり水の上なり、流石に北國生れの若侍も、多くは齒の根が合はないと云ふ始末であつた。

その上、船の中には、虱が澤山ゐた。それも、着物の縫目にかくれてゐるなどと云ふ、生やさしい虱ではない。帆にもたかつてゐる。幟にもたかつてゐる。檣にもたかつてゐる。錨にもたかつてゐる。少し誇張して云へば、人間を乘せる爲の船だか、虱を乘せる爲の船だか、判然しない位である。勿論その位だから、着物には、何十匹となくたかつてゐる。さうして、それが人肌にさへさはれば、すぐに、いい氣になつて、ちくちくやる。それも、五匹や十匹なら、どうにでも、せいとうのしやうがあるが、前にも云つた通り、白胡麻をふり撒いたやうに、澤山ゐるのだから、とても、とりつくすなどと云ふ事が出來る筈のものではない。だから、佃組と山岸組とを問はず、船中にゐる侍と云ふ侍の體は、悉く虱に食はれた痕で、まるで瘢疹にでも罹つたやうに、胸と云はず腹と云はず、一面に赤く腫れ上つてゐた。

しかし、いくら手のつけやうがないと云つても、そのまま打遣つて置くわけには、猶行かない。

そこで、船中の連中は、暇さへあれば、虱狩をやつた。上は家老から下は草履取まで、悉く裸になつて、隨所にゐる虱をてんでに茶呑茶碗の中へ、取つては入れ、取つては入れするのである。大きな帆に内海の冬の日をうけた金毘羅船の中で、三十何人かの侍が、湯もじ一つに茶呑茶碗を持つて、帆綱の下、錨の陰と、一生懸命に虱ばかり、さがして歩いた時の事を想像すると、今日では誰しも滑稽だと云ふ感じが先に立つが、「必要」の前に、一切の事が眞面目になるのは、維新以前と雖も、今と別に變りはない。――そこで、一船の裸侍は、それ自身が大きな虱のやうに、寒いのを我慢して、毎日根氣よく、そこここと歩きながら、丹念に板の間の虱ばかりつぶしてゐた。

二

所が佃組の船に、妙な男が一人ゐた。これは森權之進と云ふ中老のつむじ曲りで、身分は七十俵五人扶持の御徒士である。この男だけは不思議に、虱をとらない。とらないから。勿論、何處と云はず、たかつてゐる。髷ぶしへのぼつてゐる奴があるかと思ふと、袴腰のふちを渡つてゐる

奴がある。それでも別段、氣にかける容子がない。

ではこの男だけ、虱に食はれないのかと云ふと、又さうでもない。やはり外の連中のやうに、體中金錢斑々とでも形容したらよからうと思ふ程、所まだらに赤くなつてゐる。その上、當人がそれを搔いてゐる所を見ると、痒くない譯でもないらしい。が、痒くつても何でも、一向平氣で、すましてゐる。

すましてゐるだけなら、まだいいが、外の連中が、せつせと虱狩をしてゐるのを見ると、必わきからこんな事を云ふ。——

「とるなら、殺し召さるな。殺さずに茶碗へ入れて置けば、わしが貰うて進ぜよう。」

「貰うて、どうさつしやる？」同役の一人が、呆れた顏をして、かう尋ねた。

「貰うてか。貰へばわしが飼うておくまでぢや。」

森は、恬然として答へるのである。

「では殺さずにとつて進ぜよう。」

同役は、冗談だと思つたから、二三人の仲間と一しよに半日がかりで、虱を生きたまま、茶呑

茶碗へ二三杯とりためた。この男の腹では、かうして置いて「さあ飼へ」と云つたら、いくら依怙地な森でも、閉口するだらうと思つたからである。

すると、こつちからはまだ何とも云はない内に、森が自分の方から聲をかけた。

「とれたかな。とれたらわしが貰うて進ぜよう。」

同役の連中は、皆、驚いた。

「ではここへ入れてくれさつしやい。」

森は平然として、着物の襟をくつろげた。

「痩我慢をして、あとでお困りなさるな。」

同役がかう云つたが、當人は耳にもかけない。そこで一人づつ、持つてゐる茶碗を倒にして、米屋が一合枡で米をはかるやうに、ぞろぞろ虱をその襟元へあけてやると、森は、大事さうに外へこぼれた奴を拾ひながら、

「有難い。これで今夜から暖に眠られるて。」といふ獨語を云ひながら、にやにや笑つてゐる。

「虱がゐると、暖うござるかな。」

呆氣にとられてゐた同役は、皆互に顏を見合せながら、誰に尋ねるともなく、かう云つた。すると、森は、虱を入れた後の襟を、丁寧に直しながら、一應、皆の顏を莫迦にしたやうに見まはして、それからこんな事を云ひ出した。

「各々は皆、この頃の寒さで、風をひかれるがな、この權之進はどうぢや。嚔もせぬ。洟もたらさぬ。まして、熱が出たの、手足が冷えるのと云うた覺は、嘗てあるまい。各々はこれを、誰のおかげぢやと思はつしやる。――みんな、この虱のおかげぢや。」

何でも森の說によれば、體に虱がゐると、必ちくちく刺す。刺すからどうしても搔きたくなる。そこで、體中萬遍なく刺されると、やはり體中萬遍なく搔きたくなる。所が人間と云ふものはよくしたもので、痒い痒いと思つて搔いてゐる中に、自然と搔いた所が、熱を持つたやうに溫くなつて來る。そこで溫くなつてくれば、睡くなつて來る。睡くなつて來れば、痒いのもわからない。――かう云ふ調子で、虱さへ體に澤山ゐれば、睡つきもいいし、風もひかない。だからどうしても、虱飼ふべし、狩るべからずと云ふのである。……

「成程、そんなものでござるかな。」同役の二三人は、森の虱論を聞いて、感心したやうに、かう

云つた。

三

それから、その船の中では、森の眞似をして、虱を飼ふ連中が出來て來た。この連中も、暇さへあれば、茶呑茶碗を持つて虱を追ひかけてゐる事は、外の仲間と別に變りがない。唯、ちがふのは、その取つた虱を、一一刻銘に懷に入れて、大事に飼つて置く事だけである。

しかし、何處の國、何時の世でも、Précurseur の說が、そのまま何人にも容れられると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論に反對する、Pharisien が大勢ゐた。

中でも筆頭第一の Pharisien は井上典藏と云ふ御徒士である。これも亦妙な男で、虱をとると必ず皆食つてしまふ。夕がた飯をすませると、茶呑茶碗を前に置いて、うまさうに何かぷつりぷつり嚙んでゐるから、側へよつて茶碗の中を覗いて見ると、それが皆、とりためた虱である。「どんな味でござる？」と訊くと、「左樣さ。油臭い、燒米のやうな味でござらう」と云ふ。虱を口でつぶす者は、何處にでもゐるが、この男はさうではない。全く點心を食ふ氣で、毎日虱を食つてゐ

る。——これが先、第一に森に反對した。

井上のやうに、虱を食ふ人間は、外に一人もゐないが、井上の反對説に加擔をする者は可成ゐる。この連中の云ひ分によると、虱がゐたからと云つて、人間の體は決して溫まるものではない。それのみならず、孝經にも、身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なりとある。自、好んでその身體を、虱如きに食はせるのは、不孝も亦甚しい。だから、どうしても虱狩るべし。飼ふべからずと云ふのである。……

から云ふ行きがかりで、森の仲間と井上の仲間との間には、時折口論が持上がる。それも、唯、口論位ですんでゐた内は、差支へない。が、とうとう、しまひには、それが素で、思ひもよらない刃傷沙汰さへ、始まるやうな事になつた。

それと云ふのは、或日、森が、又大事に飼はうと思つて、人から貰つた虱を茶碗へ入れてとつて置くと、油斷を見すまして井上が、何時の間にかそれを食つてしまつた。森が來て見ると、もう一匹もない。そこで、この Précurseur が腹を立てた。

「何故、人の虱を食はしつた。」

張肘をしながら、眼の色を變へて、かうつめよると、井上は、

「自體、虱を飼ふと云ふのが、たはけぢやての。」と、空嘯いて、まるで取合ふけしきがない。

「食ふ方がたはけぢや。」

森は、躍起となつて、板の間をたたきながら、

「これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬ者がござるか。その虱を取つて食ふなどとは、恩を仇でかへすのも同前ぢや。」

「身共は、虱の恩を着た覺えなどは、毛頭ござらぬ。」

「いや、たとひ恩を着ぬにもせよ、妄に生類の命を斷つなどゝは、言語道斷でござらう。」

二言三言云ひつのつたと思ふと、森がいきなり眼の色を變へて、蝦鞘卷の柄に手をかけた。勿論、井上も負けてはゐない。すぐに、朱鞘の長物をひきよせて、立上る。――裸で虱をとつてゐた連中が、慌てて兩人を取押へなかつたなら、或はどちらか一方の命にも關る所であつた。

この騒ぎを實見した人の話によると、二人は、一同に抱きすくめられながら、それでもまだ口角に泡を飛ばせて、「虱。虱。」と叫んでゐたさうである。

四

かう云ふ具合に、船中の侍たちが、虱の爲に刃傷沙汰を引起してゐる間でも、五百石積の金毘羅船だけは、まるでそんな事には頓着しないやうに、紅白の幟を寒風にひるがへしながら、遙々として長州征伐の途に上るべく、雪もよひの空の下を、西へ西へと走つて行つた。

（大正五年三月）

酒蟲

一

近年にない暑さである。どこを見ても、泥で固めた家々の屋根瓦が、鉛のやうに鈍く日の光を反射して、その下に懸けてある燕の巣さへ、この鹽梅では中にゐる雛や卵を、そのまゝ蒸殺してしまふかと思はれる。まして、畑と云ふ畑は、麻でも黍でも、皆、土いきれにぐつたりと頭をさげて、何一つ、青いなりに、萎れてゐないものはない。その畑の上に見える空も、この頃の温氣に中てられたせゐか、地上に近い大氣は、晴れながら、どんよりと濁つて、その所々に、霰を炮烙で煎つたやうな、形ばかりの雲の峯が、つぶつぶと浮かんでゐる。――「酒蟲」の話は、この陽氣に、わざ／＼炎天の打麥場へ出てゐる、三人の男で始まるのである。

不思議な事に、その中の一人は、素裸で、仰向けに地面へ寢ころんでゐる。おまけに、どう云ふ譯だか、細引で、手も足もぐる／＼卷にされてゐる。が格別當人は、それを苦に病んでゐる容

子もない。背の低い、血色の好い、どことなく鈍重と云ふ感じを起させる、豚のやうに肥つた男である。それから手ごろな素燒の瓶が一つ、この男の枕もとに置いてあるが、これも中に何がはいつてゐるのだか、わからない。

もう一人は、黄色い法衣を着て、耳に小さな青銅の環をさげた、一見、象貌の奇古な沙門である。皮膚の色が並はづれて黒い上に、髪や鬚の縮れてゐる所を見ると、どうも葱嶺の西からでも來た人間らしい。これはさつきから根氣よく、朱柄の麈尾をふりふり、裸の男にたからうとする虻や蠅を追つてゐたが、流石に少しくたびれたと見えて、今では、例の素燒の瓶の側へ來て、七面鳥のやうな恰好をしながら、勿體らしくしやがんでゐる。

あとの一人は、この二人からずつと離れて、打麥場の隅にある草房の軒下に立つてゐる。この男は、頤の先に、鼠の尻尾のやうな鬚を、申譯だけに生やして、踵が隱れる程長い皀布衫に、結目をだらしなく垂らした茶褐帶と云ふ拵へである。白い鳥の羽で製つた團扇を、時々大事さうに使つてゐる容子では、多分、儒者か何かにちがひない。

この三人が三人とも、云ひ合せたやうに、口を噤んでゐる。その上、碌に身動きさへもしない。

何か、これから起らうとする事に、非常な興味でも持つてゐて、その爲に、皆、息をひそめてゐるのではないかと思はれる。

日は正に、亭午であらう。犬も午睡をしてゐるせゐか、吠える聲一つ聞えない。打麥場を圍んでゐる麻や黍も、青い葉を日に光らせて、ひつそりかんと靜まつてゐる。それから、その末に見える空も、一面に、熱くるしく、炎靄をたゞよはせて、雲の峯さへもこの旱に、肩息をついてゐるのかと、疑はれる。見渡した所、息が通つてゐるらしいのは、この三人の男の外にない。さうして、その三人が又、關帝廟に安置してある、泥塑の像のやうに沈默を守つてゐる。……

勿論、日本の話ではない。――支那の長山と云ふ所にある劉氏の打麥場で、或年の夏、起つた出來事である。

二

裸で、炎天に寢ころんでゐるのは、この打麥場の主人で、姓は劉、名は大成と云ふ、長山では、屈指の素封家の一人である。この男の道樂は、酒を飲む一方で、朝から、殆、盃を離したと云

ふ事がない。それも、「獨酌する毎に輒、一甕を盡す」と云ふのだから、人並をはづれた酒量である。尤も前にも云つたやうに、「負郭の田三百畝、半は黍を種う」と云ふので、飲の爲に家産が累はされるやうな惧は、萬々ない。

それが、何故、裸で、炎天に寢ころんでゐるかと云ふと、それには、かう云ふ因縁がある。――その日、劉が、同じ飲仲間の孫先生と一しよに（これが、白羽扇を持つてゐた儒者である。）風通しのいゝ室で、竹婦人に靠れながら、棋局を鬪はせてゐると、召使ひの丫鬟が來て、「唯今、寶幢寺とかにゐると云ふ、坊さんがお見えになりまして、是非、御主人にお目にかゝりたいと申しますが、いかゞ致しませう。」と云ふ。

「なに、寶幢寺？」かう云つて、劉は小さな眼をまぶしさうに、しばたたいたが、やがて、暑さうに肥つた體を起しながら、「では、こゝへお通し申せ。」と云ひつけた。それから、孫先生の顏をちよいと見て、「大方あの坊主でせう。」とつけ加へた。

寶幢寺にゐる坊主と云ふのは、西域から來た蠻僧である。これが、醫療も加へれば、房術も施すと云ふので、この界隈では、評判が高い。たとへば、張三の黑内障が、忽、快方に向つたとか、

噂が盛に行はれてゐるのである。――この噂は、二人とも聞いてゐた。その蠻僧が、今、何の用で、わざわざ、劉の所へ出むいて來たのであらう。勿論、劉の方から、迎へにやつた覺えなどは、全然ない。

序に云つて置くが、劉は、一體、來客を悦ぶやうな男ではない。が、他に一人、來客がある場合に、新來の客が來たとなると、大抵ならば、快く會つてやる。客の手前、客のあるのを自慢するとでも云つたらよささうな、子供らしい虛榮心を持つてゐるからである。それに、今日の蠻僧は、この頃、どこででも評判になつてゐる。決して、會つて恥しいやうな客ではない。――劉が會はうと云ひ出した動機は、大體こんな所にあつたのである。

「何の用でせう。」

「まづ、物貰ひですな。信施でもしてくれと云ふのでせう。」

こんな事を、二人で話してゐる内に、やがて、丫鬟の案内で、はいつて來たのを見ると、背の高い、紫石稜のやうな眼をした、異形な沙門である。黃色い法衣を着て、その肩に、縮れた髮の伸びたのを、うるささうに垂らしてゐる。それが、朱柄の麈尾を持つたまゝ、のつそり室のまん

中に立つた。挨拶もしなければ、口もきかない。

劉は、しばらく、ためらつてゐたが、その内に、それが何となく、不安になつて來たので「何か御用かな」と訊いて見た。

すると、蠻僧が云つた。「あなたでせうな、酒が好きなのは。」

「さやう。」劉は、あまり問が唐突なので、曖昧な返事をしながら、救を求めるやうに、孫先生の方を見た。孫先生は、すまして、獨りで、盤面に石を下してゐる。まるで、取り合ふ容子はない。

「あなたは、珍しい病に罹つてお出になる。それを御存知ですかな。」蠻僧は念を押すやうに、かう云つた。劉は、病と聞いたので、けげんな顏をして、竹婦人を撫でながら、

「病――ですかな。」

「さうです。」

「いや、幼少の時から……」劉が何か云はうとすると、蠻僧はそれを遮つて、

「酒を飲まれても、醉ひますまいな。」

「……」劉は、ぢろぢろ、相手の顏を見ながら、口を噤んでしまつた。實際この男は、いくら酒

を飲んでも、醉つた事がないのである。

「それが、病の證據ですよ。」蠻僧は、うす笑をしながら、語をついで、「腹中に酒蟲がゐる。それを除かないと、この病は癒りません。貧道は、あなたの病を癒しに來たのです。」

「癒りますかな。」劉は思はず覺束なさうな聲を出した。さうして、自分でそれを恥ぢた。

「癒ればこそ、來ましたが。」

すると、今まで、默つて、問答を聞いてゐた孫先生が、急に語を插んだ。

「何か、藥でもお用ゐるか。」

「いや、藥なぞは用ゐるまでもありません。」蠻僧は不愛想に、かう答へた。

孫先生は、元來、道佛の二教を殆、無理由に輕蔑してゐる。だから、道士とか僧侶とかと一しよになつても、口をきいた事は滅多にない。それが、今ふと口を出す氣になつたのは、全く酒蟲と云ふ語の興味に動かされたからで、酒の好きな先生は、これを聞くと、自分の腹の中にも、酒蟲がゐはしないかと、聊、不安になつて來たのである。所が、蠻僧の不承不承な答を聞くと、急に、自分が莫迦にされたやうな氣がしたので、先生はちよいと顏をしかめながら、又元の通り、

默々として棋子を下しはじめた。さうして、それと同時に、内心こんな横柄な坊主に會つたり何ぞする主人の劉を、莫迦げてゐると思ひ出した。

劉の方では、勿論そんな事には頓着しない。

「では、針でも使ひますかな。」

「なに、もつと造作のない事です。」

「では呪ですかな。」

「いや、呪でもありません。」

かう云ふ會話を繰返した末に、蠻僧は、簡單に、その療法を說明して聞かせた。――それによると、唯、裸になつて、日向にぢつとしてゐさへすればよいと云ふのである。劉には、それが、甚、容易な事のやうに思はれた。その位の事で癒るなら、癒して貰ふのに越した事はない。その上、意識してはゐなかつたが、蠻僧の治療を受けると云ふ點で、好奇心も少しは動いてゐた。

そこでとうとう、劉も、こつちから頭を下げて、「では、どうか一つ、癒して頂きませう。」と云ふ事になつた。――劉が、裸で、炎天の打麥場にねころんでゐるのには、かう云ふ謂れが、ある

のである。

すると蠻僧は、身動きをしてはいけないと云ふので、劉の體を細引で、ぐるぐる卷にした。それから、僮僕の一人に云ひつけて、酒を入れた素燒の瓶を一つ、劉の枕もとへ持つて來させた。當座の行きがかりで、糟邱の良友たる孫先生が、この不思議な療治に立會ふ事になつたのは云ふまでもない。

酒蟲と云ふ物が、どんな物だか、それが腹の中にゐなくなると、どうなるのだか、枕もとにある酒の瓶は、何にするつもりなのだか、それを知つてゐるのは、蠻僧の外に一人もない。かう云ふと、何も知らずに、炎天へ裸で出てゐる劉は、甚、迂闊なやうに思はれるが、普通の人間が、學校の教育などをうけるのも、實は大抵、これと同じやうな事をしてゐるのである。

三

暑い。額へ汗がぢりぢりと湧いて來て、それが玉になつたかと思ふと、つうつと生暖く、眼の方へ流れて來る。生憎、細引でしばられてゐるから、手を出して拭ふ譯には、勿論行かない。そ

こで、首を動かして、汗の進路を變へようとすると、その途端に、はげしく眩暈がしさうな氣がしたので、殘念ながら、この計畫も亦、見合せる事にした。その中に、汗は遠慮なく、瞼をぬらして、鼻の側から口許をまはりながら、頤の下まで流れて行く。氣味が惡い事夥しい。

それまでは、眼を開いて、白く焦された空や、葉をたらした麻畑を、まじ〳〵と眺めてゐたが、汗が無暗に流れるやうになつてからは、それさへ斷念しなければならなくなつた。劉は、この時、始めて、汗が眼にはいると、しみるものだと云ふ事を、知つたのである。そこで、屠所の羊の樣な顏をして、神妙に眼をつぶりながら、ぢつと日に照りつけられてゐると、今度は、顏と云はず體と云はず、上になつてゐる部分の皮膚が、次第に或痛みを感じるやうになつて來た。皮膚の全面に、あらゆる方向へ動かうとする力が働いてゐるが、皮膚自身は、それに對して、毫も彈力を持つてゐない。それでどこもかしこも、ぴり〳〵する――とでも說明したら、よからうと思ふ痛みである。これは、汗所の苦しさではない。劉は、少し蠻僧の治療をうけたのが、忌々しくなつて來た。

しかし、これは、後になつて考へて見ると、まだ苦しくない方の部だつたのである。――その

うちに、喉が渇いて來た。劉も、曹孟德か誰かが、前路に梅林ありと云つて、軍士の渇を醫したと云ふ事は知つてゐる。が、今の場合、いくら、梅子の甘酸を念頭に浮べて見ても、喉の渇く事は、少しも前と變りがない。頤を動かして見たり、舌を嚙んで見たりしたが、口の中は依然として熱を持つてゐる。それも、枕もとの素燒の瓶がなかつたら、まだ幾分でも、我慢がし易かつたのに違ひない。所が、瓶の口からは、芬々たる酒香が、間斷なく、劉の鼻を襲つて來る。しかも、氣のせゐか、その酒香が、一分每に、益〳〵高くなつて來るやうな心もちさへする。劉は、せめて、瓶だけでも見ようと思つて、眼をあけた。上眼を使つて見ると、瓶の口と、膺揚にふくれた胴の半分ばかりが、眼にはいる。眼にはいるのは、それだけであるが、同時に、劉の想像には、その瓶のうす暗い內部に、黃金のやうな色をした酒のなみ〳〵と湛へてゐる容子が、浮んで來た。思はず、ひびの出來た脣を、乾いた舌で舐めまはして見たが、唾の湧く氣色は、更にない。汗さへ今では、日に干されて、前のやうには、流れなくなつてしまつた。

　すると、はげしい眩暈が、つづいて、二三度起つた。頭痛はさつきから、しつきりなしにしてゐる。劉は、心の中で愈〳〵、蠻僧を怨めしく思つた。それから又何故自分ともあるものが、あんな

人間の口車に乘つて、こんな莫迦げた苦しみをするのだらうと思つた。そのうちに、喉は、益々、渇いて來る。胸は妙にむかついて來る。もう我慢にも、ぢつとしてはゐられない。そこで劉はとうとう思切つて、枕もとの蠻僧に、療治の中止を申込むつもりで、喘ぎながら、口を開いた。

すると、その途端である。劉は、何とも知れない塊が、少しづゝ胸から喉へ這ひ上つて來るのを感じ出した。それが或は蚯蚓のやうに、蠕動してゐるかと思ふと、或は守宮のやうに、少しづつ居ざつてゐるやうでもある。兎に角或柔かい物が、柔かいなりに、むづりむづりと、食道を上へせり上つて來るのである。さうしてとうとうしまひに、それが、喉佛の下を、無理にすりぬけたと思ふと、今度はいきなり、鰌か何かのやうにぬるりと暗い所をぬけ出して、勢よく外へとんで出た。

と、その拍子に、例の素焼の瓶の方で、ぽちやりと、何か酒の中へ落ちるやうな音がした。

すると、蠻僧が、急に落ちつけてゐた尻を持ち上げて、劉の體にかゝつてゐる、細引を解きはじめた。もう、酒蟲が出たから、安心しろと云ふのである。

「出ましたかな。」劉は、呻くやうにから云つて、ふらふらする頭を起しながら、物珍しさの餘り、喉の渇いたのも忘れて、裸のまま、瓶の側へ這ひよつた。それと見ると、孫先生も、白羽扇で日をよけながら、急いで、二人の方へやつて來る。さて、三人揃つて瓶の中を覗きこむと、肉の色が朱泥に似た、小さな山椒魚のやうなものが、酒の中を泳いでゐる。長さは、三寸ばかりであらう。口もあれば、眼もある。どうやら、泳ぎながら、酒を飲んでゐるらしい。劉はこれを見ると、急に胸が悪くなつた。……

四

蠻僧の治療の效は、覿面に現れた。劉大成は、その日から、ぱつたり酒が飲めなくなつたのである。今は、匂を嗅ぐのも、嫌だと云ふ。所が、不思議な事に、劉の健康が、それから、少しづつ、衰へて來た。今年で、酒蟲を吐いてから、三年になるが、往年の丸丸と肥つてゐた俤は、何處にもない。色光澤の悪い皮膚が、脂じみたまま、險しい顏の骨を包んで、霜に侵された双鬢が、纔に、顳顬の上に、殘つてゐるばかり、一年の中に、何度、床につくか、わからない位ださうで

ある。

しかし、それ以來、衰へたのは、劉の健康ばかりではない。劉の家産も亦とんとん拍子に傾いて、今では、三百畝を以て數へた負郭の田も、多くは人の手に渡つた。劉自身も、餘儀なく、馴れない手に鋤を執つて、佗しいその日その日を送つてゐるのである。

酒蟲を吐いて以來、何故、劉の健康が衰へたか。何故、家産が傾いたか――酒蟲を吐いたと云ふ事と、劉のその後の零落とを、因果の關係に並べて見る以上、これは、誰にでも起りやすい疑問である。現にこの疑問は、長山に住んでゐる、あらゆる職業の人人によつて繰返され、且、それらの人人の口から、あらゆる種類の答を與へられた。今、ここに擧げる三つの答も、實はその中から、最、代表的なものを選んだのに過ぎない。

第一の答。酒蟲は、劉の福であつて、劉の病ではない。偶、暗愚の蠻僧に遇つた爲に、好んで、この天與の福を失ふやうな事になつたのである。

第二の答。酒蟲は、劉の病であつて、劉の福ではない。何故と云へば、一飲一甕を盡すなどと云ふ事は、到底、常人の考へられない所だからである。そこで、もし酒蟲を除かなかつたなら、

劉は必久しからずして、死んだのに相違ない。して見ると、貧病、迭に至るのも、寧、劉にとつては、幸福と云ふべきである。

第三の答。酒蟲は、劉の病でもなければ、劉の福でもない。劉は、昔から酒ばかり飲んでゐた。劉の一生から酒を除けば、後には、何も殘らない。して見ると、劉は卽酒蟲、酒蟲は卽劉である。だから、劉が酒蟲を去つたのは自ら己を殺したのも同然である。つまり、酒が飲めなくなつた日から、劉は劉にして、劉ではない。劉自身が旣になくなつてゐたとしたら、昔日の劉の健康なり家產なりが、失はれたのも、至極、當然な話であらう。

これらの答の中で、どれが、最よく、當を得てゐるか、それは自分にもわからない。自分は、唯、支那の小說家の Didacticism に倣つて、かう云ふ道德的な判斷を、この話の最後に、列擧して見たまでゝある。

（大正五年四月）

野呂松人形

野呂松人形を使ふから、見に來ないかと云ふ招待が突然來た。招待してくれたのは、知らない人である。が、文面で、その人が、僕の友人の知人だと云ふ事がわかつた。「K氏も御出の事と存じ候へば」とか何とか、書いてある。Kが、僕の友人である事は云ふまでもない。――僕は、兎も角も、招待に應ずる事にした。

野呂松人形と云ふものが、どんなものかと云ふ事は、その日になつて、Kの説明を聞くまでは、僕もよく知らなかつた。その後、世事談を見ると、のろまは「江戸和泉太夫、芝居に野呂松勘兵衞と云ふもの、頭ひらたく色青黑きいやしげなる人形を使ふ。これをのろま人形と云ふ。野呂松の略語なり」とある。昔は藏前の札差とか諸大名の御金御用とか或は又は長袖とかが、樂しみに使つたものださうだが、今では、これを使ふ人も數へる程しかないらしい。

當日、僕は車で、その催しがある日暮里の或人の別莊へ行つた。二月の末の或曇つた日の夕方

である。日の暮には、まだ間があるので、光とも影ともつかない明るさが、往來に漂つてゐる。木の芽を誘ふには早すぎるが、空氣は、濕氣を含んで、どことなく暖い。二三ケ所で問うて、漸、見つけた家は、人通りの少い横町にあつた。が、想像したほど、閑靜な住居でもないらしい。昔通のくゞり門をはいつて、幅の狹い御影石の石だたみを、玄關の前へ來ると、こゝには、式臺の柱に、銅鑼が一つ下つてゐる。そばに、手ごろな朱塗の棒まで添へてあるから、これで叩くのかなと思つてゐると、まだ、それを手にしない中に、玄關の障子のかげにゐた人が、「どうぞこちらへ」と聲をかけた。

受附のやうな所で、罫紙の帳面に名前を書いて、奥へ通ると、玄關の次の八疊と六疊と、二間一しよにした、うす暗い座敷には、もう大分、客の數が見えてゐた。僕は、人中へ出る時は、大抵、洋服を着てゆく。袴だと、拘泥しなければならない、繁雜な日本の étiquette も、ズボンだと、屢、大目に見られ易い。僕のやうな、禮節になれない人間には、至極便利である。その日も、かう云ふ譯で、僕は、大學の制服を着て行つた。が、此處へ來てゐる連中の中には、一人も洋服を着てゐるものがない。驚いた事には、僕の知つてゐる英吉利人さへ、紋附にセルの袴で、扇を

前に控へてゐる。Kの如き町家の子弟が結城紬の二枚襲か何かで、納まつてゐたのは云ふまでもない。僕は、この二人の友人に挨拶をして、座につく時に、聊、étranger の感があつた。

「これだけ、お客があつては、――さんも大よろこびだらう。」Kが僕に云つた。――さんと云ふのは、僕に招待狀をくれた人の名である。

「あの人も、やはり人形を使ふのかい。」

「うん、一番か二番は、習つてゐるさうだ。」

「今日も使ふかしら。」

「いや、使はないだらう。今日は、これでもこの道のお歷々が使ふのだから。」

Kは、それから、いろ〳〵、野呂松人形の話をした。何でも、番組の數は、皆で七十何番とかあつて、それに使ふ人形が二十幾つとかあると云ふやうな事である。自分は、時々、六疊の座敷の正面に出來てゐる舞臺の方を眺めながら、ぼんやりKの說明を聞いてゐた。

舞臺と云ふのは、高さ三尺ばかり、幅二間ばかりの金箔を押した步衝である。Kの說によると、これを「手摺り」と稱するので、何時でも取壞せるやうに出來てゐると云ふ。その左右へは、新し

い三色緞子の几帳が下つてゐる。後は、金屏風をたてまはしたものらしい。うす暗い中に、その歩衝と屏風との金が一重、燻しをかけたやうに、重々しく夕闇を破つてゐる。――僕は、この簡素な舞臺を見て非常にいい心もちがした。

「人形には、男と女とあつてね、男には、青頭とか、文字兵衛とか、十内とか、老僧とか云ふのがある。」Kは辯じて倦まない。

「女にもいろいろありますか。」と英吉利人が云つた。

「女には、朝日とか、照日とかね、それからおきね、惡婆なんぞと云ふのもあるさうだ。尤も中で有名なのは、青頭でね。これは、元祖から、今の宗家へ傳來したのだと云ふが……」

生憎、その内に、僕は小用に行きたくなつた。

――厠から歸つて見ると、もう電燈がついてゐる。さうして、何時の間にか「手摺り」の後には、黒い紗の覆面をした人が一人、人形を持つて立つてゐる。愈、狂言が始まつたのであらう。僕は、會釋をしながら、外の客の間を通つて、前に坐つてゐた所へ來て坐つた。Kと日本服を着た英吉利人との間である。

舞臺の人形は、藍色の素袍に、立烏帽子をかけた大名である。「それがし、未、誇る寶がござらぬによつて、世に稀なる寶を都へ求めにやらうと存ずる。」人形を使つてゐる人が、こんな事を云つた。語と云ひ、口調と云ひ、間狂言を見るのと、大した變りはない。

やがて、大名が、「先、與六を呼び出して申しつけよう。やい〳〵與六あるか。」とか何とか云ふと、「へえ」と答へながらもう一人、黑い紗で顏を隱した人が、太郎冠者のやうな人形を持つて、左の三色緞子の中から、出て來た。これは、茶色の半上下に、無腰と云ふ着附けである。

すると、大名の人形が、左手を小さ刀の柄にかけながら、右手の中啓で、與六をさしまねいで、かう云ふ事を云ひつける。――「天下治まり、目出度い御代なれば、かなたこなたにて寶合せをせらるゝところ、なんぢの知る通り、それがし方には、未誇るべき寶がないによつて、汝都へ上り、世に稀なるところの寶が有らば求めて參れ。」與六「へえ」大名「急げ」「へえ」「えゝ」「へえ」「えゝ」「へえ扨々殿樣には……」――それから與六の長い soliloque が始まつた。

人形の出來は、甚、簡單である。第一、着附の下に、足と云ふものがない。口が開いたり、目が動いたりする後世の人形に比べれば、格段な相違である。手の指を動かす事はあるが、それも

る。僕は、人形に對して、再、étranger の感を深くした。
――それより外には、何もしない。甚、間ののびた、同時に、何處か鷹揚な、品のいゝものであ
滅多にやらない。するのは、唯身ぶりである。體を前後にまげたり、手を左右に動かしたりする

アナトオル・フランスの書いたものに、かう云ふ一節がある、――時代と場所との制限を離れた美は、どこにもない。自分が、或藝術の作品を悅ぶのは、その作品の生活に對する關係を、自分が發見した時に限るのである。Hissarlik の素燒の陶器は自分をして、よりイリアツドを愛せしめる。十三世紀に於けるフイレンツェの生活を知らなかつたとしたら、自分は神曲を、今日の如く鑑賞する事は出來なかつたのに相違ない。自分は云ふ、あらゆる藝術の作品は、その製作の場所と時代とを知つて、始めて、正當に愛し、且、理解し得られるのである。……

僕は、金色の背景の前に、悠長な動作を繰返してゐる、藍の素袍と茶の半上下とを見て、圖らず、この一節を思ひ出した。僕たちの書いてゐる小說も、何時かこの野呂松人形のやうになる時が來はしないだらうか。僕たちは、時代と場所との制限をうけない美があると信じたがつてゐる。僕たちのためにも、僕たちの尊敬する藝術家のためにも、さう信じて疑ひたくないと思つてゐる。

しかし、それが、果してさういありたいばかりでなく、さういある事であらうか。……

野呂松人形は、さういある事を否定する如く、木彫の白い顔を、金の歩衛の上で、動かしてゐるのである。

狂言は、それから、すつぱが出て、與六を欺し、與六が歸つて、大名の不興を蒙る所で完つた。鳴物は、三味線のない芝居の囃しと能の囃しとを、一つにしたやうなものである。

僕は、次の狂言を待つ間を、Kとも話さずに、ぼんやり、獨り「朝日」をのんですごした。

（大正五年七月十八日）

芋粥

元慶の末か、仁和の始にあつた話であらう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めてゐない。讀者は唯、平安朝と云ふ、遠い昔が背景になつてゐると云ふ事を、知つてさへゐてくれれば、よいのである。——その頃、攝政藤原基經に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつた。

これも、某と書かずに、何の誰と、ちやんと姓名を明にしたいのであるが、生憎舊記には、それが傳はつてゐない。恐らくは、實際、傳はる資格がない程、平凡な男だつたのであらう。一體舊記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、餘り興味を持たなかつたらしい。この點で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがふ。王朝時代の小説家は、存外、閑人でない。——兎に角、攝政藤原基經に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつた。これが、この話の主人公である。

五位は、風采の甚揚らない男であつた。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が下つてゐる。口髭は勿論薄い。頬が、こけてゐるから、頤が、人並はづれて、細く見える。脣は――一々、數へ立ててゐれば、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、出來上つてゐたのである。

この男が、何時、どうして、基經に仕へるやうになつたのか、それは誰も知つてゐない。が、餘程以前から、同じやうな色の褪めた水干に、同じやうな萎々した烏帽子をかけて、同じやうな役目を、飽きずに、毎日、繰返してゐる事だけは、確である。その結果であらう、今では、誰が見ても、この男に若い時があつたとは思はれない。(五位は四十を越してゐた。)その代り、生れた時から、あの通り寒むさうな赤鼻と、形ばかりの口髭とを、朱雀大路の衢風に、吹かせてゐたと云ふ氣がする。上は主人の基經から、下は牛飼の童兒まで、無意識ながら、悉くさう信じて疑ふ者がない。

かう云ふ風采を具へた男が、周圍から受ける待遇は、恐らく書くまでもないことであらう。侍所にゐる連中は、五位に對して、殆ど蠅程の注意も拂はない。有位無位、併せて二十人に近い下

役さへ、彼の出入りには、不思議な位、冷淡を極めてゐる、五位が何か云ひつけても、決して彼等同志の雜談をやめた事はない。彼等にとつては、空氣の存在が見えないやうに、五位の存在も、眼を遮らないのであらう。下役でさへさうだとすれば、別當とか、侍所の司とか云ふ上役たちが頭から彼を相手にしないのは、寧ろ自然の數である。彼等は、五位に對すると、殆ど、子供らしい無意味な惡意を、冷然とした表情の後に隱して、何を云ふのでも、手眞似だけで用を足した。人間に、言語があるのは、偶然ではない。從つて、彼等も手眞似では用を辨じない事が、時々ある。が、彼等は、それを全然五位の悟性に、缺陷があるからだと、思つてゐるらしい。そこで彼等は用が足りないと、この男の歪んだ揉烏帽子の先から、切れかかつた藁草履の尻まで、萬遍なく見上げたり、見下したりして、それから、鼻で哂ひながら、急に後を向いてしまふ。それでも、五位は、腹を立てた事がない。彼は、一切の不正を、不正として感じない程、意氣地のない、臆病な人間だつたのである。

所が、同僚の侍たちになると、進んで、彼を飜弄しようとした。年かさの同僚が、彼れの振はない風采を材料にして、古い洒落を聞かせようとする如く、年下の同僚も、亦それを機會にして、

所謂興言利口の練習をしようとしたからである。彼等は、この五位の面前で、その鼻と口髭と、烏帽子と水干とを、品隲して飽きる事を知らなかつた。そればかりではない。彼が五六年前に別れたうけ脣の女房と、その女房と關係があつたと云ふ酒のみの法師とも、屢彼等の話題になつた。その上、どうかすると、彼等は甚、性質の惡い惡戯さへする。それを今一々、列記する事は出來ない。が、彼の篠枝の酒を飲んで、後へ尿を入れて置いたと云ふ事を書けば、その外は凡、想像される事だらうと思ふ。

　しかし、五位はこれらの揶揄に對して、全然無感覺であつた。少くもわき眼には、無感覺であるらしく思はれた。彼は何を云はれても、顏の色さへ變へた事がない。默つて例の薄い口髭を撫でながら、するだけの事をしてすましてゐる。唯、同僚の惡戯が、嵩じすぎて、髷に紙切れをつけたり、太刀の鞘に草履を結びつけたりすると、彼は笑ふのか、泣くのか、わからないやうな笑顏をして、「いけぬのう、お身たちは。」と云ふ。その顏を見、その聲を聞いた者は、誰でも一時或いぢらしさに打たれてしまふ。（彼等にいぢめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない、彼等の知らない誰かが――多數の誰かが、彼の顏と聲とを借りて、彼等の無情を責めてゐる。）――

―さう云ふ氣が、朧げながら、彼等の心に、一瞬の間、しみこんで來るからである。唯その時の心もちを、何時までも持續ける者は甚少い。その少い中の一人に、或無位の侍があつた。これは丹波の國から來た男で、まだ柔かい口髭が、やつと鼻の下に、生えかかつた位の青年である。勿論、この男も始めは皆と一しよに、何の理由もなく、赤鼻の五位を輕蔑した。所が、或日何かの折に、「いけぬのう、お身たちは」と云ふ聲を聞いてからは、どうしても、それが頭を離れない。それ以來、この男の眼にだけは、五位が全く別人として、映るやうになつた。榮養の不足した、血色の惡い、間のぬけた五位の顏にも、世間の迫害にべそを掻いた、「人間」が覗いてゐるからである。この無位の侍には、五位の事を考へる度に、世の中のすべてが急に本來の下等さを露すやうに思はれた。さうしてそれと同時に霜げた赤鼻と數へる程の口髭とが何となく一味の慰安を自分の心に傳へてくれるやうに思はれた。……

しかし、それは、唯この男一人に、限つた事である。かう云ふ例外を除けば、五位は、依然として周圍の輕蔑の中に、犬のやうな生活を續けて行かなければならなかつた。第一彼には着物らしい着物が一つもない。青鈍の水干と、同じ色の指貫とが一つづつあるのが、今ではそれが上白

んで、藍とも紺とも、つかないやうな色に、なつてゐる。水干はそれでも、肩が少し落ちて、丸組の緒や菊綴の色が怪しくなつてゐるだけだが、指貫になると、裾のあたりのいたみ方が一通りでない。その指貫の中から、下の袴もはかない、細い足が出てゐるのを見ると、口の惡い同僚でなくとも、痩公卿の車を牽いてゐる、痩牛の歩みを見るやうな、みすぼらしい心もちがする。それに佩いてゐる太刀も、頗る覺束ない物で、柄の金具も如何はしければ、黑鞘の塗も剝げかゝつてゐる。これが例の赤鼻で、だらしなく草履をひきずりながら、唯でさへ猫背なのを、一層寒空の下に背ぐくまつて、もの欲しさうに、左右を眺め眺め、きざみ足に歩くのだから、通りがかりの物賣りまで莫迦にするのも、無理はない。現に、かう云ふ事さへあつた。……

或る日、五位が三條坊門を神泉苑の方へ行く所で、子供が六七人、路ばたに集つて、何かしてゐるのを見た事がある。「こまつぶり」でも、廻してゐるのかと思つて、後ろから覗いて見ると、何處かから迷つて來た、尨犬の首へ繩をつけて、打つたり毆いたりしてゐるのであつた。臆病な五位は、これまで何かに同情を寄せる事があつても、あたりへ氣を兼ねて、まだ一度もそれを行爲に現はしたことがない。が、この時だけは相手が子供だと云ふので、幾分か勇氣が出た。そこ

で出來るだけ、笑顏をつくりながら、年かさらしい子供の肩を叩いて、「もう、勘忍してやりたされ。犬も打たれゝば、痛いでのう」と聲をかけた。すると、その子供はふりかへりながら、上眼を使つて、蔑すむやうに、ぢろ〳〵五位の姿を見た。云はゞ侍所の別當が用の通じない時に、この男を見るやうな顏をして、見たのである。「いらぬ世話はやかれたうもない。」その子供は一足下りながら、高慢な脣を反らせて、かう云つた。「何ぢや、この鼻赤めが。」五位はこの語が自分の顏を打つたやうに感じた。が、それは惡態をつかれて、腹が立つたからでは毛頭ない。云はなくともいい事を云つて、恥をかいた自分が、情なくなつたからである。彼は、きまりが悪いのを苦しい笑顏に隱しながら、默つて、又、神泉苑の方へ歩き出した。後では、子供が、六七人、肩を寄せて、「べつかつかう」をしたり、舌を出したりしてゐる。勿論彼はそんな事を知らない。知つてゐたにしても、それが、この意氣地のない五位にとつて、何であらう。……

では、この話の主人公は、唯、輕蔑される爲にのみ生れて來た人間で、別に何の希望も持つてゐないかと云ふと、さうでもない。五位は五六年前から芋粥と云ふ物に、異常な執着を持つてゐる。芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛の汁で煮た、粥の事を云ふのである。當時はこ

れが、無上の佳味として、上は萬乘の君の食膳にさへ、上せられた。從つて、吾五位の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない。その時でさへ、飲めるのは僅に喉を沾すに足る程の少量である。そこで芋粥を飽きる程飲んで見たいと云ふ事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になつてゐた。勿論、彼は、それを誰にも話した事がない。いや彼自身さへそれが、彼の一生を貫いてゐる欲望だとは、明白に意識しなかつた事であらう。が事實は彼がその爲に、生きてゐると云つても、差支ない程であつた。――人間は、時として、充されるか充されないか、わからない欲望の爲に、一生を捧げてしまふ。その愚を哂ふ者は、畢竟、人生に對する路傍の人に過ぎない。

しかし、五位が夢想してゐた、「芋粥に飽かむ」事は、存外容易に事實となつて現れた。その始終を書かうと云ふのが、芋粥の話の目的なのである。

或年の正月二日、基經の第に、所謂臨時の客があつた時の事である。(臨時の客は二宮の大饗と

同日に攝政關白家が、大臣以下の上達部を招いて催す饗宴で、大饗と別に變りがない。）五位も、外の侍たちにまじつて、その殘肴の相伴をした。當時はまだ、取食みの習慣がなくて、殘肴は、その家の侍が一堂に集まつて、食ふ事になつてゐたからである。尤も、大饗に等しいと云つても昔の事だから、品數の多い割りに碌な物はない。餅、伏菟、蒸鮑、干鳥、宇治の氷魚、近江の鮒、鯛の楚割、鮭の内子、焼蛸、大海老、大柑子、小柑子、橘、串柿などの類である。唯、その中に、例の芋粥があつた。五位は毎年、この芋粥を樂しみにしてゐる。が、何時も人數が多いので、自分が飮めるのは、いくらもない。それが今年は、特に、少かつた。さうして氣のせゐか、何時もより、餘程味が好い。そこで、彼は飮んでしまつた後の椀をしげしげと眺めながら、うすい口髭についてゐる滴を、掌で拭いて誰に云ふともなく、「何時になつたら、これに飽ける事かのう」と、かう云つた。

「大夫殿は、芋粥に飽かれた事がないさうな。」

五位の語が完らない中に、誰かが、嘲笑つた。錆のある、鷹揚な、武人らしい聲である。五位は、猫背の首を擧げて、臆病らしく、その人の方を見た。聲の主は、その頃同じ基經の恪勤にな

つてゐた、民部卿時長の子藤原利仁である。肩幅の廣い、身長の群を拔いた逞しい大男で、これは、燒栗を嚙みながら、黑酒の杯を重ねてゐた。もう大分醉がまはつてゐるらしい。

「お氣の毒な事ぢやの。」利仁は、五位が顏を擧げたのを見ると、輕蔑と憐憫とを一つにしたやうな聲で、語を繼いだ。「お望みなら、利仁がお飽かせ申さう。」

始終、いぢめられてゐる犬は、たまに肉を貰つても容易によりつかない。五位は、例の笑ふのか、泣くのか、わからないやうな笑顏をして、利仁の顏と、空の椀とを等分に見比べてゐた。

「おいやかな。」

「……」

「どうぢや。」

「……」

五位は、その中に、衆人の視線が、自分の上に、集まつてゐるのを感じ出した。答へ方一つで、又、一同の嘲弄を、受けなければならない。或は、どう答へても、結局、莫迦にされさうな氣さへする。彼は躊躇した。もし、その時に、相手が、少し面倒臭さうな聲で、「おいやなら、たつて

とは申すまい」と云はなかつたなら、五位は、何時までも、椀と利仁とを、見比べてゐた事であらう。

彼は、それを聞くと、慌しく答へた。

「いや……忝うござる。」

この問答を聞いてゐた者は、皆、一時に、失笑した。「いや、忝うござる。」――かう云つて、五位の答を、眞似る者さへある。所謂、橙黄橘紅を盛つた窪坏や高坏の上に多くの揉烏帽子や立烏帽子が、笑聲と共に一しきり、波のやうに動いた。中でも、最、大きな聲で、機嫌よく、笑つたのは、利仁自身である。

「では、その中に、御誘ひ申さう。」さう云ひながら、彼は、ちよいと顔をしかめた。こみ上げて來る笑と今飲んだ酒とが、喉で一つになつたからである。「……しかと、よろしいな。」

「忝うござる。」

五位は赤くなつて、吃りながら、又、前の答を繰返した。一同が今度も、笑つたのは、云ふまでもない。それが云はせたさに、わざわざ念を押した當の利仁に至つては、前よりも一層可笑し

さうに廣い肩をゆすつて、哄笑した。この朔北の野人は、生活の方法を二つしか心得てゐない。一つは酒を飲む事で、他の一つは笑ふ事である。

しかし幸に談話の中心は、程なく、この二人を離れてしまつた。これは事によると、外の連中が、たとひ嘲弄にしろ、一同の注意をこの赤鼻の五位に集中させるのが、不快だつたからかも知れない。兎に角、談柄はそれからそれへと移つて、酒も肴も殘少になつた時分には、某と云ふ侍學生が、行縢の片皮へ、兩足を入れて馬に乘らうとした話が、一座の興味を集めてゐた。が、五位だけは、まるで外の話が聞えないらしい。恐らく芋粥の二字が、彼のすべての思量を支配してゐるからであらう。前に雉子の炙いたのがあつても、箸をつけない。黑酒の杯があつても、口を觸れない。彼は、唯、兩手を膝の上に置いて、見合ひをする娘のやうに霜に犯されかかつた鬢の邊まで、初心らしく上氣しながら、何時までも空になつた黑塗の椀を見つめて、多愛もなく、微笑してゐるのである。……

それから、四五日たつた日の午前、加茂川の河原に沿つて、粟田口へ通ふ街道を、靜に馬を進めてゆく二人の男があつた。一人は濃い縹の狩衣に同じ色の袴をして、打出の太刀を佩いた「髭黒く鬢ぐきよき」男である。もう一人は、みすぼらしい靑鈍の水干に、薄綿の衣を二つばかり重ねて着た、四十恰好の侍で、これは、帶のむすび方のだらしのない容子と云ひ、赤鼻でしかも穴のあたりが、洟にぬれてゐる容子と云ひ、身のまはり萬端のみすぼらしい事夥しい。尤も、馬は二人とも、前のは月毛、後のは蘆毛の三歳駒で、道をゆく物賣りや侍も、振向いて見る程の駿足である。その後から又二人、馬の歩みに遲れまいとして隨いて行くのは、調度掛と舍人とに相違ない。――これが、利仁と五位との一行である事は、わざわざ、こゝに斷るまでもない話であらう。

冬とは云ひながら、物靜に晴れた日で、白けた河原の石の間、潺湲たる水の邊に立枯れてゐる蓬の葉を、ゆする程の風もない。川に臨んだ背の低い柳は、葉のない枝に飴の如く滑かな日の光りをうけて、梢にゐる鶺鴒の尾を動かすのさへ、鮮かに、それと、影を街道に落してゐる。東山の暗い綠の上に、霜に焦げた天鵞絨のやうな肩を、丸々と出してゐるのは、大方、比叡の山であ

らう。二人はその中に鞍の螺鈿を、まばゆく日にきらめかせながら鞭をも加へず悠々と、粟田口を指して行くのである。
「どこでござるかな、手前をつれて行つて、やらうと仰せられるのは。」五位が馴れない手に手綱をかいくりながら、云つた。
「すぐ、そこぢや。お案じになる程遠くはない。」
「すると、粟田口邊でござるかな。」
「まづ、さう思はれたがよろしからう。」
利仁は今朝五位を誘ふのに、東山の近くに湯の湧いてゐる所があるから、そこへ行かうと云つて出て來たのである。赤鼻の五位は、それを眞にうけた。久しく湯にはいらないので、體中がこの間からむづ痒い。芋粥の馳走になつた上に、入湯が出來れば、願つてもない仕合せである。かう思つて、豫め利仁が牽かせて來た、蘆毛の馬に跨つた。所が、轡を並べて此處まで來て見ると、どうも利仁はこの近所へ來るつもりではないらしい。現に、さうかうしてゐる中に、粟田口は通りすぎた。

「粟田口ではござらぬのう。」

「いかにも、もそつと、あなたでな。」

利仁は、微笑を含みながら、わざと、五位の顏を見ないやうにして、靜に馬を步ませてゐる。兩側の人家は、次第に稀になつて、今は、廣々とした冬田の上に、餌をあさる鴉が見えるばかり、山の陰に消殘つて、雪の色も仄に青く煙つてゐる。晴れながら、とげ〳〵しい櫨の梢が、眼に痛く空を刺してゐるのさへ、何となく肌寒い。

「では、山科邊ででもござるかな。」

「山科は、これぢや。もそつと、さきでござるよ。」

成程、さう云ふ中に、山科も通りすぎた。それ所ではない。何かとする中に、關山も後にして、彼是、午少しすぎた時分には、とう〳〵三井寺の前へ來た。三井寺には、利仁の懇意にしてゐる僧がある。二人はその僧を訪ねて、午餐の馳走になつた。それがすむと、又、馬に乘つて、途を急ぐ。行手は今まで來た路に比べると遙に人煙が少ない。殊に當時は盜賊が四方に橫行した、物騷な時代である。――五位は猫背を一層低くしながら、利仁の顏を見上げるやうにして訊ねた。

「まだ、さきでござるのう。」

利仁は微笑した。惡戲をして、それを見つけられさうになつた子供が、年長者に向つてするやうな微笑である。鼻の先へよせた皺と、眼尻にたたへた筋肉のたるみとが、笑つてしまはうか、しまふまいかとためらつてゐるらしい。さうして、とうとう、かう云つた。

「實は、な、敦賀まで、お連れ申さうと思うたのぢや。」笑ひながら、利仁は鞭を擧げて遠くの空を指さした。その鞭の下には、的皪として、午後の日を受けた近江の湖が光つてゐる。

五位は、狼狽した。

「敦賀と申すと、あの越前の敦賀でござるかな。あの越前の――」

利仁が、敦賀の人、藤原有仁の女婿になつてから、多くは敦賀に住んでゐると云ふ事も、日頃から聞いてゐない事はない。が、その敦賀まで自分をつれて行く氣だらうとは、今の今まで思はなかつた。第一、幾多の山河を隔ててゐる越前の國へ、この通り、僅二人の伴人をつれただけで、どうして無事に行かれよう。ましてこの頃は、往來の旅人が、盗賊の爲に殺されたと云ふ噂さへ、諸方にある。――五位は歎願するやうに、利仁の顔を見た。

「それは又、滅相な、東山ぢやと心得れば、山科。山科ぢやと心得れば、三井寺。揚句が越前の敦賀とは、一體どうしたと云ふ事でござる。始めから、さう仰せられうなら、下人共なりと、召つれようものを。――敦賀とは、滅相な。」

五位は、殆どべそを搔かないばかりになつて、呟いた。もし「芋粥に飽かむ」事が、彼の勇氣を鼓舞しなかつたとしたら、彼は恐らく、そこから別れて、京都へ獨り歸つて來た事であらう。

「利仁が一人居るのは、千人ともお思ひなされ。路次の心配は、御無用ぢや。」

五位の狼狽するのを見ると、利仁は、少し眉を顰めながら、嘲笑つた。さうして調度掛を呼寄せて、持たせて來た壺胡籙を背に負ふと、やはり、その手から、黑漆の眞弓をうけ取つて、それを鞍上に橫へながら、先に立つて、馬を進めた。かうなる以上、意氣地のない五位は、利仁の意志に盲從するより外に仕方がない。それで、彼は心細さうに、荒涼とした周圍の原野を眺めながら、うろ覺えの觀音經を口の中に念じ念じ、例の赤鼻を鞍の前輪にすりつけるやうにして、覺束ない馬の步みを、不相變とぼ／＼と進めて行つた。

馬蹄の反響する野は、茫々たる黃茅に蔽はれて、その所所にある行潦も、つめたく、青空を映

したまゝ、この冬の午後を、何時かそれなり凍つてしまふかと疑はれる。その涯には、一帯の山脈が、日に背いてゐるせゐか、かがやく可き殘雪の光もなく、紫がゝつた暗い色を、長々となすつてゐるが、それさへ蕭條たる幾叢の枯薄に遮られて、二人の從者の眼には、はいらない事が多い。――すると、利仁が、突然、五位の方をふりむいて、聲をかけた。

「あれに、よい使者が參つた。敦賀への言づけを申さう。」

五位は利仁の云ふ意味が、よくわからないので、怖々ながら、その弓で指さす方を、眺めて見た。元より人の姿が見えるやうな所ではない。唯、野葡萄か何かの蔓が、灌木の一むらにからみついてゐる中を、一疋の狐が、暖かな毛の色を、傾きかけた日に曝しながら、のそりのそり歩いて行く。――と思ふ中に、狐は、慌たゞしく身を跳らせて、一散に、どこともなく走り出した。利仁が急に、鞭を鳴らせて、その方へ馬を飛ばし始めたからである。五位も、われを忘れて、利仁の後を、逐つた。從者も勿論、遲れてはゐられない。しばらくは、石を蹴る馬蹄の音が、戞々として、曠野の靜けさを破つてゐたが、やがて利仁が、馬を止めたのを見ると、何時、捕へたのか、もう狐の後足を摑んで、倒に、鞍の側へ、ぶら下げてゐる。狐が、走れなくなるまで、追ひ

つめた所で、それを馬の下に敷いて、手取りにしたものであらう。五位は、うすい髭にたまる汗を、慌しく拭きながら、漸、その傍へ馬を乗りつけた。

「これ、狐、よう聞けよ。」利仁は、狐を高く眼の前へつるし上げながら、わざと物々しい聲を出してから云つた。「其方、今夜の中に、敦賀の利仁が館へ參つて、かう申せ。『利仁は、唯今俄に客人を具して下らうとする所ぢや。明日、巳時頃、高島の邊まで、男たちを迎ひに遣はし、それに、鞍置馬二疋、牽かせて參れ。』よいか忘れるなよ。」

云ひ畢ると共に、利仁は、一ふり振つて狐を、遠くの叢の中へ、抛り出した。

「いや、走るわ。走るわ。」

やつと、追ひついた二人の從者は、逃げてゆく狐の行方を眺めながら、手を拍つて囃し立てた。落葉のやうな色をしたその獸の背は、夕日の中を、まつしぐらに、木の根石くれの嫌ひなく、何處までも、走つて行く。それが一行の立つてゐる所から、手にとるやうによく見えた。狐を追つてゐる中に、何時か彼等は、曠野が緩い斜面を作つて、水の涸れた川床と一つになる、その丁度上の所へ、出てゐたからである。

「廣量の御使でござるのう。」

五位は、ナイイヴな尊敬と讃嘆とを洩らしながら、この狐さへ頤使する野育ちの武人の顔を、今更のやうに、仰いで見た。自分と利仁との間に、どれ程の懸隔があるか、そんな事は、考へる暇がない。唯、利仁の意志に、支配される範圍が廣いだけに、その意志の中に包容される自分の意志も、それだけ自由が利くやうになつた事を、心強く感じるだけである。――阿諛は、恐らく、かう云ふ時に、最自然に生れて來るものであらう。讀者は、今後、赤鼻の五位の態度に、幇間のやうな何物かを見出しても、それだけで妄にこの男の人格を、疑ふ可きではない。

抛り出された狐は、なぞへの斜面を、轉げるやうにして、駈け下りると、水の無い河床の石の間を、器用に、ぴよいぴよい、飛び越えて、今度は、向うの斜面へ、勢よく、すぢかひに駈け上つた。駈け上りながら、ふりかへつて見ると、自分を手捕りにした侍の一行は、まだ遠い傾斜の上に馬を並べて立つてゐる。それが皆、指を揃へた程に、小さく見えた。殊に入日を浴びた、月毛と蘆毛とが、霜を含んだ空氣の中に、描いたよりもくつきりと、浮き上つてゐる。

狐は、頭をめぐらすと、又枯薄の中を、風のやうに走り出した。

一行は、豫定通り翌日の巳時ばかりに、高島の邊へ來た。此處は琵琶湖に臨んだ、ささやかな部落で、昨日に似ず、どんよりと曇つた空の下に、幾戸の藁屋が、疎にちらばつてゐるばかり、岸に生えた松の樹の間には、灰色の漣漪をよせる湖の水面が、磨くのを忘れた鏡のやうに、さむざむと開けてゐる。――此處まで來ると利仁が、五位を顧みて云つた。

「あれを御覽じろ。男どもが、迎ひに參つたげでござる。」

見ると、成程、二疋の鞍置馬を牽いた、二三十人の男たちが、馬に跨がつたのもあり徒歩のもあり、皆水干の袖を寒風に翻へして、湖の岸、松の間を、一行の方へ急いで來る。やがてこれが、間近くなつたと思ふと、馬に乘つてゐた連中は、慌たゞしく鞍を下り、徒歩の連中は、路傍に蹲踞して、いづれも恭々しく、利仁の來るのを、待ちうけた。

「やはり、あの狐が、使者を勤めたと見えますのう。」

「生得、變化ある獸ぢやて、あの位の用を勤めるのは、何でもござらぬ。」

五位と利仁とが、こんな話をしてゐる中に、一行は、郎等たちの待つてゐる所へ來た。「太儀ぢや。」と、利仁が聲をかける。蹲踞してゐた連中が、忙しく立つて、二人の馬の口を取る。急に、すべてが陽氣になつた。

「夜前、稀有な事が、ございましてな。」

二人が、馬から下りて、敷皮の上へ、腰を下すか下さない中に、檜皮色の水干を着た、白髪の郎等が、利仁の前へ來て、かう云つた。

「何ぢや。」利仁は、郎等たちの持つて來た篠枝や破籠を、五位にも勸めながら、鷹揚に問ひかけた。

「さればでございまする。夜前、戌時ばかりに、奥方が俄に、人心地をお失ひなされましてな。『おのれは、阪本の狐ぢや。今日、殿の仰せられた事を、言傳てせうほどに、近う寄つて、よう聞きやれ。』と、かう仰有るのでございまする。さて、一同がお前に參りますると、奥方の仰せられまするには、『殿は唯今俄に客人を具して、下られようとする所ぢや。明日巳時頃、高島の邊まで、男どもを迎ひに遣はし、それに鞍置馬二疋牽かせて參れ。』と、かう御意遊ばすのでございま

する。」

「それは、又、稀有な事でござるのう。」五位は利仁の顔と、郎等の顔とを、仔細らしく見比べながら、兩方に滿足を與へるやうな、相槌を打つた。

「それも唯、仰せられるのではございませぬ。さも、恐ろしさうに、わな〳〵とお震へになりましてな、『遲れまいぞ。遲れゝば、おのれが、殿の御勘當をうけねばならぬ。』と、しつきりなしに、お泣きになるのでございまする。」

「して、それから、如何した。」

「それから、多愛なく、お休みになりましてな。手前共の出て參りまする時にも、まだ、お眼覺にはならぬやうで、ございました。」

「如何でござるな。」郎等の話を聞き完ると、利仁は五位を見て、得意らしく云つた。「利仁には、獸も使はれ申すわ。」

「何とも驚き入る外は、ござらぬのう。」五位は、赤鼻を掻きながら、ちよいと、頭を下げて、それから、わざとらしく、呆れたやうに、口を開いて見せた。口髭には今、飲んだ酒が、滴になつ

て、くつついてゐる。

その日の夜の事である。五位は、利仁の館の一間に、切燈臺の灯を眺めるともなく、眺めながら、寢つかれない長の夜をまぢ〳〵して、明してゐた。すると、夕方、此處へ着くまでに、利仁や利仁の從者と、談笑しながら、越えて來た松山、小川、枯野、或は、草、木の葉、石、野火の煙のにほひ、——さう云ふものが、一つづゝ、五位の心に、浮んで來た。殊に、雀色時の靄の中を、やつと、この館へ辿りついて、長櫃に起してある、炭火の赤い焰を見た時の、ほつとした心もち、——それも、今かうして、寢てゐると、遠い昔にあつた事としか、思はれない。五位は綿の四五寸もはいつた、黄いろい直垂の下に、樂々と、足をのばしながら、ぼんやり、われとわが寢姿を見廻した。

直垂の下に利仁が貸してくれた、練色の衣の綿厚なのを、二枚まで重ねて、着こんでゐる。それだけでも、どうかすると、汗が出かねない程、暖かい。そこへ、夕飯の時に一杯やつた、酒の

醉が手傳つてゐる。枕元の蔀一つ隔てた向うは、霜の冴えた廣庭だが、それも、かう陶然としてゐれば、少しも苦にならない。萬事が、京都の自分の曹司にゐた時と比べれば、雲泥の相違である。が、それにも係はらず、我五位の心には、何となく釣合のとれない不安があつた。第一、時間のたつて行くのが、待遠い。しかもそれと同時に、夜の明けると云ふ事が、――芋粥を食ふ時になると云ふ事が、さう早く、來てはならないやうな心もちがする。さうして又、この矛盾した二つの感情が、互に剋し合ふ後には、境遇の急激な變化から來る、落着かない氣分が、今日の天氣のやうに、うすら寒く控へてゐる。それが、皆、邪魔になつて、折角の暖かさも、容易に、眠りを誘ひさうもない。

すると、外の廣庭で、誰か大きな聲を出してゐるのが、耳にはいつた。聲がらでは、どうも、今日、途中まで迎へに出た、白髮の郎等が何か告れてゐるらしい。その乾からびた聲が、霜に響くせゐか、凜々として凩のやうに、一語づゝ五位の骨に、應へるやうな氣さへする。

「この邊の下人、承はれ。殿の御意遊ばさるゝには、明朝、卯時までに、切口三寸、長さ五尺の山の芋を、老若各、一筋づゝ、持つて參る樣にとある。忘れまいぞ、卯時までにぢや。」

それが、二三度、繰返されたかと思ふと、やがて、人のけはひが止んで、あたりは忽ち元のやうに、靜な冬の夜になつた。その靜な中に、切燈臺の油が鳴る。赤い眞綿のやうな火が、ゆらゆらする。五位は欠伸を一つ、噛みつぶして、又、とりとめのない、思量に耽り出した。――山の芋と云ふからには、勿論芋粥にする氣で、持つて來させるのに相違ない。さう思ふと、一時、外に注意を集中したおかげで忘れてゐた、さつきの不安が、何時の間にか、心に歸つて來る。殊に、前よりも、一層強くなつたのは、あまり早く芋粥にありつきたくないと云ふ心もちで、それが意地惡く、思量の中心を離れない。どうもかう容易に「芋粥に飽かむ」事が、事實となつて現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して待つてゐたのが、如何にも、無駄な骨折のやうに、見えてしまふ。出來る事なら、何か突然故障が起つて、一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、その故障がなくなつて、今度は、やつとこれにありつけると云ふやうな、そんな手續きに、萬事を運ばせたい。――こんな考へが、「こまつぶり」のやうに、ぐる／＼一つ所を廻つてゐる中に、何時か、五位は、旅の疲れで、ぐつすり、熟睡してしまつた。

翌朝、眼がさめると、直に、昨夜の山の芋の一件が、氣になるので、五位は、何よりも先に部

屋の蔀をあげて見た。すると、知らない中に、寢すごして、もう卯時をすぎてゐたのであらう。廣庭へ敷いた、四五枚の長筵の上には、丸太のやうな物が、凡そ、二三千本、斜につき出した、檜皮葺の軒先へつかへる程、山のやうに、積んである。見るとそれが、悉く、切口三寸、長さ五尺の途方もなく大きい、山の芋であつた。

五位は、寢起きの眼をこすりながら、殆ど周章に近い驚愕に襲はれて、呆然と、周圍を見廻した。廣庭の所所には、新しく打つたらしい杭の上に五斛納釜を五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖を着た若い下司女が、何十人となく、そのまはりに動いてゐる。火を焚きつけるもの、灰を掻くもの、或は、新しい白木の桶に、「あまづらみせん」を汲んで釜の中へ入れるもの、皆芋粥をつくる準備で、眼のまはる程忙しい。釜の下から上る煙と、釜の中から湧く湯氣とが、まだ消え殘つてゐる明方の靄と一つになつて、廣庭一面、はつきり物も見定められない程、灰色のものが罩めた中で、赤いのは、烈々と燃え上る釜の下の焰ばかり、眼に見るもの、耳に聞くもの悉く、戰場か火事場へでも行つたやうな騒ぎである。五位は、今更のやうに、この巨大な山の芋が、この巨大な五斛納釜の中で、芋粥になる事を考へた。さうして、自分が、その芋粥を食ふ爲に京都か

ら、わざ〳〵、越前の敦賀まで旅をして來た事を考へた。考へれば考へる程、何一つ、情無くならないものはない。我五位の同情すべき食慾は、實に、此時もう、一半を減却してしまつたのである。

　それから、一時間の後、五位は利仁や舅の有仁と共に、朝飯の膳に向つた。前にあるのは、銀の提の一斗ばかりはいるのに、なみ〳〵と海の如くたゝへた、恐るべき芋粥である。五位はさつき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端から削るやうに、勢よく切るのを見た。それからそれを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがつて、一つのこらず、五斛納釜へすくつては入れ、すくつては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなつた時に、芋のにほひと、甘葛のにほひとを含んだ、幾道かの湯氣の柱が、蓬々然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上つて行くのを見た。これを、目のあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に對した時、まだ、口をつけない中から、既に、滿腹を感じたのは、恐らく、無理もない次第であらう。――五位は、提を前にして、間の惡さうに、額の汗を拭いた。

「芋粥に飽かれた事が、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上つて下され。」

舅の有仁は、童兒たちに云ひつけて、更に幾つかの銀の提を膳の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、溢れんばかりにはいつてゐる。五位は眼をつぶつて、唯でさへ赤い鼻を、一層赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器にすくつて、いや／＼ながら飲み干した。

「父も、さう申すぢやて。平に、遠慮は御無用ぢや。」

利仁も側から、新な提をすゝめて、意地惡く笑ひながらこんな事を云ふ。弱つたのは五位である。遠慮のない所を云へば、始めから芋粥は、一椀も吸ひたくない。それを今、我慢して、やつと、提に半分だけ平げた。これ以上、飲めば、喉を越さない中にもどしてしまふ、さうかと云つて、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無にするのも、同じである。そこで、彼は又眼をつぶつて、殘りの半分を三分の一程飲み干した。もう後は一口も吸ひやうがない。

「何とも、忝うござつた。もう十分頂戴致したて。――いやはや、何とも忝うござつた。」

五位は、しどろもどろになつて、かう云つた。餘程弱つたと見えて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思はれない程、汗が玉になつて、垂れてゐる。

「これは又、御少食な事ぢや。客人は、遠慮をされると見えたぞ。それ〳〵その方ども、何を致して居る。」

童兒たちは、有仁の語につれて、新な提の中から、芋粥を、土器に汲まうとする。五位は、兩手を蠅でも逐ふやうに動かして、平に、辭退の意を示した。

「いや、もう、十分でござる。……失禮ながら、十分でござる。」

もし、此時、利仁が、突然、向うの家の軒を指さして、「あれを御覽じろ」と云はなかつたなら、有仁は猶、五位に、芋粥をすゝめて、止まなかつたかも知れない。が、幸ひにして、利仁の聲は、一同の注意を、その軒の方へ持つて行つた。檜皮葺の軒には、丁度、朝日がさしてゐる。さうして、そのまばゆい光に、光澤のいい毛皮を洗はせながら、一疋の獸が、おとなしく、坐つてゐる。見るとそれは一昨日、利仁が枯野の路で手捕りにした、あの阪本の野狐であつた。

「狐も、芋粥が欲しさに、見參したさうな。男ども、しやつにも、物を食はせてつかはせ。」

利仁の命令は、言下に行はれた。軒からとび下りた狐は、直に廣庭で芋粥の馳走に、與つたのである。

五位は、芋粥を飲んでゐる狐を眺めながら、此處へ來ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返つた。それは、多くの侍たちに愚弄されてゐる彼である。京童にさへ「何ぢや。この赤鼻めが」と、罵られてゐる彼である。色のさめた水干に、指貫をつけて、飼主のない尨犬のやうに、朱雀大路をうろついて歩く、憐む可き、孤獨な彼である。しかし、同時に又、芋粥に飽きたいと云ふ慾望を、唯一人大事に守つてゐた、幸福な彼である。――彼は、この上芋粥を飲まずにすむと云ふ安心と共に、滿面の汗が次第に、鼻の先から、乾いてゆくのを感じた。晴れてはゐても、敦賀の朝は、身にしみるやうに、風が寒い。五位は慌てゝ、鼻をおさへると同時に、銀の提に向つて大きな嚏をした。

（大正五年八月）

猿

私が、遠洋航海をすませて、やつと半玉（軍艦では、候補生の事をかう云ふのです）の年期も終らうと云ふ時でした。私の乗つてゐたAが、横須賀へ入港してから、三日目の午後、彼是三時頃でしたらう。勢よく例の上陸員整列の喇叭が鳴つたのです。確、右舷が上陸する順番になつてゐたと思ひますが、それが皆、上甲板へ整列したと思ふと、今度は、突然、總員集合の叭喇が鳴りました。勿論、唯事ではありません。何にも事情を知らない私たちは艙口を上りながら、互に「どうしたのだらう」と云ひ交はしました。

　さて、總員が集合して見ると、副長がかう云ふのです。「……本艦内で、近來、盗難に罹つた者が、二三ある。殊に、昨日、町の時計屋が來た際にも、銀側の懷中時計が二個、紛失したと云ふ事であるから、今日はこれから、總員の身體檢査を行ひ、同時に所持品の檢査も行ふ事にする。……」大體、こんな意味だつたと思ひます。時計屋の一件は、初耳ですが、盗難に罹つた者があ

るのは、僕たちも知つてゐました。何でも、兵曹が一人に、水兵が二人で、皆、金をとられたと云ふ事です。

　身體檢査ですから、勿論、皆、裸にさせられるのですが、幸、十月の初で港内に浮んでゐる赤い浮標に日がかんかん照りつけるのを見ると、まだ、夏らしい氣がする時分なので、これはさう大して苦にもならなかつたやうです。が、弱つたのは、上陸早々、遊びに行く氣でゐた連中で、檢査をされると、ポツケツトから春畫が出る、サツクが出ると云ふ騷ぎでせう。顏を赤くして、もぢもぢしたつて、追付きません。何でも、二三人は、士官に擲られたやうでした。

　何しろ、總員六百人もあるのですから、一通り檢査をするにしても、手間がとれます。奇觀と云へば、まああの位、奇觀はありますまい。六百人の人間が皆、裸で、上甲板一杯に、並んでゐるのですから。その中でも、顏や手首のまつ黑なのが、機關兵で、この連中は今度の盜難に一時嫌疑をかけられた事があるものですから、猿股までぬいで、檢べるのならどこでも檢べてくれと云ふ、恐しいやうな權幕です。

　上甲板で、かう云ふ騷ぎが、始まつてゐる間に、中甲板や下甲板では、所持品の檢査をやり出

しました。艙口にはのこらず、候補生が配置してありますから、上甲板の連中は勿論下へは一足でもはいれません。私は、丁度、その中下甲板の檢査をする役に當つたので、外の仲間と一しよに、兵員の衣嚢やら手箱やらを檢査して歩きました。こんな事をするのは軍艦に乘つてから、まだ始めてでしたが、ビイムの裏を探すとか衣嚢をのせてある棚の奧をかきまはすとか、思つたより、面倒な仕事です。その中に、やつと私と同じ候補生の牧田と云ふ男が、贓品を見つけました。時計も金も一つになつて、奈良島と云ふ信號兵の帽子の箱の中に、あつたのです。その外にまだ給仕がなくなしたと云ふ、靑貝の柄のナイフも、はいつてゐたと云ふ事でした。

そこで、「解散」から、すぐに「信號兵集れ」と云ふ事になりました。外の連中は悅んだの、悅ばないのではありません。殊に、機關兵などは、前に疑はれたと云ふ廉があるものですから、大へんな嬉しがりやうでした。――所が集つた信號兵を見ると、奈良島がゐません。

僕は、まだ無經驗だつたので、さう云ふ事は、まるで知りませんでしたが、軍艦では贓品が出ても、犯人の出ないと云ふ事が、時々あるのださうです。勿論、自殺をするのですが、十中八九は、石炭庫の中で首を縊るので、投身するのは、殆、ありません。最も一度、私の軍艦では、ナ

イフで腹を切つたのがゐたさうですが、これは死に切れない中に發見されて、命だけはとりとめたと云ふ事でした。

さう云ふ事があるものですから、奈良島が見えないと云ふと、將校連も皆流石に、ぎよつとしたやうでした。殊に、今でも眼についてゐるのは、副長の慌て方で、此の前の戰爭の時には隨分、驍名を馳せた人ださうですが、その顏色を變へて、心配した事と云つたら、はた眼にも笑止な位です。私たちは皆、それを見ては、互に輕蔑の眼を交してゐました。ふだん精神修養の何のと云ふ癖に、あの狼狽のしかたはどうだと云ふ、腹があつたのです。

そこで、すぐに、副長の命令で、艦内の搜索が始まりました。さうなると一種の愉快な興奮に驅られるのは、私一人に限つた事ではないでせう。火事を見にゆく彌次馬の心もち——丁度あんなものです。巡査が犯人を逮捕に行くとなると、向うが抵抗するかも知れないと云ふ不安があるでせうが、軍艦の中ではそんな事は、萬々ありません。殊に、私たちと水兵との間には、上下の區別と云ふものが、嚴として、——軍人になつて見なければ、わからない程、嚴としてありますから、それが非常な强みです。私は、殆、踴躍して艙口を駈け下りました。

丁度、その時、私と一しよに、下へ來た連中の中に、牧田がゐましたが、これも、面白くつてたまらないと云ふ風で、後から、私の肩をたたきながら、

「おい、猿をつかまへた時の事を思出すな。」

と云ふのです。

「うん、今日の猿は、あいつ程敏捷でないから、大丈夫だ。」

「そんなに高を括つてゐると、逃げられるぞ。」

「なに、逃げたつて、猿は猿だ。」

こんな冗談を云ひながら、下へ下りました。

この猿と云ふのは、遠洋航海で、オオストラリアへ行つた時に、ブリスベインで、砲術長が、誰かから貰つて來た猿の事です。それが、航海中、ウイルヘルムスハアフェンへ入港する二日前に、艦長の時計を持つたなり、どこかへ行つてしまつたので、軍艦中大騷ぎになりました。一つは、永の航海で、無聊に苦んでゐたと云ふ事もあるのですが、當の砲術長はもとより、私たち總出で、事業服のまま、下は機關室から上は砲塔まで、さがして歩く――一通りの混雜ではありません。

それに、外の連中の貰つたり、買つたりした動物が澤山あるので、私たちが駈けて歩くと、犬が、足にからまるやら、ペリカンが啼き出すやら、ロオプに吊つてある籠の中で鸚哥が、氣のちがつたやうに、羽搏きをするやら、まるで、曲馬小屋で、火事でも始まつたやうな體裁です。その中に、猿の奴め、どこをどうしたか、急に上甲板へ出て來て、時計を持つたまま、いきなりマストへ駈け上らうとしました。丁度そこには、水兵が二三人仕事をしてゐたので勿論、逃がしつこはありません。すぐに、一人が、頸すぢをつかまへて、難なく、手捕りにしてしまひました。時計も、硝子がこはれた丈で、大した損害もなくてすんだのです。あとで猿は砲術長の發案で、滿二日、絶食の懲罰をうけたのですが、滑稽ではありませんか、その期限が切れない中に、砲術長自身、罰則を破つて、猿に、人參や芋を、やつてしまひました。さうして、「しよげてゐるのを見ると、猿にしても、可哀さうだからな。」と、かう云ふのです。――これは、餘事ですが、實際奈良島を、さがして歩く私たちの心もちは、この猿を追ひかけた時の心もちと、可成よく似てゐました。

私は、その時、一番先に、下甲板へ下りました。御承知でせうが、下甲板は、何時もいやにうす暗いものです。その中で、磨いた金具や、ペンキを塗つた鐵板が、あちらこちらに、ぼんやり

と、光つてゐる。——何だか妙に息がつまるやうな氣がして、仕方がありません。そのうす暗い中を、石炭庫の方へ二足三足、歩いたと思ふと、私は、もう少しで、聲を出して、叫びさうになりました。——石炭庫の積入口に、人間の上半身が出てゐたからです。今、その狹い口から、石炭庫の中へ、はいらうと云ふので、足を先へ、入れて見た所なのでせう。こつちからは、紺の水兵服の肩と、帽子とに遮られて、顏は誰ともわかりません。それに、光が足りないので、唯その上半身の黑くうき出してゐるのが、見えるだけです。が、直覺的に、私は、それを、奈良島だと思ひました。さうだとすれば、勿論、自殺をするつもりで、石炭庫へはいらうと云ふのです。

私は、異常な興奮を感じました。體中の血が躍るやうな、何とも云ひやうのない、愉快な昂奮です。銃を手にして、待つてゐた獵師が、獲物の來るのを見た時のやうな心もちとでも、云ひませうか。私は、殆、夢中で、その男にとびかかりました。さうして、獵犬よりもすばやく、兩手で、その男の肩をしつかり、上からおさへました。

「奈良島。」

叱るとも、罵るともつかずに、かう云つた私の聲は、妙に上ずつて、顫へてゐました。それが、

實際、犯人の奈良島だつた事は云ふまでもありません。

「……………」

奈良島は私の手をふり離すでもなく、上半身を積入口から出したまま、靜に、私の顔を見上げました。「靜に」と云つたのでは、云ひ足りません。ある丈の力を出しきつて、しかも靜でなければならない「靜に」です。餘裕のない、せつぱつまつた、云はば半吹き折られた帆桁が、風のすぎた後で僅に殘つてゐる力をたよりに、元の位置へ返らうとする、あの止むを得ない「靜に」です。私は、無意識ながら、豫期してゐた抵抗がなかつたので、或不滿に似た感情を抱きながら、しかもその爲に、一層、いらいらした腹立たしさを感じながら、默つて、その「靜に」もたげた顔を見下ろしました。

私は、あんな顔を、二度と見た事はありません。惡魔でも、一目見たら、泣くかと思ふやうな顔なのです。かう云つても、實際、それを見ないあなたには、とても、想像がつきますまい。私は、あなたに、あの涙ぐんでゐる眼を、お話しする事は、出來るつもりです。あの急に不隨意筋に變つたやうな口角の筋肉の痙攣も、或は、察して頂く事が出來るかも知れません。それから、

その汗ばんだ、色の悪い顏も、それだけなら、容易に、說明が出來ませう。が、それらのすべてから來る、恐しい表情は、どんな小說家も、書く事は出來ません。私は、小說をお書きになるあなたの前でも、安心して、これだけの事は、云ひきれます。私はその表情が、私の心にある何物かを、稻妻のやうに、たゝき壞したのを感じました。それ程、この信號兵の顏が私に、强いショツクを與へたのです。

「貴樣は何をしようとしてゐるのだ。」

私は、機械的にかう云ひました。すると、その「貴樣」が、氣のせゐか、私自身を指してゐる樣に、聞えるのです。「貴樣は何をしようとしてゐるのだ。」――かう訊ねられたら、私は何と答へる事が出來るのでせう。「己は、この男を罪人にしようとしてゐるのだ。」誰が、安んじて、さう答へられます。誰が、この顏を見てそんな眞似が出來ます。かう書くと、長い間の事のやうですが、實際は、殆、一刹那の中に、こんな自責が、私の心に閃きました。丁度、その時です。「面目ございません。」――かう云ふ語が、かすかながら銳く、私の耳にはいつたのは。

あなたなら、私自身の心が、私に云つたやうに聞えたとでも、形容なさるのでせう。私は、唯、

その語が、針を打つたやうに、私の神經へひゞくのを感じました。まつたく、その時の私の心もちは、奈良島と一しよに「面目ございません」と云ひながら、私たちより大きい、何物かの前に首がさげたかつたのです。私は、いつか、奈良島の肩をおさへてゐた手をはなして、私自身が捕へられた犯人のやうに、ぼんやり石炭庫の前に立つてゐました。

後は、お話しせずとも、大槪お察しがつきませう。奈良島は、その日一日禁錮室に監禁されて、翌日、浦賀の海軍監獄へ送られました。これは、あんまりお話したくない事ですが、あすこでは、囚人に、よく「彈丸運び」と云ふ事をやらせるのです。八尺程の距離を置いた臺から臺へ、五貫目ばかりの鐵の丸を、繰返へし繰返へし、置き換へさせるのですが、何が苦しいと云つてあの位、囚人に苦しいものはありますまい。いつか、拜借したドストエフスキイの「死人の家」の中にも、「甲のバケツから、乙のバケツへ水をあけて、その水を又、甲のバケツへあけると云ふやうに、無用な仕事を何度となく反復させると、その囚人は必自殺する。」――こんな事が、書いてあつたかと思ひます。それを、實際、あすこの囚人はやつてゐるのですから、自殺をするものゝないのが、寧、不思議な位でせう。そこへ行つたのです、私の取押さへた、あの信號兵は。雀斑のあ

る、背の低い、氣の弱さうな、おとなしい男でしたが……。

その日、私は、外の候補生仲間と欄干によりかゝつて、日の暮れかゝる港を見てゐますと、例の牧田が私の隣へ來て、「猿を生捕つたのは、大手柄だな」と、ひやかすやうに、云ひました。大方、私が、内心、得意でゞもあると思つたのでせう。

「奈良島は人間だ。猿ぢやあない。」

私は、つゝけんどんに、かう云つて、ふいとハンドレエルを離れてしまひました。外の連中は、不思議がつたのに違ありません。牧田と私とは、兵學校以來の親友で、喧嘩一つした事がないのですから。

私は、獨りで、上甲板を、艦尾から艦首へ歩きながら、奈良島の生死を氣づかつた副長の狼狽した容子を、なつかしく思ひ返しました。私たちがあの信號兵を、猿扱ひにしてゐた時でも、副長だけは、同じ人間らしい同情を持つてゐたのです。それを、輕蔑した私たちの莫迦さかげんは、完くお話しにも何にもなりません。私は、妙にきまりが悪くなつて、頭を下げました。さうして出來るだけ、靴の音がしないやうに、暗くなりかけた甲板を、又艦首から艦尾へ、ひき返しまし

た。禁錮室にゐる奈良島に、私たちの勢のいゝ靴の音を聞かせるのが、すまないやうな氣がしたからです。

奈良島が盗みをしたのは、やはり女からだと云ふ事でした。刑期は、どの位だか、知りません。兎に角、少くとも、何ケ月かは、暗い所へはいつてゐたのでせう。猿は懲罰をゆるされても、人間はゆるされませんから。

（大正五年八月）

手巾

東京帝國法科大學教授、長谷川謹造先生は、ヴエランダの籐椅子に腰をかけて、ストリントベルクの作劇術を讀んでゐた。

先生の專門は、植民政策の研究である。從つて讀者には、先生がドラマトゥルギイを讀んでゐると云ふ事が、聊、唐突の感を與へるかも知れない。が、學者としてのみならず、教育家としても、令名ある先生は、專門の研究に必要でない本でも、それが何等かの意味で、現代の學生の思想なり、感情なりに、關係のある物は、暇のある限り、必一應は、眼を通して置く。現に、昨今は、先生の校長を兼ねてゐる或高等專門學校の生徒が、愛讀すると云ふ、唯、それだけの理由から、オスカア・ワイルドのデ・プロフンディスとか、インテンションズとか云ふ物さへ、一讀の勞を執つた。さう云ふ先生の事であるから、今讀んでゐる本が、歐洲近代の戲曲及俳優を論じた物であるにしても、別に不思議がる所はない。何故と云へば、先生の薰陶を受けてゐる學生の

中には、イブセンとか、ストリントベルクとか、乃至メエテルリンクとかの評論を書く學生が、ゐるばかりでなく、進んでは、さう云ふ近代の戯曲家の跡を追つて、作劇を一生の仕事にしようとする、熱心家さへゐるからである。

先生は、警抜な一章を讀み了る毎に、黄いろい布表紙の本を、膝の上へ置いて、ヴェランダに吊してある岐阜提灯の方を、漫然と一瞥する。不思議な事に、さうするや否や、先生の思量は、ストリントベルクを離れてしまふ。その代り、一しよにその岐阜提灯を買ひに行つた、奥さんの事が、心に浮んで來る。先生は、留學中、米國で結婚をした。だから、奥さんは、勿論、亞米利加人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも變りがない。殊に、日本の巧緻なる美術工藝品は、少からず奥さんの氣に入つてゐる。從つて、岐阜提灯をヴェランダにぶら下げたのも、先生の好みと云ふよりは、寧、奥さんの日本趣味が、一端を現したものと見て、然る可きであらう。

先生は、本を下に置く度に、奥さんと岐阜提灯と、さうして、その提灯によつて代表される日本の文明とを思つた。先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面で

は、可成顯著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆、これと云ふ程の進歩も認める事が出來ない。否、寧、或意味では、墮落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この墮落を救濟する途を講ずるのには、どうしたらいゝのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論斷した。武士道なるものは、決して偏狹なる島國民の道德を以て、目せらるべきものでない。却てその中には、歐米各國の基督教的精神と、一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に歸趣を知らしめる事が出來るならば、それは、獨り日本の精神的文明に貢獻する所があるばかりではない。延いては、歐米各國民と日本國民との相互の理解を容易にすると云ふ利益がある。或は國際間の平和も、これから促進されると云ふ事があるであらう。――先生は、日頃から、この意味に於て、自ら東西兩洋の間に横はる橋梁にならうと思つてゐる。かう云ふ先生にとつて、奥さんと岐阜提灯と、その提灯によつて代表される日本の文明とが、或調和を保つて、意識に上るのは決して不快な事ではない。

所が、何度かこんな滿足を繰返してゐる中に、先生は、追々、讀んでゐる中でも、思量がストリントベルクとは、縁の遠くなるのに氣がついた。そこで、ちよいと、忌々しさうに頭を振つて、

それから又丹念に、眼を細い活字の上に曝しはじめた。すると、丁度、今讀みかけた所にこんな事が書いてある。

――俳優が最も普通なる感情に對して、或一つの恰好な表現法を發見し、この方法によつて成功を贏ち得る時、彼は時宜に適すると適せざるとを問はず、一面にはそれが樂である所から、又一面には、それによつて成功する所から、動もすればこの手段に赴かんとする。しかし夫が卽ち型なのである。………

先生は、由來、藝術――殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさへ、この年まで何度と數へる程しか、見た事がない。――嘗て或學生の書いた小說の中に、梅幸と云ふ名が、出て來た事がある。流石、博覽强記を以て自負してゐる先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない。そこで序の時に、その學生を呼んで、訊いて見た。

――君、梅幸と云ふのは何だね。

――梅幸――ですか。梅幸と云ひますのは、當時、丸の內の帝國劇場の座附俳優で、唯今、太閤記十段目の操を勤めて居る役者です。

小倉の袴をはいた學生は、慇懃に、かう答へた。――だから、先生はストリントベルクが、簡勁な筆で論評を加へて居る各種の演出法に對しても、先生自身の意見と云ふものは、全然ない。唯、それが、先生の留學中、西洋で見た芝居の或るものを聯想させる範圍で、幾分か興味を持つ事が出來るだけである。云はば、中學の英語の教師が、イディオムを探す爲に、バアナアド・シヨウの脚本を讀むと、別に大した相違はない。が、興味は、曲りなりにも、興味である。

ヴェランダの天井からは、まだ灯をともさない岐阜提灯が下つてゐる。さうして、籐椅子の上では、長谷川謹造先生が、ストリントベルクのドラマトゥルギイを讀んでゐる。自分は、これだけの事を書きさへすれば、それが、如何に日の長い初夏の午後であるか、讀者は容易に想像のつく事だらうと思ふ。しかし、かう云つたからと云つて、決して先生が無聊に苦しんでゐると云ふ譯ではない。さう解釋しようとする人があるならば、それは自分の書く心もちを、わざとシニカルに曲解しようとするものである。――現在、ストリントベルクさへ、先生は、中途でやめなければならなかつた。何故と云へば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げてしまつたからである。世間は、いくら日が長くても、先生を忙殺しなければ、止まないらしい。……

先生は、本を置いて、今し方小間使が持つて來た、小さな名刺を一瞥した。象牙紙に、細く西山篤子と書いてある。どうも、今までに逢つた事のある人では、ないらしい。交際の廣い先生は、籐椅子を離れながら、それでも念の爲に、一通り、頭の中の人名簿を繰つて見た。が、やはり、それらしい顔も、記憶に浮んで來ない。そこで、栞代りに、名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置くと、先生は、落着かない容子で、銘仙の單衣の前を直しながら、ちよいと又、鼻の先の岐阜提灯へ眼をやつた。誰もさうであらうが、待たせてある客より、待たせて置く主人の方が、かう云ふ場合は多く待遠しい。尤も、日頃から謹嚴な先生の事だから、これが、今日のやうな未知の女客に對してでなくとも、さうだと云ふ事は、わざわざ斷る必要もないであらう。

やがて、時刻をはかつて、先生は、應接室の扉をあけた。中へはいつて、おさへてゐたノツブを離すのと、椅子にかけてゐた四十恰好の婦人の立上つたのとが、殆、同時である。客は、先生の判別を超越した、上品な鐵御納戸の單衣を着て、それを黑の絽の羽織が、胸だけ細く剩した所に、帶止めの翡翠を、涼しい菱の形にうき上らせてゐる。髮が、丸髷に結つてある事は、かう云ふ些事に無頓着な先生にも、すぐわかつた。日本人に特有な、丸顔の、琥珀色の皮膚をした、賢

母らしい婦人である。先生は、一瞥して、この客の顏を、どこかで見た事があるやうに思つた。

——私が長谷川です。

先生は、愛想よく、會釋した。かう云へば、逢つた事があるのなら、向うで云ひ出すだらうと思つたからである。

——私は、西山憲一郎の母でございます。

婦人は、はつきりした聲で、かう名乘つて、それから、叮嚀に、會釋を返した。

西山憲一郎と云へば、先生も覺えてゐる。やはりイブセンやストリントベルクの評論を書く生徒の一人で、專門は確か獨法だつたかと思ふが、大學へはいつてからも、よく思想問題を提げては、先生の許に出入した。それが、この春、腹膜炎に罹つて、大學病院へ入院したので、先生も序ながら、一二度見舞ひに行つてやつた事がある。この婦人の顏を、どこかで見た事があるやうに思つたのも、偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいい青年と、この婦人とは、日本の俗諺が、瓜二つと形容するやうに、驚く程、よく似てゐるのである。

——はあ、西山君の……さうですか。

先生は、獨りで頷きながら、小さなテエブルの向うにある椅子を指した。

——どうか、あれへ。

婦人は、一應、突然の訪問を謝してから、又、叮寧に禮をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは、手巾であらう。先生は、それを見ると、早速テエブルの上の朝鮮團扇をすすめながら、その向う側の椅子に、座をしめた。

——結構なおすまひでございます。

婦人は、稍、わざとらしく、室の中を見廻した。

——いや、廣いばかりで、一向かまひません。

かう云ふ挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて來た冷茶を、客の前に直させながら、直に話頭を相手の方へ轉換した。

——西山君は如何です。別段御容態に變りはありませんか。

——はい。

婦人は、つつましく兩手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切つて、それから、靜にかう云

つた。やはり、落着いた、滑な調子で云つたのである。

——實は、今日も伜の事で上つたのでございますが、あれもとうとう、いけませんでございました。在生中は、いろいろ先生に御厄介になりまして……

婦人が手にとらないのを遠慮だと解釋した先生は、この時丁度、紅茶々碗を口へ持つて行かうとしてゐた。なまじひに、くどく、すすめるよりは、自分で啜つて見せる方がいいと思つたからである。所が、まだ茶碗が、柔な口髭にとどかない中に、婦人の語は、突然、先生の耳をおびやかした。茶を飲んだものだらうか、飲まないものだらうか。——かう云ふ思案が、青年の死とは、全く獨立して、一瞬の間、先生の心を煩はした。が、何時までも、持ち上げた茶碗を、片づけずに置く譯には行かない。そこで先生は思切つて、がぶりと半碗の茶を飲むと、心もち眉をひそめながら、むせるやうな聲で、「そりやあ」と云つた。

——……病院に居りました間も、よくあれがお噂など致したものでございますから、お忙しからうとは存じましたが、お知らせかたがた、お禮を申上げようと思ひまして……

——いや、どうしまして。

先生は、茶碗を下へ置いて、その代りに青い蠟を引いた團扇をとりあげながら、憮然として、から云つた。

——とうとう、いけませんでしたかなあ。丁度、これからと云ふ年だつたのですが……私は又、病院の方へも御無沙汰してゐたものですから、もう大抵、よくなられた事だとばかり、思つてゐました——すると、何時になりますかな、なくなられたのは。

——昨日が、丁度初七日でございます。

——やはり病院の方で……

——さやうでございます。

——いや、實際、意外でした。

——何しろ、手のつくせる丈は、つくした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございませんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴が出ていけませんものでございます。

こんな對話を交換してゐる間に、先生は、意外な事實に氣がついた。それは、この婦人の態度

なり、擧措なりが、少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくないと云ふ事である。眼には、涙もたまつてゐない。聲も、平生の通りである。その上、口角には、微笑さへ浮んでゐる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、この婦人は、家常茶飯事を語つてゐるとしか、思はなかつたのに相違ない。——先生には、これが不思議であつた。

——昔、先生が、伯林に留學してゐた時分の事である。今のカイゼルのおとうさんに當る、ウイルヘルム第一世が、崩御された。先生は、この訃音を行きつけの珈琲店で耳にしたが、元より一通りの感銘しかうけやうはない。そこで、何時ものやうに、元氣のいゝ顔をして、杖を脇にはさみながら、下宿へ歸つて來ると、下宿の子供が二人、扉をあけるや否や、兩方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は、茶色のジヤケツトを着た、十二になる女の子で、一人は、紺の短いズボンをはいた、九つになる男の子である。子煩惱な先生は、譯がわからないので、二人の明い色をした髮の毛を撫でながら、しきりに「どうした。どうした。」と云つて慰めた。が、子供は中々泣きやまない。さうして、洟をすゝり上げながら、こんな事を云ふ。

——おぢいさまの陛下が、おなくなりなすつたのですつて。

先生は、一國の元首の死が、子供にまで、これ程悲まれるのを、不思議に思つた。獨り皇室と人民との關係と云ふやうな問題を、考へさせられたばかりではない。西洋へ來て以來、何度も先生の視聽を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。その時の怪訝と同情とを一つにしたやうな心もちは、未に忘れようとしても、忘れる事が出來ない。――先生は、今も丁度、その位な程度で、逆に、この婦人の泣かないのを、不思議に思つてゐるのである。

が、第一の發見の後には、間もなく、第二の發見が次いで起つた。――

丁度、主客の話題が、なくなつた青年の追懷から、その日常生活のディテイルに及んで、更に又、もとの追懷へ戻らうとしてゐた時である。何かの拍子で、朝鮮團扇が、先生の手をすべつて、ぱたりと寄木の床の上に落ちた。會話は無論寸刻の斷續を許さない程、切迫してゐる譯ではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて、床の方へ手をのばした。團扇は、小さなテエブルの下に――上靴にかくれた婦人の白足袋の側に落ちてゐる。

その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持つた手が、のつてゐ

る。勿論これだけでは、發見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手が、はげしく、ふるへてゐるのに氣がついた。ふるへながら、それが感情の激動を強ひて抑へようとするせゐか、膝の上の手巾を、兩手で裂かないばかりに緊く、握つてゐるのに氣がついた。さうして、最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでもふかれてゐるやうに、繡のある緣を動かしてゐるのに氣がついた。――婦人は、顏でこそ笑つてゐたが、實はさつきから、全身で泣いてゐたのである。

團扇を拾つて、顏をあげた時に、先生の顏には、今までにない表情があつた。見てはならないものを見たと云ふ敬虔な心もちと、さう云ふ心もちの意識から來る或滿足とが、多少の芝居氣で、誇張されたやうな、甚、複雜な表情である。

――いや、御心痛は、私のやうな子供のない者にも、よくわかります。

先生は、眩しいものでも見るやうに、稍、大仰に、頸を反らせながら、低い、感情の籠つた聲でかう云つた。

――有難うございます。が、今更、何と申しましても、かへらない事でございますから……

婦人は、心もち頭を下げた。晴々した顔には、依然として、ゆたかな微笑が、たたへてゐる。

× × × × × ×

それから、二時間の後である。先生は、湯にはいつて、晩飯をすませて、食後の櫻實をつまんで、それから又、樂々と、ヴエランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は、何時までも薄明りをただよはせて、硝子戸をあけはなした廣いヴエランダは、まだ容易に、暮れさうなけはひもない。先生は、そのかすかな光の中で、さつきから、左の膝を右の膝の上へのせて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提灯の赤い房を眺めてゐる。例のストリントベルクも、手にはとつて見たものゝ、まだ一頁も讀まないらしい。それも、その筈である。――先生の頭の中は、西山篤子夫人のけなげな振舞で、未だに一ぱいになつてゐた。

先生は、飯を食ひながら、奥さんに、その一部始終を、話して聞かせた。さうして、それを、日本の女の武士道だと賞讚した。日本と日本人とを愛する奥さんが、この話を聞いて、同情しな

い筈はない。先生は、奥さんに熱心な聽き手を見出した事を、滿足に思つた。奧さんと、さつきの婦人と、それから岐阜提灯と――今では、この三つが、或倫理的な背景を持つて、先生の意識に浮んで來る。

先生はどの位、長い間、かう云ふ幸福な回想に耽つてゐたか、わからない。が、その中に、ふと或雜誌から、寄稿を依頼されてゐた事に氣がついた。その雜誌では「現代の青年に與ふる書」と云ふ題で、四方の大家に、一般道德上の意見を徵してゐたのである。今日の事件を材料にして、早速、所感を書いて送る事にしよう。――かう思つて、先生は、ちよいと頭を搔いた。

搔いた手は、本を持つてゐた手である。先生は、今まで閑却されてゐた本に、氣がついて、さつき入れて置いた名刺を印に、讀みかけた頁を、開いて見た。丁度、その時、小間使が來て、頭の上の岐阜提灯をともしたので、細い活字も、さほど讀むのに煩はしくない。先生は、別に讀む氣もなく、漫然と眼を頁の上に落した。ストリントベルクは云ふ。――

――私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分巴里から出たものらしい、手巾のことを話した。それは、顏は微笑してゐながら、手は手巾を二つに裂くと云ふ、二重の演技であつた。それ

を我等は今、臭味と名づける。………

先生は、本を膝の上に置いた。開いたまま置いたので、西山篤子と云ふ名刺が、まだ頁のまん中にのつてゐる。が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。さうかと云つて、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それらの平穏な調和を破らうとする、得體の知れない何物かである。ストリントベルクの指彈した演出法と、實踐道徳上の問題とは、勿論ちがふ。が、今、讀んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心もちを、擾さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と――

先生は、不快さうに二三度頭を振つて、それから又上眼を使ひながら、ぢつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……

（大正五年九月）

煙草と悪魔

煙草は、本來、日本になかつた植物である。では、何時頃、舶載されたかと云ふと、記錄によつて、年代が一致しない。或は、慶長年間と書いてあつたり、或は天文年間と書いてあつたりする。が、慶長十年頃には、既に栽培が、諸方に行はれてゐたらしい。それが文祿年間になると、「きかぬものたばこの法度錢法度、玉のみこゑにげんたくの醫者」と云ふ落首が出來た程、一般に喫煙が流行するやうになつた。——

そこで、この煙草は、誰の手で舶載されたかと云ふと、歴史家なら誰でも、葡萄牙人とか、西班牙人とか答へる。が、それは必ずしも唯一の答ではない。その外にまだ、もう一つ、傳說としての答が殘つてゐる。それによると、煙草は、惡魔がどこからか持つて來たのださうである。さうして、その惡魔なるものは、天主教の伴天連か（恐らくは、フランシス上人）がはる／＼日本へつれて來たのださうである。

から云ふと、切支丹宗門の信者は、彼等のパアテルを誣ひるものとして、自分を咎めようとするかも知れない。が、自分に云はせると、これはどうも、事實らしく思はれる。何故と云へば、南蠻の神が渡來すると同時に、南蠻の惡魔が渡來すると云ふ事は――西洋の善が輸入されると同時に、西洋の惡が輸入されると云ふ事は、至極、當然な事だからである。

しかし、その惡魔が實際、煙草を持つて來たかどうか、それは、自分にも、保證する事が出來ない。尤もアナトオル・フランスの書いた物によると、惡魔は木犀草の花で、或坊さんを誘惑しようとした事があるさうである。して見ると、煙草を、日本へ持つて來たと云ふ事も、滿更噓だとばかりは、云へないであらう。よし又それが噓にしても、その噓は又、或意味で、存外、ほんとうに近い事があるかも知れない。――自分は、かう云ふ考へで、煙草の渡來に關する傳說を、こゝに書いて見る事にした。

×　　×　　×　　×　　×　　×

天文十八年、惡魔は、フランシス・ザヴイエルに伴いてゐる伊留滿の一人に化けて、長い海路

を恙なく、日本へやつて來た。この伊留滿の一人に化けられたと云ふのは、正物のその男が、阿媽港か何處かへ上陸してゐる中に、一行をのせた黑船が、それとも知らずに出帆をしてしまつたからである。そこで、それまで、帆桁へ尻尾をまきつけて、倒にぶら下りながら、私に船中の容子を窺つてゐた惡魔は、早速姿をその男に變へて、朝夕フランシス上人に、給仕する事になつた。勿論、ドクトル・ファウストを尋ねる時には、赤い外套を着た立派な騎士に化ける位な先生の事だから、こんな藝當なぞは、何でもない。

所が、日本へ來て見ると、西洋にゐた時に、マルコ・ポオロの旅行記で讀んだのとは、大分、容子がちがふ。第一、あの旅行記によると、國中至る處、黃金がみちみちてゐるやうであるが、どこを見廻しても、そんな景色はない。これなら、ちよいと礫を爪でこすつて、金にすれば、それでも可成、誘惑が出來さうである。それから、日本人は、眞珠か何かの力で、起死囘生の法を、心得てゐるさうであるが、それもマルコ・ポオロの噓らしい。噓なら、方々の井戸へ唾を吐いて、惡い病さへ流行らせれば、大抵の人間は、苦しまぎれに當來の波羅葦僧なぞは、忘れてしまふ。――フランシス上人の後へついて、殊勝らしく、そこいらを見物して歩きながら、惡魔は、私に

こんな事を考へて、獨り會心の微笑をもらしてゐた。が、たつた一つ、こゝに困つた事がある。こればかりは、流石の惡魔が、どうする譯にも行かない。と云ふのは、まだフランシス・ザヴイエルが、日本へ來たばかりで、傳道も盛にならなければ、切支丹の信者も出來ないので、肝腎の誘惑する相手が、一人もゐないと云ふ事である。これには、いくら惡魔でも、少からず、當惑した。第一、さしあたり退屈な時間を、どうして暮していゝか、わからない。——

そこで、惡魔は、いろ〳〵思案した末に、先園藝でもやつて、暇をつぶさうと考へた。それには、西洋を出る時から、種々雜多な植物の種を、耳の穴の中へ入れて持つてゐる。地面は、近所の畠でも借りれば、造作はない。その上、フランシス上人さへ、それは至極よからうと、贊成した。勿論、上人は、自分についてゐる伊留滿の一人が、西洋の藥用植物か何かを、日本へ移植しようとしてゐるのだと、思つたのである。

惡魔は、早速、鋤鍬を借りて來て、路ばたの畠を、根氣よく、耕しはじめた。

丁度水蒸氣の多い春の始で、たなびいた霞の底からは、遠くの寺の鐘が、ぼうんと、眠むさう

に、響いて來る、その鐘の音が、如何にも又のどかで、聞きなれた西洋の寺の鐘のやうに、いやに冴えて、かんと腦天へひゞく所がない。――が、かう云ふ太平な風物の中にゐたのでは、さぞ惡魔も、氣が樂だらうと思ふと、決してさうではない。

彼は、一度この梵鐘の音を聞くと、聖保羅の寺の鐘を聞いたよりも、一層、不快さうに、顏をしかめて、むしやうに畑を打ち始めた。何故かと云ふと、こののんびりした鐘の音を聞いて、この曖々たる日光に浴してゐると、不思議に、心がゆるんで來る。善をしようと云ふ氣にもならないと同時に、惡を行はうと云ふ氣にもならずにしまふ。これでは、折角、海を渡つて、日本人を誘惑に來た甲斐がない。――掌に肉豆がないので、イワンの妹に叱られた程、勞働の嫌な惡魔が、こんなに精を出して、鍬を使ふ氣になつたのは、全く、このやゝもすれば、體にはひかゝる道德的の眠けを拂はうとして、一生懸命になつたせゐである。

惡魔は、とうとう、數日の中に、畑打ちを完つて、耳の中の種を、その畦に播いた。

× × × × × ×

それから、幾月かたつ中に、惡魔の播いた種は、芽を出し、莖をのばして、その年の夏の末には、幅の廣い綠の葉が、もう殘りなく、畑の土を隱してしまつた。が、その植物の名を知つてゐる者は、一人もない。フランシス上人が、尋ねてさへ、惡魔は、にや〳〵笑ふばかりで、何とも答へずに、默つてゐる。

その中に、この植物は、莖の先に、簇々として、花をつけた。漏斗のやうな形をした、うす紫の花である。惡魔には、この花のさいたのが、骨を折つただけに、大へん嬉しいらしい。そこで、彼は、朝夕の勤行をすましてしまふと、何時でも、その畑へ來て、餘念なく培養につとめてゐた。

すると、或日の事、（それは、フランシス上人が傳道の爲に、數日間、旅行をした、その留守中の出來事である。）一人の牛商人が、一頭の黃牛をひいて、その畑の側を通りかゝつた。見ると、紫の花のむらがつた畑の柵の中で、黑い僧服に、つばの廣い帽子をかぶつた、南蠻の伊留滿が、しきりに葉へついた蟲をとつてゐる。牛商人は、その花があまり、珍しいので、思はず足を止めながら、笠をぬいで、丁寧にその伊留滿へ聲をかけた。

――もし、お上人樣、その花は何でございます。

伊留滿は、ふりむいた。鼻の低い、眼の小さな、如何にも、人の好さゝうな紅毛である。

——これですか。

——さやうでございます。

紅毛は、畑の柵によりかかりながら、頭をふつた。さうして、なれない日本語で云つた。

——この名だけは、御氣の毒ですが、人には教へられません。

——はてな、すると、フランシス様が、云つてはならないとでも、仰有つたのでございますか。

——いゝえ、さうではありません。

——では、一つお教へ下さいませんか、手前も、近ごろはフランシス様の御教化をうけて、この通り御宗旨に、歸依して居りますのですから。

牛商人は、得意さうに自分の胸を指さした。見ると、成る程、小さな眞鍮の十字架が、日に輝きながら、頸にかゝつてゐる。すると、それが眩しかつたのか、伊留滿はちよいと顔をしかめて、下を見たが、すぐに又、前よりも、人なつこい調子で、冗談ともほんとうともつかずに、こんな事を云つた。

――それでも、いけませんよ。これは、私の國の掟で、人に話してはならない事になつてゐるのですから。それより、あなたが、自分で一つ、あてゝごらんなさい。日本の人は賢いから、きつとあたります。あたつたら、この畑にはえてゐるものを、みんな、あなたにあげませう。

牛商人は、伊留滿が、自分をからかつてゐるとでも思つたのであらう。彼は、日にやけた顏に、微笑を浮べながら、わざと大仰に、小首を傾けた。

――何でございますかな。どうも、殺急には、わかり兼ねますが。

――なに今日でなくつても、いゝのです。三日の間に、よく考へてお出でなさい。誰かに聞いて來ても、かまひません。あたつたら、これをみんなあげます。この外にも、珍陀の酒をあげませう。それとも、波羅葦僧垤利阿利の繪をあげますか。

牛商人は、相手があまり、熱心なのに、驚いたらしい。

――では、あたらなかつたら、どう致しませう。

伊留滿は、帽子をあみだに、かぶり直しながら、手を振つて、笑つた。牛商人が、聊、意外に思つた位、鋭い、鴉のやうな聲で、笑つたのである。

——あたらなかつたら、私があなたに、何かもらひませう。賭です。あたるか、あたらないかの賭です。あたつたら、これをみんな、あなたにあげますから。

から云ふ中に紅毛は、何時か又、人なつこい聲に、歸つてゐた。

——よろしうございます。では、私も奮發して、何でもあなたの仰有るものを、差上げませう。

——何でもくれますか、その牛でも。

——これでよろしければ、今でも差上げます。

牛商人は、笑ひながら、黄牛の額を、撫でた。彼はどこまでも、これを、人の好い伊留滿の、冗談だと思つてゐるらしい。

——その代り、私が勝つたら、その花のさく草を頂きますよ。

——よろしい。よろしい。では、確に約束しましたね。

——確に、御約定致しました。御主エス・クリストの御名にお誓ひ申しまして。

伊留滿は、これを聞くと、小さな眼を輝かせて、二三度、滿足さうに、鼻を鳴らした。それから、左手を腰にあてて、少し反り身になりながら、右手で紫の花にさはつて見て、

——では、あたらなかつたら——あなたの體と魂とを、貰ひますよ。

から云つて、紅毛は、大きく右の手をまはしながら、帽子をぬいだ。もぢやもぢやした髮の毛の中には、山羊のやうな角が二本、はえてゐる。牛商人は、思はず顏の色を變へて、持つてゐた笠を、地に落した。日のかげつたせゐであらう、畑の花や葉が、一時に、あざやかな光を失つた。牛さへ、何におびえたのか、角を低くしながら、地鳴りのやうな聲で、唸つてゐる。……

——私にした約束でも、約束は、約束ですよ。私が名を云へないものを指して、あなたは、誓つたでせう。忘れてはいけません。期限は、三日ですから。では、さやうなら。

人を莫迦にしたやうな、慇懃な調子で、から云ひながら、惡魔は、わざと、牛商人に丁寧なおじぎをした。

×　　×　　×　　×　　×　　×

牛商人は、うつかり、惡魔の手にのつたのを、後悔した。このまゝで行けば、結局、あの「ぢやぼ」につかまつて、體も魂も、「亡ぶることなき猛火」に、燒かれなければ、ならない。それでは、

今までの宗旨をすてゝ、波宇寸低茂をうけた甲斐が、なくなつてしまふ。

が、御主耶蘇基督の名で、誓つた以上、一度した約束は、破る事が出來ない。勿論、フランシス上人でも、ゐたのなら、またどうにかなる所だが、生憎、それも今は留守である。そこで、彼は、三日の間、夜の眼もねずに、惡魔の巧みの裏をかく手だてを考へた。それには、どうしても、あの植物の名を、知るより外に、仕方がない。しかし、フランシス上人でさへ、知らない名を、どこに知つてゐるものが、ゐるであらう。……

牛商人は、とう〳〵、約束の期限の切れる晩に、又あの黄牛をひつぱつて、そつと、伊留滿の住んでゐる家の側へ、忍んで行つた。家は畑とならんで、往來に向つてゐる。行つて見ると、もう伊留滿も寢しづまつたと見えて、窓からもる灯さへない。丁度、月はあるが、ぼんやりと曇つた夜で、ひつそりした畑のそこゝには、あの紫の花が、心ぼそくうす暗い中に、ほのめいてゐる。元來、牛商人は、覺束ないながら、一策を思ひついて、やつとこゝまで、忍んで來たのであるが、このしんとした景色を見ると、何となく恐しくなつて、いつそ、このまゝ歸つてしまはうかと云ふ氣にもなつた。殊に、あの戸の後では、山羊のやうな角のある先生が、因邊留濃の夢で

も見てゐるのだと思ふと、折角、はりつめた勇氣も、意氣地なく、くじけてしまふ。が、體と魂とを、「ぢやぼ」の手に、渡す事を思へば、勿論、弱い音なぞを吐いてゐるべき場合ではない。
そこで、牛商人は、毘留善麻利耶の加護を願ひながら、思ひ切つて、豫、もくろんで置いた計畫を、實行した。計畫と云ふのは、別でもない。――ひいて來た黄牛の綱を解いて、尻をつよく打ちながら、例の畑へ勢よく追ひこんでやつたのである。
牛は、打たれた尻の痛さに、跳ね上りながら、柵を破つて、畑をふみ荒らした。角を家の板目につきかけた事も、一度や二度ではない。その上、蹄の音と、鳴く聲とは、うすい夜の霧をうごかして、ものものしく、四方に響き渡つた。すると、窓の戸をあけて、顔を出したものがある。暗いので、顔はわからないが、伊留滿に化けた惡魔には、相違ない。氣のせゐか、頭の角は、夜目ながら、はつきり見えた。
――この畜生、何だつて、己の煙草畑を荒らすのだ。
惡魔は、手をふりながら、睡むさうな聲で、かう怒鳴つた。寢入りばなの邪魔をされたのが、よくよく癪にさはつたらしい。

が、畑の後へかくれて、容子を窺つてゐた牛商人の耳へは、惡魔のこの語が、泥烏須の聲のやうに、響いた。……

――この畜生、何だつて、己の煙草畑を荒らすのだ。

× × × × × ×

それから、先の事は、あらゆるこの種類の話のやうに、至極、圓滿に完つてゐる。即、牛商人は、首尾よく、煙草と云ふ名を、云ひあてゝ、惡魔に鼻をあかさせた。さうして、その畑にはえてゐる煙草を、悉く自分のものにした。と云ふやうな次第である。

が、自分は、昔からこの傳說に、より深い意味がありはしないかと思つてゐる。何故と云へば、惡魔は、牛商人の肉體と靈魂とを、自分のものにする事は出來なかつたが、その代に、煙草は、洽く日本全國に、普及させる事が出來た。して見ると牛商人の救拔が、一面墮落を伴つてゐるやうに、惡魔の失敗も、一面成功を伴つてゐはしないだらうか。惡魔は、ころんでも、たゞは起きない。誘惑に勝つたと思ふ時にも、人間は存外、負けてゐる事がありはしないだらうか。

それから序に、惡魔のなり行きを、簡單に、書いて置かう。彼は、フランシス上人が、歸つて來ると共に、神聖なペンタグラマの威力によつて、とう／＼、その土地から、逐拂はれた。が、その後も、やはり伊留滿のなりをして、方々をさまよつて、歩いたものらしい。或記錄によると、彼は、南蠻寺の建立前後、京都にも、屢々出沒したさうである。松永彈正を飜弄した例の果心居士と云ふ男は、この惡魔だと云ふ說もあるが、これはラフカディオ・ヘルン先生が書いてゐるから、こゝには、御免を蒙る事にしよう。それから、豐臣德川兩氏の外教禁遏に會つて、始の中こそ、まだ、姿を現はしてゐたが、とう／＼、しまひには、完く日本にゐなくなつた。——記錄は、大體こゝまでしか、惡魔の消息を語つてゐない。唯、明治以後、再、渡來した彼の動靜を知る事が出來ないのは、返へす／″＼も、遺憾である。……

（大正五年十月二十一日）

煙管

一

加州石川郡金澤城の城主、前田齊廣は、參覲中、江戸城の本丸へ登城する毎に、必ず愛用の煙管を持つて行つた。當時有名な煙管商、住吉屋七兵衞の手に成つた、金無垢地に、劒梅鉢の紋ちらしと云ふ、數寄を凝らした煙管である。

前田家は、幕府の制度によると、五世、加賀守綱紀以來、大廊下詰で、席次は、世々尾紀水三家の次を占めてゐる。勿論、裕福な事も、當時の大小名の中で、肩を比べる者は、殆ど、一人もない。だから、その當主たる齊廣が金無垢の煙管を持つと云ふ事は、寧ろ身分相當の裝飾品を持つのに過ぎないのである。

しかし齊廣は、その煙管を持つてゐる事を甚だ、得意に感じてゐた。尤も斷つて置くが、彼の得意は決して、煙管そのものを、どんな意味でゞも、愛翫したからではない。彼はさう云ふ煙管

を日常口にし得る彼自身の勢力が、他の諸侯に比して、優越な所以を悦んだのである。つまり、彼は、加州百萬石が金無垢の煙管になつて、どこへでも、持つて行けるのが、得意だつた――と云つても、差支ない。

さう云ふ次第だから、齊廣は、登城してゐる間中、殆どその煙管を離した事がない。人と話しをしてゐる時は勿論、獨りでゐる時でも、彼はそれを懷中から出して、鷹揚に口に啣へながら、長崎煙草か何かの匂ひの高い煙りを、必ず悠々とくゆらせてゐる。

勿論この得意な心もちは、煙管なり、それによつて代表される百萬石なりを、人に見せびらかす程、增長慢な性質のものではなかつたかも知れない。が、彼自身が見せびらかさないまでも、殿中の注意は、明かに、その煙管に集注されてゐる觀があつた。さうして、その集注されてゐると云ふ事を意識するのが齊廣にとつては、可成愉快な感じを與へた。――現に彼には、同席の大名に、あまりお煙管が見事だからちよいと拜見させて頂きたいと、云はれた後では、のみなれた煙草の煙までが何時もより、一層快く、舌を刺戟するやうな氣さへ、したのである。

二

齊廣の持つてゐる、金無垢の煙管に、眼を駭かした連中の中で、最もそれを話題にする事を好んだのは所謂、お坊主の階級である。彼等はよるとさはると、鼻をつき合せて、この「加賀の煙管」を材料に得意の饒舌を鬪はせた。

「流石は、大名道具だて。」

「同じ道具でも、あゝ云ふ物は、つぶしが利きやす。」

「質に置いたら、何兩貸す事かの。」

「貴公ぢやあるまいし、誰が質になんぞ、置くものか。」

ざつと、こんな調子である。

すると或日、彼等の五六人が、圓い頭をならべて、一服やりながら、例の如く煙管の噂をしてゐると、そこへ、偶然、御數寄屋坊主の河内山宗俊が、やつて來た。——後年「天保六歌仙」の中の、主な rôle をつとめる事になつた男である。

「ふん又煙管か。」

河内山は、一座の坊主を、尻眼にかけて、空嘯いた。

「彫と云ひ、地金と云ひ、見事な物さ。銀の煙管さへ持たぬこちとらには見るも眼の毒……」

調子にのつて辯じてゐた了哲と云ふ坊主が、ふと氣がついて見ると、宗俊は、何時の間にか彼の煙草入れをひきよせて、その中から煙草をつめては、悠然と煙を輪にふいてゐる。

「おい、おい、それは貴公の煙草入れぢやないぜ。」

「いいつて事よ。」

宗俊は、了哲の方を見むきもせずに、又煙草をつめた。さうして、それを吸つてしまふと、生あくびを一つしながら、煙草入れをそこへ抛り出して、

「えゝ、悪い煙草だ。煙管ごのみが、聞いてあきれるぜ。」

了哲は慌てゝ、煙草入れをしまつた。

「なに、金無垢の煙管なら、それでも、ちよいとのめようと云ふものさ。」

「ふん又煙管か。」と繰返して、「そんなに、金無垢が有難けりや何故お煙管拝領と出かけねえん

だ。」

「お煙管拝領？」

「さうよ。」

流石に、了哲も相手の傍若無人なのにあきれたらしい。

「いくらお前、わしが慾ばりでも、……せめて、銀でゞもあれば、格別さ。……兎に角、金無垢だぜ。あの煙管は。」

「知れた事よ。金無垢ならばこそ、貰ふんだ。眞鍮の駄六を拝領に出る奴が何處にある。」

「だが、そいつは少し恐れだて。」

了哲はきれいに剃つた頭を一つたゝいて恐縮したやうな身ぶりをした。

「手前が貰はざ、己が貰ふ。いゝか、あとで羨しがるなよ。」

河内山はかう云つて、煙管をはたきながら肩をゆすつて、せゝら笑つた。

三

それから間もなくの事である。
齊廣が何時ものやうに、殿中の一間で煙草をくゆらせてゐると、西王母を描いた金襖が、靜に開いて、黑手の黃八丈に、黑の紋附の羽織を着た坊主が一人、恭しく、彼の前へ這つて出た。顏を上げずにゐるので、誰だかまだわからない。——齊廣は、何か用が出來たのかと思つたので、煙管をはたきながら、寬濶に聲をかけた。
「何用ぢや。」
「えゝ、宗俊御願がございまする。」
河内山はかう云つて、ちよいと言葉を切つた。それから、次の語を云つてゐる中に、だん〳〵頭を上げて、しまひには、ぢつと齊廣の顏を見つめ出した。かう云ふ種類の人間のみが持つて居る、一種の愛嬌をたゝへながら、蛇が物を狙ふやうな眼で見つめたのである。
「別儀でもございませんが、その御手許にございまする御煙管を、手前、拜領致したうございまする。」
齊廣は思はず手にしてゐた煙管を見た。その視線が、煙管へ落ちたのと、河内山が追ひかける

やうに、語を次いだのとが、殆ど同時である。

「如何でございませう。拝領仰せつけられませうか。」

宗俊の語の中にあるものは懇請の情ばかりではない、お坊主と云ふ階級があらゆる大名に對して持つてゐる、威嚇の意も籠つてゐる。煩雜な典故を尙んだ、殿中では、天下の侯伯も、お坊主の指導に從はなければならない。齊廣には一方にさう云ふ弱みがあつた。それから又一方には體面上卑吝の名を取りたくないと云ふ心もちがある。しかも、彼にとつて金無垢の煙管そのものは、決して得難い品ではない。――この二つの動機が一つになつた時、彼の手は自ら、その煙管を、河内山の前へさし出した。

「おゝ、とらす。持つてまゐれ。」

「有難うございまする。」

宗俊は、金無垢の煙管をうけとると、恭しく押頂いて、そこ〳〵又西王母の襖の向うへ、ひき下つた。すると、ひき下る拍子に、後から袖を引いたものがある。ふりかへると、そこには、了哲が、うすいもののある顏をにやつかせながら、彼の掌の上にある金無垢の煙管をもの欲しさう

に、指さしてゐた。
「かう、見や。」
河内山は、小聲でかう云つて、煙管の雁首を、了哲の鼻の先へ、持つて行つた。
「とう〳〵、せしめたな。」
「だから、云はねえ事ぢやねえ。今になつて、羨ましがつたつて、後の祭だ。」
「今度は、私も拜領と出かけよう。」
「へん、御勝手になせえましだ。」
河内山は、ちよいと煙管の目方をひいて見て、それから、襖ごしに齊廣の方を一瞥しながら、又、肩をゆすつてせゝら笑つた。

四

では、煙管をまき上げられた齊廣の方は、不快に感じたかと云ふと、必しもさうではない。それは、彼が、下城をする際に、何時になく機嫌のよさゝうな顏をしてゐるので、供の侍たちが、

不思議に思つたと云ふのでも、知れるのである。

彼は、寧、宗俊に煙管をやつた事に、一種の滿足を感じてゐた。或は、煙管を持つてゐる時よりも、その滿足の度は、大きかつたかも知れない。しかしこれは至極當然な話である。何故と云へば、彼が煙管を得意にするのは、前にも斷つたやうに、煙管そのものを、愛翫するからではない。實は、煙管の形をしてゐる、百萬石が自慢なのである。だから、彼のこの虛榮心は、金無垢の煙管を愛用する事によつて、滿足させられると同じやうに、その煙管を惜しげもなく、他人にくれてやる事によつて、更によく滿足させられる譯ではあるまいか。偶それを河内山にやる際に、幾分外部の事情に、強ひられたやうな所があつたにしても、彼の滿足が、その爲に、少しでも損ぜられる事なぞはないのである。

五

そこで、齊廣は、本鄕の屋敷へ歸ると、近習の侍に向つて、愉快さうにかう云つた。

「煙管は宗俊の坊主にとらせたぞよ。」

これを聞いた家中の者は、皆、齊廣の宏量なのに驚いた。しかし御用部屋の山崎勘左衞門、御納戸掛の岩田内藏之助、御勝手方の上木九郎右衞門――この三人の役人だけは思はず、眉をひそめたのである。

加州一藩の經濟にとつては、勿論、金無垢の煙管一本の費用位は、何でもない。が、賀節朔望二十八日の登城の度に、必、それを一本づゝ、坊主たちにとられるとなると、容易ならない支出である。或は、その爲に運上を增して煙管の入目を償ふやうな事が、起らないとも限らない。さうなつては、大變である――三人の忠義の侍は、皆云ひ合せたやうに、それを未然に惧れた。

そこで、彼等は、早速評議を開いて、善後策を講じる事になつた。善後策と云つても、勿論一つしかない。――それは、煙管の地金を全然變更して、坊主共の欲しがらないやうなものにする事である。が、その地金を何にするかと云ふ問題になると、岩田と上木とで、互に意見を異にした。

岩田は君公の體面上銀より卑しい金屬を用ひるのは、異なものであると云ふ。上木は又、旣に坊主共の欲心を防がうと云ふのなら、眞鍮を用ひるのに越した事はない。今更體面を、顧慮する

如きは、姑息の見であると云ふ。――二人は、各々、自說を固守して、極力論駁を試みた。

すると、老功な山崎が、兩說とも、至極道理がある。が、先、一應、銀を用ひて見て、それでも坊主共が欲しがるやうだつたら、その後に、眞鍮を用ひても、遲くはあるまい。と云ふ折衷說を持出した。これには二人とも、勿論、異議のあるべき筈がない。そこで評議は、とう〳〵、又、住吉屋七兵衞に命じて銀の煙管を造らせる事に、一決した。

六

齊廣は、爾來登城する每に、銀の煙管を持つて行つた。やはり、劍梅鉢の紋ぢらしの、精巧を極めた煙管である。

彼が新調の煙管を、以前ほど、得意にしてゐない事は勿論である。第一人と話しをしてゐる時でさへ滅多に手にとらない。手にとつても直に又しまつてしまふ。同じ長崎煙草が、金無垢の煙管でのんだ時ほど、うまくないからである。が、煙管の地金の變つた事は獨り齊廣の上に影響したばかりではない。三人の忠臣が豫想した通り、坊主共の上にも、影響した。しかし、この影響

は結果に於て彼等の豫想を、全然裏切つてしまふ事に、なつたのである。何故と云へば坊主共は、金が銀に變つたのを見ると、今まで金無垢なるが故に、遠慮をしてゐた連中さへ、先を爭つて御煙管拜領に出かけて來た。しかも、金無垢の煙管にさへ、愛着のなかつた齊廣が、銀の煙管をくれてやるのに、未練のあるべき筈はない。彼は、請はれるまゝに、惜し氣もなく煙管を投げてやつた。しまひには、登城した時に、煙管をやるのか、煙管をやる爲に登城するのか、彼自身にも判別が出來なくなつた――少くともなつた位である。

これを聞いた、山崎、岩田、上木の三人は、又、愁眉をあつめて評議した。かうなつては、愈上木の獻策通り、眞鍮の煙管を造らせるより外に、仕方がない。そこで、又、例の如く、命が住吉屋七兵衛へ下らうとした――丁度、その時である。一人の近習が齊廣の旨を傳へに、彼等の所へやつて來た。

「御前は銀の煙管を持つと坊主共の所望がうるさい。以來從前通り、金の煙管に致せと仰せられまする。」

三人は、啞然として、爲す所を知らなかつた。

七

河内山宗俊は、外の坊主共が先を爭つて、齊廣の銀の煙管を貰ひにゆくのを、傍痛く眺めてゐた。殊に、了哲が、八朔の登城の節か何かに、一本貰つて、嬉しがつてゐた時なぞは、持前の癇高い聲で、頭から「莫迦め」をあびせかけた程である。彼は決して銀の煙管が欲しくない譯ではない。が、外の坊主共と一しよになつて、同じ煙管の跡を、追ひかけて歩くには、餘りに、「金箔」がつきすぎてゐる。その高慢と欲との鬩ぎあふのに苦しめられた彼は、今に見ろ、己が鼻を明かしてやるから——と云ふ氣で、何氣ない體を裝ひながら、油斷なく、齊廣の煙管へ眼をつけてゐた。

すると、或日、彼は、齊廣が、以前のやうな金無垢の煙草で悠々と煙草をくゆらしてゐるのに、氣がついた。が、坊主仲間では誰も貰ひに行くものがないらしい。そこで彼は折から通りかゝつた了哲をよびとめて、そつと顋で齊廣の方を敎へながら囁いた。

「又金無垢になつたぢやねえか。」

了哲はそれを聞くと、呆れたやうな顏をして、宗俊を見た。
「いゝ加減に慾ばるがいゝ。銀の煙管でさへ、あの通りねだられるのに、何で又金無垢の煙管なんぞ持つて來るものか。」
「ぢやあれは何だ。」
「眞鍮だらうさ。」
宗俊は肩をゆすつた。四方を憚つて笑ひ聲を立てなかつたのである。
「よし、眞鍮なら、眞鍮にして置け。己が拜領と出てやるから。」
「どうして、又、金だと云ふのだい。」了哲の自信は、怪しくなつたらしい。
「手前たちの思惑は先樣御承知でよ。眞鍮と見せて、實は金無垢を持つて來たんだ。第一、百萬石の殿樣が、眞鍮の煙管を默つて持つてゐる筈がねえ。」
宗俊は、口早にかう云つて、獨り、齊廣の方へやつて行つた。あつけにとられた了哲を、例の西王母の金襖の前に殘しながら。
それから、半時ばかり後である。了哲は、又疊廊下で、河内山に出つくはした。

「どうしたい、宗俊、一件は。」

「一件た何だ。」

了哲は、下脣をつき出しながら、じろじろ宗俊の顏を見て、

「とぼけなさんな。煙管の事さ。」

「うん、煙管か。煙管なら、手前にくれてやらあ。」

河内山は懷から、黃いろく光る煙管を出したかと思ふと、了哲の顏へ抛りつけて、足早に行つてしまつた。

了哲は、ぶつけられた所をさすりながら、こぼしこぼし、下に落ちた煙管を手にとつた。見ると劍梅鉢の紋ぢらしの數寄を凝らした、——眞鍮の煙管である。彼は忌々しさうに、それを、又、疊の上へ抛り出すと、白足袋の足を上げて、この上を大仰に踏みつける眞似をした。……

八

それ以來、坊主が齊廣の煙管をねだる事は、ぱつたり跡を絕つてしまつた。何故と云へば、齊

廣の持つてゐる煙管は眞鍮だと云ふ事が、宗俊と了哲とによつて、一同に證明されたからである。

そこで、一時、眞鍮の煙管を金と僞つて、齊廣を欺いた三人の忠臣は、評議の末、再、住吉屋七兵衞に命じて、金無垢の煙管を調製させた。前に河內山にとられたのと寸分もちがはない、劍梅鉢の紋ぢらしの煙管である。――齊廣はこの煙管を持つて內心、坊主共にねだられる事を豫期しながら、揚々として登城した。

すると、誰一人、拜領を願ひに出るものがない。前に同じ金無垢の煙管を二本までねだつた河內山さへ、ぢろりと一瞥を與へたなり、小腰をかゞめて行つてしまつた。同席の大名は、勿論拜見したいとも何とも云はずに、默つてゐる。齊廣には、それが不思議であつた。

いや、不思議だつたばかりではない。しまひには、それが何となく不安になつた。そこで彼は又河內山の來かゝつたのを見た時に、今度はこつちから聲をかけた。

「宗俊、煙管をとらさうか。」

「いえ、難有うございますが、手前はもう、以前に頂いて居りまする。」

宗俊は、齊廣が飜弄するとでも思つたのであらう。丁寧な語の中に、鋭い口氣を籠めてから云

つた。

齊廣はこれを聞くと、不快さうに、顏をくもらせた。長崎煙草の味も今では、口にあはない。急に今まで感じてゐた、百萬石の勢力が、この金無垢の煙管の先から出る煙の如く、多愛なく消えてゆくやうな氣がしたからである……

古老の傳へる所によると、前田家では齊廣以後、齊泰も、慶寧も、煙管は皆眞鍮のものを用ひたさうである、事によると、これは、金無垢の煙管に懲りた齊廣が、子孫に遺誡でも埀れた結果かも知れない。

（大正五年十月）

MENSURA ZOILI

僕は、船のサルーンのまん中に、テーブルをへだてゝ、妙な男と向ひあつてゐる。――

待つてくれ給へ。その船のサルーンと云ふのも、實はあまり確でない。部屋の具合とか窓の外の海とか云ふもので、やつとさう云ふ推定を下しては見たもの丶、事によると、もつと平凡な場所かも知れないと云ふ懸念がある。いや、やつぱり船のサルーンかな。それでなくては、かう搖れる筈がない。僕は木下杢太郎君ではないから、何サンチメートル位な割合で、搖れるのかわからないが、搖れる事は、確に搖れる。噓だと思つたら、窓の外の水平線が、上つたり下つたりするのを、見るがいゝ。空が曇つてゐるから、海は煮切らない綠靑色を、どこまでも擴げてゐるが、それと灰色の雲との一つになる所が、窓枠の圓形を、さつきから色々な弦に、切つて見せてゐる。

その中に、空と同じ色をしたものが、ふは〳〵飛んでゐるのは、大方鷗か何かであらう。

さて、僕の向ひあつてゐる妙な男だが、こいつは、鼻の先へ度の強さうな近眼鏡をかけて、退

屈らしく新聞を讀んでゐる。口髭の濃い、顋の四角な、どこかで見た事のあるやうな男だが、どうしても思ひ出せない。頭の毛を、長くもぢやくく生やしてゐる所では、どうも作家とか畫家とか云ふ階級の一人ではないかと思はれる。が、それにしては着てゐる茶の背廣が、何となく釣合はない。

僕は、暫、この男の方をぬすみ見ながら、小さな杯へついだ、甘い西洋酒を、少しづゝなめてゐた。これは、こつちも退屈してゐる際だから、話しかけたいのは山山だが、相手の男の人相が、甚、無愛想に見えたので、暫躊躇してゐたのである。

すると、角顋の先生は、足をうんと踏みのばしながら、生あくびを噛みつぶすやうな聲で、「あゝ、退屈だ。」と云つた。それから、近眼鏡の下から、僕の顏をちよいと見て、又、新聞を讀み出した。僕はその時、愈、こいつにはどこかで、會つた事があるのにちがひないと思つた。

サルーンには、二人の外に誰もゐない。

暫して、この妙な男は、又、「あゝ、退屈だ。」と云つた。さうして、今度は、新聞をテーブルの上へ抛り出して、ぼんやり僕の酒を飲むのを眺めてゐる。そこで僕は云つた。

「どうです。一杯おつきあひになりませんか。」

「いや、難有う。」彼は、飲むとも飲まないとも云はずに、ちよいと頭をさげて、「どうも、實際退屈しますな。これぢや向うへ着くまでに、退屈死に死んぢまふかも知れません。」

僕は同意した。

「まだ、ZOILIAの土を踏むには、一週間以上かゝりませう。私は、もう、船が飽き飽きしました。」

「ゾイリア――ですか。」

「さやう、ゾイリア共和國です。」

「ゾイリアと云ふ國がありますか。」

「これは、驚いた。ゾイリアを御存知ないとは、意外ですな。一體どこへ御出でになる御心算か知りませんが、この船がゾイリアの港へ寄港するのは、餘程前からの慣例ですぜ。」

僕は當惑した。考へて見ると、何の爲にこの船に乘つてゐるのか、それさへもわからない。まして、ゾイリアなどと云ふ名前は、未嘗、一度も聞いた事のない名前である。

「さうですか。」

「さうですとも。ゾイリアと云へば、昔から、有名な國です。御承知でせうが、ホメロスに猛烈な惡口をあびせかけたのも、やつぱりこの國の學者です。今でも確ゾイリアの首府には、この人の立派な頌德表が立つてゐる筈ですよ。」

僕は、角顋の見かけによらない博學に、驚いた。

「すると、餘程古い國と見えますな。」

「えゝ、古いです。何でも神話によると、始は蛙ばかり住んでゐた國ださうですが、パラス・アテネがそれを皆、人間にしてやつたのださうです。だから、ゾイリア人の聲は、蛙に似てゐると云ふ人もゐますが、これはあまり當になりません。記錄に現れたのでは、ホメロスを退治した豪傑が、一番早いやうです。」

「では今でも相當な文明國ですか。」

「勿論です。殊に首府にあるゾイリア大學は、一國の學者の粹を拔いてゐる點で、世界のどの大學にも負けないでせう。現に、最近、敎授連が考案した、價値測定器の如きは、近代の驚異だと

云ふ評判です。尤も、これは、ゾイリアで出るゾイリア日報のうけ賣りですが。」
「價値測定器と云ふのは何です。」
「文字通り、價値を測定する器械です。尤も主として、小説とか繪とかの價値を、測定するのに、使用されるやうですが。」
「どんな價値を。」
「主として、藝術的な價値をです。無論まだ其他の價値も、測定出來ますがね。ゾイリアでは、それを祖先の名譽の爲に MENSURA ZOILI と名をつけたさうです。」
「あなたは、そいつを御覽になつた事があるのですか。」
「いゝえ。ゾイリア日報の插繪で、見ただけです。なに、見た所は、普通の計量器と、ちつとも變りはしません。あの人が上る所に、本なりカンヴアスなりを、のせればよいのです。額緣や製本も、少しは測定上邪魔になるさうですが、さう云ふ誤差は後で訂正するから、大丈夫です。」
「それは兎に角、便利なものですね。」
「非常に便利です。所謂文明の利器ですな。」角顋は、ポケツトから朝日を一本出して、口へくは

へながら、「から云ふものが出來ると、羊頭を掲げて狗肉を賣るやうな作家や畫家は、屛息せざるを得なくなります。何しろ、價値の大小が、明白に數字で現れるのですからな。殊にゾイリア國民が、早速これを稅關に据ゑつけたと云ふ事は、最も賢明な處置だと思ひますよ。」

「それは、又何故でせう。」

「外國から輸入される書物や繪を、一々これにかけて見て、無價値な物は、絕對に輸入を禁止する爲です。この頃では、日本、英吉利、獨逸、墺太利、佛蘭西、露西亞、伊太利、西班牙、亞米利加、瑞典、諾威などから來る作品が、皆、一度はかけられるさうですが、どうも日本の物は、あまり成績がよくないやうですよ。我々のひいき眼では、日本には相當な作家や畫家がゐさうに見えますがな。」

こんな事を話してゐる中に、サルーンの扉があいて、黑坊のボイがはいつて來た。藍色の夏服を着た、敏捷さうな奴である。ボイは、默つて、脇にかゝへてゐた新聞の一束を、テーブルの上へのせる。さうして、直又、扉の向うへ消えてしまふ。

その後で角顋は、朝日の灰を落しながら、新聞の一枚をとりあげた。楔形文字のやうな、妙な

字が行列した、所謂ゾイリア日報なるものである。僕は、この不思議な文字を讀み得る點で、再この男の博學なのに驚いた。

「不相變、メンスラ・ゾイリの事ばかり出てゐますよ。」彼は、新聞を讀み〳〵、こんな事を云つた。「こゝに、先月日本で發表された小說の價値が、表になつて出てゐますぜ。測定技師の記要まで、附いて。」

「久米と云ふ男のは、あるでせうか。」

僕は、友だちの事が氣になるから、訊いて見た。

「久米ですか。『銀貨』と云ふ小說でせう。ありますよ。」

「どうです。價値は。」

「駄目ですな。何しろこの創作の動機が、人生のくだらぬ發見ださうですからな。そしておまけに、早く大人がつて通がりさうなトーンが、作全體を低級な卑しいものにしてゐると書いてあります。」

僕は、不快になつた。

「お氣の毒ですな。」角顋は冷笑した。「あなたの『煙管』もありますぜ。」

「何と書いてあります。」

「やつぱり似たやうなものですな。常識以外に何もないさうですよ。」

「へえゝ。」

「またかうも書いてあります。――この作者早くも濫作をなすか……。」

「おや〳〵。」

僕は、不快なのを通り越して、少し莫迦々々しくなつた。

「いや、あなた方ばかりでなく、どの作家や畫家でも、測定器にかゝつちや、往生です。とてもまやかしは利きませんからな。いくら自分で、自分の作品を賞め上げたつて、現に價値が測定器に現はれるのだから、駄目です。無論、仲間同志のほめ合にしても、やつぱり評價表の事實を、變へる譯には行きません。まあ精々、骨を折つて、實際價値があるやうなものを書くのですな。」

「しかし、その測定器の評價が、確だと云ふ事は、どうして、きめるのです。」

「それは、傑作をのせて見れば、わかります。モオパツサンの『女の一生』でも載せて見れば、す

ぐ針が最高價値を指しますからな。」

「それだけですか。」

「それだけです。」

僕は、默つてしまつた。少々、角顋の頭が、沒論理に出來上つてゐるやうな氣がしたからである。が、又、別な疑問が起つて來た。

「ぢや、ゾイリアの藝術家の作つた物も、やはり測定器にかけられるのでせうか。」

「それは、ゾイリアの法律が禁じてゐます。」

「何故でせう。」

「何故と云つて、ゾイリア國民が承知しないのだから、仕方がありません。ゾイリアは昔から共和國ですからな。Vox populi, vox Dei を文字通りに遵奉する國ですからな。」

角顋は、かう云つて、妙に微笑した。「尤も、彼等の作物を測定器へのせたら、針が最低價値を指したと云ふ風說もありますがな。もしさうだとすれば、彼等はディレムマにかかつてゐる譯です。測定器の正確を否定するか、彼等の作物の價値を否定するか、どつちにしても、難有い話ぢ

やありません。――が、これは風說ですよ。」

かう云ふ拍子に、船が大きく搖れたので、角顋はあつと云ふ間に椅子から、ころがり落ちた。するとその上へテーブルが倒れる。酒の罎と杯とがひつくりかへる。新聞が落ちる。窓の外の水平線が、どこかへ見えなくなる。皿の破れる音、椅子の倒れる音、それから、波の船腹へぶつかる音――、衝突だ。衝突だ。それとも海底噴火山の爆發かな。

氣がついて見ると、僕は、書齋のロッキング・チェアに腰をかけて St. John Ervine の The Critics と云ふ脚本を讀みながら、晝寢をしてゐたのである。船だと思つたのは、大方椅子の搖れるせゐであらう。

角顋は、久米のやうな氣もするし、久米でないやうな氣もする。これは、未だにわからない。

（大正五年十一月二十三日）

運

目のあらい簾が、入口にぶらさげてあるので、往來の容子は仕事場にゐても、よく見えた。清水へ通ふ往來は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓をかけた法師が通る。壺裝束をした女が通る。その後からは、めづらしく、黃牛に曳かせた網代車が通つた。それが皆、疎な蒲の簾の目を、右からも左からも、來たかと思ふと、通りぬけてしまふ。その中で變らないのは、午後の日が暖に春を炙つてゐる、狹い往來の土の色ばかりである。

その人の往來を、仕事場の中から、何と云ふ事もなく眺めてゐた、一人の靑侍が、この時、ふと思ひついたやうに、主の陶器師へ聲をかけた。

「不相變、觀音樣へ參詣する人が多いやうだね。」

「左樣でございます。」

陶器師は、仕事に氣をとられてゐたせゐか、少し迷惑さうに、から答へた。が、これは眼の小

さい、鼻の上を向いた、何處かひやうきんな所のある老人で、顏つきにも容子にも、惡氣らしいものは、微塵もない。著てゐるのは、麻の帷子であらう。それに萎えた揉烏帽子をかけたのが、此頃評判の高い鳥羽僧正の繪卷の中の人物を見るやうである。

「私も一つ、日參でもして見ようか。かう、うだつが上らなくちや、やりきれない。」

「御冗談で。」

「なに、これで善い運が授かるとなれば、私だつて、信心をするよ。日參をしたつて、參籠をしたつて、さうとすれば、安いものだからね。つまり、神佛を相手に、一商賣をするやうなものさ。」

靑侍は、年相應な上調子なもの言ひをして、下脣を舐めながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。――竹藪を後にして建てた、藁葺きのあばら家だから、中は鼻がつかへる程狹い。が、簾の外の往來が、目まぐるしく動くのに引換へて、此處では、甕でも瓶子でも、皆赭ちやけた土器の肌をのどかな春風に吹かせながら、百年も昔からさうしてゐたやうに、ひつそりかんと靜まつてゐる。どうやらこの家の棟ばかりは、燕さへも巢を食はないらしい。……

翁が返事をしないので、青侍は又語を繼いだ。

「お爺さんなんぞも、この年までには、隨分いろんな事を見たり聞いたりしたらうね。どうだい。觀音樣は、ほんとうに運を授けて下さるものかね。」

「左樣でございます。昔は折々、そんな事もあつた、やうに聞いて居りますが。」

「どんな事があつたね。」

「どんな事と云つて、さう一口には申せませんがな。——しかし、貴方がたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもございますまい。」

「可哀さうに、これでも少しは信心氣のある男なんだぜ。愈々運が授かるとなれば、明日にも——」

「信心氣でございますかな。商賣氣でございますかな。」

翁は、眦に皺をよせて笑つた。捏ねてゐた土が、壺の形になつたので、やつと氣が樂になつたと云ふ調子である。

「神佛の御考へなどゝ申すものは、貴方がた位の御年では、中々わからないものでございます

よ。」
「それはわからないさ。わからないから、お爺さんに聞くんだあね。」
「いやさ、神佛が運をお授けになる、ならないと云ふ事ぢやございません。そのお授けになる運の善し惡しと云ふ事が。」
「だつて、授けて貰へばわかるぢやないか。善い運だとか、惡い運だとか。」
「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねませうて。」
「私には運の善し惡しより、さう云ふ理窟の方がわからなさうだね。」
日が傾き出したのであらう。さつきから見ると、往來へ落ちる物の影が、心もち長くなつた。その長い影をひきながら、頭に桶をのせた物賣りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産らしい櫻の枝を持つてゐた。
「今、西の市で、績麻の鄽を出してゐる女なぞもさうでございますが。」
「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつてゐるぢやないか。」
二人は、暫の間、默つた。靑侍は、爪で頤のひげを拔きながら、ぼんやり往來を眺めてゐる。

貝殻のやうに白く光るのは、大方さつきの櫻の花がこぼれたのであらう。

「話さないかね。お爺さん。」

やがて、眠さうな聲で、青侍が云つた。

「では、御免を蒙つて、一つ御話し申しませうか。又、何時もの昔話でございますが。」

かう前置きをして、陶器師の翁は、徐に話し出した。日の長い短いも知らない人でなくては、話せないやうな、悠長な口ぶりで話し出したのである。

「もう彼是三四十年前になりませう。あの女がまだ娘の時分に、この清水の觀音樣へ、願をかけた事がございました。どうぞ一生安樂に暮せますやうにと申しましてな。何しろ、その時分は、あの女もたつた一人のおふくろに死別れた後で、それこそ日々の暮しにも差支へるやうな身の上でございましたから、さう云ふ願をかけたのも、滿更無理はございません。

「死んだおふくろと申すのは、もと白朱社の巫子で、一しきりは大さう流行つたものでございますが、狐を使ふと云ふ噂を立てられてからは、めつきり人も來なくなつてしまつたやうでございます。これが又、白あばたの、年に似合はず水々しい、大がらな婆さんでございましてな、何さ

ま、あの容子ぢや、狐どころか男でも……」
「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺ひたいね。」
「いや、これは御挨拶で。――そのおふくろが死んだので、後は娘一人の痩せ腕でございますから、いくらかせいでも、暮の立てられやうがございませぬ。そこで、あの容貌のよい、利發者の娘が、お籠りをするにも、襤褸故に、あたりへ氣がひけると云ふ始末でございました。」
「へえ、そんなに好い女だつたかい。」
「左樣でございます。氣だてと云ひ、顏と云ひ、手前の欲目では、先どこへ出しても、恥しくないと思ひましたがな。」
「惜しい事に、昔さね。」
青侍は、色のさめた藍の水干の袖口を、ちよいとひつぱりながら、こんな事を云ふ。翁は、笑聲を鼻から拔いて、又ゆつくり話しつづけた。後の竹藪では、頻に鶯が啼いてゐる。
「それが、三七日の間、御籠りをして、今日が滿願と云ふ夜に、ふと夢を見ました。何でも、同じ御堂に詣つてゐた連中の中に、背むしの坊主が一人ゐて、そいつが何か陀羅尼のやうなものを、

くどくど誦してゐたさうでございます。大方それが、氣になつたせゐでございませう。うとうと眠氣がさして來ても、その聲ばかりは、どうしても耳をはなれませぬ。とんと、緣の下で蚯蚓でも鳴いてゐるやうな心もちで――すると、その聲が、何時の間にやら人間の語になつて、『ここから歸る路で、そなたに云ひよる男がある。その男の云ふ事を聞くがよい。』と、かう聞えると申すのでございますな。

「はつと思つて、眼がさめると、坊主はやつぱり陀羅尼三昧でございます。が、何と云つてゐるのだか、いくら耳を澄ましても、わかりませぬ。その時、何氣なく、ひよいと向うを見ると、常夜燈のぼんやりした明りで、觀音樣の御顏が見えました。日頃拜みなれた、端嚴微妙の御顏でございますが、それを見ると、不思議にも又耳もとで、『その男の云ふ事を聞くがよい』と、誰だか云ふやうな氣がしたさうでございます。そこで、娘はそれを觀音樣の御告だと、一圖に思ひこんでしまひましたげな。」

「はてね。」

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だらだら下りの坂路を、五條へくだらうとしますと、案

の定後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でございましたが、生憎の暗で、相手の男の顔も見えなければ、着てゐる物などは、猶の事わかりませぬ。唯、ふり離さうとする拍子に、手が向うの口髭にさはりました。いやはや、とんだ時が、滿願の夜に當つたものでございます。

「その上、相手は、名を訊かれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。唯、云ふ事を聞けと云ふばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるやうにして、つれて行きます。泣かうにも、喚かうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がございませぬ。」

「ははあ、それから。」

「それから、とうとう八坂寺の塔の中へ、つれこまれて、その晩は其處ですごしたさうでございます。――いや、その邊の事なら、何も年よりの手前などが、わざわざ申し上げるまでもございますまい。」

翁は、又眦に皺をよせて、笑つた。往來の影は、愈々長くなつたらしい。吹くともなく渡る風

のせゐであらう、其處此處に散つてゐる櫻の花も、何時の間にかこつちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、點々と白い色をこぼしてゐる。

「冗談云つちやいけない。」

青侍は、思ひ出したやうに、頤のひげを拔き拔き、かう云つた。

「それで、もうおしまひかい。」

「これだけなら、何もわざわざお話し申すがものはございませぬ。」翁は、やはり壺をいぢりながら、「夜があけると、その男が、かうなるのも大方宿世の緣だらうから、とてもの事に夫婦になつてくれと申したさうでございます。」

「成程。」

「夢の御告げでもないなら兎も角、娘は、觀音樣のお思召し通りになるのだと思つたものでございますから、とうとう首を竪にふりました。さて形ばかりの盃事をすませると、先、當座の用にと云つて、塔の奧から出して來てくれたのが綾を十疋に絹を十疋でございます。――この眞似ばかりは、いくら貴方にもちとむづかしいかも存じませんな。」

青侍は、にやにや笑ふばかりで、返事をしない。鶯も、もう啼かなくなつた。

「やがて、男は、日の暮に歸ると云つて、娘一人を留守居に、慌しく何處かへ出て參りました。その後の淋しさは、又一倍でございます。いくら利發者でも、かうなると、流石に心細くなるのでございませう。そこで、心晴らしに、何氣なく塔の奧へ行つて見ると、どうでございませう、綾や絹は愚な事、珠玉とか砂金とか云ふ金目の物が、皮匣に幾つともなく、並べてあると云ふぢやございませぬか。これにはあゝ云ふ氣丈な娘でも、思はず肚胸をついたさうでございます。

「物にもよりますが、こんな財物を持つてゐるからは、もう疑はございませぬ。引剝でなければ、物盗りでございます。――さう思ふと、今までは唯、さびしいだけだつたのが、急に、怖いのも手傳つて、何だか片時もかうしては、ゐられないやうな氣になりました。何さま、惡く放免の手にでもかゝらうものなら、どんな目に遭ふかも知れませぬ。

「そこで、逃げ場をさがす氣で、急いで戸口の方へ引返さうと致しますと、誰だか、皮匣の後から、しはがれた聲で呼びとめました。何しろ、人はゐないとばかり思つてゐた所でございますから、驚いたの驚かないのぢやございませぬ。見ると、人間とも海鼠ともつかないやうなものが、

砂金の袋を積んだ中に、圓くなつて、坐つて居ります。――これが目くされの、皺だらけの、腰のまがつた、背の低い、六十ばかりの尼法師でございました。しかも娘の思惑を知つてか知らないでか、膝で前へのり出しながら、見かけによらない猫撫聲で、初對面の挨拶をするのでございます。

「こつちは、それ所の騒ぎではないのでございますが、何しろ逃げようと云ふ巧みをけどられなどしては大變だと思つたので、しぶしぶ皮匣の上に肘をつきながら心にもない世間話をはじめました。どうも話の容子では、この婆さんが、今まであの男の炊女か何かつとめてゐたらしいのでございます。が、男の商賣の事になると、妙に一口も話しませぬ。それさへ、娘の方では、氣になるのに、その尼が又、少し耳が遠いと來てゐるものでございますから、一つ話を何度となく、云ひ直したり聞き直したりするので、こつちはもう泣き出したい程、氣がじれます。――

「そんな事が、彼是午までつゞいたでございませう。すると、やれ清水の櫻が咲いたの、やれ五條の橋普請が出來たのと云つてゐる中に、幸、年の加減か、この婆さんが、そろ〳〵居睡りをはじめました。一つは娘の返答が、はかばかしくなかつたせゐもあるのでございませう。そこで、

娘は、折を計つて、相手の寢息を窺ひながら、そつと入口まで這つて行つて、戸を細目にあけて見ました。外にも、いゝ案配に、人のけはひはございませぬ。――

「此處でそのまゝ、逃げ出してしまへば、何事もなかつたのでございますが、ふと今朝貰つた綾と絹との事を思ひ出したので、それを取りに、又そつと皮匣の所まで歸つて參りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまづいて、思はず手が婆さんの膝にさはつたから、たまりませぬ。尼の奴め驚いて眼をさますと、暫は唯、あつけにとられて、ゐたやうでございますが、急に氣ちがひのやうになつて、娘の足にかじりつきました。さうして、半分泣き聲で、早口に何かしやべり立てます。切れ切れに、語が耳へはいる所では、萬一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇ふかも知れないと、かう云つてゐるらしいのでございますな。が、こつちも此處にゐては命にかゝはると云ふ時でございますから、元よりそんな事に耳をかす譯がございませぬ。そこで、とうとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

「打つ。蹴る。砂金の袋をなげつける。――梁に巣を食つた鼠も、落ちさうな騷ぎでございます。それに、かうなると、死物狂ひだけに、婆さんの力も、莫迦には出來ませぬ。が、そこは年のち

がひでございませう。間もなく、娘が、綾と絹とを小脇にかゝへて、息を切らしながら、塔の戸口をこつそり、忍び出た時には、尼はもう、口もきかないやうになつて居りました。これは、後で聞いたのでございますが、死骸は、鼻から血を少し出して、頭から砂金を浴びせられたまゝ、薄暗い隅の方に、仰向けになつて、臥てゐたさうでございます。

「こつちは八坂寺を出ると、町家の多い所は、流石に氣がさしたと見えて、五條京極邊の知人の家をたづねました。この知人と云ふのも、その日暮しの貧乏人なのでございますが、絹の一疋もやつたからでございませう、湯を沸かすやら、粥を煮るやら、いろ／＼經營してくれたさうでございます。そこで、娘も漸く、ほつと一息つく事が出來ました。」

「私も、やつと安心したよ。」

青侍は、帶にはさんでゐた扇をぬいて、簾の外の夕日を眺めながら、それを器用に、ぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁が五六人、騷々しく笑ひ興じながら、通りすぎたが、影はまだ往來に殘つてゐる。……

「ぢやそれで愈々けりがついたと云ふ譯だね。」

「所が」翁は大仰に首を振つて、「その知人の家に居りますと、急に往來の人通りがはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵り合ふ聲が聞えます。何しろ、後暗い體ですから、娘は又、胸を痛めました。あの物盗りが仕返ししにでも來たものか、さもなければ、檢非違使の追手がかかりでもしたものか、――さう思ふともう、おちおち、粥を啜つても居られませぬ。」

「成程。」

「そこで、戸の隙間から、そつと外を覗いて見ると、見物の男女の中を、放免が五六人、それに看督長が一人ついて、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれて、繩にかゝつた男が一人、所々裂けた水干を著て烏帽子もかぶらず、曳かれて參ります。どうも物盗りを捕へて、これからその仕家へ、實錄をしに行く所らしいのでございますな。

「しかも、その物盗りと云ふのが、昨夜、五條の坂で云ひよつた、あの男ださうぢやございませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて來たさうでございます。これは、當人が、手前に話しました――何も、その男に惚れてゐたの、どうしたのと云ふ譯ぢやない。が、その繩目をうけた姿を見たら、急に自分で、自分がいぢらしくなつて、思はず泣いてしまつたと、まあか

う云ふのでございますがな。まことにその話を聞いた時には、手前もつく〴〵さう思ひましたよ――」

「何とね。」

「觀音樣へ願をかけるのも考へ物だとな。」

「だが、お爺さん。その女は、それから、どうにかやつて行けるやうになつたのだらう。」

「どうにか所か、今では何不自由ない身の上になつて居ります。その綾や絹を賣つたのを本に致しましてな。觀音樣も、これだけは、御約束をおちがへになりません。」

「それなら、その位な目に遇つても、結構ぢやないか。」

外の日の光は、何時の間にか、黄いろく夕づいた。その中を、風だつた竹藪の音が、かすかながら其處此處から聞えて來る。往來の人通りも、暫くはとだえたらしい。

「人を殺したつて、物盜りの女房になつたつて、する氣でしたんでなければ仕方がないやね。」

青侍は、扇を帶へさしながら、立上つた。翁も、もう提の水で、泥にまみれた手を洗つてゐる――二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何ものかを、

感じてゞもゐるやうな容子である。

「兎に角、その女は仕合せ者だよ。」

「御冗談で。」

「まつたくさ。お爺さんも、さう思ふだらう。」

「手前でございますか。手前なら、さう云ふ運はまつぴらでございますな。」

「へえ、さうかね。私なら、二つ返事で、授けて頂くがね。」

「ぢや観音様を、御信心なさいまし。」

「さう〳〵、明日から私も、お籠でもしようよ。」

（大正五年十二月）

尾形了齋覺え書

今般、當村内にて、切支丹宗門の宗徒共、邪法を行ひ、人目を惑はし候儀に付き、私見聞致し候次第を、逐一公儀へ申上ぐ可き旨、御沙汰相成り候段屹度承知仕り候。

陳者、今年三月七日、當村百姓與作後家篠と申す者、私宅へ參り、同人娘里(當年九歳)大病に付き、檢脈致し呉れ候様、懇々頼入り候。

右篠と申候は、百姓惣兵衛の三女に有之、十年以前與作方へ緣付き、里を儲け候も、程なく夫に先立たれ、爾後再緣も仕らず、機織り乃至賃仕事など致し候うて、その日を糊口し居る者に御座候。なれども、如何なる心得違ひにてか、與作病死の砌より、專ら切支丹宗門に歸依致し、隣村の伴天連ろどりげと申す者方へ、繁々出入致し候間、當村内にても、右伴天連の妾と相成候由、取沙汰致す者なども有之、兎角の批評絶え申さず、依つて、父惣兵衛始め姉弟共一同、種々意見仕り候へども、泥烏須如來より難有きもの無しなど申し候うて、一向に合點仕らず、

朝夕、唯、娘里と共にくるすと稱へ候小き磔柱形の守り本尊を禮拜致し、夫與作の墓參さへ怠り居る始末に付き、唯今にては、親類縁者とも義絶致し居り、追つては、村方にても、村拂ひに行ふ可き旨、寄り〳〵評議致し居る由に御座候。

右樣の者に候へば、重々賴み入り候へども、私檢脈の儀は、叶ふまじき由申し聞け候所、一度は泣く泣く歸宅致し候へども、翌八日、再私宅へ參り、「一生の恩に着申す可く候へば、何卒御檢脈下され度」など申し候うて、如何樣斷り候も、聞き入れ申さず、はては、私宅玄關に泣き伏し、「御醫者樣の御勤は、人の病を癒す事と存じ候。然るに、私娘大病の儀、御聞き棄てに遊ばさるる條、何とも心得難く候。」など、怨じ候へば、私申し候は、「貴殿の申し條、萬々道理には候へども、私檢脈致さざる儀も、全くその理無しとは申し難く候。何故と申し候はば、貴殿平生の行狀誠に面白からず、別して、私始め村方の者の神佛を拜み候を、惡魔外道に憑かれたる所行なりなど、屢誹謗致され候由、確と承り居り候。然るに、その正道潔白なる貴殿が、私共天魔に魅入られ候者に、唯今、娘御の大病を癒し吳れよと申され候は、何故に御座候や。右樣の儀は、日頃御信仰の泥烏須如來に御賴みあつて然る可く、もし、たつて私檢脈

を所望致され候上は、切支丹宗門御歸依の儀、以後堅く御無用たる可く候。此段御承引無之に於ては、假令、醫は仁術なりと申し候へども、神佛の冥罰も恐しく候へば、檢脈の儀平に御斷り申候。」斯様、說得致し候へば、篠も流石に、推してとも申し難く、其儘凄々歸宅致し候。

翌九日は、ひき明け方より大雨にて、村内一時は人通も絕え候所、卯時ばかりに、篠、傘をも差さず、濡鼠の如くなりて、私宅へ參り、又々檢脈致し吳れ候樣、賴み入り候間、私申し候は、「長袖ながら、二言は御座無く候。然れば、娘御の命か、泥烏須如來か、何れか一つ御棄てなさるる分別肝要と存じ候。」斯様申し聞け候へば、篠、此度は狂氣の如く相成り、私前に再三額づき又は手を合せて拜みなど致し候うて、「仰せ千萬御尤もに候。なれども、切支丹宗門の敎にて、一度ころび候上は、私魂軀とも、生々世々亡び申す可く候。何卒、私心根を不憫と思召され、此儀のみは、御容赦下され度候。」など搔き口說き咽び入り候。邪宗門の宗徒とは申しながら、親心に二無き體相見え、多少とも哀れには存じ候へども、私情を以て、公道を廢す可らざるの道理に候へば、如何樣申し候うても、ころび候上ならでは、檢脈叶難き旨、申し張り候所、篠、何とも申し樣無き顏を致し、少時私顏を見つめ居り候が、突然淚をはらはら

と落し、私足下に手をつき候うて、何やら蚊の様なる聲にて申し候へども、折からの大雨の音にて、確と聞き取れ申さず、再三聞き直し候上、漸、然らば詮無く候へば、ころび候可き趣、判然致し候。なれどもころび候實證無之候へば、右證明を立つ可き旨、申し聞け候所、篠、無言の儘、懷中より、彼くるすを取り出し、玄關式臺上へ差し置き候うて、靜に三度まで踏み候。其節は格別取亂したる氣色も無之、涙も旣に乾きし如く思はれ候へども、足下のくるすを眺め候眼の中、何となく熱病人の様にて、私方下男など、皆々氣味惡しく思ひし由に御座候。

扨、私申し條も相立ち候へば、即刻下男に藥籠を擔はせ、大雨の中を、篠同道にて、同人宅へ參り候所、至極手狹なる部屋に、里獨り、南を枕にして打臥し居り候。尤も身熱烈しく候へば、殆正氣無之き體に相見え、いたいけなる手にて繰返し、繰返し、空に十字を描き候うては、頻にはるれやと申す語を、現の如く口走り、其都度嬉しげに、微笑み居り候。右、はるれやと申し候は、切支丹宗門の念佛にて、宗門佛に讃頌を捧ぐる儀に御座候由、篠、其節枕邊にて、泣く泣く申し聞かし候。依つて、早速檢脈致し候へば、傷寒の病に紛れ無く、且は手遲れの儀も有之、今日中にも、存命覺束なかる可きやに見立て候間、詮方無く其旨、篠へ申し聞け候所、

同人又々狂氣の如く相成り、「私ころび候仔細は、娘の命助け度き一念よりに御座候。然るを落命致させては、其甲斐、萬が一にも無之かる可く候。何卒泥烏須如來に背き奉り候私心苦しさを御汲み分け下され、娘一命、如何にもして、御取り留め下され度候。」と申し、私のみならず、私下男足下にも、手をつき候うて、頻に賴み入り候へども、人力にては如何とも致し難き儀に候へば、心得違ひ致さざる樣、呉れ呉れも、申し諭し、煎藥三貼差し置き候上、折からの雨止みを幸、立ち歸らんと致し候所、篠、私袂にすがりつき候うて離れ申さず、何やら申さんとする氣色にて、脣を動かし候へども、一言も申し果てざる中に、見る見る面色變り、忽、其場に悶絶致し候。然れば、私大に仰天致し、早速下男共々、介抱仕り候所、漸、正氣づき候へども、最早立上り候氣力も無之、「所詮は、私心淺く候儘、娘一命、泥烏須如來、二つながら失ひしに極まり候。」とて、さめざめと泣き沈み、種々申し慰め候へども、一向耳に掛くる體も御座無く、且は娘容態も詮無く相見え候間、止むを得ず再下男召し伴れ、匆々歸宅仕り候。

然るに、其日未時下り、名主塚越彌左衛門殿母儀檢脈に參り候所、篠娘死去致し候由、並に篠、悲嘆のあまり、遂に發狂致し候由、彌左衛門殿より承り候。右に依れば、里落命致し

候は、私檢脈後一時の間と相見え、巳の上刻には、篠既に亂心の體にて、娘死骸を搔き抱き、聲高に何やら、蠻音の經文讀誦致し居りし由に御座候。猶、此儀は、彌左衞門殿直に見受けられ候趣にて、村方嘉右衞門殿、藤吾殿、治兵衞殿等も、其場に居合されし由に候へば、千萬實事たるに紛れ無かる可く候。

追つて、翌十日は、朝來小雨有之候へども辰の下刻より春雷を催し、稍、晴れ間相きざし候折から――村鄕士梁瀨金十郎殿より、迎への馬差し遣はされ、檢脈致し吳れ候樣、申し越され候間、早速馬上にて、私宅を立ち出で候所、篠宅の前へ來かかり候へば、村方の人々大勢佇み居り、伴天連よ、切支丹よなど、罵り交し候うて、馬を進め候事さへ叶ひ申さず、依つて、私馬上より、家內の容子差し覗き候所、篠宅の戶を開け放ち候中に、紅毛人一名、日本人三名、各々法衣めきし黑衣を着し候者共、手に手に彼くるす、乃至は香爐樣の物を差しかざし候うて、同音に、はるれや、はるれやと唱へ居り候。加之、右紅毛人の足下には、篠、髮を亂し候儘、娘里を搔き抱き候うて、失神致し候如く、蹲り居り候。別して、私眼を驚かし候は、里、兩手にてひしと、篠頸を抱き居り、母の名とはるれやと、代る代る、あどけ無き聲にて、

唱へ居りし事に御座候。尤も、遠眼の事とて、確とは辨へ難く候へども、里血色至極麗しき様に相見え、折々母の頸より手を離し候うて、香爐様の物より立ち昇り候煙を捉へんとする眞似など致し居り候。然れば、私馬より下り、里蘇生致し候次第に付き、村方の人々に委細相尋ね候へば、右紅毛の伴天連ろどりげ儀、今朝、伊留滿共相從へ、隣村より篠宅へ參り、同人懺悔聞き屆け候上、一同宗門佛に加持致し、或は異香を焚き薫らし、或は神水を振り灑ぎなど致し候所、篠の亂心は自ら靜まり、里も程無く蘇生致し候由、皆々恐しげに申し聞かせ候。古來一旦落命致し候上、蘇生仕り候類、元より少からずとは申し候へども、多くは、酒毒に中り、乃至は瘴氣に觸れ候者のみに有之、里の如く、傷寒の病にて死去致し候者の、還魂仕り候例は、未嘗承り及ばざる所に御座候へば、切支丹宗門の邪法たる儀此一事にても分明致す可く、別して伴天連當村へ參り候節、春雷頻に震ひ候も、天の彼を憎ませ給ふ所かと推察仕り候。

猶、篠及娘里當日伴天連ろどりげ同道にて、隣村へ引移り候次第、並に慈元寺住職日寛殿計らひにて同人宅燒き棄て候次第は、既に名主塚越彌左衞門殿より、言上仕り候へば、私見聞致し候仔細は、荒々右にて相盡き申す可く候。但、萬一記し洩れも有之候節は、後日再應

書面を以て言上仕る可く、先は私覺え書斯くの如くに御座候。以上

申年三月二十六日

伊豫國宇和郡——村

醫師　尾形了齋

（大正五年十二月七日）

道祖問答

天王寺の別當、道命阿闍梨は、ひとりそつと床をぬけ出すと、經机の前へにじりよつて、其上に乘つてゐた法華經八の卷を灯の下に繰りひろげた。

切り燈臺の火は、花のやうな丁字をむすびながら、明く螺鈿の經机を照らしてゐる。耳にはいるのは几帳の向うに横になつてゐる和泉式部の寢息であらう。春の夜の曹司は唯しんかんと更け渡つて、その外には鼠の啼く聲さへも聞えない。

阿闍梨は、白地の錦の縁をとつた圓座の上に座をしめながら、式部の眼のさめるのを憚るやうに、中音で靜かに法華經を誦しはじめた。

これが、この男の日頃からの習慣である。身は、傅の大納言藤原道綱の子と生れて、天台座主慈惠大僧正の弟子となつたが、三業も修せず、五戒も持した事はない。いや寧ろ「天が下のいろごのみ」と云ふ Dandy の階級に屬すやうな、生活さへもつゞけてゐる。が、不思議にも、さう云

ふ生活のあひ間には、必ずひとり法華經を讀誦する。しかも阿闍梨自身は、少しもそれを矛盾だとは思つてゐないらしい。

現に今日、和泉式部を訪れたのも、驗者として來たのでは、勿論ない。唯この好女の數の多い情人の一人として春宵のつれ〴〵を慰める爲に忍んで來た。――それが、まだ一番鷄も鳴かないのに、こつそり床をぬけ出して、酒臭い脣に、一切衆生皆成佛道の妙經を讀誦しようとするのである。……

阿闍梨は褊衫の襟を正して、專念に經を讀んだ。

それが、どの位つゞいたかわからない。が、暫くすると、切り燈臺の火が、何時の間にか、少しづゝ暗くなり出したのに氣がついた。焰の先が青くなつて、光がだんだん薄れて來る。と思ふと、丁字のまはりが煤のたまつたやうに黑み出して、追々に火の形が糸ほどに細つてしまふ。阿闍梨は、氣にして二三度燈心をかき立てた。けれども、暗くなる事は、依然として變りがない。そればかりか、ふと氣がつくと、灯の暗くなるのに從つて、切り燈臺の向うの空氣が一所だけ濃くなつて、それが次第に、影のやうな人の形になつて來る。阿闍梨は、思はず讀經の聲を斷つ

た。――

「誰ぢや。」

すると、聲に應じて、その影からぼやけた返事が傳つて來た。

「おゆるされ。これは、五條西の洞院のほとりに住む翁でござる。」

阿闍梨は、身を稍後へずらせながら、眸を凝らして、ぢつとその翁を見た。翁は經机の向うに白の水干の袖を掻き合せて、仔細らしく坐つてゐる。朦朧とはしながらも、烏帽子の紐を長くむすび下げた物ごしは滿更狐狸の變化とも思はれない。殊に黃色い紙を張つた扇を持つてゐるのが、灯の暗いにも關らず氣高くはつきりと眺められた。

「翁とは何の翁ぢや。」

「おう、翁とばかりでは御合點まゐるまい。ありやうは、五條の道祖神でござる。」

「その道祖神が、何としてこれへ見えた。」

「御經を承はり申した嬉しさに、せめて一語なりとも御禮申さうとて、罷り出たのでござる。」

阿闍梨は不審らしく眉をよせた。

「道命が法華經を讀み奉るのは、常の事ぢや。今宵に限つた事ではない。」

「されば。」

道祖神は、ちよいと語を切つて、種々たる黄髮の頭を、懶げに傾けながら不相變呟くやうな、かすかな聲で、

「淸くて讀み奉らるゝ時には、上は梵天帝釋より下は恆河沙の諸佛菩薩まで、悉く聽聞せらるゝものでござる。よつて翁は下賤の悲しさに、御身近うまゐる事もかなひ申さぬ。今宵は――」と云ひかけながら、急に皮肉な調子になつて、「今宵は、御行水も遊ばされず、且つ女人の肌に觸れられての御誦經でござれば、諸々の佛神も不淨を忌んで、このあたりへは現ぜられぬげに見え申した。されば、翁も心安う見參に入り、聽聞の御禮申さう便宜を、得たのでござる。」

「何とな。」

道命阿闍梨は、不機嫌らしく聲をとがらせた。道祖神は、それにも氣のつかない容子で、

「されば、惠心の御房も、念佛讀經四威儀を破る事なかれと仰せられた。翁の果報は、やがて御房の墮獄の惡趣と思召され、向後は……」

「默れ。」

阿闍梨は、手頸にかけた水晶の念珠をまさぐりながら、鋭く翁の顔を一喝した。

「不肖ながら道命は、あらゆる經文論釋に眼を曝した。凡百の戒行德目も修せなんだものはない。その方づれの申す事に氣がつかぬうつけと思ふか。」――が、道祖神は答へない。切り燈臺のかげに蹲つたまま、ぢつと頭を垂れて、阿闍梨の語を、聞きすましてゐるやうである。

「よう聞けよ。生死卽涅槃と云ひ、煩惱卽菩提と云ふは、悉く己が身の佛性を觀ずると云ふ意ぢや。己が肉身は、三身卽一の本覺如來、煩惱業苦の三道は、法身般若外脫の三德、娑婆世界は常寂光土にひとしい。道命は無戒の比丘ぢやが、旣に三觀三諦卽一心の醍醐味を味得した。よつて、和泉式部も、道命が眼には摩耶夫人ぢや。男女の交會も萬善の功德ぢや。われらが寢所には、久遠本地の諸法、無作法身の諸佛等、悉く影顯し給ふぞよ。されば、道命が住所は靈鷲寶土ぢや。その方づれ如き、小乘臭糞の持戒者が、妄に足を容るべきの佛國でない。」

かう云つて阿闍梨は容をあらためると、水晶の念珠を振つて、苦々しげに叱りつけた。

「業畜、急々に退き居らう。」

すると、翁は、黄いろい紙の扇を開いて、顏をさしかくすやうに思はれたが、見る見る、影が薄くなつて、螢ほどになつた切り燈臺の火と共に、消えるともなく、ふつと消える——と、遠くでかすかながら、勇ましい一番鷄の聲がした。

「春はあけぼの、やう／＼白くなりゆく」時が來たのである。

（大正五年十二月十三日）

忠義

一　前島林右衛門

板倉修理は、病後の疲勞が稍恢復すると同時に、はげしい神經衰弱に襲はれた。——肩がはる。頭痛がする。日頃好んでする書見にさへ、身がはいらない。廊下を通る人の足音とか、家中の者の話聲とかが聞えただけで、すぐ注意が擾されてしまふ。それがだんだん嵩じて來ると、今度は極些細な刺戟からも、絶えず神經を虐まれるやうな姿になつた。

第一、莨盆の蒔繪などが、黑地に金の唐艸を這はせてゐると、その細い蔓や葉がどうも氣になつて仕方がない。その外象牙の箸とか、青銅の火箸とか云ふ先の尖つた物を見ても、やはり不安になつて來る。しまひには、疊の縁の交叉した角や、天井の四隅までが、丁度刃物を見つめてゐる時のやうな切ない神經の緊張を、感じさせるやうになつた。

修理は、止むを得ず、毎日陰氣な顏をして、ぢつと居間にゐすくまつてゐた。何をどうするの

も苦しい。出來る事なら、この儘存在の意識もなくなしてしまひたいと思ふ事が、度々ある。が、それは、さゝくれた神經の方で、許さない。彼は、蟻地獄に落ちた蟻のやうな、いら立たしい心で、彼の周圍を見まはした。しかも、そこにあるのは、彼の心もちに何の理解もない、徒に萬一を惧れてゐる「譜代の臣」ばかりである。「己は苦しんでゐる。が、誰も己の苦しみを察してくれるものがない。」――さう思ふ事が、既に彼には一倍の苦痛であつた。

修理の神經衰弱は、この周圍の無理解の爲に、一層昂進の度を早めたらしい。彼は、事毎に興奮した。隣屋敷まで聞えさうな聲で、わめき立てた事も一再ではない。刀架の刀に手のかかつた事も、度々ある。さう云ふ時の彼は、殆誰の眼にも、別人のやうになつてしまふ。ふだんの黄いろく肉の落ちた顏が、どこと云ふ事なく痙攣して眼の色まで妙に殺氣立つて來る。さうして、發作が甚しくなると、必ず左右の鬢の毛を、ふるへる兩手で、かきむしり始める。――近習の者は、皆この鬢をむしるのを、彼の逆上した索引にした。さう云ふ時には、互に警め合つて、誰も彼の側へ近づくものがない。

發狂――かう云ふ怖れは、修理自身にもあつた。周圍が、それを感じてゐたのは云ふまでもな

い。修理は勿論、この周圍の持つてゐる怖れには反感を抱いてゐる。しかし彼自身の感ずる怖れには、始めから反抗のしやうがない。彼は、發作が止んで、前よりも一層幽鬱な心が重く頭を壓して來ると、時としてこの怖れが、稻妻のやうに、己を脅かすのを意識した。さうして、同時に又、さう云ふ怖れを抱くことが、既に發狂の豫告のやうな、不吉な不安にさへ、襲はれた。「發狂したらどうする。」

――さう思ふと、彼は、俄に眼の前が、暗くなるやうな心もちがした。

勿論この怖れは、一方絶えず、外界の刺戟から來るいら立たしさに、かき消された。が、そのいら立たしさが又、他方では、ややもすると、この怖れを眼ざめさせた。――云はば、修理の心は、自分の尾を追ひかける猫のやうに、休みなく、不安から不安へと、廻轉してゐたのである。

修理のこの逆上は、少からず一家中の憂慮する所となつた。中でも、これが爲に最も心を勞したのは、家老の前島林右衞門である。

林右衞門は、家老と云つても、實は本家の板倉式部から、附人として來てゐるので、修理も彼には、日頃から一目置いてゐた。これは、殆病苦と云ふものの經驗のない、赭ら顏の大男で、文武の兩道に秀でてゐる點では、家中の侍で、彼の右に出るものは、幾人もない。――さう云ふ關係上、彼はこれまで、始終修理に對して、意見番の役を勤めてゐた。彼が「板倉家の大久保彦左」などと呼ばれてゐたのも、完くこの忠諫を進める所から來た渾名である。

林右衞門は、修理の逆上が眼に見えて、進み出して以來、夜の目も寢ない位、主家の爲に、心を煩はした。――既に病氣が本復した以上、修理は近日中に病綏の御禮として、登城しなければならない筈である。所が、この逆上では、登城の際、附合の諸大名、座席同列の旗本仲間へ、どんな無禮を働くか知れたものではない。萬一それから刃傷沙汰にでもなつた日には、板倉家七千石は、その儘「お取りつぶし」になつてしまふ。殷鑑は遠からず、堀田稻葉の喧嘩にあるではないか。

林右衞門は、かう思ふと、居ても立つても、ゐられないやうな心もちがした。しかし彼に云はせると、逆上は「體の病」ではない。全く「心の病」である――彼はそこで、放肆を諫めたり、奢侈

を諫めたりするのと同じやうに、敢然として、修理の神經衰弱を諫めようとした。

だから、林右衞門は、爾來、機會さへあれば修理に苦諫を進めた。が、修理の逆上は、少しも鎭まるけはひがない。寧、諫めれば諫める程、焦れれば焦れる程、眼に見えて、進んで來る。現に一度などは、危く林右衞門を手討ちにさへ、しようとした。「主を主とも思はぬ奴ぢや。本家の手前さへなくば、切つてすてようものを。」――さう云ふ修理の眼の中にあつたものは、既に怒りばかりではない。林右衞門は、そこに、又消し難い憎しみの色をも、讀んだのである。

その中に、主從の間に纏綿する感情は、林右衞門の重ねる苦諫に從つて、何時となく荒んで來た。と云ふのは、獨り修理が林右衞門を憎むやうになつたと云ふばかりではない。林右衞門の心にも亦、知らず知らず、修理に對する憎しみが、芽をふいて來た事を云ふのである。勿論、彼は、この憎しみを意識してはゐなかつた。少くとも、最後の一刻を除いて、修理に對する彼の忠心は、終始變らないものと信じてゐた。「君君爲らざれば、臣臣爲らず」――これは、孟子の「道」だつたばかりではない。その後には、人間の自然の「道」がある。しかし、林右衞門は、それを認めようとしなかつた。……

彼は、飽くまでも、臣節を盡さうとした。が、苦諫の效がない事は、既に苦い經驗を嘗めてゐる。そこで、彼は、今まで胸中に祕してゐた、最後の手段に訴へる覺悟をした。最後の手段と云ふのは、外でもない。修理を押込め隱居にして、板倉一族の中から養子をむかへようと云ふのである。――

何よりも先、「家」である。(林右衞門はかう思つた。)當主は「家」の前に、犧牲にしなければならない。殊に、板倉本家は、乃祖板倉四郎左衞門勝重以來未嘗、瑕瑾を受けた事のない名家である。二代又左衞門重宗が、父の跡をうけて、所司代として令聞があつたのは、數へるまでもない。その弟の主水重昌は、慶長十九年大阪冬の陣の和が媾ぜられた時に、判元見屆の重任を辱くしたのを始めとして、寛永十四年島原の亂に際しては西國の軍に將として、將軍家御名代の旗を、天草征伐の陣中に飜した。その名家に、萬一汚辱を蒙らせるやうな事があつたならば、どうしよう。臣子の分として、九原の下、板倉家累代の父祖に見ゆべき顏は、どこにもない。

かう思つた林右衞門は、私に一族の中を物色した。すると幸、當時若年寄を勤めてゐる板倉佐渡守には、部屋住の子息が三人ある。その子息の一人を跡目にして、養子願さへすれば、公邊の

首尾は、どうにでもならう。尤もこれは、事件の性質上修理や修理の内室には、密々で行はなければならない。彼は、ここまで思案をめぐらした時に、始めて、明るみへ出たやうな心もちがした。さうして、それと同時に今までに覺えなかつた或悲しみが、自らその心もちを曇らせようとするのが、感じられた。「皆御家の爲ぢや。」――さう云ふ彼の決心の中には、彼自身朧げにしか意識しない、何ものかを辯護しようとする或努力が、月の暈のやうにそれとなく、つきまとつてゐたからである。

病弱な修理は、第一に、林右衛門の頑健な體を憎んだ。それから、本家の附人として、彼が陰に持つてゐる權柄を憎んだ。最後に、彼の「家」を中心とする忠義を憎んだ。「主を主とも思はぬ奴ぢや。」――かう云ふ修理の語の中には、これらの憎しみが、燻りながら燃える火のやうに、暗い焔を藏してゐたのである。

そこへ、突然、思ひがけない非謀が、内室の口によつて傳へられた。林右衛門は修理を押込め

隠居にして、板倉佐渡守の子息を養子に迎へようとする。それが、偶然、内室の耳へ洩れた。――これを聞いた修理が、眦を裂いて憤つたのは無理もない。

成程、林右衛門は、板倉家を大事と思ふのかも知れない。が、忠義と云ふものは現在仕へてゐる主人を蔑にしてまでも、「家」の爲を計るべきものであらうか。しかも、林右衛門の「家」を憂へるのは、杞憂と云へば杞憂である。彼はその杞憂の爲に、自分を押込め隠居にしようとした。或はその物々しい忠義呼はりの後に、あはよくば、家を横領しようとする野心でもあるのかも知れない。――さう思ふと修理は、どんな酷刑でも、この不臣の行を罰するには、輕すぎるやうに思はれた。

彼は、内室からこの話を聞くと、すぐに、以前彼の乳人を勤めてゐた、田中宇左衛門といふ老人を呼んで、かう言つた。

「林右衛門めを縛り首にせい。」

宇左衛門は、半白の頭を傾けた。年よりもふけた、彼の顔は、この頃の心労で一層皺を増してゐる。――林右衛門の企ては、彼も快くは思つてゐない。が、何と云つても相手は本家からの附

人である。

「縛り首は穏便でございますまい。武士らしく切腹でも申しつけまするならば、格別でございますが。」

修理はこれを聞くと、嘲笑ふやうな眼で、宇左衛門を見た。さうして、二三度強く頭を振つた。

「いや人でなし奴に、切腹を申しつける廉はない。縛り首にせい。縛り首にぢや。」

が、さう云ひながら、どうしたのか、彼は、血の色のない頬へ、はらはらと涙を落した。さうして、それから――何時ものやうに兩手で、鬢の毛をかきむしり始めた。

縛り首にしろと云ふ命が出た事は、直に腹心の近習から、林右衛門に傳へられた。

「よいわ。この上は、林右衛門も意地づくぢや。手を拱いて縛り首もうたれまい。」

彼は、昂然として、かう云つた。さうして、今まで彼につきまとつてゐた得體の知れない不安が、この沙汰を聞くと同時に、跡方なく消えてしまふのを意識した。今の彼の心にあるものは、

修理に對するあからさまな憎しみである。もう修理は、彼にとつて、主人ではない。その修理を憎むのに、何の憚る所があらう。――彼の心の明くなつたのは、無意識ながら、全く彼がかう云ふ論理を、刹那の間に認めたからである。

そこで、彼は、妻子家來を引き具して、白晝、修理の屋敷を立ち退いた。作法通り、立ち退き先の所書きは、座敷の壁に貼つてある。槍も、林右衞門自ら、小腋にして、先に立つた。武具を擔つたり、足弱を扶けたりしてゐる若黨草履取を加へても、一行の人數は、漸く十人にすぎない。それが、とり亂した氣色もなく、つれ立つて、門を出た。

延享四年三月の末である。門の外では、生暖い風が、櫻の花と砂埃とを、一つに武者窓へふきつけてゐる。林右衞門は、その風の中に立つて、もう一應、往來の右左を見廻した。さうして、それから槍で、一同に左へ行けと相圖をした。

二　田中宇左衞門

林右衞門の立ち退いた後は、田中宇左衞門が代つて、家老を勤めた。彼は乳人をしてゐた關係

上、修理を見る眼が、自ら外の家來とはちがつてゐる。彼は親のやうな心もちで、修理の逆上をいたはつた。修理も亦、彼にだけは、比較的從順に振舞つたらしい。そこで、主從の關係は、林右衞門のゐた時から見ると、遙に滑になつて來た。

宇左衞門は、修理の發作が、夏が來ると共に、漸く怠り出したのを喜んだ。彼も萬一修理が殿中で無禮を働きはしないかと云ふ事を、惧れない譯ではない。が、林右衞門は、それを「家」に關る大事として、惧れた。併し、彼は、それを「主」に關る大事として惧れたのである。

勿論、「家」と云ふ事も、彼の念頭には上つてゐた。が、變があるにしてもそれは單に、「家」を亡すが故に、大事なのではない。「主」をして、「家」を亡さしむるが故に――「主」をして、不幸の名を負はしむるが故に、大事なのである。では、その大事を未然に防ぐには、どうしたら、いいであらうか。この點になると、宇左衞門は、林右衞門程明瞭な、意見を持つてゐないやうであつた。恐らく彼は、神明の加護と自分の赤誠とで、修理の逆上の鎭まるやうに祈るより外は、なかつたのであらう。

その年の八月一日、德川幕府では、所謂八朔の儀式を行ふ日に、修理は病後始めての出仕をし

た。さうして、その序に、當時西丸にゐた、若年寄の板倉佐渡守を訪うて、歸宅した。が、別に殿中では、何も粗匆をしなかつたらしい。宇左衛門は、始めて、愁眉を開く事が出來るやうな心もちがした。

しかし、彼の悅びは、その日一日だけも、續かなかつた。夜になると間もなく、板倉佐渡守から急な使があつて、早速來るやうにと云ふ沙汰が、凶兆のやうに彼を脅したからである。夜陰に及んで、突然召しを受ける。——さう云ふ事は、林右衛門の代から、まだ一度も聞いた事がない。しかも今日は、初めて修理が登城をした日である。——宇左衛門は、不吉な豫感に襲はれながら、慌しく佐渡守の屋敷へ參候した。

すると、果して、修理が佐渡守に無禮の振舞があつたと云ふ話である。——今日出仕を終つてから、修理は、白帷子に長上下の儘で、西丸の佐渡守を訪れた。見た所、顏色もすぐれないやうだから、或はまだ快癒がはかばかしくないのかとも思つたが、話して見ると、格別、病人らしい容子もない。そこで安心して、暫く世間話をしてゐる中に、偶然、佐渡守が、何時ものやうに前島林右衛門の安否を訊ねた。すると、修理は急に額を暗くして、「林右衛門めは、先頃、手前屋敷

を駈落ち致してござる。」と云ふ。林右衞門が、どう云ふ人間かと云ふ事は、佐渡守もよく知つてゐる。何か仔細がなくては、妄に主家を駈落ちなどする男ではない。かう思つたから、佐渡守は、その仔細を尋ねると同時に、本家からの附人にどう云ふ間違ひが起つても、親類中へ相談なり、知らせなりしないのは、穩でない旨を忠告した。所が、修理は、これを聞くと、眼の色を變へながら、刀の柄へ手をかけて、「佐渡守殿は、別して、林右衞門めを贔屓にせられるやうでござるが、手前家來の仕置は、不肖ながら手前一存で取計らひ申す。如何に當時出頭の若年寄でも、いらぬ世話はお置きなされい。」と云ふ口上である。そこで流石の佐渡守も、あまりの事に呆れ返つて、御用繁多を幸に、早速その場を外してしまつた。——

「よいか。」ここまで話して來て、佐渡守は、今更のやうに、苦い顏をした。

——第一に、林右衞門の立ち退いた趣を、一門衆へ通達しないのは、宇左衞門の罪である。第二に、まだ逆上の氣味のある修理を、登城させたのも、やはり彼の責を免れない。佐渡守だつたから、いいが、もし今日のやうな雜言を、列座の大名衆にでも云つたとしたら、板倉家七千石は、忽、改易になつてしまふ。——

「そこでぢや。今後は必とも、他出無用に致すやうに、別して、出仕登城の儀は、その方より、堅くさし止むるがよい。」

佐渡守は、かう云つて、ぢろりと宇左衞門を見た。

「唯だ主につれて、その方まで逆上しさうなのが、心配ぢや。よいか。屹と申しつけたぞ。」

宇左衞門は、眉をひそめながら、思切つた聲で答へた。

「よろしうござりまする、しかと向後は愼むでございませう。」

「おゝ、二度と過をせぬのが、何よりぢや。」

佐渡守は、吐き出すやうに、かう云つた。

「その儀は、宇左衞門、一命にかけて、承知仕りました。」

彼は、眼に涙をためながら懇願するやうに、佐渡守を見た。が、その眼の中には、哀憐を請ふ情と共に、犯し難い決心の色が、浮んでゐる。――必ず修理の他出を、禁ずる事が出來ると云ふ決心ではない。禁ずる事が出來なかつたら、どうすると云ふ、決心である。

佐渡守は、これを見ると、又顏をしかめながら、面倒臭さうに、横を向いた。

「主」の意に從へば、「家」が危い。「家」を立てようとすれば、「主」の意に悖る事になる。嘗は、林右衞門も、この苦境に陷つてゐた。が、彼には、「家」の爲に「主」を捨てる勇氣がある。と云ふよりは、寧、始からそれ程「主」を大事に思つてゐない。だから、彼は、容易く、「家」の爲に「主」を犧牲にした。

しかし、自分には、それが出來ない。自分は、「家」の利害だけを計るには、餘りに「主」に親しみすぎてゐる。「家」の爲に、唯、「家」と云ふ名の爲めに、どうして、現在の「主」を無理に隱居などさせられよう。自分の眼から見れば、今の修理も、破魔弓こそ持たないものの、幼少の修理と變りがない。自分が繪解きをした繪本、自分が手をとつて習はせた難波津の歌、それから、自分が尾をつけた紙鳶——さう云ふ物も、まざまざと、自分の記憶には殘つてゐる。……

さうかと云つて、「主」をその儘にして置けば、獨り「家」が亡びるだけではない。「主」自身にも凶事が起りさうである。利害の打算から云へば、林右衞門のとつた策は、唯一の、さうして又、

最も賢明なものに相違ない。自分も、それは認めてゐる。その癖、それが、自分には、どうしても實行する事が出來ないのである。

遠くで稻妻のする空の下を、修理の屋敷へ歸りながら、宇左衞門は悄然と腕を組んで、こんな事を何度となく胸の中で繰り返した。

修理は、翌日、宇左衞門から、佐渡守の云ひ渡した一部始終を聞くと、忽ち顏を曇らせた。が、それぎりで、格別何時ものやうに、とり上せる氣色もない。宇左衞門は、氣づかひながらも、幾分か安堵して、その日はその儘、下つて來た。

それから、彼是十日ばかりの間、修理は、居間にとぢこもつて、毎日ぼんやり考へ事に耽つてゐた。宇左衞門の顏を見ても、口を利かない。いや、唯一度、小雨のふる日に、時鳥の啼く聲を聞いて、「あれは鶯の巣をぬすむさうぢやな。」とつぶやいた事がある。その時でさへ、宇左衞門が、それを潮に、話しかけたが、彼は、又默つて、うす暗い空へ眼をやつてしまつた。その外は、勿

論、唖のやうに口をつぐんで、ぢつと襖障子を見つめてゐる。顔には、何の感情も浮んでゐない。

所が、或夜、十五日の總出仕が二三日の中に迫つた時の事である。修理は突然宇左衛門をよびよせて、人拂ひの上、陰氣な顔をしながら、こんな事を云つた。

「先達、佐渡殿も云はれた通り、この病體では、とても御奉公は覺束ないやうぢや。ついては、身共もいつそ隱居しようかと思ふ。」

宇左衛門は、ためらつた。これが本心なら、元よりこれに越した事はないが、どうして、修理はそれ程容易に、家督を讓る氣になれたのであらう。——

「御尤もでございます。佐渡守様もあのやうに、仰せられますからは、殘念ながら、さうなさるより外はございますまい。が、先一應は、御一門衆へも……」

「いや、いや、隱居の儀なら、林右衛門の成敗とは變つて、相談せずとも、一門衆は同意の筈ぢや。」

修理は、かう云つて、苦々しげに、微笑した。

「さやうでもございますまい。」

宇左衞門は、傷しさうな顏をして、修理を見た。が、相手は、更に耳へ入れる容子もない。

「さて、隱居すれば、出仕しようと思うても出仕する事は出來ぬ。されば、」修理はぢつと宇左衞門の顏を見ながら、一句一句、重みを量るやうに、「その前に、今一度出仕して、西丸の大御所樣(吉宗)へ、御目通りがしたい。どうぢや。十五日に、登城させてはくれまいか。」

宇左衞門は、默つて、眉をひそめた。

「それも、たつた一度ぢや。」

「恐れながら、その儀ばかりは。」

「いかぬか。」

二人は、顏を見合せながら、默つた。しんとした部屋の中には、油を吸ふ燈心の音より外に、聞えるものはない。——宇左衞門は、この暫くの間を、一年のやうに長く感じた。佐渡守へ云ひ切つた手前、それを修理に許しては自分の武士が立たないからである。

「佐渡殿の云はれた事は、承知の上での賴みぢや。」

程を經て、修理が云つた。

「登城を許せば、その方が、一門衆の不興をうける事も、修理は、よう存じてゐるが、思うて見い。修理は一門衆はもとより、家來にも見離された亂心者ぢや。」

さう云ひながら、彼の聲は、次第に感動のふるへを帶びて來た。見れば、眼も涙ぐんでゐる。

「世の嘲りはうける。家督は人の手に渡す。天道の光さへ、修理にはさゝぬかと思ふやうな身の上ぢや。その修理が、今生の望に唯一度、出仕したいと云ふ、それをこばむやうな宇左衞門ではあるまい。宇左衞門なら、この修理を、あはれとこそ思へ、憎いとは思はぬ筈ぢや。修理は、宇左衞門を親とも思ふ。兄弟とも思ふ。いや、親兄弟よりも、猶更なつかしいものと思ふ。廣い世界に、修理がたのみに思ふのは、唯その方一人きりぢや。さればこそ、無理な賴みもする。が、これも決して、一生に二度とは云はぬ。唯、今度一度だけぢや。宇左衞門、どうかこの心を察してくれい。どうかこの無理を許してくれい。これ、この通りぢや。」

彼は、家老の前へ兩手をついて、涙を落しながら、額を疊へつけようとした。宇左衞門は、感動した。

「御手をおあげ下さいまし。御手をおあげ下さいまし。勿體なうございます。」

彼は、修理の手をとつて、無理に疊から離させた。さうして泣いた。すると、泣くに從つて、彼の心には次第に或安心が、溢れるともなく、溢れて來る。――彼は涙の中に、佐渡守の前で云ひ切つた語を、再ありありと思ひ浮べた。

「よろしうございまする。佐渡守樣が何と仰有りませうとも、萬一の場合には、宇左衞門皺腹を仕れば、すむ事でございまする。私一人の粗忽にして、屹度御登城おさせ申しませう。」

これを聞くと、修理の顏は、急に別人の如く喜びにかゞやいた。その變り方には、役者のやうな巧みさがある。が又、役者にないやうな自然さもある。――彼は、突然調子の外れた笑ひ聲を洩らした。

「おゝ、許してくれるか。忝い。忝いぞよ。」

さう云つて、彼は嬉しさうに、左右を顧みた。

「皆のもの、よう聞け。宇左衞門は、登城を許してくれたぞ。」

人拂ひをした居間には、彼と宇左衞門の外に誰もゐない。皆のもの――宇左衞門は、氣づかはしさうに膝を進めて、行燈の火影に恐る恐る、修理の眼の中を窺つた。

三　刃傷

延享四年八月十五日の朝、五つ時過ぎに、修理は、殿中で、何の恩怨もない、肥後國熊本の城主、細川越中守宗教を殺害した。その顚末は、かうである。

細川家は、諸侯の中でも、すぐれて、武備に富んだ大名である。元姫君と云はれた宗教の内室さへ、武藝の道には明かつた。まして宗教の嗜みに、疎な所などのあるべき筈はない。それが、「三齋の末なればこそ細川は、二歳に斬られ、五歳ごとなる。」と諷はれるやうな死を遂げたのは、完く時の運であらう。

さう云へば、細川家には、この凶變の起る前兆が、後になつて考へれば、幾つもあつた。――第一に、その年三月中旬、品川伊佐羅子の上屋敷が、火事で燒けた。これは、邸内に妙見大菩薩があつて、その神前の水吹石と云ふ石が、火災のある毎に水を吹くので、未嘗、燒けたと云ふ

事のない屋敷である。第二に、五月上旬、門へ打つ守り札を、魚籃の愛染院から奉つたのを見ると、御武運長久御息災とある可き所に災の字が書いてない。これは、上野宿坊の院代へ問ひ合せた上、早速愛染院に書き直させた。第三に、八月上旬、屋敷の廣間のあたりから、夜な夜な大きな怪火が出て、芝の方へ飛んで行つたと云ふ。

その外、八月十四日の晝には、天文に通じてゐる家來の才木茂右衛門と云ふ男が目付へ來て、「明十五日は、殿の御身に大變があるかも知れませぬ。昨夜天文を見ますと、將星が落ちさうになつて居ります。どうか御愼み第一に、御他出なぞなさいませんやう。」と、かう云つた。目付は、元來餘り天文なぞに信を措いてゐない。が、日頃この男の豫言は、主人が尊敬してゐるので、取あへず近習の者に話して、その旨を越中守の耳へ入れた。そこで、十五日に催す能狂言とか、登城の歸りに客に行くとか云ふ事は、見合せる事になつたが、御奉公の一つと云ふ廉で、出仕だけは止めにならなかつたらしい。

それが、翌日になると、又不吉な前兆が、加はつた。――十五日には、何時も越中守自身、麻上下に著換へてから、八幡大菩薩に、神酒を備へるのが慣例になつてゐる。所が、その日は、小

姓の手から神酒を入れた瓶子を二つ、三寶へのせた儘受取つて、それを神前へ備へようとすると、どうした拍子か瓶子は二つとも倒れて、神酒が外へこぼれてしまつた。その時は、流石に一同、思はず顔色を變へたと云ふ事である。

翌日、越中守は登城すると、御坊主田代祐悦が供をして、先、大廣間へ通つた。が、やがて、大便を催したので、今度は御坊主黑木閑齋をつれて、湯呑み所際の厠へはいつて、用を足した。さて、厠を出て、うすぐらい手水所で手を洗つてゐると突然後から、誰とも知れず、聲をかけて、斬りつけたものがある。驚いて、振り返ると、その拍子に又二の太刀が、すかさず眉間へ閃いた。その爲に血が眼へはいつて、越中守は、相手の顔も見定める事が出來ない。相手は、そこへつけこんで、たたみかけ、たたみかけ、幾太刀となく浴せかけた。さうして、越中守がよろめきながら、とうとう、四の間の緣に仆れてしまふと、脇差をそこへ捨てたなり、慌てゝ何處か見えなくなつてしまつた。

所が、伴をしてゐた黑木閑齋が、不意の大變に狼狽して、大廣間の方へ逃げて行つたなり、これも何處かへ隱れてしまつたので、誰もこの刃傷を知るものがない。それを、暫してから、漸く本間定五郎と云ふ小拾人が、御番所から下部屋へ先る途中で發見した。そこで、すぐに御徒目付へ知らせる。御徒目付からは、御徒組頭久下善兵衞、御徒目付土田半右衞門、菰田仁右衞門、などが駈けつける。――殿中では忽、蜂の巢を破つたやうな騷動が出來した。

それから、一同集つて、手負ひを抱きあげて見ると、顏も體も血まみれで誰とも更に見分ける事が出來ない。が、耳へ口をつけて呼ぶと、漸く微な聲で、「細川越中」と答へた。續いて、「相手はどなたでござる」と尋ねたが、「上下を著た男」と云ふ答へがあつただけで、その後は、もうこちらの聲も通じないらしい。創は「首構七寸程、左肩六七寸ばかり、右肩五寸ばかり、左右手四五ケ所、鼻上耳脇また頭に疵二三ケ所、背中右の脇腹まで筋違に一尺五寸ばかり」である。そこで、當番御目付土屋長太郎、橋本阿波守は勿論、大目付河野豐前守も立ち合つて、一まづ手負ひを、焚火の間へ舁ぎこんだ。さうしてそのまはりを小屛風で圍んで、五人の御坊主を附き添はせた上に、大廣間詰の諸大名が、代る代る來て介抱した。中でも松平兵部少輔は、此處へ舁ぎこむ途中

から、最も親切に劬つたので、わき眼にも、情誼の篤さが忍ばれたさうである。

その間に、一方では老中若年寄衆へこの急變を屆けた上で、萬一の爲に、玄關先から大手まで、嚴しく門々を打たせてしまつた。これを見た大手先の大小名の家來は、驚破、殿中に椿事があつたと云ふので、立ち騷ぐ事が一通りでない。何度目付衆が出て、制しても、すぐ又、海嘯のやうに、押し返して來る。そこへ、殿中の混雜も亦、益々甚しくなり出した。これは御目付土屋長太郎が、御徒目付、火の番などを召し連れて、番所々々から勝手まで、根氣よく刃傷の相手を探して歩いたが、どうしても、その「上下を著た男」を見つける事が出來なかつたからである。

すると、意外にも、相手は、これらの人々の眼にはかゝらないで、反て寶井宗賀と云ふ御坊主の爲に、發見された。――宗賀は大膽な男で、これより先、一同のさがさないやうな場所々々を、獨りでしらべて歩いてゐた。それがふと焚火の間の近くの厠の中を見ると、鬢の毛をかき亂した男が一人、影のやうに蹲つてゐる。うす暗いので、はつきりわからないが、どうやら鼻紙嚢から鋏を出して、そのかき亂した鬢の毛を鋏んでゝもゐるらしい。そこで宗賀は、側へよつて聲をかけた。

「どなたでござる。」
「これは、人を殺したで、髪を切つてゐるものでござる。」
男は、しはがれた聲で、から答へた。
もう疑ふ所はない。宗賀は、すぐに人を呼んで、この男を厠の中から、ひきずり出した。さうして、とりあへず、それを御徒目付の手に渡した。
御徒目付は又、それを蘇鐵の間へつれて行つて、大目付始め御目付衆立ち合ひの上で、刃傷の仔細を問ひ質した。が、男は、物々しい殿中の騷ぎを、茫然と眺めるばかりで、更に答へらしい答へをしない。偶々口を開けば、唯時鳥の事を云ふ。さうして、そのあひ間には、血に染まつた手で、何度となく、鬢の毛をかきむしつた。——修理は既に、發狂してゐたのである。

細川越中守は、焚火の間で、息をひきとつた。が、大御所吉宗の內意を受けて、手負ひと披露した儘駕籠で中の口から、平川口へ出て引きとらせた。公に死去の屆が出たのは、二十一日の事

である。

修理は、越中守が引きとつた後で、すぐに水野監物に預けられた。これも中の口から、平川口へ、青網をかけた駕籠で出たのである。駕籠のまはりは水野家の足輕が五十人、一樣に新しい柿の帷子を著、新しい白の股引をはいて、新しい棒をつきながら、警固した。――この行列は、監物の日頃不意に備へる手配が、行きとどいてゐた證據として、當時のほめ物になつたさうである。

それから七日目の二十二日に、大目付石河土佐守が、上使に立つた。上使の趣は、「其方儀亂心したとは申しながら、細川越中守手疵養生不相叶致死去候に付、水野監物宅にて切腹被申付者也」と云ふのである。

修理は、上使の前で、短刀を法の如くさし出されたが、茫然と手を膝の上に重ねた儘、とらうとする氣色もない。そこで、介錯に立つた水野の家來吉田彌三左衞門が、止むを得ず後からその首をうち落した。うち落したと云つても、喉の皮一重はのこつてゐる。彌三左衞門は、その首を手にとつて、下から檢使の役人に見せた。顴骨の高い、皮膚の黃ばんだ、いたいたしい首である。眼は、勿論つぶつてゐない。

檢使は、これを見ると、血のにほひを嗅ぎながら、滿足さうに、「見事」と聲をかけた。

同日、田中宇左衛門は、板倉式部の屋敷で、縛り首に處せられた。これは「修理病氣に付、禁足申付候樣にと屹度、板倉佐渡守兼ねて申渡置候處、自身の計らひにて登城させ候故、かかる凶事出來、七千石斷絕に及び候段、言語道斷の不屆者」といふ罪狀である。

板倉周防守、同式部、同佐渡守、酒井左衛門尉、松平右近將監等の一族緣者が、遠慮を仰せつかつたのは云ふまでもない。その外、越中守を見捨てゝ逃げた黑木閑齋は、扶持を召上げられた上、追放になつた。

修理の刄傷は、恐らく過失であらう。細川家の九曜の星と、板倉家の九曜の巴と衣類の紋所が似てゐる爲に、修理は、佐渡守を刺さうとして、誤つて越中守を害したのである。以前、毛利主

水正を、水野隼人正が斬つたのも、やはりこの人違ひであつた。殊に、手水所のやうな、うす暗い所では、かう云ふ間違ひも、起りやすい。――これが當時の定評であつた。

が、板倉佐渡守だけは、この定評をよろこばない。彼は、この話が出ると、何時も苦々しげに、かう云つた。

「佐渡は、修理に刃傷されるやうな覺えは、毛頭ない。まして、あの亂心者のした事ぢや。大方、何と云ふ事もなく、肥後侯を斬つたのであらう。人違ひなどゝは、迷惑至極な臆測ぢや。その證據には、大目付の前へ出ても、修理は、時鳥がどうやら云うてゐたさうではないか。されば、時鳥ぢやと思つて、斬つたのかも知れぬ。」

（大正六年二月）

貉

書紀によると、日本では、推古天皇の三十五年春二月、陸奥で始めて、貉が人に化けた。尤もこれは、一本によると、化レ人でなくて、比レ人とあるが、兩方ともその後に歌之と書いてあるから、人に化けたにしろ、人に比つたにしろ、人並に唄を歌つた事だけは事實らしい。

それより以前にも、垂仁紀を見ると、八十七年、丹波の國の甕襲と云ふ人の犬が、貉を嚙み殺したら、腹の中に八尺瓊曲玉があつたと書いてある。この曲玉は馬琴が、八犬傳の中で、八百比丘尼妙椿を出すのに借用した。が、垂仁朝の貉は、唯肚裡に明珠を藏したゞけで、後世の貉の如く變化自在を極めた譯ではない。すると、貉の化けたのは、やはり推古天皇の三十五年春二月が始めなのであらう。

勿論貉は、神武東征の昔から、日本の山野に棲んでゐた。さうして、それが、紀元千二百八十八年になつて、始めて人を化かすやうになつた。――かう云ふと、一見甚唐突の觀があるやう

に思はれるかも知れない。が、それは恐らく、こんな事から始まつたのであらう。――

その頃、陸奥の汐汲みの娘が、同じ村の汐焼きの男と戀をした。が、女には母親が一人ついてゐる。その目を忍んで、夜な夜な逢はうと云ふのだから、二人とも一通りな心づかひではない。男は毎晩、磯山を越えて、娘の家の近くまで通つて來る。すると娘も、刻限を見計らつて、そつと家をぬけ出して來る。が、娘の方は、母親の手前をかねるので、やゝもすると、遲れやすい。或時は、月の落ちかゝる頃になつて、やつと來た。或時は、遠近の一番鷄が啼く頃になつても、まだ來ない。

そんな事が、何度か續いた或夜の事である。男は、屛風のやうな岩のかげに蹲りながら、待つてゐる間のさびしさをまぎらせるつもりで、高らかに唄を歌つた。沸き返る浪の音に消されるなと、いらだたしい思ひを鹽からい喉にあつめて、一生懸命に歌つたのである。

それを聞いた母親は、傍にねてゐる娘に、あの聲は何ぢやと云つた。始めは寢たふりをしてゐた娘も、二度三度と問ひかけられると、答へない譯には行かない。人の聲ではないさうな。――狼狽した餘り、娘はかう誤魔化した。

そこで、人でなうて何が歌ふと、母親が問ひかへした。それに、貉かも知れぬと答へたのは、全く娘の機轉である。――戀は昔から、何度となく女にかう云ふ機轉を教へた。

夜が明けると、母親は、この唄の聲を聞いた話を近くにゐる蓆織りの媼に話した。媼も亦この唄の聲を耳にした一人である。貉が唄を歌ひますかの――かう云ひながらも、媼は又これを、蘆刈りの男に話した。

話が傳はり傳はつて、その村へ來てゐた、乞食坊主の耳へはいつた時、坊主は、貉の唄を歌ふ理由を、仔細らしく説明した。――佛説に轉生輪廻と云ふ事がある。だから貉の魂も、もとは人間の魂だつたかも知れない。もしさうだとすれば、人間のする事は、貉もする。月夜に歌を唄ふ位な事は、別に不思議でない。……

それ以來、この村では、貉の唄を聞いたと云ふ者が、何人も出るやうになつた。さうして、しまひにはその貉を見たと云ふ者さへ、現れて來た。これは、鷗の卵をさがしに行つた男が、或夜岸傳ひに歸つて來ると、未だ殘つてゐる雪の明りで、磯山の陰に貉が一匹唄を歌ひながら、のそのそうろついてゐるのを目のあたりに見たと云ふのである。

既に、姿さへ見えた。それに次いで、殆一村の老若男女が、悉その聲を聞いたのは、寧自然の道理である。貉の唄は、時としては、山から聞えた。時としては、海から聞えた。さうして又更に時としては、その山と海との間に散在する、苫屋の屋根の上からさへ聞えた。そればかりではない。最後には汐汲みの娘自身さへ、或夜突然この唄の聲に驚かされた。——

娘は、勿論これを、男の唄の聲だと思つた。寢息を窺ふと、母親はよく寐入つてゐるらしい。そこで、そつと床をぬけ出して、入口の戸を細目にあけながら、外の容子を覗いて見た。が、外はうすい月と浪の音ばかりで、男の姿はどこにもない。娘は暫くあたりを見廻してゐたが、突然つめたい春の夜風にでも吹かれたやうに、頰をおさへながら、立ちすくんでしまつた。戸の前の砂の上に、點々として貉の足跡のついてゐるのが、その時朧げに見えたからであらう。……

この話は、忽ち幾百里の山河を隔てた、京畿の地まで喧傳された。それから山城の貉が化ける。近江の貉が化ける。遂には同屬の狸までも化け始めて、徳川時代になると、佐渡の團三郎と云ふ、貉とも狸ともつかない先生が出て、海の向うにゐる越前の國の人をさへ、化かすやうな事になつた。

化かすやうになつたのではない。化かすと信ぜられるやうになつたのである――かう諸君は、云ふかも知れない。しかし、化かすと云ふ事と、化かすと信ぜられると云ふ事との間に、果してどれ程の相違があるのであらう。

獨り貉ばかりではない。我々にとつて、すべてあると云ふ事は、畢竟するに唯あると信ずる事にすぎないではないか。

イエエツは、「ケルトの薄明り」の中で、ジル湖上の子供たちが、青と白との衣を着たプロテスタント派の少女を、昔ながらの聖母マリアだと信じて、疑はなかつた話を書いてゐる。ひとしく人の心の中に生きてゐると云ふ事から云へば、湖上の聖母は、山澤の貉と何の異る所もない。

我々は、我々の祖先が、貉の人を化かす事を信じた如く、我々の内部に生きるものを信じようではないか。さうして、その信ずるもの〻命ずるま〻に我々の生き方を生きようではないか。

貉を輕蔑すべからざる所以である。

（大正六年三月）

世之助の話

上

友だち　處でね、一つ承りたい事があるんだが。
世之助　何だい。馬鹿に改まつて。
友だち　それがさ。今日はふだんとちがつて、君が近近に伊豆の何とか云ふ港から船を出して、女護ケ島へ渡らうと云ふ、その名殘りの酒宴だらう。
世之助　さうさ。
友だち　だから、こんな事を云ひ出すのは、何だか一座の興を殺ぐやうな氣がして、太夫の手前も、聊恐縮なんだがね。
世之助　そんならよせばいいぢやないか。
友だち　處が、よせないね。よせる位なら、始から云ひ出しはしない。

世之助　ぢや話すさ。

友だち　それがさ、さう中々簡單には行かない譯がある。

世之助　何故？

友だち　訊く方も、訊かれる方も、あんまり難有い事ぢやないからね。尤も君が愈〻と云へば、私も度胸を据ゑて、承る事にするが。

世之助　何だい、一體。

友だち　まあさ、君は何だと思ふ。

世之助　ぢれつたい男だな。何だつて云へば。

友だち　いやさう開き直られると、反つて云ひ出しにくいがね。つまり何さ。――この頃西鶴が書いた本で見ると、君は七つの時から女を知つて……、

世之助　おい、おい、まさか意見をする氣ぢやあるまいね。

友だち　大丈夫、叔父さんがまだ若すぎる。――そこで、六十歲の今日まで、三千七百四十二人の女に戯れ……

世之助　こいつはちと手きびしいな。

友だち　まあさ、三千七百四十二人の女に戯れ、七百二十五人の少人を弄んだと云ふ事だが、あれは君、ほんたうかい。

世之助　ほんたうだよ。ほんたうだが、精々お手柔かに願ひたいな。

友だち　それが、どうも私には少し眞にうけられないんだね。いくら何だつて君、三千七百四十二人は多すぎるよ。

世之助　成程ね。

友だち　いくら君を尊敬した上でもだよ。

世之助　ぢや勝手に割引して置くさ。――太夫が笑つてゐるぜ。

友だち　いくら太夫が笑つてゐても、この儘にはすまされない。白狀すればよし、さもなければ、――

世之助　盛りつぶすか。そいつは御免を蒙らう。何もそんなにむづかしい事ぢやない。唯、私の算盤が、君のと少しちがつてゐるだけなんだ。

友だち　ははあ、すると一桁狂つたと云ふ次第かい。
世之助　いいえ。
友だち　ぢや――おい、どつちがぢれつたい男だつけ。
世之助　だが君も亦、つまらない事を氣にしたもんだ。
友だち　氣にするつて譯ぢやないが、私だつて男だらうぢやないか。何割引くか判然しない中は首を切られても、引きさがらない。
世之助　困つた男だな。それならお名殘りに一つ、私の算盤のとり方を話さうか。――おい、加賀節はしばらく見合せだ。その祐善の繪のある扇をこつちへよこしてくれ。それから、誰か蠟燭の心を切つて貰ひたいな。
友だち　いやに大袈裟だぜ。――かう靜になつて見ると、何だか櫻もさむいやうだ。
世之助　ぢや、始めるがね。勿論唯一例を話すだけなんだから、どうかそのつもりに願ひたい。

中

もう彼是三十年ばかり昔の事だ。私が始めて、江戸へ下つた時に、たしか吉原のかへりだつたと思ふが、太鼓を二人ばかりつれて、角田川の渡しを渡つた事がある。どこの渡しだつたか、それも今では覺えてゐない。どこへ行くつもりだつたか、それももう忘れてしまつた。が、その時の容子だけは、かう云ふ中にも、朧げながら眼の前へ浮んで來る。……

　何でも花曇りの午すぎで、川すぢ一帶、どこを見ても、煮え切らない、退屈な景色だつた。水も生ぬるさうに光つてゐれば、向う河岸の家並も、うつらうつら夢を見てゐるやうに思はれる。後をふり返ると、土手の松にまじつて、半開の櫻が、べつたり泥繪具をなすつてゐた。その又やけに白いのが、何時になく重くるしい。その上少し時候はづれの暖さで、體さへ動かせば、すぐじつとりと汗がにじむ。勿論さう云ふ陽氣だから、水の上にも、吐息程の風さへない。

　乘合は三人で、一人は國姓爺の人形芝居からぬけ出して來たやうな、耳の垢取り、一人は廿七八の、眉をおとした町家の女房、もう一人はその伴らしい、洟をたらした丁稚だつた。それが互に膝をつき合せて凡まん中どころに蹲つたが、何分舟が少さいので、窮屈な事夥しい。そこへ又人が多すぎたせゐか、ともすれば、舷が水にひたりさうになる。が、船頭は一向平氣なもので、

無愛想な老爺の、竹の子笠をかぶつたのが、器用に右左へ棹を使ふ。おまけにその棹の雫が、時時乗合の袖にかかるが、船頭はこれにも頓着する容子がない。――いや、平氣なのは、まだ外にもある。それは例の甘輝字は耳の垢とりで、怪しげな唐裝束に鳥の羽毛のついた帽子をかぶりながら、言上げの幟を肩に、獅子ケ城の櫓へ上つたと云ふ形で、舳の先へ陣どつたのが、船の出た時から、つけ髯をしごいては、しきりに鼻唄をうたつてゐる。眉のうすい、うけ脣の、高慢な顏を、仔細らしくしやくりながら、「さん谷土手下にぬしのない子がすてゝんある」と、そそるのだから、これには私ばかりか、太鼓たちも聊たじろいだらしい。

「唐人の「すててん節」は、はじめてでげす。」

一人が、扇をぱちつかせながら、情ない聲を出して、かう云つた。すると、それが聞えたのだらう。私と向ひあつてゐた女房が、ちよいと耳の垢とりの方を見ると、すぐその眼を私にかへして、鐵漿をつけた齒を見せながら、愛想よく微笑した。黑い、つやつやした齒が、ちらりと脣を洩れたかと思ふと、右の頰にあさく靨が出來る。脣には紅がぬつてあるらしい。――それを見ると、私は妙にへどもどして、惡い事でも見つけられた時のやうな、一種の羞恥に襲はれてしま

つた。

が、かう云つたばかりでは、唐突すぎる。曰くは、この舟へ乗つたそもそもからあつたのだから。――と云ふのは、最初、土手を下りて、あぶなつかしい杭を力に、やつと舟へ乗つたと思ふと、足のふみどころが悪かつたので、舷が水をあほると同時に、大きく一つぐらりとゆれる。その拍子に、伽羅の油のにほひが、ぷんと私の鼻を打つた。舟の中に、女がゐる――その位な事は、土手の上から川を見下した時に、知つてゐた。が、唯女がゐると云ふだけで、（廓のかへりではあるし）それが格別痛切にさう思つてゐた譯でも何でもない。だから、伽羅の油のにほひを嗅ぐと、私は、まづ意外な感じがした。さうしてその意外の感じの後には、すぐに一種の刺戟を感じた。

唯にほひだからと云つても、決して馬鹿にしたものではない。少くとも私にとつては、大抵な事が妙に嗅覚と關係を持つてゐる。早い話が子供の時の心もちだ。手習に行くと、よくいたづらつ子にいぢめられる。それも、師匠に云ひつければ、後の祟が恐ろしい。そこで、涙をのみこんで、一生懸命に又、草紙をよごしに行く。さう云ふ時のさびしい、たよりのない心もちは、成人になるにつれて、忘れてしまふ。或は思ひ出さうとしても、容易に思ひ出し悪い。それが腐つた

灰墨のにほひを嗅ぐと、何時でも私には、そんな心もちがかへつて來る。さうして、子供の時の喜びと悲しみとが、もう一度私を甘やかしてくれる。――が、これは餘事だ。私は唯、伽羅の油のにほひが、急にこの女房の方へ、私の注意を持つて行つた事さへ話せばよい。

さて、氣がついて、相手を見ると、黒羽二重の小袖に裾取の紅うらをやさしく出した、小肥りな女だつた。が、唐織寄縞の帶を前でむすんだ所と云ひ、投島田に平元結をかけて對のさし櫛をした所と云ひ、素人とは思はれない位な、なまめかしさだ。顏はあの西鶴の、「當世の顏はすこしまろく、色はうすはな櫻にて」と云ふやつだが、「面道具の四つ不足なく揃ひて」はちと覺束ない。白粉にかくれてはゐるが、雀斑も少々ある。口もとや鼻つきも、稍下品だつた。が、幸ひ生際がいいので、さう云ふ難も、大して目に立たない。――私はまだ殘つてゐた昨夜の醉が、急にさめたやうな心もちがして、その女の側へ腰を下した。その下した時に又、曰くがある。

曰くといふのは、私の膝が、先方の膝にさはつたのだ。私は卵色縮緬の小袖を着てゐる。下は多分肌着に、隱し緋無垢だつたらう。それでも、私には、向ふの膝がわかつた。着物を着た膝ではない。體の膝がわかつたのだ。柔な圓みの上に、かすかなくぼみが、うすく膩をためてゐる

——その膝がわかつたのだ。

私は、膝と膝とを合せたまま、太鼓を相手に氣のない冗談を云ひながら、何かを待設けるやうな心もちで、ぢつと身動きもしないでゐた。勿論その間も、伽羅の油のにほひと、京おしろいのにほひとは、絶えず私の鼻を襲つて來る。そこへ、少したつ中には、今度は向ふの體溫が、こちらの膝へ傳はつて來た。それを感じた時のむづ痒いやうな一種の戰慄は、到底形容する語がない。私は唯、それを私自身の動作に飜譯する事が出來るだけだ。——私は、眼を輕くつぶりながら、鼻の穴を大きくして、深くゆるやかな呼吸をした。それで君に、すべてを察して貰ふより外はない。

が、さう云ふ感覺的な心もちは、すぐにもう少し智的な欲望をよび起した。先方も私と同じ心もちでゐるだらうか。同じ感覺的な快さを感じてゐるだらうか。——それはかう云ふ疑問だつた。そこで私は、顏をあげて、わざと、平氣を裝ひながら、ぢつと向ふの顏を見た。が、そのつけやきばの平氣は、すぐに裏切られるやうな運命を持つてゐた。何故かと云ふと、相手の女房は、その稍汗ばんだ、顏の筋肉のゆるみ方と、吸ふものをさがしてゐるやうな、かすかな脣のふるへ方

とで、私の疑問を明かに肯定してくれたから、さうして、その上に、私自身の心もちを知つてゐて、その知つてゐる事に、或満足を感じてゐる事さへも、わからせてくれたから――私は聊か恐縮しながら、てれがくしに太鼓の方をふりむいた。

「唐人の「すててん節」は始てでげす。」

太鼓がかう云つたのは、丁度その時だつた。耳の垢とりの鼻唄を笑つた女房と、私が思はず眼を見合せて、一種の羞恥を感じたのは、偶然でない。が、その羞恥は、當時、女房に對して感じた羞恥のやうな氣がしてゐたが、後になつて考へて見ると、實は女房以外の人間に對して感じた羞恥だつた。いや、さう云つては、まだ語弊がある。人間がさう云ふ場合、一切の他人（この場合なら、女房も入れて）に對して感じる羞恥だつた。これは當時の私が、さう云ふ羞恥を感じながら、女房に對しては、次第により大膽になれたのも、わかりはしないだらうか。

私は全身のあらゆる感覺を出來る丈鋭くしながら、香を品する人のやうな態度で、相手の女房を「鑑賞した。」これは私が殆すべての女に對してする事だから、大方君にも以前に話した事があるだらう。――私は稍汗ばんだ女の顔の皮膚と、その皮膚の放散するにほひとを味つた。それか

ら、感覺と感情との微妙な交錯に反應する、みづみづしい眼の使ひを味つた。それから、血色のいゝ頬の上で、かすかに動いてゐる睫毛の影を味つた。それから、膝へのせた手の、うるほひのある、しなやかな、指のくみ方を味つた。それから、膝と腰とにわたる、むつちりした、彈力のある、ゆたかな肉づきを味つた。それから——かう話して行けば、際限がないから、やめにするが、兎に角私はその女房の體を、あらゆる點から味つた。敢て、あらゆる點と云つても、差支へはない。私は感官の力の足りない所を、想像の働きで補つた。或は、その上に又、推理の裏打さへも施した。私の視覺、聽覺、嗅覺、觸覺、溫覺、壓覺、——どれ一つとして、この女房が滿足させてくれなかつたものはない。いや實に、それ以上のものにさへ滿足を與へてくれた。……

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………

「忘れものをおしでないよ。」

それから、かう云ふ聲を聞いた。さうしてそれと同時に、今まで見えなかつた、女の細い喉が見えた。その蓮葉な、鼻にかゝつた聲と、白粉の少しむらになつた、肉のうすい喉とが、私に幾

分の刺戟を與へるのは云ふまでもない。が、それよりも寧、私を動かしたのは、丁稚の方へふりむいた時の動作が、私の膝へ傳へてくれる、相手の膝の動き方であつた。私は前に、向ふの膝がわかつたと云つた。が、今はそれだけではない。向ふの膝のすべてが――それをつくつてゐる筋肉と關節とが、九年母の實と核とを舌の先にさぐるやうに、一つ〳〵私には感じられた。黑羽二重の小袖は、私にとつてないにひとしかつたと云つても、過言ではない。これは、すぐ次に起つた最後の曰くを知つたなら、君も認めない譯には行かないだらう。

やがて、舟は棧橋についた。舳がとんと杭にあたると、耳の垢とりは、一番に向ふへとび上る。その途端に私は、わざと舟のあほりを食つたやうに裝つて、（乘る時にも、さうだつたので、これは至極自然に見えるだらうと思つてゐた。）よろけながら、手を舷の上にある女房の手にかけた。さうして、太鼓に腰を支へられながら「これは失禮」と聲をかけた。君はその時、私がどんな心もちだつたと思ふ？　私は、この接觸から來る可也強い刺戟を豫想してゐた。恐らく私の今までの經驗は、最後の仕上げを受ける事だらうとさへも思つてゐた。が、この豫想は見事に、外れてしまつたのではないか。私は勿論、滑な、寧つめたい皮膚の手ざはりと、柔かい、しかも力のある

筋肉の抵抗とを感じた。しかし、それらは、結局今までの經驗の反復にすぎない。同じ刺戟は、回數と共に力を減じて來る。ましてこの時は豫想が大きい。私は索漠とした心もちで、靜に私の手をはなさなければならなかつた。もし私の今までの經驗が、完全にこの女房の體を鑑賞したのでなかつたなら、かう云ふ失望はどうして、說明する事が出來るだらう。私はこの女を、感覺的に知りつくした。——どうしても、かう考へるより外はない。

　これは、またかう云ふ事から考へて見ても、わかるだらう。それは私が昨日なじんだ吉原の太夫と、今の女房とを、私の心もちの上でくらべて見るとする。成程一人は一夜中一しよに語りあかした。一人は僅の時間だけ、一つ舟に乘つてゐたのに過ぎない。が、その差別は、膚下一寸でなくなつてしまふ。どちらが私に、よく多く滿足を與へたか、それは殆どわからない。從つて、私が持つて居る愛惜も(もしさう云ふものがあるとすれば)全く同じやうなものである。私は右の耳に江戶淸搔きの音を聞き、左の耳に角田川の水の音を聞いてゐるやうな心もちがした。さうしてそれが兩方とも、同じ調子を出してゐるやうな心もちがした。

　これは、私には兎も角も發見だつた。が、總じて、發見位、人間をさみしくするものはない。

私は花曇りの下を、丁稚を伴につれて、その眉のあとの青い女房が、「ぬきあし中びねりのあるきかた」で、耳の垢とりの後から、棧橋を渡るのを見た時には、何とも云へずさびしかつた。勿論惚れた譯でも何でもない。唯向うでも大體私と同じやうな心もちでゐたと云ふ事は、私のさはつた手を動かさずにゐたのでも、わかるだらう。……なに吉原の太夫？ 太夫はまるでそれと反對な、小さい、人形のやうな、女だつた。

下

世之助 まづざつと、こんなものだつた。そこで、それ以來、その女のやうなものを關係した中へ勘定したから、合せて男女四千四百六十七人に戯れた事になると云ふ次第さ。

友だち 成程、さう聞けば尤もらしい。だが……

世之助 だが、何だい。

友だち だが、物騷な話ぢやないか。さうなると、女房や娘はうつかり外へも出されない譯だからね。

世之助　物騒でも、それがほんたうなのだから、仕方がない。

友だち　して見ると、今にお上から、男女同席御法度の御布令でも出かねなからう。

世之助　この頃のやうぢや、その中に出るかも知れないね。が、出る時分には、私はもう女護ケ島へ行つてゐる。

友だち　羨せるぜ。

世之助　なに女護ケ島へ行つたつて、ここにゐたつて、大してかはりはしない。

友だち　今の算盤のとり方にすれば、さうだらう。

世之助　どうせ何でも泡沫夢幻だからね。さあ改めて、加賀節でも承らう。

（大正六年四月）

偷盗

「お婆、猪熊のお婆。」

一

朱雀綾小路の辻で、ぢみな紺の水干に揉烏帽子をかけた、二十ばかりの、醜い、隻眼の侍が、平骨の扇を上げて、通りかかりの老婆を呼びとめた。──

むし暑く夏霞のたなびいた空が、息をひそめたやうに、家々の上を掩ひかぶさつた、七月の或日ざかりである。男の足をとめた辻には、枝の疎な、ひよろ長い葉柳が一本、この頃流行る疫病にでも罹つたかと思ふ姿で、形ばかりの影を地の上に落してゐるが、此處にさへ、その日に乾いた葉を動かさうと云ふ風はない。まして、日の光に照りつけられた大路には、あまりの暑さにめげたせゐか、人通りも今は一しきりとだえて、唯さつき通つた牛車の轍が長々とうねつてゐるばかり、その車の輪にひかれた、小さな蛇も、切れ口の肉を青ませながら、始めは尾をぴくぴくや

つてゐたが、何時か脂ぎつた腹を上へ向けて、もう鱗一つ動かさないやうになつてしまつた。どこもかしこも、炎天の埃を浴びたこの町の辻で、僅に一滴の濕りを點じたものがあるとすれば、それはこの蛇の切れ口から出た、腥い腐れ水ばかりであらう。

「お婆。」

「……」

老婆は、慌しくふり返つた。見ると、年は六十ばかりであらう。垢じみた檜皮色の帷子に、黄ばんだ髪の毛を垂らして、尻の切れた藁草履をひきずりながら、長い蛙股の杖をついた、眼の圓い、口の大きな、どこか蟇の顏を思はせる、卑しげな女である。

「おや、太郎さんか。」

日の光にむせるやうな聲で、かう云ふと、老婆は、杖をひきずりながら、二足三足後へ歸つて、先づ口を切る前に、上脣をべろりと嘗めて見せた。

「何か用でもおありか。」

「いや、別に用ぢやない。」

隻眼は、うすい瘡痕のある顏に、强ひて作つたらしい微笑をうかべながら、何處か無理のある聲で、快活にかう云つた。

「唯、沙金がこの頃は、どこにゐるかと思つてな。」

「用のあるは、何時も娘ばかりさね。鳶が鷹を生んだおかげには。」

猪熊の婆は、厭味らしく、脣を反らせながら、にやついた。

「用と云ふ程の用ぢやないが、今夜の手筈も、まだ聞かないからな。」

「なに、手筈に變りがあるものかね。集るのは羅生門、刻限は亥の上刻――みんな昔から、きまつてゐる通りさ。」

老婆は、かう云つて、狡猾さうに、ぢろぢろ、左右を見まはしたが、人通りのないのに安心したのか又、厚い脣をちよいと嘗めて、

「家内の容子は、大抵娘が探つて來たさうだよ。それも、侍たちの中には、手の利く奴がゐるまいと云ふ事さ。詳しい話は、今夜娘がするだらうがね。」

これを聞くと、太郎と云はれた男は、日をよけた黃紙の扇の下で、嘲るやうに、口を歪めた。

「ぢや沙金は又、誰かあすこの侍とでも、懇意になつたのだな。」

「なに、やつぱり販婦か何かになつて、行つたらしいよ。」

「何になつて行つたつて、あいつの事だ。當てになるものか。」

「お前さんは、不相變疑り深いね。だから、娘に嫌はれるのさ。嫉妬にも、程があるよ。」

老婆は、鼻の先で笑ひながら、杖を上げて、路ばたの蛇の死骸を突ついた。何時の間にかたかつてゐた青蠅が、むらむらと立つたかと思ふと、又元のやうに止まつてしまふ。

「そんな事ぢや、しつかりしないと、次郎さんに取られてしまふよ。取られてもいいが、どうせさうなれば、唯ぢやすまないからね。お爺さんでさへ、それぢや時々、眼の色を變へるんだから、お前さんなら猶さらだらうぢやないか。」

「わかつてゐるわな。」

相手は、顏をしかめながら、忌々しさうに、柳の根へ唾を吐いた。

「それが中々、わからないんだよ。今でこそお前さんだつて、さうやつて、すましてゐるが、娘とお爺さんとの仲をかぎつけた時には、まるで、氣がふれたやうだつたぢやないか。お爺さんだ

つて、さうさ、あれで、もう少し氣が强からうものなら、すぐにお前さんと刃物三昧だわね。」

「そりやもう一年前の事だ。」

「何年前でも、同じ事だよ。一度した事は、三度するつて云ふぢやないか。三度だけなら、まだいい方さ。私なんぞは、この年まで、同じ莫迦を、何度したか、わかりやしないよ。」

かう云つて、老婆は、疎な齒を出して、笑つた。

「冗談ぢやない。――それより、今夜の相手は、曲りなりにも、藤判官だ、手くばりはもうついたのか。」

太郎は、日にやけた顔に、いら立たしい色を浮べながら、話頭を轉じた。折から、雲の峯が一つ、太陽の道に當つたのであらう。あたりが翛然と、暗くなつた。その中に、唯、蛇の死骸だけが、前よりも一層腹の脂を、ぎらつかせてゐるのが見える。

「何の、藤判官だと云つて、高が青侍の四人や五人、私だつて、昔とつた杵柄さ。」

「ふん、お婆は、えらい勢だな。さうして、こつちの人數は？」

「何時もの通り、男が二十三人。それに私と娘だけさ。阿濃は、あの體だから、朱雀門に待つて

ゐて、貰ふ事にしようよ。」

「さう云へば、阿濃も、彼是臨月だつたな。」

太郎は又、嘲るやうに口を歪めた。それと殆同時に、雲の影が消えて、往來は忽、元のやうに、眼が痛む程、明くなる。——猪熊の婆も、腰を反らせて、一しきり東鴉のやうな笑聲を立てた。

「あの阿呆をね。誰がまあ手をつけたんだか——尤も、阿濃は次郎さんに、執心だつたが、まさかあの人でもなからうよ。」

「親の詮議は兎も角、あの體ぢや何かにつけて不便だらう。」

「それや、どうにでも仕方はあるのだけれど、あれが不承知なのだから、困るわね。おかげで、仲間の者へ沙汰をするのも、私一人と云ふ始末さ。眞木島の十郎、關山の平六、高市の多襄丸と、まだこれから、三軒まはらなくつちや——おや、さう云へば、油を賣つてゐる中に、もう彼是未になる。御前さんも、もう私のおしやべりには、聞き飽きたらう。」

蛙股の杖は、かう云ふ語と共に動いた。

「が、沙金は？」

この時、太郎の脣は、目に見えぬ程、かすかに痙攣つた。が、老婆は、これに氣がつかなかつたらしい。

「大方、今日あたりは、猪熊の私の家で、午睡でもしてゐるだらうよ。昨日までは、家にゐなかつたがね。」

隻眼は、ぢつと老婆を見た。さうして、それから、靜な聲で、

「ぢや、いづれ又、日が暮れてから、合はう。」

「あいさ。それまでは、お前さんも、ゆつくり午睡でもする事だよ。」

猪熊の婆は、口達者に答へながら、杖を曳いて、歩き出した。綾小路を東へ、猿のやうな帷子姿が、藁草履の尻に埃をあげて、日ざしにも恐れず、歩いて行く。――それを見送つた侍は、汗のにじんだ額に、嶮しい色を動かしながら、もう一度、柳の根に唾を吐くと、それから徐に、踵をめぐらした。

二人の分れた後には、例の蛇の死骸にたかつた青蠅が、不相變日の光の中に、かすかな羽音を傳へながら、立つかと思ふと、止つてゐる。………

二

猪熊の婆は、黄ばんだ髪の根に、じつとりと汗をにじませながら、足にかかる夏の埃も拂はずに、杖をつきつき歩いて行く。――

通ひ慣れた路ではあるが、自分が若かつた昔にくらべれば、どこもかしこも、嘘のやうな變り方である。自分が、まだ臺盤所の婢女をしてゐた頃の事を思へば、――いや、思ひがけない身分ちがひの男に、挑まれて、とうとう沙金を生んだ頃の事を思へば、今の都は、名ばかりで、その頃の俤は殆どない。昔は、牛車の行き交ひのしげかつた路も、今は徒に薊の花が、さびしく日だまりに、咲いてゐるばかり、仆れかかつた板垣の中には、無花果が青い實をつけて、人を怖れない鴉の群は、晝も水のない池につどつてゐる。さうして、自分も何時か、髪が白み皺がよつて、遂には腰のまがるやうな、老の身になつてしまつた。都も昔の都でなければ、自分も昔の自分でない。

その上、貌も變れば、心も變つた。始めて娘と今の夫との關係を知つた時、自分は、泣いて騷

いだ覺えがある。が、かうなつて見れば、それも、當り前の事としか思はれない。盜みをする事も、人を殺す事も、慣れれば、家業と同じである。云はゞ京の大路小路に、雜草がはえたやうに、自分の心も、もう荒んだ事を、苦にしない程、荒んでしまつた。が、一方から見れば又、すべてが變つたやうで、變つてゐない。娘の今してゐる事と、自分の昔した事とは、存外似よつた所がある。あの太郎と次郎とにしても、やはり今の夫の若かつた頃と、やる事に大した變りはない。かうして人間は、何時までも同じ事を繰返して行くのであらう。さう思へば、都も昔の都なら、自分も昔の自分である。……

　猪熊の婆の心の中には、かう云ふ考が、漠然とながら、浮んで來た。そのさびしい心もちに、つまされたのであらう、圓い眼がやさしくなつて、蟇のやうな顏の肉が、何時の間にか、ゆるんで來る。――と、又急に、老婆は、活き活きと、皺だらけの顏をにやつかせて、蛙股の杖のはこびを、前よりも急がせ始めた。

　それも、その筈である。四五間先に、路と芒原とを（これも、元は誰かの廣庭であつたのかも知れない。）隔てる、崩れかかつた築土があつて、その中に、盛りをすぎた合歡の樹が二三本、苔

の色の日に燒けた瓦の上に、ほほけた、赤い花を垂らしてゐる。それを空に、枯竹の柱を四隅へ立てて、古蓆の壁を下げた、怪しげな小屋が一つ、しよんぼりとかけてある。――場所と云ひ、容子と云ひ、中には、乞食でも棲んでゐるらしい。

別して、老婆の眼をひいたのは、その小屋の前に、腕を組んで佇んだ、十七八の若侍で、これは、朽葉色の水干に黑鞘の太刀を橫たへたのが、どう云ふ譯か、仔細らしく、小屋の中を覗いてゐる。その初々しい眉のあたりから、まだ子供らしさのぬけない頰のやつれが、一目で老婆に、その誰と云ふ事を知らせてくれた。

「何をしてゐるのだえ。次郎さん。」

猪熊の婆は、その側へ歩みよると、蛙股の杖を止めて、頤をしやくりながら、呼びかけた。

相手は、驚いて、ふり返つたが、つくも髮の、蟇の面の、厚い脣を舐める舌を見ると、白い齒を見せて微笑しながら、默つて、小屋の中を指さした。

小屋の中には、破れ疊を一枚、ぢかに地面へ敷いた上に、四十恰好の小柄な女が、石を枕にして、橫になつてゐる。それも、肌を掩ふものは、腰のあたりにかけてある、麻の汗衫一つぎりで、

殆ど裸と變りがない。見ると、その胸や腹は、指で押しても、血膿にまじつた、水がどろりと流れさうに、黄いろく滑に、むくんでゐる。殊に、蓆の裂け目から、天日のさしこんだ所で見ると、腋の下や頸のつけ根に、丁度腐つた杏のやうな、どす黒い斑があつて、そこから何とも云ひやうのない、異様な臭氣が、洩れるらしい。

枕下には、縁の缺けた土器がたつた一つ（底に飯粒がへばりついてゐる所を見ると、元は粥でも入れたものであらう。）捨てたやうに置いてあつて、誰がした悪戯か、その中に五つ六つ、泥だらけの石塊が行儀よく積んである。しかも、そのまん中に、花も葉も干からびた、合歡を一枝立てたのは、大方高坏へ添へる色紙の、心葉を眞似たものであらう。

それを見ると、氣丈な猪熊の婆も、流石に顔をしかめて、後へさがつた。さうして、その刹那に、突然さつきの蛇の死骸を思ひ浮べた。

「何だえ。これは。疫病に罹つてゐる人ぢやないか。」

「さうさ。とてもいけないと云ふので、どこかこの近所の家で、棄てたのだらう。これぢや、どこでも持てあつかふよ。」

次郎は又、白い齒を見せて、微笑した。

「それを、お前さんは又、何だつて、見てなんぞゐるのさ。」

「なに、今ここを通りかかつたら、野良犬が二三匹、いい餌食を見つけた氣で、食ひさうにしてゐたから、石をぶつけて、追拂つてやつた所さ。私が來なかつたら、今頃はもう、腕の一つも食はれてしまつたかも知れない。」

老婆は、蛙股の杖に頤をのせて、もう一度しみじみ、女の體を見た。さつき、犬が食ひかかつたと云ふのは、これであらう。――破れ疊の上から、往來の砂の中へ、斜にのばした二の腕には、水氣を持つた、土氣色の皮膚に、鋭い齒の痕が三つ四つ、紫がかつて殘つてゐる。が、女は、ぢつと眼をつぶつたなり、息さへ通つてゐるかどうかわからない。老婆は、再、はげしい嫌惡の感に、面を打たれるやうな心もちがした。

「一體、生きてゐるのかえ。それとも、死んでゐるのかえ。」

「どうだかね。」

「氣樂だよ、この人は。死んだものなら、犬が食つたつて、いいぢやないか。」

老婆は、かう云ふと、蛙股の杖をのべて、遠くから、ぐいと女の頭を突いて見た。頭は枕の石をはづれて、砂に髪をひきながら、多愛なく疊の上へぐたりとなる。が、病人は、依然として、眼をつぶつた儘、顔の筋肉一つ動かさない。

「そんな事をしたつて、駄目だよ。さつきなんぞは、犬に食ひつかれてさへ、やつぱりぢつとしてゐたんだから。」

「それぢや、死んでゐるのさ。」

次郎は、三度白い齒を見せて、笑つた。

「死んでゐたつて、犬に食はせるのは、ひどいやね。」

「何がひどいものかね。死んでしまへば、犬に食はれたつて、痛くはなしさ。」

老婆は、杖の上でのび上りながら、ぎよろり眼を大きくして、嘲笑ふやうに、かう云つた。

「死なつたつて、ひくひくしてゐるよりは、いつそ一思ひに、喉笛でも犬に食ひつかれた方が、益しかも知れないわね。どうせこれぢや、生きてゐたつて、長い事はありやせずさ。」

「だつて、人間が犬に食はれるのを、默つて見てもゐられないぢやないか。」

すると、猪熊の婆は、上脣をべろりとやつて、太々しく空嘯いた。

「その癖、人間が人間を殺すのは、お互に平氣で、見てゐるぢやないか。」

「さう云へば、さうさ。」

次郎は、ちよいと鬢を搔いて、四度白い齒を見せながら、微笑した。さうして、やさしく老婆の顏を眺めながら、

「どこへ行くのだい、お婆は。」と問ひかけた。

「眞木島の十郎と、高市の多襄丸と、――ああ、さうだ。關山の平六へは、お前さんに、言託を賴まうかね。」

かう云ふ中に、猪熊の婆は、杖にすがつて、もう二足三足步いてゐる。

「ああ、行つてもいい。」

次郎も漸く、病人の小屋を後にして、老婆と肩を並べながら、ぶらぶら炎天の往來を步き出した。

「あんなものを見たんで、すつかり氣色が惡くなつてしまつたよ。」

老婆は、大仰に顏をしかめながら、

「――ええと、平六の家は、お前さんも知つてゐるだらう。これをまつすぐに行つて、立本寺の門を左へ切れると、藤判官の屋敷がある。あの一町ばかり先さ。序だから、屋敷のまはりでもまはつて、今夜の下見をしてお置きよ。」

「なに私も、始からそのつもりで、こつちへ出て來たのさ。」

「さうかえ、それはお前さんにしては、氣がきいたね。お前さんの兄さんの御面相ぢや、一つ間違ふと、向ふにけどられさうで、下見に行つても、貰へないが、お前さんなら、大丈夫だよ。」

「可哀相に、兄貴もお婆の口にかかつちや、かなはないね。」

「なに、私なんぞは一番、あの人の事をよく云つてゐる方さ。お爺さんなんぞと來たら、お前さんにも話せないやうな事を、云つてゐるわね。」

「それは、あの事があるからさ。」

「あつたつて、お前さんの悪口は、云はないぢやないか。」

「ぢや大方、私は子供扱ひにされてゐるんだらう。」

二人は、こんな閑談を交しながら、狹い往來をぶらぶら歩いて行つた。歩く毎に、京の町の荒廢は、愈、目のあたりに開けて來る。家と家との間に、草いきれを立ててゐる蓬原、その所々に續いてゐる古築土、それから、昔の儘、僅に殘つてゐる松や柳——どれを見ても、かすかに漂ふ死人の臭ひと共に、亡びて行くこの大きな町を、思はせないものはない。途中では、唯一人、手に足駄をはいてゐる、躄の乞食に行きちがつた。——

「だが、次郎さん、お氣をつけよ。」

猪熊の婆は、ふと太郎の顏を思ひ浮べたので、獨り苦笑を浮べながら、かう云つた。

「娘の事ぢや、隨分兄さんも、夢中になり兼ねないからね。」

が、これは、次郎の心に、思つたよりも大きな影響を與へたらしい。彼は、秀でた眉の間を、俄に曇らせながら、不快らしく眼を伏せた。

「そりや私も、氣をつけてゐる。」

「氣をつけてゐてもさ。」

老婆は、聊、相手の感情の、この急激な變化に驚きながら、例の如く脣を舐め舐め、呟いた。

「氣をつけてゐてもだわね。」

「しかし、兄貴の思惑は兄貴の思惑で、私には、どうにも出來ないぢやないか。」

「さう云へば、實も蓋もなくなるがさ。實は私は、昨日娘に會つたのだよ。すると、今日未の下刻に、お前さんと寺の門の前で、會ふ事になつてゐると云ふぢやないか。それで、お前さんの兄さんには半月近くも、顏は合せないやうにしてゐるとね、太郎さんがこんな事を知つてごらん。又、お前さん、一悶着だらう。」

次郎は、老婆の娓々として說く語を遮るやうに、默つて、苛立しく何度も頷いた。が、猪熊の婆は、容易に口を閉ざしさうな氣色もない。

「さつき、向ふの辻で、太郎さんに遇つた時にも、私はよくさう云つて來たけれどね、さうなりや、私たちの仲間だもの、すぐに刃物三昧だらうぢやないか。萬一、その時のはずみで、娘に怪我でもあつたら、と私は、唯、それが心配なのさ。娘は、何しろあの通りの氣質だし、太郎さんにしても、一徹人だから、私は、お前さんによく賴んで置かうと思つてね。お前さんは、死人が犬に食はれるのさへ、見てゐられない程、やさしいんだから。」

から云つて、老婆は、何時か自分にも起つて來た不安を、强ひて消さうとするやうに、わざとしはがれた聲で、笑つて見せた。が、次郎は依然として、顏を暗くしながら、何か物思ひに耽けるやうに、眼を伏せて歩いてゐる。………

「大事にならなければいいが。」

猪熊の婆は、蛙股の杖を早めながら、この時始めて心の底で、しみじみから、祈つたのである。

彼是その時分の事である。楚の先に蛇の死骸をひつかけた、町の子供が三四人、病人の小屋の外を通りかかると、中でも惡戲な一人が、遠くから及び腰になつて、その蛇を女の顏の上へ拋り上げた。靑く脂の浮いた腹がぺたり、女の頰に落ちて、それから、腐れ水にぬれた尾が、ずるずる頤の下へ垂れる——と思ふと、子供たちは、一度にわつと喚きながら、悸えたやうに、四方へ散つた。

今まで死んだやうになつてゐた女が、その時急に、黃いろくたるんだ瞼をあけて、腐つた卵の白味のやうな眼を、どんより空に据ゑながら、砂まぶれの指を一つびくりとやると、聲とも息と

もわからないものが、干割れた脣の奧の方から、かすかに洩れて來たからである。

三

猪熊の婆に別れた太郎は、時々扇で風を入れながら、日陰も選ばず、朱雀の大路を北へ、進まない歩みをはこんだ。――

日中の往來は、人通りも極めて少ない。栗毛の馬に平文の鞍を置いて跨つた武士が一人、鎧櫃を荷つた調度掛を從へながら、綾藺笠に日をよけて、悠々と通つた後には、唯、せはしない燕が、白い腹を閃かせて、時々、往來の砂をかすめるばかり、板葺、檜皮葺の屋根の向うに、むらがつてゐる旱り雲も、さつきから、凝然と、金銀銅鐵を熔かした儘、小動ぎをする氣色はない。まして、兩側に建て續いた家々は、いづれもしんと靜まり返つて、その板蔀や蒲簾の後では、町中の人が悉、死に絕えてしまつたかとさへ疑はれる。

猪熊の婆の云つたやうに、沙金を次郎に奪はれると云ふ惧は、漸く日の前に迫つて來た。あの

女が、――現在養父にさへ、身を任かせたあの女が、瘢痕のある、隻眼の、醜い己を、日にこそ焼けてゐるが目鼻立ちの整つた、若い弟に見かへるのは、元より何の不思議もない。己は、唯、次郎が、――子供の時から、己を慕つてくれたあの次郎が、己の心もちを察してくれて、よしや沙金の方から手を出してもその誘惑に乘らない丈の、愼しみを持つてくれる事と、一圖に信じ切つてゐた。が、今になつて考へれば、それは、弟を買かぶつた、蟲のいい量見に過ぎなかつた。いや、弟を見上げすぎたと云ふよりも、沙金の淫な媚びのたくみを、見下げすぎた誤りだつた。獨り次郎ばかりではない。あの女の眼ざし一つで、身を亡ぼした男の數は、この炎天にひるがへる燕の數よりも、澤山ある。現にかう云ふ己でさへ、唯一度、あの女を見たばかりで、とうとう今のやうに、身を墮した。……

するとが四條坊門の辻を、南へやる赤絲毛の女車が、靜に太郎の行く手を通りすぎる。車の中の人は見えないが、紅の裾濃に染めた、すずしの下簾が、町筋の荒涼としてゐるだけに、一際目に立つてなまめかしい。それにつき添つた牛飼の童と雜色とは、迂散らしく太郎の方へ眼をやつた

が、牛だけは、角を低れて、漆のやうに黒い背を鷹揚にうねらしながら、わき見もせずに、のつそりと歩いてゆく。しかしとりとめのない考へに沈んでゐる太郎には、車の金具の、まばゆく日に光つたのが、僅に眼にはいつただけである。

彼は、暫く足をとめて、車を通りこさせてから、又隻眼を地に伏せて、黙々と歩きはじめた。

——

（己が右の獄の放免をしてゐた時の事を思へば、今では、遠い昔のやうな、心もちがする。あの時の己と今の己とを比べれば、己自身にさへ、同じ人間のやうな氣はしない。あの頃の己は、三寶を敬ふ事も忘れなければ、王法に遵ふ事も怠らなかつた。それが、今では、盗みもする。時によつては、火つけもする。人を殺した事も、二度や三度ではない。ああ、昔の己は――仲間の放免と一しよになつて、何時もの七半を打ちながら、笑ひ興じてゐた、あの昔の己は、今の己の眼から見ると、どの位仕合せだつたかわからない。

考へれば、まだ昨日のやうに思はれるが、實はもう一年前になつた。――あの女が、盗みの咎

で、檢非違使の手から、右の獄へ送られる。己がそれと、ふとした事から、牢格子を隔てて、話し合ふやうな仲になる。それから、その話が、だんだん度重なつて、何時か互に身の上の事まで、打明け始める。とうとう、しまひには、猪熊の婆や同類の盜人が、牢を破つてあの女を救ひ出すのを、見ないふりをして、通してやつた。

その晩から、己は何度となく、猪熊の婆の家へ出入りをした。沙金は、己の行く時刻を見計らつて、あの半蔀の間から、雀色時の往來を覗いてゐる。さうして己の姿が見えると、鼠鳴きをして、はいれと云ふ。家の中には、下衆女の阿濃の外に、誰もゐない。やがて、蔀を下す。結び燈臺へ火をつける。さうして、あの何疊かの疊の上に、折敷や高坏を、所狹く置きならべて、二人ぎりの小酒盛をする。その揚句が、笑つたり、泣いたり、喧嘩をしたり、仲直りをしたり――云はゞ、世間並の戀人同志が、するやうな事をして、何時でも夜を明かした。

日の暮に來て、夜のひき明け方に歸る。――あれが、それでも一月は續いたらう。その中に、己には沙金が猪熊の婆のつれ子である事、今では二十何人かの盜人の頭になつて、時々洛中を擾がせてゐる事、さうして又、日頃は容色を賣つて、傀儡同樣な暮しをしてゐる事――さう云ふ事

が、だんだんわかつて來た。が、それは、反てあの女に、双紙の中の人間めいた、不思議な圓光をかけるばかりで、少しも卑しいなどと云ふ氣は起させない。無論、あの女は、時々己に、一そ仲間へはいれと云ふ。が、己は何時も、承知しない。すると、あの女は、己の事を臆病だと云つて、莫迦にする。己はよくそれで、腹を立てた。………）

「はい、はい」と馬を叱る聲がする。太郎は、慌てゝ、路をよけた。

米俵を二俵づゝ、左右へ積んだ馬を曳いて、汗衫一つの下衆が、三條坊門の辻を曲りながら、汗もふかずに、炎天の大路を南へ下つて來る。その馬の影が、黒く地面に焼きついた上を、燕が一羽、ひらり羽根を光らせて、すぢかひに、空へ舞上つた。と思ふと、それが又礫を投げるやうに、落として來て、太郎の鼻の先を一文字に、向ふの板庇の下へはいる。

太郎は、歩きながら、思ひ出したやうに、はたはたと、黄紙の扇を使つた。——

（さう云ふ月日が、續くともなく續く中に、己は、偶然あの女と養父との關係に、氣がついた。

尤も己一人が、沙金を自由にする男でないと云ふ事も、知つてゐなかつた譯ではない。沙金自身さへ、關係した公卿の名や法師の名を、何度も自慢らしく己に話した事がある。が、己はかう思つた。あの女の肌は、大ぜいの男を知つてゐるかも知れない。けれども、あの女の心は、己だけが占有してゐる。さうだ、女の操は、體にはない。――己は、かう信じて、己の嫉妬を抑へてゐた。勿論これも、あの女から、知らず知らず己が敎つた、考へ方にすぎないかも知れない。が、兎も角もさう思ふと、己の苦しい心は幾分か樂になつた。しかし、あの女と養父との關係は、それとちがふ。

己は、それを感づいた時に、何とも云へず、不快だつた。さう云ふ事をする親子なら、殺して飽きたらない。それを默つて見る實の母の、猪熊の婆も亦、畜生より、無殘な奴だ。かう思つた己は、あの醉ひどれの老爺の顏を見る度に、何度太刀へ手をかけたか、わからない。が、沙金はその度に、己の前で、殊更、手ひどく養父を莫迦にした。さうしてその見え透いた手くだが又、不思議に己の心を鈍らせた。「私は阿父さんが嫌で嫌で仕方がないんです」と云はれゝば、養父を惡む氣にはなつても、沙金を惡む氣には、どうしてもなれない。そこで、己と養父とは、今日が

今日まで、互に睨み合ひながら、何事もなくすぎて來た。もしあのお爺にもう少し、勇氣があつたなら、――いや、己にもう少し、勇氣があつたなら、己たちはとうの昔、どちらか死んでゐた事であらう。……）

　頭を上げると、太郎は何時か二條を折れて、耳敏川に跨つてゐる、小さい橋にかゝつてゐた。水の涸れた川は、細いながらも、燒太刀のやうに、日を反射して、絶えてはつゞく葉柳と家々との間に、かすかなせゝらぎの音を立てゝゐる。その川の遙か下に、黑いものが二つ三つ、鵜の鳥かと思ふやうに、流れの光りを亂してゐるのは、大方町の子供たちが、水でも浴びてゐるのであらう。

　太郎の心には、一瞬の間、幼かつた昔の記憶が、――弟と一しよに、五條の橋の下で、鮠を釣つた昔の記憶が、この炎天に通ふ微風のやうに、かなしく、なつかしく、返つて來た。が、彼も弟も、今は昔の彼等ではない。

　太郎は、橋を渡りながら、うすい痘痕のある顏に、又險しい色を閃かせた。――

（すると、突然或日、その頃筑後の前司の小舍人になつてゐた弟が、盗人の疑ひをかけられて、左の獄へ入れられたと云ふ知らせが來た。放免をしてゐる己には、獄中の苦しさが、誰よりもよく、わかつてゐる。己は、まだ筋骨のかたまらない弟の身の上を、自分の事のやうに、心配した。そこで、沙金に相談すると、あの女はさも譯がなささうに、「牢を破ればいゝぢやないの」と云ふ。側にゐた猪熊の婆も、しきりにそれをすゝめてくれる。己は、とうとう覺悟をきめて、沙金と一しよに、五六人の盗人を語り集めた。さうして、その夜の中に、獄を擾がして、難なく弟を救ひ出した。その時、受けた創の痕は、今でも己の胸に殘つてゐる。が、それよりも忘れられないのは、己がその時始めて、放免の一人を斬り殺した事であつた。あの男の鋭い叫び聲と、それから、あの血の臭ひとは、未に己の記憶を離れない。かう云ふ今でも、己はそれを、この蒸暑い空氣の中に、感じるやうな心もちがする。

その翌日から、己と弟とは、猪熊の沙金の家で、人目を忍ぶ身になつた。一度罪を犯したからは、正直に暮すのも、危い世渡りをして行くのも、検非違使の眼には、變りがない。どうせ死ぬ

位なら、一日も長く生きてゐよう。さう思つた己は、とうとう沙金の云ふなりになつて、弟と一しよに盗人の仲間入をした。それからの己は、火もつける。人も殺す。悪事と云ふ悪事で、何一つしなかつたものはない。勿論、それも始めは、いやいやした。が、して見ると、意外に造作がない。己は何時の間にか、悪事を働くのが、人間の自然かも知れないと思ひ出した。……）

太郎は、半ば無意識に辻をまがつた。辻には、石でまはりを積んだ一圜ひの土饅頭があつて、その上に石塔婆が二本、並んで、午後の日に赫と、照りつけられてゐる。その根元には又、何匹かの蜥蜴が、煤のやうに黒い體を、氣味悪くへばりつかせてゐたが、太郎の足音に驚いたのであらう、彼の影の落ちるよりも早く、一度にざわめきながら、四方へ散つた。が、太郎は、それに眼をやる氣色もない。――

（己は、悪事をつむに従つて、益々沙金に愛着を感じて來た。人を殺すのも、盗みをするのも、みんなあの女故である。――現に牢を破つたのさへ、次郎を助けようと思ふ外に、一人の弟を見殺しにすると、沙金に哂はれるのを、惧れたからであつた。――さう思ふと、猶更己は、何に換

へても、あの女を失ひたくない。

その沙金を、己は今、肉身の弟に奪はれようとしてゐる。己が命を賭けて助けてやつた、あの次郎に奪はれようとしてゐる。奪はれようとしてゐるのか、或は、もう奪はれてゐるのか、それさへも、はつきりはわからない。沙金の心を疑はなかつた己は、あの女が外の男をひつぱりこむのも、善くない仕事の方便として、許してゐた。それから、養父との關係も、あのお爺が親の威光で、何も知らない中に、誘惑したと思へば、眼をつぶつて、すごせない事はない。が、次郎との仲は、別である。

己と弟とは、氣だてが變つてゐるやうで、實は見かけ程、變つてゐない。尤も顏貌は、七八年前の疱瘡が、己には重く、弟には輕かつたので、次郎は、生れついた眉目をその儘に、うつくしい男になつたが、己はその爲に隻眼つぶれた、生まれもつかない不具になつた。その醜い、隻眼の己が、今まで沙金の心を捕へてゐたとすれば、（これも、己のうぬ惚れだらうか。）それは己の魂の力に相違ない。さうして、その魂は、同じ親から生まれた弟も、己に變りなく持つてゐる。しかも、弟は、誰の眼にも己よりはうつくしい。さう云ふ次郎に、沙金が心を惹かれるのは、元よ

り理の當然である。その上又、次郎の方でも、己にひきくらべて考へれば、到底あの女の誘惑に、勝てようとは思はれない。いや、己は、始終己の醜い顏を恥ぢてゐる。さうして、大抵の情事には、自らひかへ目になつてゐる。それでさへ、沙金には、氣違ひのやうに、戀をした。まして、自分の美しさを知つてゐる次郎が、どうして、あの女の見せる媚びを、返さずにゐられよう。――かう思へば、次郎と沙金とが、近づくやうになるのは、無理もない。が、無理がない丈、それ丈、己には苦痛である。弟は、沙金を己から奪はうとする。――それも、沙金の全部を、己から奪はうとする。何時かは、さうして必ず。ああ、己の失ふのは、獨り沙金ばかりではない。弟も一しよに失ふのだ。さうして、その代りに、次郎と云ふ名の敵が出來る。――己は、敵には用捨しない。敵も、己に用捨はしないだらう。さうなれば、落ち着く所は、今から豫めわかつてゐる。弟を殺すか、己が殺されるか。………」

太郎は、死人の臭ひが、鋭く鼻を打つたのに、驚いた。が、彼の心の中の死が、臭つたと云ふ譯ではない。見ると、猪熊の小路の邊、とある網代の塀の下に腐爛した子供の死骸が二つ、裸の

儘、積み重ねて捨てゝある。はげしい天日に、照りつけられたせゐか、變色した皮膚の所々が、べつとりと紫がゝつた肉を出して、その上には又青蝿が、何匹となく止つてゐる。そればかりではない。一人の子供のうつむけた顔の下には、もう足の早い蟻がついた。――

太郎は、目のあたりに、自分の行く末を見せつけられたやうな心もちがした。さうして、思はず下唇を緊く嚙んだ。――

(殊に、この頃は、沙金も己を避けてゐる。たまに會つても、いゝ顔をした事は、一度もない。時々は己に面と向つて、惡口さへきく事がある。己はその度に腹を立てた。打つた事もある。蹴つた事もある。が、打つてゐる中に、蹴つてゐる中に、己は何時でも、己自身を折檻してゐるやうな心もちがした。それも無理はない。己の二十年の生涯は、沙金のあの眼の中に宿つてゐる。だから沙金を失ふのは、今までの己を失ふのと、變りはない。

沙金を失ひ、弟を失ひ、さうしてそれと共に己自身も失つてしまふ。己はすべてを失ふ時が來たのかも知れない。………)

さう思ふ中に、彼は、もう猪熊の婆の家の、白い布をぶら下げた戸口へ來た。まだこゝまでも、死人の臭ひは、傳はつて來るが、戸口の傍に、暗い綠の葉を垂れた枇杷があつて、その影が僅ながら、涼しく窓に落ちてゐる。この木の下を、この戸口へはいつた事は、何度あるかわからない。が、これからは？

太郎は、急に或氣づかれを感じて、一味の感傷にひたりながら、其眼に涙をうかべて、そつと戸口へ立ちよつた。すると、その時である。家の中から、忽ちけたたましい女の聲が、猪熊の爺の聲に交つて、彼の耳を貫いた。沙金なら、捨てゝは置けない。

彼は、入口の布をあげて、うすぐらい家の中へ、忙しく一足ふみ入れた。

四

猪熊の婆に分れると、次郎は、重い心を抱きながら、立本寺の門の石段を、一つづつ數へるやうに上つて、その所々剝落した朱塗の丸柱の下へ來て、疲れたやうに腰を下した。流石の夏の日も、斜につき出した、高い瓦に遮られて、こゝまではさして來ない。後を見ると、うす暗い中に、

一體の金剛力士が青蓮花を踏みながら、左手の杵を高くあげて、胸のあたりに燕の糞をつけた儘、寂然と境内の晝を守つてゐる。――次郎は、此處へ來て、始めて落着いて、自分の心もちが考へられるやうな氣になつた。

日の光は、不相變目の前の往來を、照り白らませて、その中にとびかふ燕の羽を、さながら黑繻子か何かのやうに、光らせてゐる。大きな日傘をさして、白い水干を着た男が一人、青竹の文挾に挾んだ文を持つて、暑さうにゆつくり通つた後は、向うに續いた築土の上へ、影を落す犬もない。

次郎は、腰にさした扇をぬいて、その黑柿の骨を、一つづゝ指で送つたり、もどしたりしながら、兄と自分との關係を、それからそれへ、思ひ出した。――

何で自分は、かう苦しまなければ、ならないのであらう。たつた一人の兄は、自分を敵のやうに思つてゐる。顏を合せる每に、こちらから口をきいても、浮かない返事をして、話の腰を折つてしまふ。それも、自分と沙金とが、今のやうな事になつて見れば、無理のない事に相違ない。が、自分は、あの女に會ふ度に、始終兄にすまないと思つてゐる。別して、會つた後のさびしい

心もちでは、よく兄がいとしくなつて、人知れない涙もこぼしこぼしした。現に、一度なぞは、この儘、兄にも沙金にも別れて、東國へでも下らうとさへ、思つた事がある。さうしたら、兄も自分を憎まなくなるだらうし、自分も沙金を忘れられるだらう。さう思つて、よそながら暇乞ひをするつもりで、兄の所へ會ひにゆくと、兄は何時も、そつけなく、自分をあしらつた。さうして、沙金に會ふと、――今度は自分が、折角の決心を忘れてしまふ。が、その度に、自分はどの位、自分自身を責めた事であらう。

しかし、兄には、自分のこの苦しみがわからない。唯一圖に、自分を、戀の敵だと思つてゐる。自分は、兄に罵られてもいゝ。顔に唾されてもいゝ。或は場合によつては、殺されてもいゝ。が、自分が、どの位自分の不義を憎んでゐるか、どの位兄に同情してゐるか、それだけは、察してゐて貰ひたい。その上でならば、どんな死に樣をするにしても、兄の手にかゝれば、本望だ。いや、寧、この頃の苦しみよりは、一思ひに死んだ方が、どの位仕合せだかわからない。

自分は、沙金に戀をしてゐる。が、同時に憎んでもゐる。あの女の多情な性質は、考へただけでも、腹立たしい。その上に、絶えず嘘をつく。それから、兄や自分でさへためらふやうな、虐

い人殺しも、平氣でする。時々、自分は、あの女の淫な寢姿を眺めながら、どうして、自分がこんな女に、ひかされるのだらうと思つたりした。殊に、見ず知らずの男にも、慣々しく肌を任かせるのを見た時には、一そ自分の手で、殺してやらうかと云ふ氣にさへなつた。それ程、自分は、沙金を憎んでゐる。が、あの女の眼を見ると、自分はやつぱり、誘惑に陷つてしまふ。あの女のやうに、醜い魂と、美しい肉身とを持つた人間は、外にゐない。

　この自分の憎しみも、兄にはわかつてゐないやうだ。いや、元來兄は、自分のやうに、あの女の獸のやうな心を、憎んではゐないらしい。たとへば、沙金と外の男との關係を見るにしても、兄と自分とは全く眼がちがふ。兄は、あの女が誰と一しよにゐるのを見ても、默つてゐる。あの女の一時の氣まぐれは、氣まぐれとして、許してゐるらしい。が、自分は、さう行かない。自分にとつては、沙金が肌身を汚す事は、同時に沙金が心を汚す事だ。或は心を汚すより、以上の事のやうに思はれる。勿論自分には、あの女の心が、外の男に移るのも許されない。が、肌身を外の男に任せるのは、それよりも猶、苦痛である。それだからこそ、自分は兄に對しても、嫉妬をする。すまないとは思ひながら、嫉妬をする。して見ると、兄と自分との戀は、まるでちがふ考

が、元になつてゐるのではあるまいか。さうしてそのちがひが、餘計二人の仲を、惡くするのではあるまいか。……

次郎は、ぼんやり往來を眺めながら、こんな事をしみじみと考へた。すると、丁度その時である。突然、けたたましい笑ひ聲が、まばゆい日の光を動かして、往來のどちらかから聞えて來た。と思ふと、癇高い女の聲が、舌のまはらない男の聲と一しよになつて、人も無げに、淫な冗談を云ひかはして來る。次郎は、思はず扇を腰にさして、立上つた。

が、柱の下をはなれて、まだ石段へ足を下すか下さない中に、小路を南へ歩いて來た二人の男女が、彼の前を通りかかつた。

男は、樺櫻の直垂に梨打の烏帽子をかけて、打出しの太刀を濶達に佩いた、三十ばかりの年配で、どうやら酒に醉つてゐるらしい。女は、白地にうす紫の模様のある衣を着て、市女笠に被衣をかけてゐるが、聲と云ひ、物ごしと云ひ、紛れもない沙金である。――次郎は、石段を下りながら、ぢつと脣を嚙んで、眼を外らせた。が、二人とも、次郎には、眼をかける容子がない。

「ぢやよくつて。きつと忘れちやいやよ。」

「大丈夫だよ。己がひきうけたからは、大船に乘つた氣でゐるがいゝ。」

「だつて、私の方ぢや命がけなんですもの。この位、念を押さなくちやしやうがないわ。」

男は赤鬚の少しある口を、咽まで見える程、あけて笑ひながら、指で、ちよいと沙金の頰を突ついた。

「己の方も、これで命がけさ。」

「うまく云つてゐるわ。」

二人は、寺の門の前を通りすぎて、さつき次郎が猪熊の婆と別れた辻まで行くと、そこに足をとめた儘暫くは、人目も恥ぢず、ふざけ合つてゐたが、やがて、男は、振りかへり振りかへり、何か頻にからかひながら、辻を東へ折れてしまふ。女は、踵をめぐらして、まだくすくす笑ひながら、又こつちへ歸つて來る。――次郎は、石段の下に佇んで、うれしいのか情ないのか、わからないやうな感情に動かされながら、子供らしく顏を赤らめて、被衣の中から覗いてゐる、沙金の大きな黑い眼を迎へた。

「今のやつを見た？」

沙金は、被衣を開いて、汗ばんだ顔を見せながら、笑ひ笑ひ、問ひかけた。

「見なくつてさ。」

「あれはね。——まあ此處へかけませう。」

二人は、石段の下の段に、肩をならべて、腰を下した。幸、こゝには門の外に、唯一本、細い幹をくねらした、赤松の影が落ちてゐる。

「あれは、藤判官の所の侍なの。」

沙金は、石段の上に腰を下すか下さないのに、市女笠をぬいで、かう云つた。小柄な、手足の動かし方に猫のやうな敏捷さがある。中肉の、二十五六の女である。顔は、恐しい野性と異常な美しさとが、一つになつたとでも云ふのであらう。狹い額とゆたかな頬と、鮮な歯と淫な脣と、鋭い眼と鷹揚な眉と、——すべて、一つになり得さうもないものが、不思議にも一つになつて、しかもそこに、爪ばかりの無理もない。が、中でも見事なのは、肩にかけた髮で、これは、日の光の加減によると、黒い上につやゝかな青みが浮く。さながら、烏の羽根と違ひがない。次郎は、何時見ても變らない女のなまめかしさを、寧憎いやうに感じたのである。

「さうして、お前さんの情人なんだらう。」

沙金は、眼を細くして笑ひながら、無邪氣らしく、首をふつた。

「あいつの莫迦と云つたら、ないのよ。妾の云ふ事なら、何でも、犬のやうにきくぢやないの。おかげで、何も彼も、すつかりわかつてしまつた。」

「何がさ。」

「何がつて、藤判官の屋敷の容子がよ。そりや一方ならないお饒舌なんでせう。さつきなんぞはこの頃、あすこで買つた馬の話まで、話して聞かしたわ。——さうさう、あの馬は太郎さんに賴んで盜ませようかしら。陸奥出の三才駒だつて云ふから、滿更でもないわね。」

「さうだ。兄貴なら、何でもお前の御意次第だから。」

「いやだわ。嫉妬をやかれるのは、妾大きらひ。それも、太郎さんなんぞ、——そりやはじめは、妾の方でも、少しはどうとか思つたけれど、今ぢやもう何でもないわ。」

「その中に、私の事もさう云ふ時が來やしないか。」

「それは、どうだかわかりやしない。」

沙金は、又癇高い聲で、笑つた。

「怒つたの？　ぢや、來ないつて云ひませうか。」

「内心女夜叉さね。お前は。」

次郎は、顔をしかめながら、足下の石を拾つて、向うへ投げた。

「そりや、女夜叉かも知れないわ。唯、こんな女夜叉に惚れられたのが、あなたの因果だわね。

――まだ疑つてゐるの。ぢや妾、もう知らないからいゝ。」

沙金は、かう云つて、暫くぢつと、往來を見つめてゐたが、急に鋭い眼を、次郎の上に轉じると、忽冷な微笑が、脣をかすめて、一過した。

「そんなに疑ふのなら、いゝ事を教へて上げませうか。」

「いゝ事？」

「えゝ」

女は、顔を次郎の側へ持つて來た。うす化粧のにほひが、汗にまじつて、むんと鼻をつく。――

――次郎は、身の中がむづ痒い程、烈しい衝動を感じて、思はず顔を側へむけた。

「妾ね、あいつにすつかり、話してしまつたの。」

「何を？」

「今夜、みんなで藤判官の屋敷へ、行くと云ふ事を。」

次郎は、耳を信じなかつた。息苦しい官能の刺戟も、一瞬の間に消えてしまふ。――彼は唯、疑はしげに、空しく女の顔を見返した。

「そんなに驚かなくつたつていゝわ。何でもない事なのよ。」

沙金は、稍聲を低めて、嘲笑ふやうな調子を出した。

「妾かう云つたの。妾の寢る部屋は、あの大路面の檜垣のすぐ側なんですが、昨夜その檜垣の外で、きつと盜人でせう、五六人の男が、あなたの所へはいる相談をしてゐるのが聞えました。それがしかも、今夜なんです。お馴染み甲斐に、教へて上げましたから、それ相當の用心をしないと、あぶなうござんすよつて。だから、今夜は、きつと向うにも、手くばりがあるわ。あいつも、今人を集めに行つた所なの。二十人や三十人の侍は、くるにちがひなくつてよ。」

「どうして又、そんな餘計な事をしたのさ。」

次郎は、まだ落着かない容子で、當惑したらしく、沙金の眼を窺つた。
「餘計ぢやないわ。」
沙金は、氣味惡く、微笑した。さうして、左の手で、そつと次郎の右の手に、さはりながら、
「あなたの爲にしたの。」
「どうして？」
かう云ひながら、次郎の心には、恐しい或ものが感じられた。まさか――
「まだわからない？　さう云つて置いて、太郎さんに、馬を盜む事を賴めば――ね。いくら何だつて、一人ぢやかなはないでせう。いえさ、外のものが加勢をしたつて、知れたものだわ。さうすれば、あなたも妾も、いゝぢやないの。」
次郎は、全身に水を浴びせられたやうな心もちがした。
「兄貴を殺す！」
沙金は、扇を弄びながら、素直に頷いた。
「殺しちや惡い？」

「惡いよりも——兄貴を罠にかけて——」
「ぢやあなた殺せて？」
次郎は、沙金の眼が、野猫のやうに鋭く、自分を見つめてゐるのを感じた。さうして、その眼の中に、恐しい力があつて、それが次第に自分の意志を、痲痺させようとするのを感じた。
「しかし、それは卑怯だ。」
「卑怯でも、仕方がなくはない？」
沙金は、扇をすてゝ、靜に兩手で、次郎の右の手をとらへながら、追窮した。
「それも、兄貴一人やるのならいゝが、仲間を皆、あぶない目に遇はせてまで——」
かう云ひながら、次郎は、しまつたと思つた。狡猾な女は勿論、この機會を見のがさない。
「一人やるのならいゝの？　なぜ？」
次郎は、女の手をはなして、立上つた。さうして、顏の色を變へた儘、默つて、沙金の前を、右左に歩き出した。
「太郎さんを殺していゝんなら、仲間なんぞ何人殺したつて、いゝでせう。」

沙金は、下から次郎の顔を見上げながら、一句を射た。

「お婆はどうする？」

「死んだら、死んだ時の事だわ。」

次郎は、立止つて、沙金の顔を見下した。女の眼は、侮蔑と愛欲とに燃えて炭火のやうに熱を持つてゐる。

「あなたの爲なら、妾誰を殺してもいゝ。」

この語の中には、蝎のやうに、人を刺すものがある。次郎は、再一種の戰慄を感じた。

「しかし、兄貴は――」

「妾は、親も捨てゝゐるのぢやない？」

かう云つて、沙金は、眼を落すと、急に張りつめた顔の表情が弛んで、燒砂の上へ、日に光りながらはらはらと涙が落ちた。

「もうあいつに話してしまつたのに、――今更取返しはつきはしない。――そんな事がわかつたら、妾は――妾は、仲間に――太郎さんに殺されてしまふぢやないの。」

その切れ切れな語と共に、次郎の心には、自ら絶望的な勇氣が、湧いて來る。血の色を失つた彼は、默つて、土に膝をつきながら、冷い兩手に緊く、沙金の手をとらへた。

彼等は二人とも、その握りあふ手の中に、恐しい承諾の意を感じたのである。

五

白い布をかゝげて、家の中に一足ふみこんだ太郎は、意外な光景に驚かされた。――見ると、廣くもない部屋の中には、廚へ通ふ遣戸が一枚、斜に網代屛風の上へ、倒れかゝつて、その拍子にひつくり返つたものであらう、蚊遣りを焚く土器が、二つになつてころがりながら、一面にあたりへ、燃え殘つた青松葉を、灰と一しよにふりまいてゐる。その灰を頭から浴びて、ちぢれ髮の、色の惡い、肥つた、十六七の下衆女が一人、これも酒肥りに肥つた、禿頭の老人に、髮の毛をつかまれながら、怪しげな麻の單衣の、前も露に取亂した儘、足をばたばた動かして、氣違ひのやうに、悲鳴を上げる――と、老人は、左手に女の髮をつかんで、右手に口の缺けた瓶子を、空ざまにさし上げながら、その中に煤けた液體を、强ひて相手の口へ注ぎこまうとする。

が、液體は、徒に女の顔を、眼と云はず、鼻と云はず、うす黒く横流するだけで、口へは、殆どはいらないらしい。そこで老人は、愈、氣を苛つて無理に女の口を、割らうとする。女は、とられた髮も、ぬける程強く、頭を振つて、一滴もそれを飲むまいとする。手と手と、足と足とが、互にもつれたり、はなれたりして、明い處から、急にうす暗い家の中へはいつた、太郎の眼には、どちらがどちらの體とも、わからない。が、二人が誰だと云ふ事は、勿論一目見て、それと知れた。——

太郎は、草履を脫ぐ間ももどかしさうに、慌しく部屋の中へ躍りこむと、突嗟に老人の右の手をつかんで、苦もなく瓶子をもぎはなしながら、怒氣を帶びて、一喝した。

「何をする？」

太郎の鋭いこの語は、忽ち嚙みつくやうな、老人の語で答へられた。

「おぬしこそ、何をする。」

「己か。己ならからするわ。」

太郎は、瓶子を投げすてゝ、更に相手の左の手を、女の髮からひき離すと、足をあげて老人を、

遣戸の上へ蹴倒した。不意の救ひに驚いたのであらう、阿濃は慌てゝ、一二間這ひのいたが、老人の後へ倒れたのを見ると、神佛ををがむやうに、太郎の前へ手を合せて、震へながら頭を下げた。と思ふと、亂れた髮もつくろはずに、脫兎の如く身を躱して、徒跣の儘、緣を下へ、白い布をひらりとくゞる。――猛然として、追ひすがらうとする猪熊の爺を、太郎が再一蹴して、灰の中に倒した時には、彼女は旣に息を切らせて、枇杷の木の下を北へ、こけつまろびつして、走つてゐた。……

「助けてくれ。人殺しぢや。」

老人は、かうわめきながら、始の勢にも似ず、網代屛風をふみ倒して、廚の方へ逃げようとする。――太郎は、すばやく猿臂をのべて、淺黃の水干の襟上をつかみながら、相手をそこへ引き倒した。

「人殺し。人殺し。助けてくれ。親殺しぢや。」

「莫迦な事を。誰がおぬしなぞを殺すものか。」

太郎は、膝の下に老人を押し伏せた儘、かう高らかに、嘲笑つた。が、それと同時に、この老

爺を殺したいと云ふ欲望が、抑へ難い程強く、起つて來た。殺すのには、勿論何の面倒もない。唯、一突き――あの赤く皮のたるんでゐる頸を、唯、一突き突きさへすれば、それでもう萬事が完つてしまふ。突き透した太刀の鋒が、疊へはいる手答へと、その太刀の柄へ感じて來る、斷末魔の身もだへと、さうして、又、その太刀を押し戻す勢で、溢れて來る血の臭ひと、――さう云ふ想像は、自ら太郎の手を、葛巻きの太刀の柄へのばさせた。

「嘘ぢや。嘘ぢや。おぬしは、何時もわしを殺さうと思うてゐる。――やい、誰か助けてくれ。人殺しぢや。親殺しぢや。」

猪熊の爺は、相手の心を見透したのか、又一しきりはね起きようとして、すまひながら、必死になつて、わめき立てた。

「おぬしは、何で阿濃を、あのやうな目にあはせた。さあその仔細を云へ。云はねば……」

「云ふ。云ふ。――云ふがな。云つた後でも、おぬしの事ぢや。殺さないものでも、なからう。」

「うるさい。云ふか、云はぬか。」

「云ふ。云ふ。云ふ。が、先、そこを放してくれ。これでは、息がつまつて、口がきけぬわ。」

太郎は、それを耳にもかけないやうに、殺氣立つた聲で、いら立たしく繰返した。

「云ふか、云はぬか。」

「云ふ。」と、猪熊の爺は、聲をふりしぼつて、まだはね返さうと、もがきながら、「云ふともた。あれは唯、わしが藥をのませうと思うたのぢや。それを、あの阿濃の阿呆めが、どうしても飲み居らぬ。されば、ついわしも手荒な事をした。それだけぢや。いや、まだある。藥をこしらへ居つたのは、お婆ぢや、わしの知つた事ではない。」

「藥？　では、墮胎藥だな。いくら阿呆でも、嫌がる者をつかまへて、非道な事をする老爺だ。」

「それ見い。云へと云ふから、云へば、猶おぬしは、わしを殺す氣になるわ。人殺し。極道。」

「誰がおぬしを殺すと云つた？」

「殺さぬ氣なら、何故おぬしこそ、太刀の柄へ手をかけてゐるのぢや。」

老人は、汗にぬれた禿頭を仰向けて、上眼に太郎を見上げながら、口角に泡をためて、かう叫んだ。太郎は、はつと思つた。殺すなら、今だと云ふ氣が、心頭をかすめて、一閃する。彼は思はず、膝に力を入ながら、太刀の柄を握りしめて、老人の頸のあたりをじつと見た。僅かに殘つ

た胡麻鹽の毛が、後頭部を半ば蔽つた下に、二筋の腱が、赤い鳥肌の皮膚の皺を、そこだけ目だたないやうに、のばしてゐる。——太郎は、その頸を見た時に、不思議な憐憫を感じ出した。

「人殺し。親殺し。嘘つき。親殺し。親殺し。」

猪熊の爺は、つゞけさまに絶叫しながら、漸く、太郎の膝の下からはね起きた。はね起きると、すばやく倒れた遣戸を小楯にとつて、きよろきよろ、眼を左右にくばりながら、隙さへあれば、逃げようとする。——その一面に赤く地腫れのした、眼も鼻も歪んでゐる、狡猾らしい顔を見ると、太郎は、今更のやうに、殺さなかつたのを後悔した。が、彼は徐に太刀の柄から手を離すと、彼自身を憫むやうに苦笑を脣に浮べながら、手近の古疊の上へしぶしぶ腰を下した。

「おぬしを殺すやうな太刀は、持たぬわ。」

「殺せば、親殺しぢやて。」

彼の容子に安心した、猪熊の爺は、そろそろ遣戸の後から、にじり出ながら、太郎の坐つたのと、すぢかひに敷いた疊の上へ、自分も落ちつかない尻を据ゑた。

「おぬしを殺して、何で親殺しになる？」

太郎は、眼を窓にやりながら、吐き出すやうに、かう云つた。四角に空を切りぬいた窓の中には、枇杷の木が、葉の裏表に日を受けて、明暗さまざまな綠の色を、ひつそりと風のない梢にあつめてゐる。

「親殺しぢやよ。――何故と云へばな。沙金は、わしの義理の子ぢや。されば、つながるおぬしも、子ではないか。」

「ぢや、その子を妻にしてゐるおぬしは、何だ。畜生かな、それとも亦、人間かな。」

老人は、さつきの爭ひに破れた、水干の袖を氣にしながら、唸るやうな聲で云つた。

「畜生でも、親殺しはすまいて。」

太郎は、脣を歪めて、嘲笑つた。

「不相變、達者な口だて。」

「何が達者な口ぢや。」

猪熊の爺は、急に鋭く、太郎の顏を睨めたが、やがて又、鼻で笑ひながら、

「されば、おぬしにきくがな、おぬしは、このわしを、親と思ふか。いやさ、親と思ふ事が出來

るかよ。」
「きくまでもないわ。」
「出來まいな。」
「おお、出來ない。」
「それが手前勝手ぢや。よいか。沙金はお婆のつれ子ぢやよ。が、わしの子ではない。されば、お婆につれそふわしが、沙金を子ぢやと思はねばならぬなら、沙金につれそふおぬしも、わしを親ぢやと思はねばなるまいがな。それをおぬしは、わしを親とも思はぬ。思はぬ所か、場合によつては、打ち打擲もするではないか。そのおぬしが、わしにばかり、沙金を子と思へとは、どう云ふ譯ぢや。妻にして惡いとは、どう云ふ譯ぢや。沙金を妻にするわしが、畜生なら、親を殺さうとするおぬしも、畜生ではないか。」
老人は、勝ち誇つた顔色で、皺だらけの人さし指を、相手につきつけるやうにしながら、眼をかゞやかせて、饒舌り立てた。
「どうぢや。わしが無理か、おぬしが無理か、いかなお主にも、この位な事はわかるであらう。

それもわしとお婆とは、まだわしが、左兵衛府の下人をして居つた頃からの昔馴染ぢや。お婆が、わしをどう思うたか、それは知らぬ。が、わしはお婆を懸想してゐた。」

太郎は、かう云ふ場合、この酒飲みの、狡猾な、卑しい老人の口から、かう云ふ昔語りを聞かうとは夢にも思つてゐなかつた。いや、寧、この老人に、人並の感情があるかどうか、それさへ疑はしいと、思つてゐた。懸想した猪熊の爺と懸想された猪熊の婆と、――太郎は、自ら自分の顏に、一脈の微笑が浮んで來るのを感じたのである。

「その中に、わしはお婆に情人がある事を知つたがな。」

「そんなら、おぬしは嫌はれたのぢやないか。」

「情人があつたとて、わしの嫌はれたと云ふ、證據にはならぬ。話の腰を折るなら、もう止めぢや。」

猪熊の爺は、眞顏になつて、かう云つたが、すぐ又、膝をすゝめて、太郎の方へにじり寄りながら、唾をのみのみ、話し出した。

「その中に、お婆がその情人の子を姙んだて。が、これは何でもない。唯、驚いたのは、その子

を生むと、間もなく、お婆の行き方が、わからなくなつて、しまうた事ぢや。人に聞けば、疫病で死んだの、筑紫へ下つたのと云ひ居るわ。後で聞けば、何の、奈良坂のしるべの許へ、一時身を寄せて居つたげぢや。が、わしは、それから俄に、この世が味氣なくなつてしまうたゞされば、酒も飲む、賭博も打つ。遂には、人に誘はれて、まんまと强盜にさへ身を墮したがな。綾を盜めば綾につけ、錦を盜めば、錦につけ、思ひ出すのは、唯、お婆の事ぢや。それから十年たち、十五年たつて、やつと又お婆に、めぐり會つて見れば――」

今では全く、太郎と一つ疊に坐りこんだ老人は、こゝまで話すと、次第に感情が昂ぶつて來たせゐか、暫くは唯、涙に頰を濡らしながら、口ばかり動かして、默つてゐる。太郎は、隻眼をあげて、別人を見るやうに、相手のべそを搔いた顏を眺めた。

「めぐり會つて見れば、お婆は、もう昔のお婆ではない。わしも、昔のわしでなかつたのぢや。が、つれてゐる子の沙金を見れば、昔のお婆が又、歸つて來たかと思ふ程、俤がよう似てゐるて。されば、わしはかう思うた。今、お婆に別れゝば、沙金とも亦別れなければならぬ。もし沙金と別れまいと思へば、お婆と一しよになるばかりぢや。よし、ならば、お婆を妻にしよう――かう

思切つて、持つたのが、この猪熊の瘦世帶ぢや。……………」

猪熊の爺は、泣き顏を、太郎の顏の側へ持つて來ながら、淚聲でかう云つた。すると、その拍子に、今まで氣のつかなかつた、酒くさい臭ひが、ぷんとする。――太郎は、呆氣にとられて、扇のかげに、鼻をかくした。

「されば、昔から今日の日まで、わしが命にかけて思うたのは、唯、昔のお婆一人ぎりぢや。つまりは今の沙金一人ぎりぢやよ。それを、おぬしは、何かにつけて、わしを畜生ぢやなどゝ云ふ。この老爺がおぬしは、それ程憎いのか。憎ければ、一そ殺すがよい。今こゝで、殺すがよい。おぬしに殺されゝば、わしも本望ぢや。が、よいか、親を殺すからは、おぬしも、畜生ぢやぞよ。畜生が畜生を殺す――これは、面白からう。」

淚が乾くに從つて、老人は又、元のやうに、ふて腐れた惡態をつきながら、皺だらけの人さし指をふり立てた。

「畜生が畜生を殺すのぢや。さあ殺せ。おぬしは、卑怯者ぢやな。ははあ、さつき、わしが阿濃に藥をくれようとしたら、おぬしが腹を立てたのを見ると、あの阿呆を孕ませたのも、おぬしら

しいぞ。そのおぬしが、畜生でなうて、何が畜生ぢや。」

から云ひながら、老人は、一はやく、倒れた遣戸の向うへとび退いて、すはと云へば、逃げようとする氣配を示しながら、紫がゝつた顏中の造作を、憎々しく歪めて見せる。――太郎は、あまりの雜言に堪へ兼ねて、立上りながら、太刀の柄へ手をかけたが、やめて、脣を急に動かすと、忽ち相手の顏へ、一塊の痰を吐きかけた。

「おぬしのやうな畜生には、これが丁度、相當だわ。」

「畜生呼ばゝりは、措いてくれ。沙金は、おぬしばかりの妻かよ。次郎殿の妻でもないか。されば、弟の妻を偸むおぬしもやはり、畜生ぢや。」

太郎は、再この老爺を殺さなかつた事を後悔した。が、同時に又、殺さうと云ふ氣の起る事を惧れもした。そこで、彼は、隻眼を火のやうに閃めかせながら、默つて、席を蹴つて去らうとする――すると、その後から、猪熊の爺は又、指をふりふり、罵詈を浴びせかけた。

「おぬしは、今の話をほんとうだと思ふか。あれは、みんな嘘ぢや。婆が昔馴染ぢやと云ふのも、嘘なら、沙金がお婆に似てゐると云ふのも嘘ぢや。よいか。あれは、みんな嘘ぢや。が、咎めた

くも、おぬしは咎められまい。わしは嘘つきぢやよ。畜生ぢやよ。おぬしに殺されそくなつた、人でなしぢやよ。……………」

老人は、かう唾罵を飛ばしながら、追ひ追ひ、呂律がまはらなくなつて來た。が、猶も濁つた眼に懸命の憎惡を集めながら、足を踏み鳴らして、意味のない事を叫びつゞける。――太郎は、堪へ難い嫌惡の情に襲はれて、耳を掩ふやうにしながら、匇々、猪熊の家を出た。外には、稍傾きかゝつた日がさして、不相變その中を、燕が輕々と流れてゐる。

「何處へ行かう。」

外へ出て、思はずかう小首を傾けた太郎は、ふとさつきまでは、自分が沙金に會ふつもりで、猪熊へ來たのに、氣がついた。が、どこへ行つたら、沙金に會へると云ふ、當てもない。

「まゝよ。羅生門へ行つて、日の暮れるのでも待たう。」

彼のこの決心には、勿論、幾分沙金に會へると云ふ望みが、隱れてゐる。沙金は、日頃から、强盜にはいる夜には、好んで、男裝束に身をやつした。その裝束や打物は、皆羅生門の樓上に、皮子へ入れてしまつてある。――彼は、心をきめて、小路を南へ、大股に歩き出した。

それから、三條を西へ折れて、耳敏川の向う岸を、四條まで下つて行く――丁度、その四條の大路へ出た時の事である。太郎は、一町を隔てゝ、この大路を北へ、立本寺の築土の下を、話しながら通りかかる、二人の男女の姿を見た。朽葉色の水干とうす紫の衣とが、影を二つ重ねながら、はればれした笑聲を後に殘して、小路から小路へ通りすぎる。めまぐるしい燕の中に、男の黑鞘の太刀が、きらりと日に光つたかと思ふと、二人はもう見えなくなつた。

太郎は、額を曇らせながら、思はず路側に足をとめて、苦しさうに呟いた。

「どうせみんな畜生だ。」

六

更けやすい夏の夜は、早くも亥の上刻に迫つて來た。――

月はまだ上らない。見渡す限り、重苦しい暗の中に、聲もなく眠つてゐる京の町は、加茂川の水面がかすかな星の光をうけて、ほのかに白く光つてゐるばかり、大路小路の辻々にも、今は漸

く灯影が絶えて、内裏と云ひ、芒原と云ひ、町家と云ひ、悉、靜な夜空の下に、色も形も朧げな、たゞ廣い平面を、唯、際限もなく擴げてゐる。それが又、右京左京の區別なく、何處も森閑と音を絕つて、たまに耳にはいるのは、すぢかひに聲を飛ばす時鳥の外に、何もない。もしその中に一點でも、人なつかしい火がゆらめいて、かすかなもの〻聲が聞えるとすれば、それは、香の煙のたちこめた大寺の內陣で、金泥も綠靑も所斑な、孔雀明王の畫像を前に、常燈明の光をたのむ參籠の人々か、さもなくば、四條五條の橋の下で、短夜を芥火の影に偸む、乞食法師の群であらう。或は又、夜な夜な、往來の人をおびやかす朱雀門の古狐が、瓦の上、草の間に、ともすともなくともすと云ふ、鬼火の類であるかも知れない。が、その外は、北は千本、南の鳥羽街道の境を盡して、蚊遣りの煙のにほひのする、夜色の底に埋もれながら、河原蓬の葉を動かす、微風もまるで知らないやうに、沈々として更けてゐる。

その時、王城の北、朱雀大路のはづれにある、羅生門のほとりには、時ならない弦打ちの音が、さながら蝙蝠の羽音のやうに、互に呼びつ答へつして、或は一人、或は三人、或は五人、或は八人、怪しげな出立ちをしたもの〻姿が、次第に何處からか、つどつて來た。覺つかない星明りに

透かして見れば、太刀を佩くもの、矢を負ふもの、斧を執るもの、戟を持つもの、皆それぞれ、得物に身を固めて、脛布藁沓の装ひも甲斐々々しく、門の前に渡した石橋へ、むらむらと集つて、列を作る――と、まつさきには、太郎がゐた。それにつゞいて、さつきの爭ひも忘れたやうに、猪熊の爺が、物々しく鉾の先を、きらりと暗に閃かせる。續いて、次郎、猪熊の婆、少し離れて、阿濃もゐる。それにかこまれて、沙金は一人、黒い水干に太刀を佩いて、胡簶を背に弓杖をつきながら、一同を見渡して、あでやかな口を開いた。――

「いゝかい。今夜の仕事は、何時もより手ごはい相手なんだからね。皆そのつもりで、ゐておくれ。さしづめ十五六人は、太郎さんと一しよに、裏から、後は妾と一しよに、表からはいつて貰はう。中でも目ぼしいのは、裏の廐にゐる陸奥出の馬だがね。これは、太郎さん、あなたに頼んで置くわ。よくつて。」

太郎は、默つて星を見てゐたが、これを聞くと、脣を歪めながら、頷いた。

「それから斷つて置くが、女子供を質になんぞとつては、いけないよ。あとの始末が面倒だからね。ぢや、人數が揃つたら、そろそろ出かけよう。」

から云つて、沙金は弓をあげて、一同を麾いたが、しよんぼり、指を嚙んで立つてゐる、阿濃を顧みると、又やさしく語を添へた。

「ぢや、お前は此處で、待つてゐておくれ。一刻か二刻で、皆歸つてくるからね。」

阿濃は、子供のやうに、うつとり沙金の顏を見て、靜に合點した。

「されば、行かう。ぬかるまいぞ、多襄丸。」

猪熊の爺は、戟をたばさみながら、隣にゐる仲間をふり返つた。蘇芳染の水干を着た相手は、太刀の鍔を鳴らして「ふゝん」と云つた儘、答へない。その代りに、斧をかついだ、靑髭のさわやかな男が、横あひから、口を出した。

「おぬしこそ、又影法師なぞにおびえまいぞ。」

これと共に、二十三人の盗人どもは、ひとしく忍び笑ひを洩らしながら、沙金を中に、雨雲のむらがる如く、一團の殺氣をこめて、朱雀大路へ押し出すと、溝を溢れた泥水が、窪地々々へ引かれるやうに暗にまぎれて、何處へ行つたか、忽の中に、見えなくなつた。…………

後には、唯、何時か月しろのした、うす明い空にそむいて、羅生門の高い甍が、寂然と大路を

見下してゐるばかり、又しても時鳥の、聲が遠近に斷續して、今まで七丈五級の大石段に、佇んでゐた阿濃の姿も、どこへ行つたか、見えなくなつた。——が、間もなく、門上の樓に、おぼつかない灯がともつて、窓が一つ、かたりと開くと、その窓から、遠い月の出を眺めてゐる、小さな女の顔が出た。阿濃は、かうして、次第に明くなつて行く京の町を、目の下に見下しながら、胎兒の動くのを感じる毎に、獨りうれしさうに、ほゝ笑んでゐるのである。

七

次郎は、二人の侍と三頭の犬とを相手にして、血にまみれた太刀を揮ひながら、小路を南へ二三町、下るともなく下つて來た。今は沙金の安否を氣づかつてゐる餘裕もない。侍は衆をたのんで、隙間もなく斬りかける。犬も毛の逆立つた背を聳やかして、前後を嫌はず、飛びかゝつた。折からの月の光に、往來は、ほのかながら、打つ太刀をたがはせない程に、明くなつてゐる。——次郎は、その中で、人と犬とに四方を圍まれながら、必死になつて、斬りむすんだ。相手を殺すか、相手に殺されるか、二つに一つより生きる路はない。彼の心には、かう云ふ覺

悟と共に、殆常軌を逸した、兇猛な勇氣が、刻々に力を増して來た。相手の太刀を受止めて、それを向ふへ斬返しながら、足もとを襲はうとする犬を、突嗟に横へ躱してしまふ。――彼は、この働きを殆同時にした。それればかりではない。どうかするとその拍子に斬返した太刀を、逆にまはして、後から來る犬の牙を、防がなければならない事さへある。それでも流石に何時か疵をうけたのであらう。月明りにすかして見ると、赤黒いものが一すぢ、汗ににじんで、左の小鬢から流れてゐる。が、死に身になつた次郎には、その痛みも氣にならない。彼は、唯、色を失つた額に、秀でた眉を一文字に顰めながら、恰も太刀に使はれる人のやうに、烏帽子も落ち、水干も破れた儘、縱横に刃を交へてゐるのである。

それがどの位續いたか、わからない。が、やがて、上段に太刀をふりかざした侍の一人が、急に半身を後へそらせて、けたゝましい悲鳴をあげたと思ふと、次郎の太刀は、早くもその男の脾腹を斜に、腰のつがひまで斬りこんだのであらう。骨を切る音が鈍く響いて、横に薙いだ太刀の光が、うす暗をやぶつてきらりとする。――と、その太刀が宙にをどつて、もう一人の侍の太刀を、丁と下から拂つたと見る間に、相手は肘をしたゝか斬られて、矢庭に元來た方へ、敗走した。

それを次郎が追ひすがりざまに、斬らうとしたのと、狩犬の一頭が鞠のやうに身をはずませて、彼の手下へかぶりついたのとが、殆、同時の働きである。彼は、一足後へとびのきながら、ふりかむつた血刀の下に、全身の筋肉が一時に弛むやうな氣落ちを感じて、月に黑く逃げてゆく相手の後姿を見送つた。さうしてそれと共に、惡夢から覺めた人のやうな心もちで、今自分のゐる所が、外ならない立本寺の門前だと云ふ事に氣がついた。——

　これから半刻ばかり以前の事である。藤判官の屋敷を、表から襲つた偸盗の一群は、中門の右左、車宿の內外から、思ひもかけず射出した矢に、先膽を破られた。まつさきに進んだ眞木島の十郎が、太腿を箆深く射られて、辷るやうにどうと倒れる。それを始めとして、瞬く間に二三人、或は顏を破り、或は臂を傷けて、慌しく後を見せた。射手の數は、勿論何人だかわからない。が、染羽白羽の尖り矢は、中には物々しい鏑の音さへ交へて、又一しきり飛んで來る。後に下つてゐた沙金でさへ、遂には黑い水干の袖を斜に、流れ矢に射透された。

「御頭に怪我をさすな。射ろ。射ろ。味方の矢にも、鏃があるぞ。」

交野の平六が、斧の柄をたゝいて、かう罵ると、「おう」と云ふ答へがあつて、忽ち盗人の中か

らも、亦矢叫びの聲が上り始める。太刀の柄に手をかけて、やはり後に下つてゐた次郎は、平六のこの語に、一種の苛責を感じながら、見ないやうにして沙金の顏を横からそつと覗いて見た。沙金は、この騷ぎの中にも冷然と佇みながら、殊更月の光にそむきゐて、弓杖をついた儘、口角の微笑もかくさず、ぢつと矢の飛び交ふのを、眺めてゐる。――すると、平六が、又いら立たしい聲を上げて、横あひから、かう叫んだ。

「何故十郎を捨てゝ置くのぢや。おぬしたちは矢玉が恐しうて、仲間を見殺しにする氣かよ。」

太腿を縫はれた十郎は、立ちたくも立てないのであらう、太刀を杖にして居ざりながら、丁度羽根をぬかれた鴉のやうに、矢を避け避け、もがいてゐる。次郎は、それを見ると、異樣な戰慄を覺えて、思はず腰の太刀をぬき拂つた。が、平六はそれを知ると、流し眄にぢろりと彼の顏を見て、

「おぬしは、お頭に附添うてゐればよい。十郎の始末は、小盜人で澤山ぢや。」と、嘲るやうに云ひ放つた。

次郎は、この語に皮肉な侮蔑を感じて、脣を嚙みながら、銳く平六の顏を見返した。――する

と、丁度その途端である。十郎を救はうとして、ばらばらと走り寄つた、盗人たちの機先を制して、耳をつんざく一聲の角を合圖に、紛々として亂れる矢の中を、門の內から耳の尖つた、牙の銳い、狩犬が六七頭すさまじい唸り聲を立てながら、夜目にも白く埃を卷いて、まつしぐらに衝いて出た。續いてその後から十人十五人、手に手に打物を取つた侍が、先を爭つて屋敷の外へ、ひしめきながら溢れて來る。味方も勿論、見てはゐない。斧をふりかざした平六を先に立てゝ、太刀や鉾が林のやうに、きらめきながら並んだ中から、人とも獸ともつかない聲を、誰とも知らずわつと上げると、始めのひるんだ氣色にも似ず一度に備へを立て直して、猛然として殺到する。沙金も、今は弓にたかうすべの矢を番へて、まだ微笑を絕たない顏に、一脈の殺氣を浮べながら、すばやく路ばたの築土の壞れを小楯にとつて、身がまへた。――

やがて敵と味方は、見る見る中に一つになつて、氣の違つたやうにわめきながら、十郎の倒れてゐる前後をめぐつて、無二無三に打合ひ始めた。その中に又、狩犬がけたたましく、血に餓ゑた聲を響かせて、戰はいづれが勝つとも、暫くの間はわからない。そこへ一人、裏へまはつた仲間の一人が、汗と埃とにまみれながら、二三ケ所薄手を負うた容子で、血に染まつた儘かけつけ

た。肩にかついだ太刀の刃のこぼれでは、この方の戰も、やはり存外手痛かつたらしい。

「あつちは皆ひき上げますぜ。」

その男は、月あかりにすかしながら、沙金の前へ來ると、息を切らし切らし、かう云つた。

「何しろ肝腎の太郎さんが、門の中で、奴等に圍まれてしまつたと云ふ騷ぎでしてな。」

沙金と次郎とは、うす暗い築土の影の中で、思はず眼と眼を見合せた。

「圍まれて、どうしたえ。」

「どうしたか、わかりません。が、事によると、――まあそれもあの人の事だから、萬々大丈夫だらうとは思ひますがな。」

次郎は、顏をそむけながら、沙金の側を離れた。が、小盜人は勿論そんな事は、氣にとめない。

「それにお爺やお婆まで、手を負つたやうでした。あの分ぢや殺された奴も、四五人はありませう。」

沙金は頷いた。さうして次郎の後から追ひかけるやうに、險のある聲で、

「ぢや、私たちもひき上げましよう。次郎さん、口笛を吹いて頂戴。」と云つた。

次郎は、あらゆる表情が、凝り固まつたやうな顔をしながら、左手の指を口へ含んで、鋭く二聲、口笛の音を飛ばせた。これが、仲間にだけ知られてゐる、引揚げの時の合圖である。が、盜人たちは、この口笛を聞いても、踵をめぐらす容子がない。（實は、人と犬とにとりかこまれてめぐらす丈の餘裕がなかつたせゐであらう。）口笛の音は、蒸暑い夜の空氣を破つて、空しく小路の向うに消えた。さうしてその後には、人の叫ぶ聲と、犬の吠える聲と、それから太刀の打ち合ふ音とが、遙な空の星を動かして、一層騷然と、立ちのぼつた。

沙金は、月を仰ぎながら、稻妻の如く眉を動かした。

「仕方がないわね。ぢや、私たちだけ歸りましよう。」

さう云ふ話のまだ完らない中に、さうして、次郎がそれを聞かないものゝやうに、再指を口に含んで相圖を吹かうとした時に、盜人たちの何人かゞ、むらむらと備へを亂して、左右へ分れた中から、人と犬とが一つになつて、二人の近くへ迫つて來た。――と思ふと、沙金の手に弓返りの音がして、まつさきに進んだ白犬が一頭、たかうすべの矢に腹を縫はれて、苦鳴と共に、横に仆れる。見る間に、黒血がその腹から、斑々として砂に垂れた。が、犬に續いた一人の男は、

それにも悸ぢず、太刀をふりかざして、横あひから次郎に斬つてかゝる。その太刀が、殆ど無意識に受けとめた、次郎の太刀の刃を打つて、鏘然とした響きと共に、瞬く間、火花を散らした。――次郎はその時、月あかりに、汗にぬれた赤鬚と切り裂かれた樺櫻の直垂とを、相手の男に認めたのである。

彼は直下に、立本寺の門前を、ありありと眼に浮べた。さうして、それと共に、恐しい疑惑が、突然として、彼を脅かした。沙金はこの男と腹を合せて、兄のみならず、自分をも殺さうとするのではあるまいか。一髪の間にかう云ふ疑ひを抱いた次郎は、眼の前が暗くなるやうな怒りを感じて、相手の太刀の下を、脱兎の如く、くゞりぬけると、兩手に緊く握つた太刀を、奮然として、相手の胸に突き刺した。さうして、一たまりもなく仆れる相手の男の顔を、したゝか藁沓でふみにじつた。

彼は、相手の血が、生暖く彼の手にかゝつたのを感じた。太刀の先が肋の骨に觸れて、強い抵抗を受けたのを感じた。さうして又、斷末魔の相手が、ふみつけた彼の藁沓に、下から何度も噛みついたのを感じた。それらが、彼の復讐心に、快い刺戟を與へたのは、勿論であらう。が、それ

につれて、彼は又、或名狀し難い心の疲勞に、襲はれた。もし周圍が周圍だつたら、彼は必そこに身を投げ出して、飽くまで休息を貪つた事であらう。しかし、彼が相手の顏をふみつけて、血のしたゝる太刀を向ふの胸から引きぬいてゐる中に、もう何人かの侍は、四方から彼をとり圍んだ。いや、既に後から、忍びよつた男の鉾は、危く鋒を、彼の背に擬してゐる。が、その男は、不意に前へよろめくと、鉾の先に次郎の水干の袖を裂いて、うつむけにがくりと仆れた。たかうすべの矢が一筋、颯然と風を切りながら、一ゆりゆつて後頭部へ、ぐさと箆深く立つたからである。

それから後の事は、次郎にも、まるで夢のやうにしか思はれない。彼は唯、前後左右から落ちて來る太刀の中に、獸のやうな唸り聲を出して、相手を選まず渡り合つた。周圍に沸き返つてゐる、聲とも音ともつかない物の響と、その中に出沒する、血と汗とにまみれた人の顏と――その外のものは、何も眼にはいらない。唯、流石に、後にのこして來た沙金の事が、太刀から迸る火花のやうに、時々心に閃いた。が、閃いたと思ふ中に、刻々迫つて來る生死の危急が、忽ちそれを搔消してしまふ。さうして、その後には又、太刀音と矢叫びとが、天を掩ふ蝗の羽音のやうに、

築土にせかれた小路の中で、とめどもなく湧き返つた。――次郎は、かう云ふ勢に促されて、何時か二人の侍と三頭の犬とに追はれながら、小路を南へ少しづゝ斬り立てられて來たのである。が、相手の一人を殺し、一人を追拂つた後で、犬だけなら、恐れる事もないと思つたのは、結局次郎の空だのみにすぎなかつた。犬は三頭が三頭ながら、大きさも毛なみも一對な茶まだらの逸物で、犢もこれにくらべれば、大きい事はあつても、小さい事はない。それが皆、口のまはりを人間の血に濡らして、前に變らず彼の足下へ、左右から襲ひかゝつた。一頭の頤を蹴返すと、一頭が肩先へ躍りかゝる。それと同時に、一頭の牙が、すんでに太刀を持つた手を、嚙まうとした。と又、三頭とも巴のやうに、彼の前後に輪を畫いて、尾を空ざまに上げながら、砂のにほひを嗅ぐやうに、頤を前足へすりつけて、びようびようと吠え立てる。――相手を殺したのに、氣のゆるんだ次郎は、前よりも一層、この狩犬の執拗い働きに惱まされた。

　しかも、いら立てば立つ程、彼の打つ太刀は皆空を斬つて、やゝともすれば、足場を失はせようとする。犬は、その隙に乘じて、熱い息を吐きながら、愈休みなく肉薄した。もうかうなつては、唯、窮餘の一策しか殘つてゐない。そこで、彼は、事によつたら、犬が追ひあぐんで、ど

こかに逃げ場が出來るかも知れないと云ふ、一縷の望にたよりながら、打ち外した太刀を引いて、折から足を狙つた犬の背を危く向ふへとび越えると、月の光を便りにして、ひた走りに走り出した。が、元よりこの企ても、所詮は溺れようとするものが、藁でもつかむのと變りはない。犬は、彼が逃げるのを見ると、齊しくきりりと尾を捲いて、後足に砂を蹴上げながら眞一文字に追ひすがつた。

が、彼のこの企ては、單に失敗したと云ふだけの事ではない。實はそれが爲に、反て虎口にはいるやうな事が出來たのである。――次郎は立本寺の辻をきはどく西へ切れて、ものゝ二町と走るか走らない中に、忽ち行く手の夜を破つて、今自身を追つてゐる犬の聲より、より多く犬の聲が、耳を貫いて起るのを聞いた。それから、月に白らんだ小路をふさいで、黑雲に足のはえたやうな犬の群が、右往左往に入り亂れて、餌食を爭つてゐる樣が見えた。最後に――それは殆ど寸刻の暇もなかつた位である。すばやく彼を驅けぬけた狩犬の一頭が、友を集めるやうに高く吠えると、そこに狂つてゐた犬の群は、悉く相呼び相答へて、一度に狺々の聲をあげながら、見る間に彼を、その生きて動く、羶い毛皮の渦卷きの中へ捲きこんだ。深夜、この小路に、かうまで犬

の集まつてゐたのは、元より何時もある事ではない。次郎は、この廢都を我物顏に、十二十と頭を揃へて、血の臭ひに餓ゑて歩く、獰猛な野犬の群が、ここに捨ててあつた疫病の女を、宵の中から餌食にして、互に牙を嚙みながら、そのちぎれちぎれな肉や骨を、奪合つてゐる所へ、來たのである。

犬は、新しい餌食を見ると、一瞬の暇もなく、嵐に吹かれて飛ぶ稻穗のやうに、八方から次郎へ飛びかかつた。たくましい黑犬が、太刀の上を躍り越えると、尾のない狐に似た犬が、後から來て、肩をかすめる。血に濡れた口髭が、ひやりと頰にさはつたかと思ふと、砂だらけな足の毛が、斜に眉の間を撫でた。斬らうにも突かうにも、どれと相手を定める事が出來ない。前を見ても、後を見ても、唯、靑くかがやいてゐる眼と、絕えず喘いでゐる口とがあるばかり、しかもその眼とその口が、數限りもなく、路を埋めて、ひしひしと足下に迫つて來る。――次郎は、太刀を輪はしながら、急に、猪熊の婆の話を思ひ出した。「どうせ死ぬのなら一思ひに死んだ方がいい。」彼は、さう心に叫んで、潔く眼をつぶつたが、喉を嚙まうとする犬の息が、暖く顏へかかると、思はず又、眼を開いて、横なぐりに太刀をふるつた。何度それを繰返したか、わからない。

しかし、その中に、腕の力が、次第に衰へて來たのであらう、打つ太刀が、一太刀毎に重くなつた。今では踏む足さへ危くなつた。そこへ、斬つた犬の數よりも、遙に多い野犬の群が、或は芒原の向うから、或は築土の壞れをぬけて、續々として、つどつて來る。――

次郎は、絶望の眼をあげて、天上の小さな月を一瞥しながら、太刀を兩手にかまへた儘、兄の事や沙金の事を、一度に石火の如く、思ひ浮べた。兄を殺さうとした自分が、反つて犬に食はれて死ぬ。これより至極な天罰はない。――さう思ふと、彼の眼には、自ら涙が浮んだ。が、犬はその間も、用捨はしない。さつきの狩犬の一頭が、ひらりと茶まだらな尾をふるつたかと思ふと、次郎は忽ち左の太腿に、鋭い牙の立つたのを感じた。

するとその時である。月にほのめいた兩京二十七坊の夜の底から、かまびすしい犬の聲を壓して遙に戞々たる馬蹄の音が、風のやうに空へあがり始めた。………

しかしその間も阿濃だけは、安らかな微笑を浮べながら、羅生門の樓上に佇んで、遠くの月の

出を眺めてゐる。東山の上が、うす明く靑んだ中に、旱に瘦せた月は、徐にさみしく、中空に上つて行く。それにつれて、加茂川にかかつてゐる橋が、その白々とした水光りの上に、何時か暗く浮上つて來た。

獨り加茂川ばかりではない。さつきまでは、眼の下に黑く死人のにほひを藏してゐた京の町も、僅の間に、つめたい光の鍍金をかけられて、今では、越の國の人が見ると云ふ蜃氣樓のやうに、塔の九輪や伽藍の屋根を、おぼつかなく光らせながら、ほのかな明るみと影との中に、あらゆる物象を、ぼんやりとつつんでゐる。町をめぐる山々も、日中のほとぼりを返してゐるのであらう、自ら頂を朧げな月明りにぼかしながら、どの峯も、ぢつと物を思つてでもゐるやうに、うすい靄の上から、靜に荒廢した町を見下してゐる――と、その中で、かすかに凌霄花のにほひがした。門の左右を埋める藪の所々から、簇々と蔓をのばしたその花が、今では古びた門の柱にまとひついて、ずり落ちさうになつた瓦の上や、蜘蛛の巣をかけた樒の間へ、はひ上つたのがあるからであらう。……

窓によりかかつた阿濃は、鼻の穴を大きくして、思入れ凌霄花のにほひを吸ひながら、なつか

しい次郎の事を、さうして、早く日の日を見ようとして、動いてゐる胎兒の事を、それからそれへと、とめどなく思ひつづけた。――彼女は双親を覺えてゐない。生れた所の容子さへ、もう完く忘れてゐる。何でも幼い時に一度、この羅生門のやうな、大きな丹塗の門の下を、誰かに抱くか、負はれかして、通つたと云ふ記憶がある。が、これも勿論、どの位ほんとうだか、確な事はわからない。唯、どうにかかうにか、覺えてゐるのは、物心がついてから後の事ばかりである。さうして、それが又、覺えてゐない方がよかつたと思ふやうな事ばかりである。或時は、町の子供にいぢめられて、五條の橋の上から河原へ、さかさまにつき落とされた。或時は、饑にせまつてした盜みの咎で、裸の儘、地藏堂の梁へつり上げられた。それがふと沙金に助けられて、自然とこの盜人の群にはいつたが、それでも苦しい目にあふ事は、以前と少しも變りがない。白痴に近い天性を持つて生まれた彼女にも、苦しみを、苦しみとして感じる心はある。阿濃は猪熊の婆の氣に逆つては、よくむごたらしく打擲された。猪熊の爺には、醉つた勢で、よく無理難題を云ひかけられた。ふだんは何かと劬つてくれる沙金でさへ、癇に障ると、彼女の髮の毛をつかんで、ずるずる引きずりまはす事がある。まして、外の盜人たちは、打つにも叩くにも、用捨はない。

阿濃は、その度に何時もこの羅生門の上へ逃げて來ては、獨りでしくしく泣いてゐた。もし次郎が來なかつたら、さうして時々、やさしい語をかけてくれなかつたら、恐らくとうにこの門の下へ身を投げて、死んでしまつてゐた事であらう。

煤のやうなものが、ひらひらと月にひるがへつて、甍の下から、窓の外をうす青い空へ上がつた。云ふまでもなく蝙蝠である。阿濃は、その空へ眼をやつて、疎な星に、うつとりと眺め入つた。――すると又一しきり、腹の兒が、身動きをする。彼女は急に耳をすますやうにして、その身動きに氣をつけた。彼女の心が、人間の苦しみをのがれようとして、もがくやうに、腹の兒は又、人間の苦しみを嘗めに來ようとして、もがいてゐる。が、阿濃は、そんな事は考へない。唯、母になると云ふ喜びだけが、さうして、又、自分も母になれると云ふ喜びだけが、この凌霄花のにほひのやうに、さつきから彼女の心を一ぱいにしてゐるからである。

その中に、彼女はふと、胎兒が動くのは、眠れないからではないかと思ひ出した。事によると、眠られない餘りに、小さな手や足を動かして、泣いてでもゐるのかも知れない。「坊やはいい兒だね。おとなしく、ねんねしてお出で、今にぢき夜が明けるよ。」――彼女は、かう胎兒に囁いた。

が、腹の中の身動きは、止みさうで、容易に止まない。その中に痛みさへ、どうやら少しづつ加はつて來る。阿濃は、窓を離れて、その下に蹲りながら、結び燈臺のうす暗い灯にそむいて、腹の中の兒を慰めようと、細い聲で唄をうたつた。

君をおきて
あだし心を
われ持たばや
なよや、末の松山
波も越えなむや
波も越えなむ

うろ覺えに覺えた唄の聲は、灯のゆれるのに從つて、ふるへふるへ、しんとした樓の中に斷續した。唄は、次郎が好んでうたふ唄である。醉ふと、彼は必、扇で拍子をとりながら、眼をねむつて、何度もこの唄をうたふ。沙金はよく、その節廻しが可笑しいと云つて、手を打つて笑つた。

――その唄を、腹の中の兒が、喜ばないと云ふ筈はない。

しかし、その兒が、實際次郎の胤かどうか、それは、誰も知つてゐるものがない。阿濃自身も、この事だけは、完く口をつぐんでゐる。たとへ盜人たちが、意地惡く兒の親を問ひつめても、彼女は兩手を胸に組んだ儘、恥しさうに眼を伏せて、愈〻執拗く默つてしまふ。さう云ふ時は、必垢じみた彼女の顏に女らしい血の色がさして、何時か睫毛にも、涙がたまつて來る。盜人たちは、それを見ると、益々何かと囃し立てゝ、腹の兒の親さへ知らない、阿呆な彼女を嘲笑つた。が、阿濃は胎兒が次郎の子だと云ふ事を、緊く心の中で信じてゐる。さうして、自分の戀してゐる次郎の子が、自分の腹にやどるのは、當然な事だと信じてゐる。この樓の上で、獨りさびしく寢る毎に、必夢に見るあの次郎が、親でなかつたとしたならば、誰がこの兒の親であらう。――阿濃は、この時、唄をうたひながら、遠い所を見るやうな眼をして、蚊に刺されるのも知らずに、現ながらの夢を見た。人間の苦しみを忘れた、しかも又人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、傷しい夢である。(涙を知らないものゝ見る事が出來る夢ではない。)そこでは、一切の惡が、眼底を拂つて、消えてしまふ。が、人間の悲しみだけは、――空をみたしてゐる月の光のやうに、大きな人間の悲しみだけは、やはりさびしく嚴に殘つてゐる。……

なよや、末の松山
浪も越えなむや
浪も越えなむ

唄の聲は、ともし火の光のやうに、次第に細りながら消えて行つた。さうして、それと共に、力のない呻吟の聲が、暗を誘ふ如く、かすかに洩れ始めた。阿濃は、唄の半ばで、突然下腹に、鋭い疼痛を感じ出したのである。

相手の用意に裏を搔かれた盜人の群は、裏門を襲つた一隊も、防ぎ矢に射しらまされたのを始めとして、中門を打つて出た侍たちに、やはり手痛い逆撃を食はせられた。高が青侍の腕だてと思ひ侮つてゐた先手の何人かも、算を亂しながら、背を見せる――中でも、臆病な猪熊の爺は、誰よりも先に逃げかゝつたが、どうした拍子か、方角を誤つて、太刀をぬきつれた侍たちの唯中へ、はいるともなく、はいつてしまつた。酒肥りのした體格と云ひ、物々しく鉾を提げた容子と

云ひ、一かど手なみのすぐれたものと、思はれでもしたのであらう。侍たちは、彼を見ると、互に目くばせを交しながら、二人三人、鋒を揃へた儘、ぢりぢり前後から、つめよせて來た。

「遁るまいぞ。わしはこの殿の家人ぢや。」

猪熊の爺は、苦しまぎれに慌しくかう叫んだ。

「嘘をつけ。――おのれにたばかれるやうな阿呆と思ふか。――往生際の悪い老爺ぢや。」

侍たちは、口々に罵りながら、早くも太刀を打ちかけようとする。もうかうなつては、逃げようとしても逃げられない。猪熊の爺の顔は、とうとう死人のやうな色になつた。

「何が嘘ぢや。何が嘘ぢやよ。」

彼は、眼を大きくして、あたりを頻に見廻しながら、逃げ場はないかと氣をあせつた。額には、つめたい汗が湧いて來る。手もふるへが止まらない。が、周圍は、何處を見ても、虐たらしい生死の爭ひが、盜人と侍との間に戰はれてゐるばかり、靜な月の下ではあるが、烈しい太刀音と叫喚の聲とが、一塊になつた敵味方の中から、ひつきりなしにあがつて來る。――所詮逃げられないと覺つた彼は、眼を相手の上に据ゑると、忽別人のやうに、兇悪な氣色になつて、上下の齒

をむき出しながら、すばやく鉾をかまへて、威丈高に罵つた。

「嘘をついたがどうしたのぢや。阿呆。外道。畜生。さあ來い。」

かう云ふ語と共に、鉾の先からは、火花が飛んだ。中でも屈竟な、赤痣のある侍が一人、衆に先んじて傍から、無二無三に斬つてかゝつたのである。が、元より年をとつた彼が、この侍の相手になる譯はない。まだ十合と刃を合せない中に、見る見る、鉾先がしどろになつて、次第に後へ下つて行く。それがやがて小路のまん中まで、斬り立てられて來たかと思ふと、相手は、大きな聲を出して、彼が持つてゐた鉾の柄を、見事に半ばから、切り折つた。と、又一太刀、今度は、右の肩先から胸へかけて、袈裟がけに浴せかける。猪熊の爺は、尻居に仆れて、とび出しさうに大きく眼を見ひらいたが、急に恐怖と苦痛とに堪へられなくなつたのであらう、慌てゝ高這ひに這ひのきながら、聲をふるはせて、わめき立てた。

「欺し討ぢや。欺し討を、食はせ居つた。助けてくれ。欺し討ぢや。」

赤痣の侍は、その後から又、のび上つて、血に染んだ太刀をふりかざした。その時もし、どこからか猿のやうなものが、走つて來て、帷子の裾を月にひるがへしながら、彼等の中へとびこま

なかつたとしたならば、猪熊の爺は、既に、あへない最期を遂げてゐたのに相違ない。が、その猿のやうなものは、彼と相手との間を押しへだてると、突嗟に小刀を閃かして、相手の乳の下へ刺し通した。さうして、それと共に、相手の横に拂つた太刀をあびて、恐しい叫び聲を出しながら、焼け火箸でも踏んだやうに、勢よくとび上ると、その儘、向ふの顔へしがみついて、二人一しよにどうと仆れた。

それから、二人の間には、殆人間とは思はれない、猛烈な攫み合ひが、始まつた。打つ。噛む。髪をむしる。しばらくは、どちらがどちらともわからなかつたが、やがて、猿のやうなものが、上になると、再小刀がきらりと光つて、組みしかれた男の顔は、痣だけ元のやうに赤く残しながら、見てゐる中に、色が變つた。すると、相手もその儘、力が抜けたのか、侍の上へ折り重なつて、仰向けにぐたりとなる――その時、始めて月の光にぬれながら、息も絶え絶えに喘いでゐる、皺だらけの、蟇に似た、猪熊の婆の顔が見えた。

老婆は、肩で息をしながら、侍の屍體の上に横たはつて、まだ相手の髻をとらへた、左の手もゆるめずに、しばらくは苦しさうな呻吟の聲をつづけてゐたが、やがて白い眼を、ぎよろりと一

つ動かすと、干からびた脣を、二三度無理に動かして、

「お爺さん。お爺さん。」と、かすかに、しかもなつかしさうに、自分の夫を呼びかけた。が、誰もこれに答へるものはない。猪熊の爺は、老女の救を得ると共に、打物も何も投げすてゝ、こけつまろびつ、血に辷りながら、逸早くどこかへ逃げてしまつた。その後にも勿論、何人かの盗人たちは、小路の其處此處に、得物を揮つて、必死の戰をつゞけてゐる。が、それらは皆、この垂死の老婆にとつて、相手の侍と同じやうな、行路の人に過ぎないのであらう。――猪熊の婆は、次第に細つて行く聲で、何度となく、夫の名を呼んだ。さうして、その度に、答へられないさびしさを、負うてゐる創の痛みよりも、より鋭く味はされた。しかも、刻々衰へて行く視力には、次第に周圍の光景が、ぼんやりと霞んで來る。唯、自分の上にひろがつてゐる大きな夜の空と、その中にかゝつてゐる小さな白い月と、それより外のものは、何一つはつきりとわからない。

「お爺さん。」

老婆は、血の交つた唾を、口の中にためながら、囁くやうにかう云ふと、それなり恍惚とした、失神の底に、――恐らくは、さめる時のない眠りの底に、昏々として沈んで行つた。……………

その時である。太郎は、そこを栗毛の裸馬に跨つて、血にまみれた太刀を、口に啣へながら、兩の手に手綱をとつて、嵐のやうに通りすぎた。馬は云ふまでもなく、沙金が目をつけた、陸奧出の三才駒であらう。既に、盜人たちがちりぢりに、死人を殘して引き揚げた小路は、月に照らされて、さながら霜を置いたやうにうす白い。彼は、亂れた髮を微風に吹かせながら、馬上に頭をめぐらして、後に罵り騷ぐ人々の群を、誇らかに眺めやつた。

それも無理はない。彼は、味方の破れるのを見ると、よしや何物を得なくとも、この馬だけは奪はうと、緊く心に決したのである。さうして、その決心通り、葛卷きの太刀を揮ひ揮ひ、手に立つ侍を斬拂つて、單身門の中に踏みこむと、苦もなく廐の戶を蹴破つて、この馬の覊綱を切るより早く、背に飛びのる間も惜しいやうに、遮るものを蹄にかけて、一散に宙を飛ばした。その爲に受けた創も、元より數へる暇はない。水干の袖はちぎれ、烏帽子は空しく紐を止めて、寸寸に裂かれた袴も、腥い血潮に染まつてゐる。が、それも、太刀と鉾との林の中から、一人に遇へば一人を斬り、二人に遇へば二人を斬つて、出て來た時の事を思へば、嬉しくこそあれ、惜しくはない。――彼は、後を見返り見返り、晴々した微笑を、口角に漂はせながら、昂然として、馬

を驅つた。

彼の念頭には、沙金がある。と同時に又、次郎もある。彼は、自ら欺く弱さを叱りながら、しかも猶沙金の心が再彼に傾く日を、夢のやうに胸に描いた。自分でなかつたなら、誰がこの馬をこの場合、奪ふ事が出來るだらう。向うには、人の和があつた。しかも地の利さへ占めてゐる。もし次郎だつたとしたならば――彼の想像には、一瞬の間、侍たちの太刀の下に、斬り伏せられてゐる弟の姿が、浮んだ。これは、勿論、彼にとつて、少しも不快な想像ではない。いや寧彼の中にある或物は、その事實である事を、祈りさへした。自分の手を下さずに、次郎を殺す事が出來るなら、それは獨り彼の良心を苦しめずにすむばかりではない。結果から云へば、沙金がその爲に、自分を憎む惧もなくなつてしまふ。さう思ひながらも、彼は、流石に自分の卑怯を恥ぢた。さうして口に啣へた太刀を、右手にとつて、徐に血をぬぐつた。

　そのぬぐつた太刀を、丁と鞘にをさめた時である。折から辻を曲つた彼は、行く手の月の中に、二十と云はず三十と云はず、群る犬の數を盡して、びやうびやうと吠え立てる聲を聞いた。しかも、その中に唯一人、太刀をかざした人の姿が、くづれかゝつた築土を背負つて、朧げながら黑

く見える。と思ふ間に、馬は、高く嘶きながら、長い鬣をさつと振ふと、四つの蹄に砂煙をまき上げて、瞬く暇に太郎をそこへ疾風のやうに持つて行つた。

「次郎か。」

太郎は、我を忘れて、叫びながら、險しく眉を顰めて、弟を見た。次郎も片手に太刀をかざしながら、項を反らせて、兄を見た。さうして刹那に二人とも、相手の瞳の奥にひそんでゐる、恐しいものを感じ合つた。が、それは、文字通り刹那である。馬は、吠え吼る犬の群に、脅されたせゐであらう、首を空ざまにつとあげると、前足で大きな輪をかきながら、前よりも速に、空へ跳つた。後には、唯、濛々とした埃が、夜空に白く、一しきり柱になつて、舞上る。次郎は、依然として、野犬の群の中に、創を蒙つた儘、立ちすくんだ。……

太郎は――一時に、色を失つた太郎の顔には、もうさつきの微笑の影はない。彼の心の中では、何ものかが、「走れ、走れ」と囁いてゐる。唯、一時、唯、半時、走りさへすれば、それで萬事が休してしまふ。彼のする事を、何時かしなくてはならない事を、犬が代つてしてくれるのである。「走れ、何故走らない？」囁きは、耳を離れない。さうだ。どうせ何時かしなくてはならない事

である。遲いと早いとの相違が何であらう。もし弟と自分の位置を換へたにしても、やはり弟は自分のしようとする事をするに違ひない。「走れ。羅生門は遠くはない。」太郎は、隻眼に熱を病んだやうな光を帶びて、半無意識に、馬の腹を蹴つた。馬は、尾と鬣とを、長く風になびかせながら、蹄に火花を散らして、まつしぐらに狂奔する。一町二町月明りの小路は、太郎の足の下で、急湍のやうに後へ流れた。

すると忽ち又、彼の脣を衝いて、なつかしい語が、溢れて來た。「弟」である。肉身の、忘れる事の出來ない「弟」である。太郎は、堅く手綱を握つた儘、血相を變へて齒嚙みをした。この語の前には、一切の分別が眼底を拂つて、消えてしまふ。弟か沙金かの、選擇を强ひられた譯ではない。直下にこの語が電光の如く彼の心を打つたのである。彼は空も見なかつた。路も見なかつた。月は猶更眼にはいらなかつた。唯見たのは、限りない夜である。夜に似た愛憎の深みである。太郎は、狂氣の如く、弟の名を口外に投げると、身をのけざまに飜して、片手の手綱を、ぐいと引いた。見る見る、馬の頭が、向きを變へる。と、又雪のやうな泡が、栗毛の口に溢れて、蹄は、碎けよとばかり、大地を打つた。――一瞬の後、太郎は、慘として暗くなつた顏に、隻眼を火の

如くかゞやかせながら、再、元來た方へまつしぐらに汗馬を跳らせたのである。

「次郎。」

近づく儘に、彼はかう叫んだ。心の中に吹き荒ぶ感情の嵐が、この語を機會として、一時に外へ溢れたのであらう。その聲は、白燃鐵を打つやうな響を帶びて、鋭く次郎の耳を貫いた。

次郎は、屹と馬上の兄を見た。それは日頃見る兄ではない。いや、今し方馬を飛ばせて、一散に走り去つた兄とさへ、變つてゐる。險しくせまつた眉に、堅く、下脣を嚙んだ齒に、さうして又、怪しく熱してゐる隻眼に、次郎は、殆ど憎惡に近い愛が、――今まで知らなかつた、不思議な愛が燃え立つてゐるのを見たのである。

「早く乘れ。次郎。」

太郎は、群る犬の中に、隕石のやうな勢で、馬を乘り入れると、小路を斜に輪乘りをしながら、叱咜するやうな聲で、かう云つた。元より躊躇に、時を移すべき場合ではない。次郎は、矢庭に持つてゐた太刀を、出來る丈遠くへ抛り投げると、その後を追つて、頭をめぐらす野犬の隙を窺つて、身輕く馬の平首へをどりついた。太郎も亦その刹那に猿臂をのばし、弟の襟上をつかみな

がら、必死になつて引ずり上げる。――馬の頭が、鬣に月の光を拂つて、三度向きを變へた時、次郎は既に馬背にあつて、ひしと兄の胸を抱いてゐた。

と、忽ち一頭、血みどろの口をした黒犬が、すさまじく唸りながら、砂を捲いて鞍壺へ飛びあがつた。尖つた牙が、危く次郎の膝へかゝる。その途端に、太郎は、足をあげて、したゝか栗毛の腹を蹴つた。馬は、一聲嘶きながら、早くも尾を宙に振ふ。――その尾の先をかすめながら、犬は、空しく次郎の脛布を食ひちぎつて、うづまく獸の波の中へ、まつさかさまに落ちて行つた。

が、次郎は、それをうつくしい夢のやうに、うつとりした眼でながめてゐた。彼の眼には、天も見えなければ、地も見えない。唯、彼を抱いてゐる兄の顏が、――半面に月の光をあびて、ぢつと行く手を見つめてゐる兄の顏が、やさしく、嚴に映つてゐる。彼は、限りない安息が、徐に心を滿して來るのを感じた。母の膝を離れてから、何年にも感じた事のない、靜な、しかも力強い安息である。――

「兄さん。」

馬上にある事も忘れたやうに、次郎はその時、しかと兄を抱くと、うれしさうに微笑しながら、

頰を紺の水干の胸にあてて、はらはらと涙を落したのである。

半時の後、人通りのない朱雀の大路を、二人は靜に馬を進めて行つた。兄も默つてゐれば、弟も口をきかない。しんとした夜は、唯馬蹄の響に谺をかへして、二人の上の空には涼しい天の河がかゝつてゐる。

八

羅生門の夜は、まだ明けない。下から見ると、つめたく露を置いた甍や、丹塗りの剝げた欄干に、傾きかゝつた月の光が、いざよひながら、殘つてゐる。が、その門の下は、斜につき出した高い檐に、月も風も遮られて、むし暑い暗がりが、絕え間なく藪蚊に刺されながら、酸えたやうによどんでゐる。藤判官の屋敷から、引き揚げて來た偸盜の一群は、その暗の中にかすかな松明の火をめぐりながら、三々五々、或は立ち或は臥し、或は圓柱の根がたに蹲つて、さつきから、それぞれ怪我の手當に忙しい。

中でも、一番重手を負つたのは、猪熊の爺である。彼は、沙金の古い袿を敷いた上に、仰向けに横はつて、半ば眼をつぶりながら、時々ものに脅えるやうに、しはがれた聲で、うめいてゐる。一時の間、此處にかうしてゐるのか、それとも一年も前から同じやうに寐てゐるのか、彼の困憊した心には、それさへ時々はわからない。眼の前には、さまざまな幻が、瀕死の彼を嘲るやうに、ひつきりなく徂來すると、その幻と、現在門の下で起つてゐる出來事とが、彼にとつては、何時か全く同一な世界になつてしまふ。彼は、時と處とを別たない、昏迷の底に、その醜い一生を、正確に、しかも理性を超越した或順序で、まざまざと再、生活した。

「やい、お婆、お婆はどうした。お婆。」

彼は、暗から生まれて、暗へ消えてゆく恐しい幻に脅されて、身を悶へながら、かう呻つた。すると、側から額の創を汗衫の袖で包んだ、交野の平六が顔を出して、

「お婆か。お婆はもう十萬億土へ行つてしまうた。大方蓮の上でな、おぬしの來るのを、待ち焦がれてゐる事ぢやらう。」

云ひすてて、自分の冗談を、自分でからからと笑ひながら、向ふの隅に、眞木島の十郎の腿の

怪我の手當をしてゐる、沙金の方をふり返つて、聲をかけた。
「お頭、お爺はちとむづかしいやうぢや。苦しめる丈、殺生ぢやて。わしが止めを刺してやらうかと思ふがな。」
沙金は、あでやかな聲で、笑つた。
「冗談ぢやないよ。どうせ死ぬものなら、自然に死なしておやりな。」
「成程な、それもさうぢや。」
猪熊の爺は、この問答を聞くと、或豫期と恐怖とに襲はれて、體中が一時に凍るやうな心もちがした。さうして、又大きな聲で呻つた。平六と同じやうな理由で、敵には臆病な彼も、今迄に何度、致死期の仲間の者をその鉾の先で、止めを刺したかわからない。それも多くは、人を殺すと云ふ、唯それ丈の興味から、或は自分の勇氣を人にも自分にも示さうとする、唯それ丈の目的から、進んでこの無殘な所業を敢てした。それが今は——
と、誰か、彼の苦しみも知らないやうに、灯の陰で一人、鼻唄をうたふ者がある。
いたち笛ふき

猿かなづ
いなごまろは拍子うつ
きりぎりす

ぴしやりと、蚊をたたく音が、それに次いで聞える。中には「ほう、やれ」と拍子をとつたものもあつた。二三人が、肩を搖つたけはひで、息のつまつたやうな笑ひ聲を立てる。——猪熊の爺は、總身をわなわなふるはせながら、まだ生きてゐると云ふ事實を確めたい爲に、重い瞼を開いて、ぢつとともし火の光を見た。灯は、その焰のまはりに無數の輪をかけながら、執拗い夜に攻められて、心細い光を放つてゐる。と、小さな黄金蟲が一匹ぶうんと音を立てて、飛んで來て、その光の輪にはいつたかと思ふと忽ち羽根を燒かれて、下へ落ちた。青臭いにほひが、一しきり鼻を打つ。

あの蟲のやうに、自分も程なく死ななければならない。死ねば、どうせ蛆と蠅とに、血も肉も食ひつくされる體である。ああこの自分が死ぬ。それを、仲間のものは、唄をうたつたり笑つたりしながら、何事もないやうに騷いでゐる。さう思ふと、猪熊の爺は、名狀し難い怒と苦痛とに、

骨髓を噛まれるやうな心もちがした。さうして、それと共に、何だか轆轤のやうにとめどなく廻つてゐる物が、火花を飛ばしながら眼の前へ下りて來るやうな心もちがした。

「畜生。人でなし。太郎。やい。極道。」

まはらない舌の先から、自らかう云ふ語が、とぎれとぎれに落ちて來る。――眞木島の十郎は、腿の創が痛まないやうに、そつとねがへりをうちながら、喉の渇いたやうな聲で、沙金に囁いた。

「太郎さんは、よくよく憎まれたものさな。」

沙金は、眉を顰めながら、ちよいと猪熊の爺の方を見て、領いた。すると鼻唄をうたつたのと同じ聲で、

「太郎さんはどうした。」と訊ねたものがある。

「まづ助かるまいな。」

「死んだのを見たと云うたのは、誰ぢや。」

「わしは、五六人を相手に斬り合うてゐるのを見た。」

「やれやれ、頓生菩提。頓生菩提。」

「次郎さんも、見えないぞ。」

「これも事によると、同じくぢや。」

太郎も死んだ。お婆も、もう生きてはゐない。自分も、すぐに死ぬであらう。死ぬ。死ぬとは、何だ。何にしても、自分は死にたくない。が、死ぬ。蟲のやうに、何の造作もなく死んでしまふ。――こんな取りとめのない考へが、暗の中に鳴いてゐる藪蚊のやうに、四方八方から、意地惡く心を刺して來る。猪熊の爺は、形のない、氣味の惡い「死」が、辛抱づよく、丹塗りの柱の向うに、ぢつと自分の息を窺つてゐるのを感じた。殘酷に、しかも又落着いて、自分の苦痛を眺めてゐるのを感じた。さうして、それが少しづつ居ざりながら、消えてゆく月の光のやうに、次第に枕下へすりよつて來るのを感じた。何にしても、自分は死にたくない。――

夜は誰とか寢む
常陸の介と寢む
寢たる肌もよし
男山の峯のもみぢ葉

さぞ名はたつや

又、鼻唄の聲が、油しめ木の音のやうな呻吟の聲と一つになつた。と誰か、猪熊の爺の枕もとで、唾をはきながら、かう云つたものがある。

「阿濃の阿呆が見えぬの。」

「成程、さうぢや。」

「大方、この上に寢て居らう。」

「や、上で猫が啼くぞ。」

皆、一時にひつそりとなつた。その中を、絶え絶えにつづく猪熊の爺の呻り聲と一つになつて、かすかに猫の聲が聞えて來る。と流れ風が、始めてなま溫く、柱の間を吹いて、うす甘い凌霄花のにほひが、何處からかそつと一同の鼻を襲つた。

「猫も化けるさうな。」

「阿濃の相手には、猫の化けた、老ぼれが相當ぢやよ。」

すると、沙金が、衣ずれの音をさせて、たしなめるやうに、かう云つた。

「猫ぢやないよ。ちよつと誰か行つて、見て來ておくれ。」

聲に應じて、交野の平六が、太刀の鞘を、柱にぶつつけながら、立上つた。樓上に通ふ梯子は、二十幾つの段をきざんで、その柱の向うにかかつてゐる。――一同は、理由のない不安に襲はれて、しばらくは誰も口をとざしてしまつた。その間を唯、凌霄花のにほひのする風が、又してもかすかに、通りぬけると、忽ち樓上で平六の、何か、わめく聲がした。さうして、程なく急いで梯子を下りて來る足音が、慌しく、重苦い暗をかき亂した。――唯事ではない。

「どうぢや。阿濃めが、子を産み居つたわ。」

平六は、梯子を下りると、古被衣にくるんだ、圓々したものを、勢よくともし火の下へ出して見せた。女の臭のする、うすよごれた布の中には、生まれたばかりの赤ん坊が、人間と云ふよりは、寧ろ皮を剝いた蛙のやうに、大きな頭を重さうに動かしながら、醜い顔をしかめて、泣き立ててゐる。うすい産毛と云ひ、細い手の指と云ひ、何一つ、嫌惡と好奇心とを、同時に唆らないものはない。――平六は、左右を見まはしながら、抱いてゐる赤子を、ふり動かして、得意らしく、しやべり立てた。

「上へ上つて見ると、阿濃め、窓の下へつつ伏したなり、死んだやうになつて、呻つてゐると、阿呆とは云へ、女の部ぢや。癪かと思うて、側へ行くと、いや驚くまい事か。魚の腸をぶちまけたやうなものが、うす暗い中で、啼いてゐるわ。手をやると、それがぴくりと動いた。毛のない所を見れば、猫でもあるまい。ぢやてひつつかんで、月明りにかざして見ると、この通り生れたばかりの赤子ぢや。見い、蚊に食はれたと見えて、胸も腹も赤斑らになつてゐるわ。阿濃も、これからはおふくろぢやよ。」

松明の火を前に立つた、平六のまはりを圍んで、十五六人の盗人は、立つものは立ち、臥すものは臥して、いづれも皆、首をのばしながら、別人のやうに、やさしい微笑を含んで、この命が宿つたばかりの、赤い、醜い肉塊を見守つた。赤ん坊は、しばらくも、ぢつとしてゐない。手を動かす。足を動かす。しまひには、頭を後へそらせて、一しきり又、けたゝましく泣き立てた。と、齒のない口の中が見える。

「やあ舌がある。」

前に鼻唄をうたつた男が、頓狂な聲で、かう云つた。それにつれて、一同が、創も忘れたやう

に、どつと笑ふ。——その笑ひ聲の後を追ひかけるやうに、この時、突然、猪熊の爺が、どこにそれ丈の力が殘つてゐたかと思ふやうな聲で、險しく一同の後から、聲をかけた。
「その子を見せてくれ。よ。その子を。見せないか。やい、極道。」
平六は、足で彼の頭をこづいた。さうして、嚇すやうな調子で、かう云つた。
「見たければ、見ろさ。極道とは、おぬしの事ぢや。」
猪熊の爺は、濁つた眼を大きく見開いて、平六が身をかゞめながら、無造作につきつけた赤ん坊を、食ひつきさうな容子をして、ぢつと見た。見てゐる中に、顏の色が、次第に蠟の如く青ざめて、皺だらけの眦に、涙が玉になりながら、たまつて來る。と思ふと、ふるへる脣のほとりには、不思議な微笑の波が漂つて、今迄にない無邪氣な表情が、何時か顏中の筋肉を柔げた。しかも、饒舌な彼が、さうなつた儘、口をきかない。一同は、「死」が遂に、この老人を捕へたのを知つた。しかし彼の微笑の意味は誰も知つてゐるものがない。
猪熊の爺は、寢た儘、徐に手をのべて、そつと赤ん坊の指に觸れた。と、赤ん坊は、針にでも刺されたやうに、忽ちいたいたしい泣き聲を上げる。平六は、彼を叱らうとして、さうして又、

やめた。老人の顏が――血の氣を失つた、この酒肥りの老人の顏が、その時ばかりは、平生とちがつた、犯し難い嚴さに、かゞやいてゐるやうな氣がしたからである。その前には、沙金でさへ、恰も何物かを待ち受けるやうに、息を凝らしながら、養父の顏を、――さうして又情人の顏を、眼もはなさず見つめてゐる。が、彼はまだ、口を開かない。唯、彼の顏には、祕密な喜びが、折から吹き出した明け近い風のやうに、靜に、心地よく、溢れて來る。彼は、この時、暗い夜の向うに、――人間の眼のとゞかない、遠くの空に、さびしく、冷かに明けて行く、不滅な、黎明を見たのである。

「この子は――この子は、わしの子ぢや。」

彼は、はつきりかう云つて、それから、もう一度赤ん坊の指にふれると、その手が力なく、落ちさうになる。――それを、沙金が、傍からそつと支へた。十餘人の盜人たちは、この語を聞かないやうに、いづれも唾をのんで、身動きもしない。と、沙金が頭を上げて、赤子を抱いた儘、立つてゐる交野の平六の顏を見て、頷いた。

「咳がつまる音ぢや。」

平六は、誰に云ふともなく、呟いた。——猪熊の爺は、暗に怯えて啼く赤子の聲の中に、かすかな苦悶をつゞけながら、消えかゝる松明の火のやうに、靜に息をひきとつたのである。……

「爺も、とうとう死んだの。」

「さればさ。阿濃を手ごめにした主も、これで知れたと云ふものぢや。」

「死骸は、あの藪中へ埋めずばなるまい。」

「鴉の餌食にするのも、氣の毒ぢやな。」

盗人たちは、口々にこんな事を、うす寒さうに、話し合つた。と、遠くで、かすかに、鷄の聲がする。何時か夜の明けるのも、近づいたらしい。

「阿濃は？」と沙金が云つた。

「わしが、あり合せの衣をかけて、寢かせて來た。あの體ぢやて、大事はあるまい。」

平六の答も、日頃に似ずものやさしい。

その中に、盗人が二人三人、猪熊の爺の死骸を、門の外へ運び出した。外も、まだ暗い。有明の月のうすい光に、蕭條とした藪が、かすかに梢をそよめかせて、凌霄花のにほひが、愈濃く、

甘く漂つてゐる。時々かすかな音のするのは、竹の葉を辷る露であらう。

「生死事大。」

「無常迅速。」

「生き顔より、死顔の方がよいやうぢやな。」

「どうやら、前よりも眞人間らしい顔になつた。」

猪熊の爺の屍骸は、斑々たる血痕に染まりながら、かう云ふ語の中に、竹と凌霄花との茂みを、次第に奥深く舁かれて行つた。

九

翌日、猪熊の或家で、虐たらしく殺された女の死骸が發見された。年の若い、肥つた、うつくしい女で、創の容子では、餘程はげしく抵抗したものらしい。證據ともなる可きものは、その死骸が口にくはへてゐた、朽葉色の水干の袖ばかりである。

又、不思議な事には、その家の婢女をしてゐた阿濃と云ふ女は、同じ所にゐながら、薄手一つ

負はなかつた。この女が、検非違使廰で、調べられた所によると、大體こんな事があつたらしい。大體と云ふのは、阿濃が天性白痴に近い所から、それ以上要領を得る事が、むづかしかつたからである。――

その夜、阿濃は、夜更けて、ふと眼をさますと、太郎次郎と云ふ兄弟のものと、沙金とが、何か聲高に爭つてゐる。どうしたのかと思つてゐる中に、次郎が、いきなり太刀をぬいて、沙金を斬つた。沙金は助けを呼びながら、逃げようとすると、今度は太郎が、刃を加へたらしい。それからしばらくは、唯、二人の罵る聲と、沙金の苦しむ聲とがつゞいたが、やがて女の息がとまると、兄弟は、急に抱きあつて、長い間默つて、泣いてゐた。阿濃は、これを遣り戸の隙間から、覗いてゐたが、主人を救はなかつたのは、完く抱いて寝てゐる子供に、怪我をさすまいと思つたからである。

「その上、その次郎さんと申しますのが、この子の親なのでございます。」

阿濃は、急に顔を赤らめて、かう云つた。

「それから、太郎さんと次郎さんとは、私の所へ來て、たつしやでゐろよと申しました。この子

を見せましたら、次郎さんは、笑ひながら、頭を撫でてくれましたが、それでもまだ眼には涙が一ぱいたまつて居りましたつけ。私はもつとさうしてゐたかつたのでござりますが、二人とも、大へんに急いで、すぐに外へ出ますと、大方枇杷の木にでもつないで置いたのでございませう、馬へとびのつて、どこかへ行つてしまひました。馬は二匹ではございません。私が、この子を抱いて、窓から見て居りますと、一匹に二人で乘つて行くのが、月がございましたから、よく見えました。その後で、私は、主人の死骸はその儘にして、そつと又床へはいりました。主人がよく人を殺すのを見ましたから、その死骸も私には、怖くも何ともなかつたのでございます。」

檢非違使には、やつとこれ丈の事がわかつた。さうして、阿濃は、罪の無いのが明かになつたので、早速自由の身にされた。

それから、十年餘り後、尼になつて、子供を養育してゐた阿濃は、丹後守何某の隨身に、驍勇の名の高い男の通るのを見て、あれが太郎だと人に敎へた事がある。成程その男も、うす痘痕で、しかも隻眼つぶれてゐた。

「次郎さんなら、私すぐにも驅けて行つて、逢ふのだけれど、あの人は恐いから……」

阿濃は、娘のやうなしなをして、かう云つた。が、それがほんとうに太郎かどうか、それは誰にも、わからない。唯、その男にも弟があつて、やはり同じ主人に仕へると云ふ事だけ、その後かすかに風聞された。

（大正六年四月二十日）

さまよへる猶太人

基督教國にはどこにでも、「さまよへる猶太人」の傳說が殘つてゐる。伊太利でも、佛蘭西でも、英吉利でも、獨逸でも、墺太利でも、西班牙でも、この口碑が傳はつてゐない國は、殆一つもない。從つて、古來これを題材にした、藝術上の作品も、澤山ある。グスタヴ・ドオレの畫は勿論、ユウジアン・スウもドクタア・クロリイも、これを小說にした。モンク・ルイズのあの名高い小說の中にも、ルシフアや「血をしたたらす尼」と共に「さまよへる猶太人」が出て來たやうに記憶する。最近では、フイオナ・マクレオドと稱したウイリアム・シヤアプが、これを材料にして、何とか云ふ短篇を書いた。

では「さまよへる猶太人」とは何かと云ふと、これはイエス・クリストの呪を負つて、最後の審判の來る日を待ちながら、永久に漂浪を續けてゐる猶太人の事である。名は記錄によつて一定しない。或はカルタフイルスと云ひ、或はアハスフエルスと云ひ、或はブタデウスと云ひ、或は又

イサク・ラクエデムと云つてゐる。その上、職業もやはり、記録によつてちがふ。イエルサレムにあるサンヘドリムの門番だつたと云ふものもあれば、いやピラトの下役だつたと云ふものもある。中には又、靴屋だと云つてゐるものもあつた。が、呪を負ふやうになつた原因については、大體どの記録も變りはない。彼は、ゴルゴタへひかれて行くクリストが、彼の家の戸口に立止つて、暫く息を入れようとした時に、無情にも罵詈を浴せかけた上で、散々打擲を加へさへした。その時負うたのが、「行けと云ふなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの歸るまで、待つて居れよ」と云ふ呪である。彼はこの後、パウロが洗禮を受けたのと同じアナニアスの洗禮を受けて、ヨセフと云ふ名を貰つた。が、一度負つた呪は、世界滅却の日が來るまで、解かれない。現に彼が、千七百二十一年六月二十二日、ムウニツヒの市に現れた事は、ホオルマイエルのタツシエン・ブウフの中に書いてある。――

これは近頃の事であるが、遠く文獻を溯つても、彼に關する記録は、隨所に發見される。その中で、最も古いのは、恐らくマシウ・パリスの編纂したセント・アルバンスの修道院の年代記に出てゐる記事であらう。これによると、大アルメニアの大僧正が、セント・アルバンスを訪れた

時に、通譯の騎士が大僧正はアルメニアで屢々「さまよへる猶太人」と食卓を共にした事があると云つたさうである。次いでは、フランドルの歴史家、フイリツプ・ムスクが千二百四十二年に書いた、韻文の年代記の中にも、同じやうな記事が見えてゐる。だから、十三世紀以前には、少くとも人の視聽を聳たしめる程度に、彼は歐羅巴の地をさまよはなかつたらしい。所が、千五百五年になると、ボヘミアで、ココトと云ふ機織りが、六十年以前にその祖父の埋めた財寶を彼の助けを借りて、發掘する事が出來た。そればかりではない。千五百四十七年には、シユレスウイツヒの僧正パウル・フオン・アイツエンと云ふ男が、ハムブルグの教會で彼が祈禱をしてゐるのに出遇つた。それ以來、十八世紀の初期に至るまで、彼が南北兩歐に亙つて、姿を現したと云ふ記錄は、甚多い。最も明白な場合のみを擧げて見ても、千五百七十五年には、マドリツドに現れ、千五百九十九年には、ウインに現れ、千六百一年にはリウベツク、レヴエル、クラカウの三ケ所に現れた。ルドルフ・ボトレウスによれば、千六百四年頃には、パリに現れた事もあるらしい。それから、ナウムブルグやブラツセルを經て、ライプツイツヒを訪れ、千六百五十八年には、スタンフオドのサムエル・ウオリスと云ふ肺病やみの男に、赤サルビアの葉を二枚に、羊蹄の葉

を一枚、麥酒にまぜて飲むと、健康を恢復すると云ふ秘法を教へてやつたさうである。次いで、前に云つたムウニツヒを過ぎて、再英吉利に入り、ケムブリツヂやオツクスフオドの教授たちの質疑に答へた後、丁抹から瑞典へ行つて、遂に踪跡がわからなくなつてしまつた。爾來、今日まで彼の消息は、杳としてわからない。

「さまよへる猶太人」とは如何なるものか、彼は過去に於て、如何なる歴史を持つてゐるか、かう云ふ點に關しては、如上で、その大略を明にし得た事と思ふ。が、それを傳へるのみが、決して自分の目的ではない。自分は、この傳説的な人物に關して、嘗て自分が懐いてゐた二つの疑問を擧げ、その疑問が先頃偶然自分の手で發見された古文書によつて、二つながら解決された事を公表したいのである。さうして、その古文書の内容をも併せて、こゝに公表したいのである。先、第一に自分の懐いてゐた、二つの疑問とは何であるか。——

第一の疑問は、完く事實上の問題である。「さまよへる猶太人」は、殆どあらゆる基督教國に、姿を現した。それなら、彼は日本にも渡來した事がありはしないか。現代の日本は暫く措いても、十四世紀の後半に於て、日本の西南部は、大抵天主教を奉じてゐた。デルブロオのビブリオテエ

ク・オリアンタアルを見ると、「さまよへる猶太人」は、十六世紀の初期に當つて、フアデイラの率ゐるアラビアの騎兵が、エルヴァンの市を陥れた時に、その陣中に現れて、Allah akubar（神は大いなるかな）の祈禱を、フアデイラと共にしたと云ふ事が書いてある。既に彼は、「東方」にさへ、その足跡を止めてゐる。大名と呼ばれた封建時代の貴族たちが、黄金の十字架を胸に懸けて、パアテル・ノステルを口にした日本を、――貴族の夫人たちが、珊瑚の念珠を爪繰つて、毘留善麻利耶の前に跪いた日本を、その彼が訪れなかつたと云ふ筈はない。更に平凡な云ひ方をすれば、當時の日本にも、既に彼に關する傳說が、「ぎやまん」や羅面琴と同じやうに、輸入されてゐはしなかつたか――と、かう自分は疑つたのである。

第二の疑問は、第一の疑問に比べると、聊その趣を異にしてゐる。「さまよへる猶太人」は、イエス・クリストに非禮を行つた爲に、永久に地上をさまよはなければならない運命を背負はせられた。が、クリストが十字架にかけられた時に、彼を窘めたものは、獨りこの猶太人ばかりではない。或ものは、彼に荊棘の冠を頂かせた。或ものは、彼に紫の衣を纏はせた。又或ものはその十字架の上に、I・N・R・I の札をうちつけた。石を投げ、唾を吐きかけたものに至つては、恐ら

く數へきれない程多かつたのに違ひない。それが何故、彼ひとりクリストの呪を負つたのであらう。或はこの「何故」には、どう云ふ解釋が與へられてゐるのであらう。――これが、自分の第二の疑問であつた。

自分は、數年來この二つの疑問に對して、何等の手がゝりをも得ずに、空しく東西の古文書を涉獵してゐた。が、「さまよへる猶太人」を取扱つた文獻の數は、非常に多い。自分がそれを悉く讀破すると云ふ事は、少くとも日本にゐる限り、全く不可能な事である。そこで、自分はとうとう、この疑問も結局答へられる事がないのかと云ふ氣になつた。所が丁度さう云ふ絕望に陷りかかつた去年の秋の事である。自分は最後の試みとして、兩肥及び平戶天草の諸島を遍歷して、古文書の蒐集に從事した結果、偶然手に入れた文祿年間のMSS.の中から、遂に「さまよへる猶太人」に關する傳說を發見する事が出來た。その古文書の鑑定その他に關しては、今こゝに敍說してゐる暇がない。唯それは、當時の天主教徒の一人が傳聞した所を、その儘當時の口語で書き留めて置いた簡單な覺え書だと云ふ事を書いてさへ置けば十分である。

この覺え書によると、「さまよへる猶太人」は、平戶から九州の本土へ渡る船の中で、フランシ

ス・ザヴイエルと邂逅した。その時、ザヴイエルは、「シメオン伊留滿一人を御伴に召され」てゐたが、そのシメオンの口から、當時の容子が信徒の間へ傳へられ、それが又次第に諸方へひろまつて、遂には何十年か後に、この記錄の筆者の耳へもはいるやうな事になつたのである。もし筆者の言をその儘信用すれば「ふらんしす上人さまよへるゆだやびとと問答の事」は、當時の天主教徒間に有名な物語の一つとして、屢説教の材料にもなつたらしい。自分は、今この覺え書の內容を大體に亙つて、紹介すると共に、二三、原文を引用して、上記の疑問の氷解した喜びを、讀者とひとしく味ひたいと思ふ。――

第一に、記錄はその船が「土產の果物くさ〴〵を積」んでゐた事を語つてゐる。だから季節は恐らく秋であらう。これは、後段に、無花果云々の記事が見えるのに徵しても、明である。それから乘合は外にはなかつたらしい。時刻は、丁度晝であつた。――筆者は本文へはいる前に、これだけの事を書いてゐる。從つてもし讀者が當時の狀景を彷彿しようと思ふなら、記錄に殘つてゐる、これだけの箇條から、魚の鱗のやうに眩く日の光を照り返してゐる海面と、船に積んだ無花果や柘榴の實と、さうしてその中に坐りながら、熱心に話し合つてゐる三人の紅毛人とを、讀者

自身の想像に描いて見るより外はない。何故と云へば、それらを活々と描寫する事は、單なる一學究たる自分にとつて、到底不可能な事だからである。

が、もし讀者がそれに多少の困難を感ずるとすれば、ペツクがその著「ヒストリイ・オヴ・スタンフオオド」の中で書いてゐる「さまよへる猶太人」の服裝を、大體ここに紹介するのも、讀者の想像を助ける上に於て、或は幾分の效果があるかも知れない。ペツクはかう云つてゐる。「彼の上衣は紫である。さうして腰まで、ボタンがかゝつてゐる。ズボンも同じ色で、やはり見た所古くはないらしい。靴下はまつ白であるが、リンネルか、毛織りか、見當がつかなかつた。それから髯も髮も、兩方とも白い。手には白い杖を持つてゐた。」――これは、前に書いた肺病やみのサムエル・ウオリスが、親しく目撃した所を、ペツクが記錄して置いたのである。だから、フランシス・ザヴイエルが遇つた時も、彼は恐らくこれに類した服裝をしてゐたのに違ひない。

そこで、それがどうして「さまよへる猶太人」だとわかつたかと云ふと、「上人の祈禱された時、その和郎も恭しく祈禱した」ので、フランシスの方から話をしかけたのださうである。所が、話して見ると、どうも普通の人間ではない。話すことと云ひ、話し振りと云ひ、その頃東洋へ浮浪

して來た冒險家や旅行者とは、自ら容子がちがつてゐる。「天竺南蠻の今昔を、掌にても指すやうに」指したので、「シメオン伊留滿はもとより、上人御自身さへ舌を捲かれたさうでござる。」そこで、「そなたは何處のものぢやと御訊ねあつたれば、一所不住のゆだやびと」と答へた。が、上人も始めは多少、この男の眞僞を疑ひかけてゐたのであらう。「當來の波羅葦僧にかけても、誓ひ申すべきや。」と云つたら、相手が「誓ひ申すとの事故、それより上人も打ちとけて、種々問答せられたげぢや。」と書いてあるが、その問答を見ると、最初の部分は、唯昔あつた事實を尋ねただけで、宗教上の問題には、殆ど一つも觸れてゐない。

それがウルスラ上人と一萬一千の童貞少女が、「奉公の死」を遂げた話や、パトリツク上人の淨罪界の話を經て、次第に今日の使徒行傳中の話となり、進んでは、遂に御主耶蘇基督が、ゴルゴタで十字架を負つた時の話になつた。丁度この話へ移る前に、上人が積荷の無花果を水夫に分けて貰つて、「さまよへる猶太人」と一しよに、食つたと云ふ記事がある。前に季節の事に言及した時に引いたから、こゝに書いて置くが、勿論大した意味がある譯ではない。——さて、その問答を見ると、大體下のやうな具合である。

上人「御主御受難の砌は、エルサレムにゐられたか。」

「さまよへる猶太人」「如何にも、眼のあたりに御受難の御有樣を拜しました。元來それがしは、よせふと申して、えるされむに住む靴匠でござつたが、當日は御主がぴらと殿の裁判を受けられるとすぐに、一家のものどもを戸口へ呼び集めて、勿體なくも、御主の御惱みを、笑ひ興じながら、見物したものでござる。」

記錄の語る所によると、クリストは「物に狂うたやうな群集の中を」、パリサイの徒と祭司とに守られながら、十字架を背にした百姓の後について、よろめき、歩いて來た。肩には、紫の衣がかゝつてゐる。額には荊棘の冠がのつてゐる。さうして又、手や足には、鞭の痕や切り創が、薔薇の花のやうに赤く殘つてゐる。が、眼だけは、ふだんと少しも變りがない。「日頃のやうに靑く澄んだ御眼」は、悲しみも悅びも超越した、不思議な表情を湛へてゐる。――これは、「ナザレの木匠の子」の敎を信じない、ヨセフの心にさへ異常な印象を與へた。彼の言葉を借りれば、「それがしも、その頃やはり御主の眼を見る度に、何となくなつかしい氣が起つたものでござる。大方死んだ兄と、よう似た眼をしてゐられたせゐでもござらう。」

その中にクリストは、埃と汗とにまみれながら、折から通りかゝつた彼の戸口に足を止めて、暫く息を休めようとした。そこには、鞣皮の帯をしめて、わざと爪を長くしたパリサイの徒もゐた事であらうし、髪に青い粉をつけて、ナルドの油の匂をさせた娼婦たちもゐた事であらう。或は又、羅馬の兵卒たちの持つてゐる楯が、右からも左からも、眩く暑い日の光を照りかへしてゐたかも知れない。が、記録には唯、「多くの人々」と書いてある。さうして、ヨセフは、その「多くの人々の手前、祭司たちへの忠義ぶりが見せたうござつたによつて、」クリストの足を止めたのを見ると、片手に子供を抱きながら、片手に「人の子」の肩を捕へて、ことさらに荒々しくこづきまはした。――「やがては、ゆるりと磔柱にかゝつて、休まるゝ體ぢやなど悪口し、あまつさへ手をあげて、打擲さへしたものでござる。」

すると、クリストは、靜に頭をあげて、叱るやうにヨセフを見た。彼が死んだ兄に似てゐると思つた眼で、嚴にぢつと見たのである。「行けと云ふなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの歸るまで、待つて居れよ。」――クリストの眼を見ると共に、彼はかう云ふ語が、熱風よりもはげしく、刹那に彼の心へ焼けつくやうな氣もちがした。クリストが、實際かう云つたかど

うか、それは彼自身にも、はつきりわからない。が、ヨセフは「この呪が心耳にとゞまつて、ゐても立つても居られぬやうな氣に」なつたのであらう。あげた手が自ら垂れ、心頭にあつた憎しみが自ら消えると、彼は、子供を抱いた儘、思はず往來に跪いて、爪を剝がしてゐるクリストの足に、恐る恐る脣をふれようとした。が、もう遲い。クリストは、兵卒たちに追ひ立てられて、既に五六歩彼の戶口を離れてゐる。ヨセフは、茫然として、ややともすると群集にまぎれようとする御主の紫の衣を見送つた。さうして、それと共に、云ひやうのない後悔の念が、心の底から動いて來るのを意識した。しかし、誰一人彼に同情してくれるものはない。彼の妻や子でさへも、彼のこの所作を、やはり荊棘の冠をかぶらせるのと同樣、クリストに對する嘲弄だと解釋した。まして往來の人々が、愈々面白さうに笑ひ興じたのは、無理もない話である。――石をも焦がすやうなエルサレムの日の光の中に、濛々と立騰る砂塵をあびせて、ヨセフは眼に淚を浮べながら、腕の子供を何時か妻に抱きとられてしまつたのも忘れて、何時までも跪いた儘、動かなかつた。……

「されば恐らく、えるされむは廣しと云へ、御主を辱めた罪を知つてゐるものは、それがしひとりでござらう。罪を知ればこそ、呪もかゝつたのでござる。罪を罪とも思はぬものに、天の罰が

下らうやうはござらぬ。云はゞ、御主を磔柱にかけた罪は、それがしひとりが負うたやうなものでござる。但し罰をうければこそ、贖ひもあると云ふ次第ゆゑ、やがて御主の救拔を蒙るのも、それがしひとりにきはまりました。罪を罪と知るものには、總じて罰と贖ひとが、ひとつに天から下るものでござる。」――「さまよへる猶太人」は、記録の最後で、かう自分の第二の疑問に答へてゐる。この答の當否を穿鑿する必要は、暫くない。兎も角も答を得たと云ふ事が、それだけで既に自分を滿足させてくれるからである。

「さまよへる猶太人」に關して、自分の疑問に對する答を、東西の古文書の中に發見した人があれば、自分は切に、その人が自分の爲に高教を吝まない事を希望する。又自分としても、如上の記述に關する引用書目を擧げて、聊この小論文の體裁を完全にしたいのであるが、生憎さうする丈の餘白が殘つてゐない。自分は唯こゝに、「さまよへる猶太人」の傳記の起源が、馬太傳の第十六章二十八節と馬可傳の第九章一節とにあると云ふベリンググツドの說を擧げて、一先づペンを止める事にしようと思ふ。

（大正六年五月十日）

二つの手紙

或機會で、予は下に掲げる二つの手紙を手に入れた。一つは本年二月中旬、もう一つは三月上旬、——警察署長の許へ、郵税先拂ひで送られたものである。それをここへ掲げる理由は、手紙自身が說明するであらう。

第一の手紙

——警察署長閣下、

先づ何よりも先に、閣下は私の正氣だと云ふ事を御信じ下さい。これ私があらゆる神聖なものに誓つて、保證致します。ですから、どうか私の精神に異常がないと云ふ事を、御信じ下さい。さもないと、私がこの手紙を閣下に差上げる事が、全く無意味になる惧があるのでございます。その位なら、私は何を苦しんで、こんな長い手紙を書きませう。

閣下、私はこれを書く前に、ずゐぶん躊躇致しました。何故かと申しますと、これを書く以上、私は私一家の祕密をも、閣下の前に暴露しなければならないからでございます。勿論それは、私の名譽にとつて、可成大きな損害に相違ございません、しかし事情はこれを書かなければ、もう一刻の存在も苦痛な程、切迫して參りました。こゝで私は、遂に斷乎たる處置を執る事に、致したのでございます。

さう云ふ必要に迫られて、これを書いた私が、どうして、狂人扱ひをされて、默つて居られませう。私はもう一度、こゝに改めてお願ひ致します。閣下、どうか私の正氣だと云ふ事を御信用下さい。さうして、この手紙を御面倒ながら、御一讀下さい。これは私が、私と私の妻との名譽を賭して、書いたものでございますから。

かやうな事を、くどく書きつゞけるのは、繁忙な職務を御鞅掌になる閣下にとつて、餘りに御迷惑を顧みない仕方かも知れません。しかし、私の下に申上げようとする事實の性質上、閣下が私の正氣だと云ふ事を御信用になるのは、どうしても必要でございます。さもなければ、どうしてこの超自然な事實を、御承認になる事が出來ませう。どうして、この創造的精力の奇怪な作

用を、可能視なさる事が出來ませう。それ程、私が閣下の御留意を請ひたいと思ふ事實には不可思議な性質が加はつてゐるのでございます。ですから、私は以上のお願ひを敢て致しました。猶これから書く事も、或は冗漫の譏を免れないものかも知れません。しかし、これは一方では私の精神に異狀がないと云ふ事を證明すると同時に、又一方ではかう云ふ事實も古來決して絶無ではなかつたと云ふ事を御耳に入れる爲に、幾分の必要がありはしないかと、思はれるのでございます。

歴史上、最も著名な實例の一つは、恐らくカテリナ女帝に現はれたものでございませう。それから又、ゲエテに現れた現象も、やはりそれに劣らず著名なものでございます。が、これらは、餘り人口に膾炙しすぎて居りますから、こゝにはわざと申上げません。私は、それより二三の權威ある實例によつて、出來る丈手短に、この神祕な事實の性質を御説明申したいと思ひます。まづ Dr. Werner の與へてゐる實例から、始めませう。彼によりますと、ルウドウイツヒスブルクの Ratzel と云ふ寶石商は、或夜街の角をまがる拍子に、自分と寸分もちがはない男と、ばつたり顔を合せたさうでございます。その男は、後間もなく、木樵りが槲の木を伐り倒すのに手を借して、

その木の下に壓されて歿くなりました。これによく似てゐるのは、ロストックで數學の教授をしてゐた Becker に起つた實例でございませう。ベツカアは或夜五六人の友人と、神學上の議論をして、引用書が必要になつたものでございますから、それをとりに獨りで自分の書齋へ參りました。すると、彼以外の彼自身が、いつも彼のかける椅子に腰をかけて、何か本を讀んでゐるではございませんか。ベツカアは驚きながら、その人物の肩ごしに、讀んでゐる本を一瞥致しました。本はバイブルで、その人物の右手の指は「爾の墓を用意せよ。爾は死すべければなり」と云ふ章を指さして居ります。ベツカアは友人のゐる部屋へ歸つて來て、一同に自分の死の近づいた事を話しました。さうして、その語通り、翌日の午後六時に、靜に息をひきとりました。

これで見ると、Doppelgaenger の出現は、死を豫告するやうに思はれます。が、必ずしもさうばかりとは限りません。Dr. Werner は、ディレニウス夫人と云ふ女が、六歳になる自分の息子と夫の妹と三人で、黑い着物を着た第二の彼女自身を見た時に、何も變事の起らなかつた事を記錄してゐます。これは又、さう云ふ現象が、第三者の眼にも映じると云ふ、實例になりませう。Stilling 教授が擧げてゐるトリツプリンと云ふワイマアルの役人の實例や、彼の知つてゐる某 M

夫人の實例も、やはり、この部類に屬すべきものではございませんか。

更に進んで、第三者のみに現れたドッペルゲンゲルの例を尋ねますと、これも亦決して稀ではございません。現に Dr. Werner 自身もその下女が二重人格を見たさうでございます。次いで、ウルムの高等裁判所長の Pfizer と申す男は、その友人の官吏が、ゲッティンゲンにゐる息子の姿を、自分の書齋で見たと云ふ事實に、確な證明を與へて居ります。その外、「幽靈の性質に關する探究」の著者が擧げて居りますカムパアランドのカアクリントン教會區で、七歳の少女がその父の二重人格を見たと云ふ實例や「自然の暗黒面」の著者が擧げて居りますH某と云ふ科學者で藝術家だつた男が、千七百九十二年三月十二日の夜、その叔父の二重人格を見たと云ふ實例などを數へましたら、恐らくそれは、夥しい數に上る事でございませう。

私はさし當り、これ以上實例を列擧して、貴重なる閣下の時間を浪費おさせ申さうとは致しますまい。唯、閣下は、これらが皆疑ふ可らざる事實だと云ふ事を、御承知下さればよろしうございます。さもないと、或は私の申上げようとする事が、全然とりとめのない、馬鹿げた事のやうに思召すかも知れません。何故かと申しますと、私も、私自身のドッペルゲンゲルに苦しま

されてゐるものだからでございます。さうして、その事に關して、聊閣下にお願ひの筋があるからでございます。

私は私自身のドッペルゲンゲルと書きました。が、詳しく云へば、私及私の妻のドッペルゲンゲルと申さなくてはなりません。私は、當區――町――丁目――番地居住、佐々木信一郎と申すものでございます。年齢は三十五歳、職業は東京帝國文科大學哲學科卒業後、引續き今日まで、私立――大學の倫理及英語の教師を致して居ります。妻ふさ子は、丁度四年以前に、私と結婚致しました。當年二十七歳になりますが、子供はまだ一人もございません。こゝで私が特に閣下の御注意を促したいのは、妻にヒステリカルな素質があると云ふ事でございます。これは結婚前後が最も甚しく、一時は私とさへ殆ど語を交へない程、憂鬱になつた事もございましたが、近年は發作も極めて稀になり、氣象も以前に比べれば、餘程快活になつて參りました。所が、昨年の秋から又精神に何か動搖が起つたらしく、この頃では何かと異常な言動を發して、私を窘める事も少くはございません。唯、私が何故妻のヒステリイを力說するか、それはこの奇怪な現象に對する私自身の說明と、或關係があるからで、その說明については、いづれ後で詳しく申上

る事に致しませう。

さて、私及私の妻に現れたドッペルゲンゲルの事實は、どんなものかと申しますと、大體に於てこれまでに三度ございました。今それを一つづゝ私の日記を參考として、出來る丈正確に、こゝへ記載して御覽に入れませう。

第一は、昨年十一月七日、時刻は略午後九時と九時三十分との間でございます。當日私は妻と二人で、有樂座の慈善演藝會へ參りました。打明けた御話をすれば、その會の切符は、それを賣りつけられた私の友人夫婦が何かの都合で行かれなくなつた爲に、私たちの方へ親切にもまはしてくれたのでございます。演藝會そのものの事は、別にくだ〳〵しく申上げる必要はございません。又實際音曲にも踊にも興味のない私は、云はゞ妻の爲に行つたやうなものでございますから、プログラムの大半は徒に私の退屈を増させるばかりでございました。從つて、申上げようと思つたと致しましても、全然その材料を缺いてゐるやうな始末でございます。唯、私の記憶によりますと、仲入りの前は、寛永御前仕合と申す講談でございました。當時の私の思量に、異常な何ものかを期待する、準備的な心もちがありはしないかと云ふ懸念は、寛永御前仕合の講談を

聞いたと云ふこの一事でも一掃されは致しますまいか。

私は、仲入りに廊下へ出ると、すぐに妻を一人殘して、小用を足しに參りました。申上げるまでもなく、その時分には、もう廻りの狹い廊下が、人で一ぱいになつて居ります。私はその人の間を縫ひながら、便所から歸つて參りましたが、あの弧狀になつてゐる廊下が、玄關の前へ出る所で、豫期した通り私の視線は、向うの廊下の壁によりかゝるやうにして立つてゐる、妻の姿に落ちました。妻は、明い電燈の光がまぶしいやうに、つゝましく伏眼になりながら、私の方へ横顏を向けて、靜に立つてゐるのでございます。が、それに別に不思議はございません。私が私の視覺の、同時に又私の理性の主權を、殆ど刹那に粉碎しようとする恐ろしい瞬間にぶつかつたのは、私の視線が、偶然――と申すよりは、人間の知力を超越した、或隱微な原因によつて、その妻の傍に、こちらを後にして立つてゐる、一人の男の姿に注がれた時でございました。

閣下、私は、その時その男に始めて私自身を認めたのでございます。

第二の私は、第一の私と同じ羽織を着て居りました。第一の私と同じ袴を穿いて居りました。さうして又、第一の私と、同じ姿勢を裝つて居りました。もしそれがこちらを向いたとしたなら

ば、恐らくその顔も亦、私と同じだつた事でございませう。私はその時の私の心もちを、何と形容していゝかわかりません。私の周圍には大ぜいの人間が、しつきりなしに動いて居ります。私の頭の上には多くの電燈が、晝のやうな光を放つて居ります。云はゞ私の前後左右には、神祕と兩立し難い一切の條件が、備つてゐたとでも申しませうか。さうして私は實に、さう云ふ外界の中に、突然この存在以外の存在を、目前に見たのでございます。私の錯愕は、その爲に、一層驚くべきものになりました。私の恐怖は、その爲に、一層恐るべきものになりました。もし妻がその時眼をあげて、私の方を一瞥しなかつたなら、私は恐らく大聲をあげて、周圍の注意をこの奇怪な幻影に惹かうとした事でございませう。

しかし、妻の視線は、幸にも私の視線と合しました。さうして、それと殆ど同時に、第二の私は丁度硝子に龜裂の入るやうな早さで、見る間に私の眼界から消え去つてしまひました。私は、夢遊病患者のやうに、茫然として妻に近づきました。が、妻には、第二の私が眼に映じなかつたのでございませう。私が側へ參りますと、妻は何時もの調子で、「長かつたわね」と申しました。それから、私の顏を見て、今度はおづおづ「どうかして」と尋ねました。私の顏色は確に、灰のや

うになつてゐたのに相違ございません。私は冷汗を拭ひながら、私の見た超自然な現象を、妻に打明けようかどうかと迷ひました。が、心配さうな妻の顏を見ては、どうして、これが打明けられませう。私はその時、この上妻に心配させない爲に、一切第二の私に關しては、口を噤まうと決心したのでございます。

閣下、もし妻が私を愛してゐなかつたなら、さうして又私が妻を愛してゐなかつたなら、どうして私にかう云ふ決心が出來ませう。私は斷言致します。私たちは、今日まで眞底から、互に愛し合つて居りました。しかし世間はそれを認めてくれません。閣下、世間は妻が私を愛してゐる事を認めてくれません。それは恐しい事でございます。恥づべき事でございます。私としては、私が妻を愛してゐる事を否定されるより、どの位屈辱に價するかわかりません。しかも世間は、一歩を進めて、私の妻の貞操をさへ疑ひつゝあるのでございます。――

私は感情の激昂に驅られて、思はず筆を岐路に入れたやうでございます。

さて、私はその夜以來、一種の不安に襲はれはじめました。それは前に掲げました實例通り、ドツペルゲンゲルの出現は、屢々當事者の死を豫告するからでございます。しかし、その不安の

中にも、一月ばかりの日數は、何事もなく過ぎてしまひました。さうして、その中に年が改まりました。私は勿論、あの第二の私を忘れた譯ではございません。が、月日の經つのに從つて、私の恐怖なり不安なりは、次第に柔らげられて參りました、いや、時には、實際、すべてを幻覺と云ふ名で片づけてしまはうとした事さへございます。

すると、恰も私のその油斷を戒めでもするやうに、第二の私は、再私の前に現れました。

これは一月の十七日、丁度木曜日の正午近くの事でございます。その日私は學校に居りますと、突然舊友の一人が訪ねて參りましたので、幸午後からは授業の時間もございませんから、一しよに學校を出て、駿河臺下の或カツフエへ飯を食ひに參りました。駿河臺下には、御承知の通りあの四つ辻の近くに、大時計が一つございます。私は電車を下りる時に、ふとその時計の針が、十二時十五分を指してゐたのに氣がつきました。その時の私には、大時計の白い盤が、雪をもつた、鉛のやうな空を後にして、ぢつと動かずにゐるのが、何となく恐しいやうな氣がしたのでございます。或は事によるとこれも、あの前兆だつたかも知れません。私は突然この恐しさに襲はれたので、大時計を見た眼を何氣なく、電車の線路一つへだてた中西屋の前の停留場へ落し

ました。すると、その赤い柱の前には、私と私の妻とが肩を並べながら、睦じさうに立つてゐたではございませんか。

妻は黒いコオトに、焦茶の絹の襟巻をして居りました。さうして鼠色のオオヴア・コオトに黒のソフトをかぶつてゐる私に、第二の私に、何か話しかけてゐるやうに見えました。閣下、その日は私も、この第一の私も、鼠色のオオヴア・コオトに、黒のソフトをかぶつてゐたのでございます。私はこの二つの幻影を、如何に恐怖に充ちた眼で、眺めましたらう。如何に憎悪に燃えた心で、眺めましたらう。殊に、妻の眼が第二の私の顔を、甘えるやうに見てゐるのを知つた時には――ああ、一切が恐しい夢でございます。私には到底當時の私の位置を、再現するだけの勇氣がございません。私は思はず、友人の肘をとらへたなり、放心したやうに往來へ立ちすくんでしまひました。その時、外濠線の電車が、駿河臺の方から、坂を下りて來て、けたたましい音を立てながら、私の目の前をふさいだのは、全く神明の冥助とでも云ふものでございませう。私たちは丁度、外濠線の線路を、向うへ突切らうとしてゐた所なのでございます。

電車は勿論、すぐに私たちの前を通りぬけました。しかしその後で、私の視線を遮つたのは、

唯中西屋の前にある赤い柱ばかりでございました。二つの幻影は、電車のかげになつた刹那に、どこかへ見えなくなつてしまつたのでございます。私は、妙な顔をしてゐる友人を促して、可笑しくもない事を可笑しさうに笑ひながら、わざと大股に歩き出しました。その友人が、後に私が發狂したと云ふ噂を立てたのも、當時の私の異常な行動を考へれば、滿更無理な事ではございません。しかし、私の發狂の原因を、私の妻の不品行にあるとするに至つては、好んで私を侮辱したものと思はれます。私は、最近にその友人へ絶交狀を送りました。

私は、事實を記すのに忙しい餘り、その時の妻が、妻の二重人格にすぎない事を證明致さなかつたやうに思ひます。當時の正午前後、妻は確に外出致しませんでした。これは、妻自身はもとより、私の宅で召使つてゐる下女も、さう申して居る事でございます。又、その前日から、頭痛がすると申して、兎角ふさぎ勝ちでゐた妻が、俄に外出する筈もございません。して見ますと、この場合、私の眼に映じた妻の姿は、ドツペルゲンゲルでなくて、何でございませう。私は、妻が私に外出の有無を問はれて、眼を大きくしながら、「いゝえ」と云つた顔を、今でもあり／＼と覺えて居ります。もし世間の云ふやうに、妻が私を欺いてゐるのなら、あゝ云ふ、子供のやう

な無邪氣な顏は、決して出來るものではございません。

私が第二の私の客觀的存在を信ずる前に、私の精神狀態を疑つたのは、勿論の事でございます。しかし、私の頭腦は少しも混亂して居りません。安眠も出來ます。勉強も出來ます。成程、二度目に第二の私を見て以來、稍ともすると、ものに驚き易くなつて居りますが、これはあの奇怪な現象に接した結果であつて、斷じて原因ではございません。私はどうしても、この存在以外の存在を信じなければならないやうになつたのでございます。

しかし、私は、その時も妻には、とう〳〵、あの幻影の事を話さずにしまひました。もし運命が許したら、私は今日までもやはり口を噤んで居りましたらう。が、執拗な第二の私は、三度私の前にその姿を現しました。これは前週の火曜日、即二月十三日の午後七時前後の事でございます。私はその時、妻に一切を打明けなければならないやうな羽目になつてしまひました。これもさうする外に、私たちの不幸を輕くする手段が、なかつたのですから、仕方がございません。が、この事は後で又、申上げる事に致しませう。

その日、丁度宿直に當つてゐた私は、放課後間もなく、はげしい胃痙攣に惱まされたので、

早速校醫の忠告通り、車で宅へ歸る事に致しました。所が午頃からふり出した雨に風が加はつて、宅の近くへ參りました時には、たゝきつけるやうな吹き降りでございます。私は門の前で匆々車賃を拂つて、雨の中を大急ぎで玄關まで駈けて參りました。玄關の格子には、何時もの通り、内から釘がさしてございます。が、私には外からでも釘が拔けますから、すぐに格子をあけて、中へはいりました。大方雨の音にまぎれて、格子のあく音が聞えなかつたのでございませう。奧からは誰も出て參りません。私は靴をぬいで、帽子とオオヴア・コオトとを折釘にかけて、玄關から一間置いた向うにある、書齋の唐紙をあけました。これは茶の間へ行く間に、教科書其他のはいつてゐる手提鞄を、そこへ置いて行くのが習慣になつてゐるからでございます。

すると、私の眼の前には、忽ち意外な光景が現れました。北向きの窓の前にある机と、その前にある輪轉椅子と、さうしてそれらを圍んでゐる書棚とには、勿論何の變化もございません。しかし、こちらに横をむけて、その机の側に立つてゐた女と、輪轉椅子に腰をかけてゐた男とは、一體誰だつたでございませう。閣下、私はこの時、第二の私と第二の私の妻とを、咫尺の間に見たのでございます。私は當時の恐しい印象を忘れようとしても、忘れる事は出來ません。私の立

つてゐる閾の上からは、机に向つて竝んでゐる二人の横顔が見えました。窓から來るつめたい光をうけて、その顔は二つとも鋭い明暗を作つて居ります。さうして、その顔の前にある、黄いろい絹の笠をかけた電燈が、私の眼には殆どまつ黑に映りました。しかも、何と云ふ皮肉でございませう。彼等は、私がこの奇怪な現象を記錄して置いた、私の日記を讀んでゐるのでございます。これは机の上に開いてある本の形で、すぐにそれがわかりました。

私はこの光景を一瞥すると同時に、私自身にもわからない叫び聲が、自ら私の脣を衝いて出たやうな記憶がございます。又、その叫び聲につれて、二人の幻影が同時に私の方を見たやうな記憶もございます。もし彼等が幻影でなかつたなら、私はその一人たる妻からでも、當時の私の容子を話して貰ふ事が出來たでございませう。しかし勿論それは不可能な事でございます。唯、確に覺えてゐるのは、その時私がはげしい眩暈を感じたと云ふ事より外に、全く何もございません。私はその儘、そこに倒れて、失神してしまつたのでございます。その物音に驚いて、妻が茶の間から駈けつけて來た時には、あの呪ふべき幻影ももう消えてゐたのでございませう。妻は私をその書齋へ寢かして、早速氷嚢を額へのせてくれました。

私が正氣にかへつたのは、それから三十分ばかり後の事でございます。妻は、私が失神から醒めたのを見ると、突然聲を立てゝ泣き出しました。この頃の私の言動が、どうも妻の腑に落ちないと申すのでございます。「何かあなたは疑つていらつしやるのでせう。さうでせう。それなら、何故さうと打明けてくださらないのです。」妻はかう申して、私を責めました。世間が、妻の貞操を疑つてゐると云ふ事は、閣下も御承知の筈でございます。それはその時既に、私の耳へはいつて居りました。恐らくは妻も亦、誰からと云ふ事もなく、この恐しい噂を聞いてゐたのでございませう。私は妻の語が、私もさう云ふ疑を持つてはゐはしないかと云ふ掛念で、ふるへてゐるのを感じました、妻は、私のあらゆる異常な言動が、皆その疑から來たものと思つてゐるらしいのでございます。この上私が沈默を守るとすればそれは徒に妻を窘める事になるより外はございません。そこで、私は、額にのせた氷嚢が落ちないやうに、靜に顏を妻の方へ向けながら、低い聲で「許してくれ。己はお前に隱して置いた事がある。」と申しました。さうしてそれから、第二の私が三度まで私の眼を遮つた話を、出來る丈詳しく話しました。「世間の噂も、己の考へでは、誰か第二の己が第二のお前と一しよにゐるのを見て、それから揑造したものらしい。己は固くお

前を信じてゐる。その代りお前も己を信じてくれ。」私はその後で、かう力を入れてつけ加へました。しかし、妻は、弱い女の身として、世間の疑の的になると云ふ事が、如何にも切ないのでございませう。或は又、ドツペルゲンゲルと云ふ現象が、その疑を解く爲には餘りに異常すぎたせゐもあるのに相違ございません。妻は私の枕もとで、何時までも啜り上げて泣いて居ります。

　そこで私は、前に掲げた種々の實例を擧げて、如何にドツペルゲンゲルの存在が可能かと云ふ事を、諄々として妻に說いて聞かせました。閣下、妻のやうにヒステリカルな素質のある女には、殊にかう云ふ奇怪な現象が起り易いのでございます。その例もやはり、記錄に乏しくはございません。例へば著名なソムナンビユウルの Auguste Muller などは、屢々その二重人格を示したと云ふ事でございます。但さう云ふ場合には、その夢遊病患者の意志によつて、ドツペルゲンゲルが現れるのでございますから、その意志が少しもない妻の場合には、當てはまらないと云ふ非難もございませう。又一歩を讓つて、それで妻の二重人格が說明出來るにしても、私のそれは出來ないと云ふ疑問が起るかも知れません。しかしこれ等は、決して解釋に苦む程困難な問題ではございません。何故かと申しますと、自分以外の人間の二重人格を現す能力も、時には持つてゐる

ものがある事は、やはり疑ひ難い事實でございます。フランツ・フオン・バアデルがDr. Wernerに與へました手紙によりますと、エッカルツハウズンは、死ぬ少し前に、自分は他の人間の二重人格を現す能力を持つてゐると、公言したさうでございます。して見ますれば、第二の疑問は、第一の疑問と同じく、妻がそれを意志したかどうかと云ふ事になつてしまふ譯でございませう。所で、意志の有無と申す事は、存外不確なものではございますまいか。成程、妻はドツペルゲンゲルを現さうとは、意志しなかつたのに相違ございません。しかし、私の事は始終念頭にあつたでございませう。或は私とどこかへ一しよに行く事を、望んで居つたかも知れません。これが妻のやうな素質を持つてゐるものに、ドツペルゲンゲルの出現を意志したと、同じやうな結果を齎すと云ふ事は、考へられない事でございませうか。少くとも私はさうありさうな事だと存じます。まして、私の妻のやうな實例も、二三外に散見してゐるではございませんか。

　私はかう云ふやうな事を申して、妻を慰めました。妻もやつと得心が行つたのでございませう。それからは、「唯あなたがお氣の毒ね」と申して、ぢつと私の顏を見つめたきり、涙を乾かしてしまひました。

閣下、私の二重人格が私に現れた、今日までの經過は、大體右のやうなものでございます。私は、それを、妻と私との間の祕密として、今日まで誰にも洩らしませんでした。しかし今はもう、その時ではございません。世間は公然、私を嘲り始めました。さうして又、私の妻を憎み始めました。現にこの頃では、妻の不品行を諷した俚謠をうたつて、私の宅の前を通るものさへございます。私として、どうして、それを默視する事が出來ませう。

しかし、私が閣下にかう云ふ事を御訴へ致すのは、單に私たち夫妻に無理由な侮辱が加へられるからばかりではございません。さう云ふ侮辱を耐へ忍ぶ結果、妻のヒステリイが、益昂進する傾があるからでございます。ヒステリイが益昂進すれば、ドツペルゲンゲルの出現も或はより頻繁になるかも知れません。さうすれば、妻の貞操に對する世間の疑は、更に甚しくなる事でございませう。私はこのデイレムマをどうして脱したらいゝか、わかりません。

閣下、かう云ふ事情の下にある私にとつては、閣下の御保護に依頼するのが、最後の、さうして又唯一の活路でございます。どうか私の申上げた事を御信じ下さい。さうして、殘酷な世間の迫害に苦しんでゐる、私たち夫妻に御同情下さい。私の同僚の一人は故に大きな聲を出して、新

聞に出てゐる姦通事件を、私の前で喋々して聞かせました。私の先輩の一人は、私に手紙をよこして、妻の不品行を諷すると同時に、それとなく離婚を勸めてくれました。それから又、私の教へてゐる學生は、私の講義を眞面目に聽かなくなつたばかりでなく、私の教室の黑板に、私と妻とのカリカテュアを描いて、その下に「めでたしめでたし」と書いて置きました。しかし、それらは皆、多少なりとも私と交渉のある人々でございますが、この頃では、赤の他人の癖に、思ひもよらない侮辱を加へるものも、決して少くはございません。或者は、無名のはがきをよこして、妻を禽獸に比しました。或者は、宅の黑塀へ學生以上の手腕を揮つて、如何はしい畫と文句とを書きました。さうして更に大膽なる或者は、私の庭内へ忍びこんで、妻と私とが夕飯を認めてゐる所を、窺ひに參りました。閣下、これが人間らしい行でございませうか。

私は閣下に、これだけの事を申上げたい爲に、この手紙を書きました。私たち夫妻を凌辱し、脅迫する世間に對して、官憲は如何なる處置をとる可きものか、それは勿論閣下の問題で、私の問題ではございません。が、私は、賢明なる閣下が、必ず私たち夫妻の爲に、閣下の權能を最適當に行使せられる事を確信して居ります。どうか昭代をして、不祥の名を負はせないやうに、

閣下の御職務を御完うし下さい。

猶、御質問の筋があれば、私は何時でも御署まで出頭致します。ではこれで、筆を擱く事に致しませう。

第二の手紙

——警察署長閣下、

閣下の怠慢は、私たち夫妻の上に、最後の不幸を齎しました。私の妻は、昨日突然失踪したぎり、未にどうなつたかわかりません。私は危みます。妻は世間の壓迫に耐へ兼ねて、自殺したのではございますまいか。

世間は遂に、無辜の人を殺しました。さうして閣下自身も、その悪む可き幇助者の一人になられたのでございます。

私は今日限り、當區に居住する事を止めるつもりでございます。無爲無能なる閣下の警察の下に、この上どうして安んじてゐる事が出來ませう。

閣下、私は一昨日、學校も辭職しました。今後の私は、全力を擧げて、超自然的現象の研究に從事するつもりでございます。閣下は恐らく、一般世人と同様、私のこの計畫を冷笑なさる事でせう。しかし一警察署長の身を以て、超自然的なる一切を否定するのは、恥づべき事ではございますまいか。

閣下は先、人間が如何に知る所の少ないかを御考へになるべきでせう。たとへば、閣下の使用せられる刑事の中にさへ、閣下の夢にも御存知にならない傳染病を持つてゐるものが、大勢居ります。殊にそれが、接吻によつて、迅速に傳染すると云ふ事實は、私以外に殆一人も知つてゐるものはございません。この例は、優に閣下の傲慢なる世界觀を破壞するに足りませう。……

× × × × ×

それから、先は、殆意味をなさない、哲學じみた事が、長々と書いてある。これは不必要だから、こゝには省く事にした。

(大正六年八月十日)

或日の大石内藏助

立てきつた障子にはうららかな日の光がさして、嵯峨たる老木の梅の影が、何間かの明みを、右の端から左の端まで畫の如く鮮に領してゐる。元淺野内匠頭家來、當時細川家に御預り中の大石内藏助良雄は、その障子を後にして、端然と膝を重ねた儘、さつきから書見に餘念がない。書物は恐らく、細川家の家臣の一人が借してくれた三國誌の中の一冊であらう。

九人一つ座敷にゐる中で、片岡源五右衞門は、今し方厠へ立つた。早水藤左衞門は、下の間へ話しに行つて、未にここへ歸らない。あとには、吉田忠左衞門、原惣右衞門、間瀨久太夫、小野寺十内、堀部彌兵衞、間喜兵衞の六人が、障子にさしてゐる日影も忘れたやうに、或は書見に耽つたり、或は消息を認めたりしてゐる。その六人が六人とも、五十歳以上の老人ばかり揃つてゐたせゐか、まだ春の淺い座敷の中は、肌寒いばかりにもの靜である。時たま、しはぶきの聲をさせるものがあつても、それは、かすかに漂つてゐる墨の匂を動かす程の音さへ立てない。

内藏助は、ふと眼を三國誌からはなして、遠い所を見るやうな眼をしながら、靜に手を傍の火鉢の上にかざした。金網をかけた火鉢の中には、いけてある炭の底に、うつくしい赤いものが、かんがりと灰を照らしてゐる。その火氣を感じると、内藏助の心には、安らかな滿足の情が、今更のやうにあふれて來た。丁度、去年の極月十五日に、亡君の讐を復して、泉岳寺へ引上げた時、彼自ら「あらたのし思ひははるる身はすつる、うきよの月にかかる雲なし」と詠じた、その時の滿足が歸つて來たのである。

赤穗の城を退去して以來、二年に近い月日を、如何に彼は焦慮と畫策との中に、費した事であらう。動もすればはやり勝ちな、一黨の客氣を控制して、徐に機の熟するのを待つただけでも、並大抵な骨折りではない。しかも讐家の放つた細作は、絶えず彼の身邊を窺つてゐる。彼は放埒を裝つて、これらの細作の眼を欺くと共に、併せて又、その放埒に欺かれた同志の疑惑をも解かなければならなかつた。山科や圓山の謀議の昔を思ひ返せば、當時の苦衷が再心の中によみ返つて來る。――しかし、もうすべては行く處へ行きついた。

もし、まだ片のつかないものがあるとすれば、それは一黨四十七人に對する、公儀の御沙汰だ

けである。が、その御沙汰があるのも、いづれ遠い事ではないのに違ひない。さうだ。すべては行く處へ行きついた。それも單に、復讐の擧が成就したと云ふばかりではない。すべてが、彼の道德上の要求と、殆完全に一致するやうな形式で成就した。彼は、事業を完成した滿足を味つたばかりでなく、道德を體現した滿足をも、同時に味ふ事が出來たのである。しかも、その滿足は、復讐の目的から考へても、手段から考へても、良心の疚しさに曇らされる所は少しもない。彼として、これ以上の滿足があり得ようか。……

かう思ひながら、内藏助は眉をのべて、これも書見に倦んだのか、書物を伏せた膝の上へ、指で手習ひをしてゐた吉田忠左衞門に、火鉢のこちらから聲をかけた。

「今日は餘程暖いやうですな。」

「さやうでございます。かうして居りましても、どうかすると、あまり暖いので、睡氣がさしさうでなりません。」

内藏助は微笑した。この正月の元旦に、富森助右衞門が、三杯の屠蘇に醉つて、「今日も春恥しからぬ寢武士かな」と吟じた、その句がふと念頭に浮んだからである。句意も、良雄が今感じて

ゐる滿足と變りはない。

「やはり本意を遂げたと云ふ、氣のゆるみがあるのでございませう。」

「さうさ。それもありませう。」

忠左衞門は、手もとの煙管をとり上げて、つゝましく一服の煙を味つた。煙は、早春の午後をわづかにくゆらせながら、明い靜かさの中に、うす青く消えてしまふ。

「かう云ふのどかな日を送る事があらうとは、お互に思ひがけなかつた事ですからな。」

「さやうでございます。手前も二度と、春に逢はうなどとは、夢にも存じませんでした。」

「我々は、よく〳〵運のよいものと見えますな。」

二人は、滿足さうに、眼で笑ひ合つた。――もしこの時、良雄の後の障子に、影法師が一つ映らなかつたなら、さうして、その影法師が、障子の引手へ手をかけると共に消えて、その代りに、早水藤左衞門の逞しい姿が、座敷の中へはいつて來なかつたなら、良雄は何時までも、快い春の日の暖さを、その誇らかな滿足の情と共に、味はふ事が出來たのであらう。が、現實は、血色の好い藤左衞門の兩頰に浮んでゐる、ゆたかな微笑と共に、遠慮なく二人の間へはいつて來た。が、

彼等は、勿論それには氣がつかない。

「大分下の間は、賑かなやうですな。」

忠左衞門は、かう云ひながら、又煙草を一服吸ひつけた。

「今日の當番は、傳右衞門殿ですから、それで餘計話がはずむのでせう。片岡なども、今し方あちらへ參つて、その儘坐りこんでしまひました。」

「道理こそ、遲いと思ひましたよ。」

忠左衞門は、煙にむせて、苦しさうに笑つた。すると、頻に筆を走らせてゐた小野寺十内が、何かと思つた氣色で、ちよいと顏をあげたが、すぐ又眼を紙へ落して、せつせとあとを書き始める。これは恐らく、京都の妻女へ送る消息でも、認めてゐたものであらう。――内藏助も、眦の皺を深くして、笑ひながら、

「何か面白い話でもありましたか。」

「いえ、不相變の無駄話ばかりでございます。尤も先刻、近松が甚三郎の話を致した時には、傳右衞門殿なぞも、眼に涙をためて、聞いて居られましたが、その外は――いや、さう云へば、面

白い話がございました。我々が吉良殿を討取つて以來、江戸中に何かと仇討じみた事が流行るさうでございます。」
「はゝあ、それは思ひもよりませんな。」
忠左衛門は、けゞんな顔をして、藤左衛門を見た。相手は、この話をして聞かせるのが、何故か非常に得意らしい。
「今も似よりの話を二つ三つ聞いて來ましたが、中でも可笑しかつたのは、南八丁堀の湊町邊にあつた話です。何でも事の起りは、あの界隈の米屋の亭主が、風呂屋で、隣同志の紺屋の職人と喧嘩をしたのですな。どうせ起りは、湯がはねかつたとか何とか云ふ、つまらない事からなのでせう。さうして、その揚句に米屋の亭主の方が、紺屋の職人に桶で散々に撲られたのださうです。すると、米屋の丁稚が一人、それを遺恨に思つて、暮方その職人の外へ出る所を待伏せて、いきなり鉤を向うの肩へ打ちこんだと云ふぢやありませんか。それも「主人の讐、思ひ知れ」と云ひながら、やつたのださうです。……」
藤左衛門は、手眞似をしながら、笑ひ〳〵、かう云つた。

「それは又亂暴至極ですな。」
「職人の方は、大怪我をしたやうです。それでも、近所の評判は、その丁稚の方が好いと云ふのだから、不思議でせう。その外まだ其の通町三丁目にも一つ、新麹町の二丁目にも一つ、それから、もう一つは何處でしたかな。兎に角、諸方にあるさうです。それが皆、我々の眞似ださうだから、可笑しいぢやありませんか。」
藤左衞門と忠左衞門とは、顏を見合せて、笑つた。復讐の擧が江戸の人心に與へた影響を耳にするのは、どんな些事にしても、快いに相違ない。唯一人内藏助だけは、僅に額へ手を加へた儘、つまらなさうな顏をして、默つてゐる。――藤左衞門の話は、彼の心の滿足に、かすかながら妙な曇りを落させた。と云つても、勿論彼が、彼のした行爲のあらゆる結果に、責任を持つ氣でゐた譯ではない。彼等が復讐の擧を果して以來、江戸中に仇討が流行した所で、それはもとより彼の良心と風馬牛なのが當然である。しかし、それにも關らず、彼の心からは、今までの春の溫もりが、幾分か減却したやうな感じがあつた。
事實を云へば、その時の彼は、單に自分たちのした事の影響が、意外な所まで波動したのに、

聊驚いただけなのである。が、ふだんの彼なら、藤左衞門や忠左衞門と共に、笑つてすませる筈のこの事實が、其時の滿足しきつた彼の心には、ふと不快な種を蒔く事になつた。これは恐らく、彼の滿足が、暗々の裡に論理と背馳して、彼の行爲とその結果のすべてとを肯定する程、蟲の好い性質を帶びてゐたからであらう。勿論當時の彼の心には、かう云ふ解剖的な考へは、少しもはいつて來なかつた。彼は唯、春風の底に一脈の氷冷の氣を感じて、何となく不愉快になつただけである。

しかし、内藏助の笑はなかつたのは、格別二人の注意を惹かなかつたらしい。いや、人の好い藤左衞門の如きは、彼自身にとつてこの話が興味あるやうに、内藏助にとつても興味があるものと確信して疑はなかつたのであらう。それでなければ、彼は、更に自身下の間へ赴いて、當日の當直だつた細川家の家來、堀内傳右衞門を、わざ／＼こちらへつれて來などはしなかつたのに相違ない。所が、萬事にまめな彼は、忠左衞門を顧て、「傳右衞門殿をよんで來ませう。」とか何とか云ふと、早速隔ての襖をあけて、氣輕く下の間へ出向いて行つた。さうして、程なく、見た所から無骨らしい傳右衞門を伴なつて、不相變の微笑をたゝへながら、得々として歸つて來た。

「いや、これは、とんだ御足勞を願つて恐縮でございますな。」

忠左衛門は、傳右衛門の姿を見ると、良雄に代つて、微笑しながらから云つた。傳右衛門の素朴で、眞率な性格は、お預けになつて以來、夙に彼と彼等との間を、故舊のやうな溫情でつないでゐたからである。

「早水氏が是非こちらへ參れと云はれるので、御邪魔とは思ひながら、罷り出ました。」

傳右衛門は、座につくと、太い眉毛を動かしながら、日にやけた頰の筋肉を、今にも笑ひ出しさうに動かして、萬遍なく一座を見廻した。これにつれて、書物を讀んでゐたのも、筆を動かしてゐたのも、皆それ〴〵挨拶をする。內藏助もやはり、慇懃に會釋をした。唯その中で聊滑稽の觀があつたのは、讀みかけた太平記を前に置いて、眼鏡をかけた儘、居眠りをしてゐた堀部彌兵衛が、眼をさますが早いか、慌ててその眼鏡をはづして、丁寧に頭を下げた容子である。これには流石な間喜兵衛も、よく〳〵可笑しかつたものと見えて、傍の衝立の方を向きながら、苦しさうな顏をして笑をこらへてゐた。

「傳右衛門殿も老人はお嫌だと見えて、兎角こちらへはお出になりませんな。」

内藏助は、何時に似合はない、滑な調子で、かう云つた。幾分か亂されはしたものの、まだ彼の胸底には、さつきの滿足の情が、暖く流れてゐたからであらう。

「いや、さう云ふ譯ではございませんが、何かとあちらの方々に引とめられて、ついその儘、話しこんでしまふのでございます。」

「今も承れば、大分面白い話が出たやうでございますな。」

忠左衛門も、傍から口を挾んだ。

「面白い話――と申しますと……」

「江戸中で仇討の眞似事が流行ると云ふ、あの話でございます。」

藤左衛門は、かう云つて、傳右衛門と内藏助とを、にこ〳〵しながら、等分に見比べた。

「はあ、いや、あの話でございますか。人情と云ふものは、實に妙なものでございます。御一同の忠義に感じると、町人百姓までさう云ふ眞似がして見たくなるのでございませう。これで、どの位じだらくな上下の風俗が、改まるかわかりません。やれ淨瑠璃の、やれ歌舞伎のと、見たくもないものばかり流行つてゐる時でございますから、丁度よろしうございます。」

會話の進行は、又内藏助にとつて、面白くない方向へ進むらしい。そこで、彼は、わざと重々しい調子で、卑下の辭を述べながら、巧にその方向を轉換しようとした。

「手前たちの忠義をお褒め下さるのは難有いが、手前一人の量見では、お恥しい方が先に立ちます。」

かう云つて、一座を眺めながら、

「何故かと申しますと、赤穗一藩に人も多い中で、御覽の通りこゝに居りまするものは、皆小身者ばかりでございます。尤も最初は、奥野將監などと申す番頭も、何かと相談にのつたものでございますが、中ごろから量見を變へ、遂に同盟を脱しましたのは、心外と申すより外はございません。その外、進藤源四郎、河村傳兵衞、小山源五右衞門などは、原惣右衞門より上席でございますし、佐々小左衞門なども、吉田忠左衞門より身分は上でございますが、皆一擧が近づくにつれて、變心致しました。その中には、手前の親族の者もございます。して見ればお恥しい氣のするのも無理はございますまい。」

一座の空氣は、内藏助のこの語と共に、今までの陽氣さをなくして、急に眞面目な調子を帶

びた。この意味で、會話は、彼の意圖通り、方向を轉換したと云つても差支へない。が、轉換した方向が、果して內藏助にとつて、愉快なものだつたかどうかは、自ら又別な問題である。

彼の述懷を聞くと、先早水藤左衞門は、兩手にこしらへてゐた拳骨を、二三度膝の上でこすりながら、

「彼奴等は皆、揃ひも揃つた人畜生ばかりですな。一人として、武士の風上にも置けるやうな奴は居りません。」

「さやうさ。それも高田群兵衞などになると、畜生より劣つてゐますて。」

忠左衞門は、眉をあげて、贊同を求めるやうに、堀部彌兵衞を見た。慷慨家の彌兵衞は、もとより默つてゐない。

「引上げの朝、彼奴に遇つた時には、唾を吐きかけても飽き足らぬと思ひました。何しろのめのめと我々の前へ面をさらした上に、御本望を遂げられ、大慶の至りなどと云ふのですからな。」

「高田も高田ぢやが、小山田庄左衞門などもしやうのないたはけ者ぢや。」

間瀬久太夫が、誰に云ふともなくかう云ふと、原惣右衞門や小野寺十內も、やはり口を齊しく

して、背盟の徒を罵りはじめた。寡默な間喜兵衛でさへ、口こそきかないが、白髪頭をうなづかせて、一同の意見に賛同の意を表した事は、度々ある。

「何に致せ、御一同のやうな忠臣と、一つ御藩に、さやうな輩が居らうとは、考へられも致しませんな。さればこそ、武士はもとより、町人百姓まで、犬侍の祿盗人のと惡口を申して居るやうでございます。岡林杢之助殿なども、昨年切腹こそ致されたが、やはり親類縁者が申し合せて、詰腹を斬らせたのだなどと云ふ風評がございました。又よしんばさうでないにしても、かやうな場合に立ち至つて見れば、その汚名も受けずには居られますまい。まして、餘人は猶更の事でございます。これは、仇討の眞似事を致す程、義に勇みやすい江戸の事と申し、且はかねがね御一同の御憤りもある事と申し、さやうな輩を斬つてすてるものが出ないとも、限りませんな。」

傳右衛門は、他人事とは思はれないやうな容子で、昂然とかう云ひ放つた。この分では、誰よりも彼自身が、その斬り捨ての任に當り兼ねない勢である。これに煽動された吉田、原、早水、堀部などは、皆一種の興奮を感じたやうに、愈手ひどく、亂臣賊子を罵殺しにかゝつた。――が、その中に唯一人、大石内藏助だけは、兩手を膝の上にのせた儘、愈つまらなさうな顏をして、

だんだん口數をへらしながら、ぼんやり火鉢の中を眺めてゐる。

彼は、彼の轉換した方面へ會話が進行した結果、變心した故朋輩の代價で、彼等の忠義が益褒めそやされてゐると云ふ、新しい事實を發見した。さうして、それと共に、彼の胸底を吹いてゐた春風は、再幾分の温もりを減却した。勿論彼が背盟の徒の爲に惜んだのは、單に會話の方向を轉じたかつた爲ばかりではない。彼としては、實際彼等の變心を遺憾とも不快とも思つてゐた。が、彼はそれらの不忠の侍をも、憐みこそすれ、憎いとは思つてゐない。人情の向背も、世故の轉變も、つぶさに味つて來た彼の眼から見れば、彼等の變心の多くは、自然すぎる程自然であつた。もし眞率と云ふ語が許されるとすれば、氣の毒な位眞率であつた。從つて、彼は彼等に對しても、終始寛容の態度を改めなかつた。まして、復讐の事の成つた今になつて見れば、彼等に與ふ可きものは、唯だ憫笑が殘つてゐるだけである。それを世間は、殺しても猶飽き足らないやうに、思つてゐるらしい。何故我々を忠義の士とする爲には、彼等を人畜生としなければならないのであらう。我々と彼等との差は、存外大きなものではない。――江戸の町人に與へた妙な影響を、前に快からず思つた内藏助は、それとは稍ちがつた意味で、今度は背盟の徒が蒙つた影

響を、傳右衛門によつて代表された、天下の公論の中に看取した。彼が苦い顏をしたのも、決して偶然ではない。

しかし、内藏助の不快は、まだこの上に、最後の仕上げを受ける運命を持つてゐた。

彼の無言でゐるのを見た傳右衛門は、大方それを彼らしい謙讓な心もちの結果とでも、推測したのであらう。愈彼の人柄に敬服した。その敬服さ加減を披瀝する爲に、この朴直な肥後侍は、無理に話頭を一轉すると、忽内藏助の忠義に對する、盛な歎賞の辭をならべはじめた。

「過日もさる物識りから承りましたが、唐土の何とやら申す侍は、炭を吞んで啞になつてまでも、主人の仇をつけ狙つたさうでございますな。しかし、それは内藏助殿のやうに、心にもない放埒をつくされるよりは、まだ〱苦しくない方ではございますまいか。」

傳右衛門は、かう云ふ前置きをして、それから、内藏助が濫行を盡した一年前の逸聞を、長々としやべり出した。高尾や愛宕の紅葉狩も、佯狂の彼には、どの位つらかつた事であらう。島原や祇園の花見の宴も、苦肉の計に耽つてゐる彼には、苦しかつたのに相違ない。……

「承れば、その頃京都では、大石かるくて張抜石などと申す唄も、流行りました由を聞き及び

ました。それほどまでに、天下を欺き了せるのは、よく〳〵の事でなければ出來ますまい。先頃天野彌左衞門樣が、沈勇だと御賞美になつたのも、至極道理な事でございます。」

「いや、それ程何も、大した事ではございません。」内藏助は、不承々々に答へた。

その人に傲らない態度が、傳右衞門にとつては、物足りないと同時に、一層の奧床しさを感じさせたと見えて、今まで内藏助の方を向いてゐた彼は、永年京都勤番をつとめてゐた小野寺十内の方へ向きを換へると、益〻、熱心に推服の意を洩し始めた。その子供らしい熱心さが、一黨の中でも通人の名の高い十内には、可笑しいと同時に、可愛かつたのであらう。彼は、素直に傳右衞門の意をむかへて、當時内藏助が仇家の細作を欺く爲に、法衣をまとつて升屋の夕霧のもとへ通ひつめた話を、事明細に話して聞かせた。

「あの通り眞面目な顏をしてゐる内藏助が、當時は里げしきと申す唄を作つた事もございました。それが又、中々評判で、廓中どこでもうたはなかつた所は、なかつた位でございます。そこへ當時の内藏助の風俗が、墨染の法衣姿で、あの祇園の櫻がちる中を、浮さま〳〵とそやされながら、醉つて歩くと云ふのでございませう。里げしきの唄が流行つたり、内藏助の濫行も名高くなつた

りしたのは、少しも無理はございません。何しろ夕霧と云ひ、浮橋と云ひ、島原や撞木町の名高い太夫たちでも、内藏助と云へば、下にも置かぬやうに扱ふと云ふ騒ぎでございましたから。」

内藏助は、かう云ふ十内の話を、殆侮蔑されたやうな心もちで、苦々しく聞いてゐた。と同時に又、昔の放埒の記憶を、思ひ出すともなく思ひ出した。それは、彼にとつては、不思議な程色彩の鮮な記憶である。彼はその思ひ出の中に、長蠟燭の光を見、伽羅の油の匂を嗅ぎ、加賀節の三味線の音を聞いた。いや、今十内が云つた里げしきの「さすが涙のばら〱袖に、こぼれて袖に、露のよすがのうきつとめ」と云ふ文句さへ、春宮の中からぬけ出したやうな、夕霧や浮橋のなまめかしい姿と共に、歴々と心中に浮んで來た。如何に彼は、この記憶の中に出沒するあらゆる放埒の生活を、思ひ切つて受用した事であらう。さうして又、如何に彼は、その放埒の生活の中に、復讐の擧を全然忘却した駘蕩たる瞬間を、味つた事であらう。彼は己を欺いて、この事實を否定するには、餘りに正直な人間であつた。勿論この事實が不道徳なものだなどゝ云ふ事も、人間性に明な彼にとつて、夢想さへ出來ない所である。從つて、彼の放埒のすべてを、彼の忠義を盡す手段として激賞されるのは、不快であると共に、うしろめたい。

から考へてゐる內藏助が、その所謂佯狂苦肉の計を褒められて、苦い顏をしたのに不思議はない。彼は、再度の打擊をうけて僅に殘つてゐた胸間の春風が、見る見る中に吹きつくしてしまつた事を意識した。あとに殘つてゐるのは、一切の誤解に對する反感と、その誤解を豫想しなかつた彼自身の愚に對する反感とが、うすら寒く影をひろげてゐるばかりである。彼の復讐の擧も、彼の同志も、最後に又彼自身も、多分この儘、勝手な賞讚の聲と共に、後代まで傳へられる事であらう。――かう云ふ不快な事實と向ひあひながら、彼は火の氣のうすくなつた火鉢に手をかざすと、傳右衛門の眼をさけて、情無ささうにため息をした。

それから何分かの後である。厠へ行くのにかこつけて、座をはづして來た大石內藏助は、獨り緣側の柱によりかゝつて、寒梅の老木が、古庭の苔と石との間に、的皪たる花をつけたのを眺めてゐた。日の色はもううすれ切つて、植込みの竹のかげからは、早くも黄昏がひろがらうとするらしい。が、障子の中では、不相變面白さうな話聲がつゞいてゐる。彼はそれを聞いてゐる中に、

自らな一味の哀情が、徐に彼をつゝんで來るのを意識した。このかすかな梅の匂につれて、冴返る心の底へしみ透つて來る寂しさは、この云ひやうのない寂しさは、一體どこから來るのであらう。――內藏助は、靑空に象嵌をしたやうな、堅く冷い花を仰ぎながら、何時までもぢつと佇んでゐた。

（大正六年八月十五日）

片戀

（一しよに大學を出た親しい友だちの一人に、或夏の午後京濱電車の中で遇つたら、こんな話を聞かせられた。）

この間、社の用でYへ行つた時の話だ。向うで宴會を開いて、僕を招待してくれた事がある。何しろYの事だから、床の間には石版摺りの乃木大將の掛物がかゝつてゐて、その前に造花の牡丹が生けてあると云ふ體裁だがね。夕方から雨がふつたのと、人數も割に少かつたのとで、思つたよりや感じがよかつた。その上二階にも一組宴會があるらしかつたが、これも幸と土地がらに似ず騷がない。所が君、お酌人の中に――

君も知つてゐるだらう。僕らが昔よく飲みに行つたUの女中に、お德つて女がゐた。鼻の低い、額のつまつた、あすこ中での茶目だつた奴さ。あいつが君、はいつてゐるんだ。お座敷着で、お銚子を持つて、外の朋輩なみに乙につんとすましてさ。始は僕も人ちがひかと思つたが、側へ來

たのを見ると、お德にちがひない。もの云ふ度に、顋をしやくる癖も、昔の通りだ。――僕は實際無常を感じてしまつたね。あれでも君、元は志村の岡惚れだつたんぢやないか。

志村の大將、その時分は大眞面目で、青木堂へ行つちやペパミントの小さな罎を買つて來て、『甘いから飮んでごらん。』などと、やつたものさ。酒も甘かつたらうが、志村も甘かつたよ。

そのお德が、今ぢやこんな所で商賣をしてゐるんだ。シカゴにゐる志村が聞いたら、どんな心もちがするだらう。さう思つて、聲をかけようとしたが、遠慮した。――お德の事だ。前には日本橋に居りました位な事は、云つてないものぢやない。

すると、向うから聲をかけた。『ずゐぶんしばらくだわねえ。私がUにゐる時分にお眼にかゝつた切りなんだから。あなたはちつともお變りにならない。』なんて云ふ。――お德の奴め、もう來た時から醉つてゐたんだ。

が、いくら醉つてゐても、久しぶりぢやあるし、志村の一件があるもんだから、大に話がもてたらう。すると君、外の連中が氣を廻はすのを義理だと心得た顏色で、わい〳〵騷ぎ立てたんだ。何しろ主人役が音頭をとつて、逐一白狀に及ばない中は、席を立たせないと云ふんだから、始末

が悪い。そこで、僕は志村のペパミントの話をして、『これは私の親友に臂を食はせた女です。』——莫迦々々しいが、さう云つた。主人役がもう年配でね。僕は始から、叔父さんにつれられて、お茶屋へ上つたと云ふ格だつたんだ。

すると、その臂と云ふんで、又どつと來たぢやないか。外の藝者まで一しよになつて、お徳のやつをひやかしたんだ。

所が、お徳事福龍のやつが、承知しない。——福龍がよかつたらう。八犬傳の龍の講釋の中に、「優樂自在なるを福龍と名づけたり」と云ふ所がある。それがこの福龍は、大に優樂不自在なんだから可笑しい。尤もこれは餘計な話だがね。——その承知しない云ひ草が、又大に論理的なんだ。『志村さんが私にお惚れになつたつて、私の方でも惚れなければならないと云ふ義務はござんすまい。』さ。

それから、まだあるんだ。『それがさうでなかつたら、私だつて、とうの昔にもつと好い月日があつたんです。』

それが、所謂片戀の悲しみなんださうだ。さうしてその揚句に例でも擧げる氣だつたんだら

う。お徳のやつめ、妙なのろけを始めたんだ。君に聞いて貰はうと思ふのはそののろけ話さ。どうせのろけだから、面白い事はない。

あれは不思議だね。夢の話と色戀の話位、聞いてゐてつまらないものはない。

（そこで自分は、『それは當人以外に、面白さが通じないからだよ。』と云つた。『ぢや小說に書くのにも、夢と色戀とはむづかしい譯だね。』『少くとも夢なんぞは感覺的なだけに、猶さうらしいね。小說の中に出て來る夢で、ほんとうの夢らしいのは殆一つもない位だ。』『だが、戀愛小說の傑作は澤山あるぢやないか。』『それだけ又、後世にのこらなかつた愚作の數も、思ひやられると云ふものさ。』）

さう話がわかつてゐれば、大に心づよい。どうせこれもその愚作中の愚作だよ。何しろお徳の口吻を眞似ると、『まあ私の片戀つて云ふやうなもの』なんだからね。精々そのつもりで、聞いてくれ給へ。

お徳の惚れた男と云ふのは、役者でね。あいつがまだ淺草田原町の親の家にゐた時分に、公園で見初めたんださうだ。かう云ふと、君は宮戸座か常盤座の馬の足だと思ふだらう。所がさうぢ

やない。抑、日本人だと思ふのが間違ひなんだ。毛唐の役者でね。何でも半道だと云ふんだから、笑はせる。

その癖、お徳はその男の名前も知らなければ、居所も知らない。それ所か、國籍さへわからないんだ。女房持か、獨り者か――そんな事は勿論、訊くだけ、野暮さ。可笑しいだらう。いくら片戀だつて、あんまり莫迦げてゐる。僕たちが若竹へ通つた時分だつて、よしんば語り物は知らなからうが、先方は日本人で、藝名昇菊位な事は心得てゐたもんだ。――さう云つて、僕がからかつたら、お徳の奴、むきになつて、『そりや私だつて、知りたかつたんです。だけど、わからないんだから、仕方がないぢやありませんか。何しろ幕の上で遇ふだけなんですもの。』と云ふ。

幕の上では、妙だよ。幕の中でと云ふなら、わかつてゐるがね。そこでいろ〳〵聞いて見ると、その戀人なるものは、活動寫眞に映る西洋の曾我の家なんださうだ。これには、僕も驚いたよ。成程幕の上でには、ちがひない。

外の連中は、惡い落だと思つたらしい。中には、『へん、いやにおひやらかしやがる。』なんて云つた人もある。船着だから、人氣が荒いんだ。が、見たところ、どうもお徳が嘘をついてゐると

も思はれない。尤も眼は大分とろんこだつたがね。

『毎日行きたくつても、さうはお小遣ひがつゞかないでせう。だから私、やつと一週に一ぺんづつ行つて見たんです。』――これはいゝが、その後が振つてゐる。『一度なんか、阿母さんにねだつてやつとやつて貰ふと、滿員で横の隅の所にしか、はいれないんでせう。さうすると、折角その人の顏が映つても、妙に平べつたくしか見えないんでせう。私、かなしくつて、かなしくつて。』――前掛を顏へあてて、泣いたつて云ふんだがね。そりや戀人の顏が、幕なりにぺちやんこに見えちや、かなしからうさ。これには、僕も同情したよ。

『何でも、十二三度その人がちがつた役をするのを見たんです。顏の長い、瘦せた、髯のある人でした。大抵黑い、あなたの着ていらつしやるやうな服を着てゐましたつけ。』――僕は、モオニングだつたんだ。さつきで懲りてゐるから、機先を制して、『似てゐやしないか。』つて云ふと、すまして、『もつといゝ男』さ。『もつといゝ男』はきびしいぢやないか。

『何しろあなた、幕の上で遇ふだけなんでせう。向うが生身の人なら、語をかけるとか、眼で心意氣を知らせるとか出來るんですが、そんな事をしたつて、寫眞ぢやね。』おまけに活動寫眞なん

だ。肌身はなさずとも、行かなかつた譯さ。『思ひ思はれるつて云ひますがね。思はれない人だつて、思はれるやうにはしむけられるんでせう。志村さんにしたつて、私によく靑いお酒を持つて來ちやくだすつた。それが私のは、思はれるやうにしむける事も出來ないんです。ずゐぶん因果ぢやありませんか。』一々御尤もだ。こいつには、可笑しい中でも、つまされたよ。

『それから藝者になつてからも、お客樣をつれ出しちやよく活動を見に行つたんですが、どうした譯か、ぱつたりその人が寫眞に出てこなくなつてしまつたんです。何時行つて見ても、「名金」だの「ジゴマ」だのつて、見たくも無いものばかりやつてゐるぢやありませんか。しまひには私も、これはもう縁がないもんだとさつぱりあきらめてしまつたんです。それがあなた……』

外の連中が相手にならないもんだから、お德は僕一人をつかまへて、しやべつてゐるんだ。それも半分泣き聲でさ。

『それがあなた、この土地へ來て始めて活動へ行つた晩に、何年ぶりかでその人が寫眞に出て來たぢやありませんか。――どこか西洋の町なんでせう。かう敷石があつて、まん中に何だか梧桐みたいな木が立つてゐるんです。兩側はずつと西洋館でしてね。唯、寫眞が古いせゐか、一體に

夕方みたいにうすぼんやり黃いろくつて、その家や木がみんな妙にぶる〳〵ふるへてゐて――それやさびしい景色なんです。そこへ、小さな犬を一匹つれて、その人があなた煙草をふかしながら、出て來ました。やつぱり黑い服を着て、杖をついて、ちつとも私が子供だつた時と變つちやゐません……』

ざつと十年ぶりで、戀人にめぐり遇つたんだ。向うは寫眞だから、變らなからうが、こつちはお德が福龍になつてゐる。さう思へば、可哀さうだよ。

『さうして、その木の所で、ちよいと立止つて、こつちを向いて、帽子をとりながら、笑ふんです。それが私に挨拶をするやうに見えるぢやありませんか。名前を知つてりや呼びたかつた……』

呼んで見給へ。氣ちがひだと思はれる。いくらYだつて、まだ活動寫眞に惚れた藝者はゐなからう。

『さうすると、向うから、小さな女異人が一人歩いて來て、その人にかじりつくんです。辯士の話ぢや、これがその人の情婦なんですとさ。年をとつてゐる癖に、大きな鳥の羽根なんぞを帽子につけて、いやらしいつたらないんでせう。』

お徳は妬けたんだ。それも寫眞にぢやないか。

（こゝまで話すと、電車が品川へ來た。自分は新橋で下りる體である。それを知つてゐる友だちは、語り完らない事を虞れるやうに、時々眼を窓の外へ投げながら、稍慌しい口調で、話しつづけた。）

それから、寫眞はいろ／＼な事があつて、結局その男が巡査につかまる所でおしまひになるんださうだ。何をしてつかまるんだか、お徳は詳しく話してくれたんだが、生憎今ぢや覺えてゐない。

『大ぜいよつてたかつて、その人を縛つてしまつたんです。いゝえ、その時はもうさつきの往來ぢやありません。西洋の居酒屋か何かなんでせう。お酒の罎がずうつとならんでゐて、すみの方には大きな鸚鵡の籠が一つ吊下げてあるんです。それが夜の所だと見えて、どこもかしこも一面に青くなつてゐました。その青い中で——私はその人の泣きさうな顔をその青い中で見たんです。あなただつて見れば、きつとかなしくなつたわ。眼に涙をためて、口を半分ばかりあいて……』

さうしたら、呼笛が鳴つて、寫眞が消えてしまつたんだ。あとは白い幕ばかりさ。お徳の奴の

文句が好い。――『みんな消えてしまつたんです。消えて儚くなりにけりか。どうせ何でもさうしたもんね。』

　これだけ聞くと、大に悟つてゐるらしいが、お徳は泣き笑ひをしながら、僕にいや味でも云ふやうな調子で、かう云ふんだ。あいつは惡くすると君、ヒステリイだぜ。だが、ヒステリイにしても、いやに眞劍な所があつたつけ。事によると、寫眞に惚れたと云ふのは作り話で、ほんとうは誰か我々の連中に片戀をした事があるのかも知れない。

（二人の乘つてゐた電車は、この時、薄暮の新橋停車場へ着いた。）

（大正六年九月十七日）

戲作三昧

一

天保二年九月の或午前である。神田同朋町の錢湯松の湯では、朝から不相變客が多かつた。式亭三馬が何年か前に出版した滑稽本の中で、「神祇、釋教、戀、無常、みないりごみの浮世風呂」と云つた光景は、今もその頃と變りはない。風呂の中で歌祭文を唄つてゐる嚊たばね、上り場で手拭をしぼつてゐるちよん髷本多、文身の背中を流させてゐる丸額の大銀杏、さつきから顏ばかり洗つてゐる由兵衞奴、水槽の前に腰を据ゑて、しきりに水をかぶつてゐる坊主頭、竹の手桶と燒物の金魚とで、餘念なく遊んでゐる虻蜂蜻蛉、――狹い流しにはさう云ふ種々雜多な人間がいづれも濡れた體を滑らかに光らせながら、濛々と立上る湯煙と窓からさす朝日の光との中に、糢糊として動いてゐる。その又騷ぎが、一通りではない。第一に湯を使ふ音や桶を動かす音がする。それから話し聲や唄の聲がする。最後に時々番臺で鳴らす拍子木の音がする。だから柘榴口の内

外は、すべてがまるで戰場のやうに騷々しい。そこへ暖簾をくぐつて、商人が來る。物貰ひが來る。客の出入りは勿論あつた。その混雜の中に――

つゝましく隅へ寄つて、その混雜の中に、靜に垢を落してゐる、六十あまりの老人が一人あつた。年の頃は六十を越してゐよう。鬢の毛が見苦しく黃ばんだ上に、眼も少し惡いらしい。が、痩せてはゐるものゝ骨組みのしつかりした、寧ろいかついと云ふ體格で、皮のたるんだ手や足にも、どこかまだ老年に抵抗する底力が殘つてゐる。これは顏でも同じ事で、下顎骨の張つた頰のあたりや、稍大きい口の周圍に、旺盛な動物的精力が、恐ろしい閃きを見せてゐる事は、殆壯年の昔と變りがない。

老人は丁寧に上半身の垢を落してしまふと、止め桶の湯も浴びずに、今度は下半身を洗ひはじめた。が、黑い垢すりの甲斐絹が何度となく上をこすつても、脂氣の拔けた、小皺の多い皮膚からは、垢と云ふ程の垢も出て來ない。それがふと秋らしい寂しい氣を起させたのであらう。老人は片々の足を洗つたばかりで、急に力がぬけたやうに手拭の手を止めてしまつた。さうして、濁つた止め桶の湯に、鮮かに映つてゐる窓の外の空へ眼を落した。そこには又赤い柿の實が、瓦屋

根の一角を下に見ながら、疎に透いた枝を綴つてゐる。

老人の心には、この時「死」の影がさしたのである。が、その「死」は、嘗て彼を脅したそれのやうに、忌はしい何物をも藏してゐない。云はばこの桶の中の空のやうに、靜ながら慕はしい、安らかな寂滅の意識であつた。一切の塵労を脱して、その「死」の中に眠る事が出來たならば――無心の子供のやうに夢もなく眠る事が出來たならば、どんなに悦ばしい事であらう。自分は生活に疲れてゐるばかりではない。何十年來、絶え間ない創作の苦しみにも、疲れてゐる。……

老人は憮然として、眼を擧げた。あたりではやはり賑な談笑の聲につれて、大ぜいの裸の人間が、目まぐるしく湯氣の中に動いてゐる。柘榴口の中の歌祭文にも、めりやすやよしこの聲が加はつた。ここには勿論、今彼の心に影を落した悠久なものの姿は、微塵もない。

「いや、先生、こりやとんだ所で御眼にかゝりますな。どうも曲亭先生が朝湯にお出でにならうなんぞとは手前夢にも思ひませんでした。」

老人は、突然から呼びかける聲に驚ろかされた。見ると彼の傍には、血色のいゝ、中背の細銀杏が、止め桶を前に控へながら、濡れ手拭を肩へかけて、元氣よく笑つてゐる。これは風呂か

ら出て、丁度上り湯を使はうとした所らしい。

「不相變御機嫌で結構だね。」

馬琴瀧澤瑣吉は、微笑しながら、稍皮肉にかう答へた。

二

「どう致しまして、一向結構ぢやございません。結構と云や、先生、八犬傳は愈出でゝ、愈奇なり、結構なお出來でございますな。」

細銀杏は肩の手拭を桶の中へ入れながら、一調子張上げて辯じ出した。

「船蟲が瞽婦に身をやつして、小文吾を殺さうとする。それが一旦つかまつて拷問された揚句に、莊介に助けられる。あの段どりが實に何とも申されません。さうしてそれが又、莊介小文吾再會の機緣になるのでございますからな。不肖ぢやございますが、この近江屋平吉も、小間物屋こそ致して居りますが、讀本にかけちや一かど通のつもりでございます。その手前でさへ、先生の八犬傳には、何とも批の打ちやうがございません。いや全く恐れ入りました。」

馬琴は默つて又、足を洗ひ出した。彼は勿論彼の著作の愛讀者に對しては、昔からそれ相當な好意を持つてゐる。しかしその好意の爲に、相手の人物に對する評價が、變化するなどと云ふ事は少しもない。これは聰明な彼にとつて、當然すぎる程當然な事である、が、不思議な事には逆にその評價が彼の好意に影響すると云ふ事も亦殆どない。だから彼は場合によつて、輕蔑と好意とを、完く同一人に對して同時に感ずる事が出來た。この近江屋平吉の如きは、正にさう云ふ愛讀者の一人である。

「何しろあれだけのものをお書きになるんぢや、並大抵なお骨折ぢやございますまい。先づ當今では、先生がさしづめ日本の羅貫中と云ふ所でございますな――いや、これはとんだ失禮を申上げました。」

平吉は又大きな聲をあげて笑つた。その聲に驚かされたのであらう。側で湯を浴びてゐた小柄な、色の黑い、眇の小銀杏が、振返つて平吉と馬琴とを見比べると、妙な顏をして流しへ痰を吐いた。

「貴公は不相變發句にお凝りかね。」

馬琴は巧に話頭を轉換した。がこれは何も眇の表情を氣にした譯ではない。彼の視力は幸福な事に(?)もうそれがはつきりとは見えない程、衰弱してゐたのである。

「これはお尋ねに預つて恐縮至極でございますな。手前のはほんの下手の横好きで今日も運座、明日も運座、と、所々方々へ臆面もなくしや〳〵り出ますが、どう云ふものか、句の方は一向頭を出してくれません。時に先生は、如何でございますな、歌とか發句とか申すものは、格別お好みになりませんか。」

「いや私は、どうもあゝ云ふものにかけると、とんと無器用でね。尤も一時はやつた事もあるが。」

「そりや御冗談で。」

「いや、完く性に合はないと見えて、未だにとんと眼くらの垣覗きさ。」

馬琴は、「性に合はない」と云ふ語に、殊に力を入れてかう云つた。彼は歌や發句が作れないとは思つてゐない。だから勿論その方面の理解にも、乏しくないと云ふ自信がある。が、彼はさう云ふ種類の藝術には、昔から一種の輕蔑を持つてゐた。何故かと云ふと、歌にしても、發句にし

ても、彼の全部をその中に注ぎこむ爲には、餘りに形式が小さすぎる。だから如何に巧に詠みこなしてあつても、一句一首の中に表現されたものは、抒情なり敍景なり、僅に彼の作品の何行かを充す丈の資格しかない。さう云ふ藝術は、彼にとつて、第二流の藝術である。

三

彼が「性に合はない」と云ふ語に力を入れた後には、かう云ふ輕蔑が潜んでゐた。が、不幸にして近江屋平吉には、全然さう云ふ意味が通じなかつたものらしい。

「はゝあ、やつぱりさう云ふものでございますかな。手前などの量見では、先生のやうな大家なら、何でも自由にお作りになれるだらうと存じて居りましたが――いや、天二物を與へずとは、よく申したものでございます。」

平吉はしぼつた手拭で、皮膚が赤くなる程、ごし／＼體をこすりながら、稍遠慮するやうな調子で、かう云つた。が、自尊心の強い馬琴には、彼の謙辭をその儘語通り受取られたと云ふ事が、先づ何よりも不滿である。その上平吉の遠慮するやうな調子が愈又氣に入らない。そこで彼は

手拭と垢すりとを流しへ抛り出すと半ば身を起しながら、苦い顏をして、こんな氣焔をあげた。

「尤も、當節の歌よみや宗匠位には行くつもりだがね。」

しかし、かう云ふと共に、彼は急に自分の子供らしい自尊心が恥づかしく感ぜられた。自分はさつき平吉が、最上級の語を使つて八犬傳を褒めた時にも、格別嬉しかつたとは思つてゐない。さうして見れば、今その反對に、自分が歌や發句を作る事の出來ない人間と見られたにしても、それを不滿に思ふのは、明に矛盾である。咄嗟にかう云ふ自省を動かした彼は、恰も内心の赤面を隱さうとするやうに、慌しく止め桶の湯を肩から浴びた。

「でございませう。さうなくつちや、とてもあゝ云ふ傑作は、お出來になりますまい。して見ますと、先生は歌も發句もお作りになると、かう睨んだ手前の眼光は、やつぱり大したものでございますな。これはとんだ手前味噌になりました。」

平吉は又大きな聲を立てゝ、笑つた。さつきの眇はもう側にゐない。痰も馬琴の浴びた湯に、流されてしまつた。が、馬琴がさつきにも增して恐縮したのは勿論の事である。

「いや、うつかり話しこんでしまつた。どれ私も一風呂、浴びて來ようか。」

妙に間の惡くなつた彼は、かう云ふ挨拶と共に、自分に對する一種の腹立しさを感じながら、とう／＼この好人物の愛讀者の前を退却すべく、徐に立上つた。が、平吉は彼の氣焔によつて寧ろ愛讀者たる彼自身まで、肩身が廣くなつたやうに、感じたらしい。

「では先生その中に一つ歌か發句かを書いて頂きたいものでございますな。よろしうございますか。お忘れになつちやいけませんぜ。ぢや手前も、これで失禮致しませう。お忙しうもございませうが、お通りすがりの節は、ちと御立ち寄りを。手前も亦、お邪魔に上ります。」

平吉は追ひかけるやうに、かう云つた。さうして、もう一度手拭を洗ひ出しながら、柘榴口の方へ歩いて行く馬琴の後姿を見送つて、これから家へ歸つた時に、曲亭先生に遇つたと云ふ事を、どんな調子で女房に話して聞かせようかと考へた。

四

柘榴口の中は、夕方のやうにうす暗い。それに湯氣が、霧よりも深くこめてゐる。眼の惡い馬琴は、その中にゐる人々の間を、あぶなさうに押しわけながら、どうにか風呂の隅をさぐり當て

ると、やつとそこへ皺だらけな體を浸した。

湯加減は少し熱い位である。彼はその熱い湯が爪の先にしみこむのを感じながら、長い呼吸をして、徐に風呂の中を見廻はした。うす暗い中に浮んでゐる頭の數は、七つ八つもあらうか。それが皆話しをしたり、唄をうたつたりしてゐるまはりには、人間の脂を溶した、滑な湯の面が、柘榴口からさす濁つた光に反射して、退屈さうにたぶ／＼と動いてゐる。そこへ胸の惡い「錢湯の匂」がむんと人の鼻を衝いた。

馬琴の空想には、昔から羅曼的な傾向がある。彼はこの風呂の湯氣の中に、彼が描かうとする小說の場景の一つを、思ひ浮べるともなく思ひ浮べた。そこには重い舟日覆がある。日覆の外の海は、日の暮と共に風が出たらしい。舷をうつ浪の音が、まるで油を搖るやうに、重苦しく聞えて來る。その音と共に、日覆をはためかすのは、大方蝙蝠の羽音であらう。舟子の一人は、それを氣にするやうに、そつと舷から外を覗いて見た。霧の下りた海の上には、赤い三日月が陰々と空に懸つてゐる。すると……

彼の空想は、こゝまで來て、急に破られた。同じ柘榴口の中で、誰か彼の讀本の批評をしてゐ

るのが、ふと彼の耳へはいつたからである。しかも、それは聲と云ひ、話樣と云ひ、殊更彼に聞かせようとして、しやべり立ててゐるらしい。馬琴は一旦風呂を出ようとしたが、やめて、ぢつとその批評を聞き澄ました。

「曲亭先生の、著作堂主人のと、大きな事を云つたつて、馬琴なんぞの書くものは、みんなありや燒直しでげす。早い話が八犬傳は、手もなく水滸傳の引寫しぢやげえせんか。が、そりやまあ大目に見ても、いゝ筋がありやす。何しろ先が唐の物でげせう。そこで、まづそれを讀んだと云ふ丈でも、一手柄さ。所がそこへ又づぶ京傳の二番煎じと來ちや、呆れ返つて腹も立ちやせん。」

馬琴はかすむ眼で、この惡口を云つてゐる男の方を透して見た。湯氣に遮られて、はつきりと見えないが、どうもさつき側にゐた眇の小銀杏でもあるらしい。さうとすればこの男は、さつき平吉が八犬傳を褒めたのに業を煮やして、わざと馬琴に當りちらしてゐるのであらう。

「第一馬琴の書くものは、ほんの筆先一點張りでげす。まるで腹には、何にもありやせん。あればまづ寺子屋の師匠でも云ひさうな、四書五經の講釋だけでげせう。だから又當世の事は、とんと御存じなしさ。それが證據にや、昔の事でなけりや、書いたと云ふためしはとんとげえせん。

お染久松がお染久松ぢや書けねえもんだから、そら松染情史秋七草さ。こんな事は、馬琴大人の口眞似をすれば、そのためしさはに多かりでげす。」

憎悪の感情は、どつちか優越の意識を持つてゐる以上、起したくも起されない。馬琴も相手の云ひぐさが癪にさはりながら、妙にその相手が憎めなかつた。その代りに彼自身の輕蔑を、表白してやりたいと云ふ欲望がある。それが實行に移されなかつたのは、恐らく年齢が齒止めをかけたせゐであらう。

「そこへ行くと、一九や三馬は大したものでげす。あの手合ひの書くものには天然自然の人間が出てゐやす。決して小手先の器用や生噛りの學問で、捏ちあげたものぢやげえせん。そこが大きに蓑笠軒隱者なんぞとは、ちがふ所さ。」

馬琴の經驗によると、自分の讀本の惡評を聞くと云ふ事は、單に不快であるばかりでなく、危險も亦少くない。と云ふのは、その惡評を是認する爲に、勇氣が沮喪すると云ふ意味ではなく、それを否認する爲に、その後の創作的動機に、反動的なものが加はると云ふ意味である。さうしてさう云ふ不純な動機から出發する結果、屢畸形な藝術を創造する惧があると云ふ意味である。

時好に投ずることのみを目的としてゐる作者は別として、少しでも氣魄のある作者なら、この危險には存外陷り易い。だから馬琴は、この年まで自分の讀本に對する惡評は、成る可く讀まないやうに心がけて來た。が、さう思ひながらも亦、一方には、その惡評を讀んで見たいと云ふ誘惑がないでもない。今、この風呂で、この小銀杏の惡口を聞くやうになつたのも、半はその誘惑に陷つたからである。

かう氣のついた彼は、すぐに便々とまだ湯に浸つてゐる自分の愚を責めた。さうして、癇高い小銀杏の聲を聞き流しながら、柘榴口を外へ勢ひよく跨いで出た。外には、湯氣の間に窓の青空が見え、その青空には暖く日を浴びた柿が見える。馬琴は水槽の前へ來て、心靜に上り湯を使つた。

「兎に角、馬琴は食はせ物でげす。日本の羅貫中もよく出來やした。」

しかし風呂の中ではさつきの男が、まだ馬琴がゐるとでも思ふのか、依然として猛烈なフイリツピクスを發しつづけてゐる。事によると、これはその眇に災されて、彼の柘榴口を跨いで出る姿が、見えなかつたからかも知れない。

五

しかし、錢湯を出た時の馬琴の氣分は、沈んでゐた。眇の毒舌は、少くともこれだけの範圍で、確に豫期した成功を收め得たのである。彼は秋晴れの江戸の町を歩きながら、風呂の中で聞いた惡評を、一々彼の批評眼にかけて、綿密に點檢した。さうして、それが、如何なる點から考へて見ても、一顧の價のない愚論だと云ふ事實を、即座に證明する事が出來た。が、それにも關らず、一度亂された彼の氣分は、容易に元通り、落着きさうもない。

彼は不快な眼を擧げて、兩側の町家を眺めた。町家のものは、彼の氣分とは沒交涉に、皆その日の生計を勵んでゐる。だから「諸國銘葉」の柿色の暖簾、「本黃楊」の黃いろい櫛形の招牌、「駕籠」の掛行燈、「卜筮」の算木の旗、――さう云ふものが、無意味な一列を作つて、唯雜然と彼の眼底を通りすぎた。

「どうして己は、己の輕蔑してゐる惡評に、かう煩されるのだらう。」

馬琴は又、考へつゞけた。

「己を不快にするのは、第一にあの眇が己に惡意を持つてゐると云ふ事實だ。人に惡意を持たれると云ふ事は、その理由の如何に關らず、それ丈で己には不快なのだから、仕方がない。」

彼は、かう思つて、自分の氣の弱いのを恥ぢた。實際彼の如く傍若無人な態度に出る人間が少かつたやうに、彼の如く他人の惡意に對して、敏感な人間も亦少かつたのである。さうして、この行爲の上では全く反對に思はれる二つの結果が、實は同じ原因――同じ神經作用から來てゐると云ふ事實にも、勿論彼はとうから氣がついてゐた。

「しかし、己を不快にするものは、まだ外にもある。それは己があの眇と、對抗するやうな位置に置かれたと云ふ事だ。己は昔からさう云ふ位置に身を置く事を好まない。勝負事をやらないのも、その爲だ。」

こゝまで分析して來た彼の頭は、更に一步を進めると同時に、思ひもよらない變化を、氣分の上に起させた。それは緊くむすんでゐた彼の脣が、この時急に弛んだのを見ても、知れる事であらう。

「最後に、さう云ふ位置へ己を置いた相手が、あの眇だと云ふ事實も、確に己を不快にしてゐる。

もしあれがもう少し高等な相手だつたら、己はこの不快を反撥する丈の、反抗心を起してゐたのに相違ない。何にしても、あの眇が相手では、いくら己でも閉口する筈だ。」

馬琴は苦笑しながら、高い空を仰いだ。その空からは、朗かな鳶の聲が、日の光と共に、雨の如く落ちて來る。彼は今まで沈んでゐた氣分が次第に輕くなつて來る事を意識した。

「しかし、眇がどんな悪評を立てようとも、それは精々、己を不快にさせる位だ。いくら鳶が鳴いたからと云つて、天日の歩みが止まるものではない。己の八犬傳は必ず完成するだらう。さうしてその時は、日本が古今に比倫のない大傳奇を持つ時だ。」

彼は恢復した自信を勞はりながら、細い小路を靜に家の方へ曲つて行つた。

六

内へ歸つて見ると、うす暗い玄關の沓脱ぎの上に、見慣れたばら緒の雪駄が一足のつてゐる。馬琴はそれを見ると、すぐにその客ののつぺりした顔が、眼に浮んだ。さうして又、時間をつぶされる迷惑を、苦々しく心に思ひ起した。

「今日も朝の中はつぶされるな。」

かう思ひながら、彼が式臺へ上ると、慌しく出迎へた下女の杉が、手をついた儘、下から彼の顔を見上げるやうにして、

「和泉屋さんが、御居間でお歸りをお待ちでございます。」と云つた。

彼は頷きながら、ぬれ手拭を杉の手に渡した。が、どうもすぐに書齋へは通りたくない。

「お百は。」

「御佛參にお出でになりました。」

「お路も一しよか。」

「はい。坊ちやんと御一しよに。」

「伜は。」

「山本樣へいらつしやいました。」

家内は皆、留守である。彼はちよいと、失望に似た感じを味つた。さうして仕方なく、玄關の隣にある書齋の襖を開けた。

開けて見ると、そこには、色の白い、顔のてらてら光つてゐる、どこか妙に取り澄ました男が、細い銀の煙管を啣へながら、端然と座敷のまん中に控へてゐる。彼の書齋には石刷を貼つた屏風と床にかけた紅楓黃菊の双幅との外に、裝飾らしい裝飾は一つもない。壁に沿うては、五十に餘る本箱が、唯古びた桐の色を、一面に寂しく並べてゐる。障子の紙も貼つてから、一冬はもう越えたのであらう。切り貼りの點々とした白い上には、秋の日に照された破芭蕉の大きな影が、婆娑として斜に映つてゐる。それだけにこの客のぞろりとした服裝が、一層又周圍と釣り合はない。

「いや、先生、ようこそお歸り。」

客は、襖があくと共に、滑な調子でかう云ひながら、恭しく頭を下げた。これが、當時八犬傳に次いで世評の高い金瓶梅の版元を引受けてゐた、和泉屋市兵衞と云ふ本屋である。

「大分にお待ちなすつたらう。めづらしく今朝は、朝湯に行つたのでね。」

馬琴は、本能的にちよいと顏をしかめながら、何時もの通り、禮儀正しく座についた。

「へへえ、朝湯に。成程。」

市兵衞は、大に感服したやうな聲を出した。如何なる瑣末な事件にも、この男の如く容易に感

服する人間は、滅多にない。いや、感服したやうな顔をする人間は、稀である。馬琴は徐に一服吸ひつけながら、何時もの通り、早速話を用談の方へ持つていつた。彼は特に、和泉屋のこの感服を好まないのである。

「そこで今日は何か御用かね。」

「へえ、なに又一つ原稿を頂戴に上りましたんで。」

市兵衛は煙管を一つ指の先でくるりとまはして見せながら、女のやうに柔しい聲を出した。この男は不思議な性格を持つてゐる。と云ふのは、外面の行爲と内面の心意とが、大抵な場合は一致しない。しない所か、何時でも正反對になつて現れる。だから、彼は大に强硬な意志を持つてゐると、必ずそれに反比例する、如何にも柔しい聲を出した。

馬琴はこの聲を聞くと、再び本能的に顔をしかめた。

「原稿と云つたつて、それは無理だ。」

「へへえ、何か御差支でもございますので。」

「差支へる所ぢやない。今年は讀本を大分引受けたので、とても合巻の方へは手が出せさうもな

い。」

「成程それは御多忙で。」

と云つたかと思ふと、市兵衛は煙管で灰吹きを叩いたのが相圖のやうに、今までの話はすつかり忘れたと云ふ顏をして、突然鼠小僧次郎太夫の話をしやべり出した。

七

鼠小僧次郎太夫は、今年五月の上旬に召捕られて、八月の中旬に獄門になつた、評判の高い大賊である。それが大名屋敷へばかり忍び込んで、盗んだ金は窮民へ施したと云ふ所から、當時は義賊と云ふ妙な名前が、一般にこの盗人の代名詞になつて、どこでも盛に持て囃されてゐた。

「何しろ先生、盗みにはいつた御大名屋敷が七十六軒、盗んだ金が三千百八十三兩二分だと云ふのだから驚きます。盗人ぢやございますが、中々唯の人間に出來る事ぢやございません。」

馬琴は思はず好奇心を動かした。市兵衛がかう云ふ話をする後には、何時も作者に材料を與へてやると云ふ已惚れがひそんでゐる。その已惚れは勿論、よく馬琴の癇にさはつた。が、癇にさ

はりながらも、やつぱり好奇心には動かされる。藝術家としての天分を多量に持つてゐた彼は、殊にこの點では、誘惑に陥り易かつたからであらう。

「ふむ、それは成程えらいものだね。私もいろいろ噂には聞いてゐたが、まさかそれ程とは思はずにゐた。」

「つまりまづ賊中の豪なるものでございませうな。何でも以前は荒尾但馬守様の御供押しか何かを勤めた事があるさうで、お屋敷方の案内に明いのは、そのせゐださうでございます。引廻しを見たものゝ話を聞きますと、でつぷりした、愛嬌のある男ださうで、その時は紺の越後縮の帷子に、下へは白練の單衣を着てゐたと申しますが、とんと先生のお書きになるものゝ中へでも出て來さうぢやございませんか。」

馬琴は生返事をしながら、又一服吸ひつけた。が、市兵衞は元より、生返事位に驚くやうな男ではない。

「如何でございませう。そこで金瓶梅の方へ、この次郎太夫を持ちこんで、御執筆を願ふやうな譯には參りますまいか。それはもう手前も、お忙しいのは重々承知致して居ります。が、そこを

どうか枉げて、一つ御承諾を。」
鼠小僧はこゝに至つて、忽ち又元の原稿の催促へ舞戻つた。が、この慣用手段に慣れてゐる馬琴は依然として承知しない。のみならず、彼は前よりも一層機嫌が惡くなつた。これは一時でも市兵衛の計に乗つて、幾分の好奇心を動かしたのが、彼自身莫迦々々しくなつたからである。彼はまづさうに煙草を吸ひながら、とう／＼こんな理窟を云ひ出した。
「第一私が無理に書いたつて、どうせ碌なものは出來やしない。それぢや賣れ行きに關るのは云ふまでもない事なのだから、貴公の方だつてつまらなからう。して見ると、これは私の無理を通させる方が、結局兩方の爲になるだらうと思ふが。」
「でございませうが、そこを一つ御奮發願ひたいので。如何なものでございませう。」
市兵衛は、かう云ひながら、視線で彼の顔を「撫で廻した。」（これは馬琴が和泉屋の或眼つきを形容した語である。）さうして、煙草の煙をとぎれとぎれに鼻から出した。
「とても、書けないね。書きたくも、暇がないんだから、仕方がない。」
「それは手前、困却致しますな。」

と言つたが、今度は突然、當時の作者仲間の事を話し出した。やつぱり細い銀の煙管を、うすい脣の間に啣へながら。

八

「又種彦の何か新版物が、出るさうでございますな。いづれ優美第一の、哀れつぽいものでございませう。あの仁の書くものは、種彦でなくては書けないと云ふ所があるやうで。」

市兵衞は、どう云ふ氣か、すべて作者の名前を呼びすてにする習慣がある。馬琴はそれを聞く度に、自分も亦蔭では「馬琴が」と云はれる事だらうと思つた。この輕薄な、作者を自家の職人だと心得てゐる男の口から、呼びすてにされてまでも、原稿を書いてやる必要がどこにある？――癇の昂ぶつた時々には、かう思つて腹を立てた事も、稀ではない。今日も彼は種彦と云ふ名を耳にすると、苦い顏を愈苦くせずにはゐられなかつた。が、市兵衞には、少しもそんな事は氣にならないらしい。

「それから手前どもでも、春水を出さうかと存じて居ります。先生はお嫌ひでございますが、や

はり俗物にはあの邊が向きますやうでございますな。」

「はゝあ、左様かね。」

馬琴の記憶には、何時か見かけた事のある春水の顔が、卑しく誇張されて浮んで來た。「私は作者ぢやない。お客様のお望みに從つて、艶物を書いてお目にかける手間取りだ。」——かう春水が稱してゐると云ふ噂は、馬琴も夙に聞いてゐた所である。だから、勿論彼はこの作者らしくない作者を、心の底から輕蔑してゐた。が、それにも關らず、今市兵衞が呼びすてにするのを聞くと、依然として不快の情を禁ずる事が出來ない。

「兎も角あれで、艶つぽい事にかけては、達者なものでございますからな。それに名代の健筆で。」

かう云ひながら、市兵衞はちよいと馬琴の顔を見て、それから又すぐに口に啣へてゐる銀の煙管へ眼をやつた。その咄嗟の表情には、恐る可く下等な何者かがある。少くとも、馬琴はさう感じた。

「あれだけのものを書きますのに、すら〳〵筆が走りつゞけて、二三回分位なら、紙からはなれ

ないさうでございます。時に先生なぞは、やはりお早い方でございますか。」

馬琴は不快を感じると共に、脅されるやうな心もちになつた。彼の筆の早さを春水や種彦のそれと比較されると云ふ事は、自尊心の旺盛な彼にとつて、勿論好ましい事ではない。しかも彼は遲筆の方である。彼はそれが自分の無能力に裏書きをするやうに思はれて、寂しくなつた事もよくあつた。が、一方又それが自分の藝術的良心を計る物差しとして、尊みたいと思つた事も度々ある。唯、それを俗人の穿鑿にまかせるのは、彼がどんな心もちでゐようとも、斷じて許さうとは思はない。そこで彼は、眼を床の紅楓黄菊の方へやりながら、吐き出すやうにかう云つた。

「時と場合でね。早い時もあれば、又遲い時もある。」

「はゝあ、時と場合でね。成程。」

市兵衞は三度感服した。が、これが感服それ自身に了る感服でない事は、云ふまでもない。彼はこの後で、すぐに又、切りこんだ。

「でございますが、度々申し上げた原稿の方は、一つ御承諾下さいませんでせうか。春水なんぞも、……」

「私と爲永さんとは違ふ。」

馬琴は腹を立てると、下脣を左の方へまげる癖がある。この時、それが恐しい勢で左へまがつた。

「まあ私は御免を蒙らう。——杉、杉、和泉屋さんのお履物を直して置いたか。」

九

和泉屋市兵衞を逐ひ歸すと、馬琴は獨り緣側の柱へよりかゝつて、狹い庭の景色を眺めながら、まだをさまらない腹の蟲を、無理にをさめようとして、骨を折つた。

日の光を一ぱいに浴びた庭先には、葉の裂けた芭蕉や、坊主になりかかつた梧桐が、槇や竹の綠と一しよになつて、暖かく何坪かの秋を領してゐる。こつちの手水鉢の側にある芙蓉は、もう花が疎になつたが、向うの袖垣の外に植ゑた木犀は、まだその甘い匂が衰へない。そこへ例の鳶の聲が遙な靑空の向うから、時々笛を吹くやうに落ちて來た。

彼は、この自然と對照させて、今更のやうに世間の下等さを思出した。下等な世間に住む人間

の不幸は、その下等さに煩はされて、自分も亦下等な言動を餘儀なくさせられる所にある。現に今自分は、和泉屋市兵衞を逐ひ拂つた。逐ひ拂ふと云ふ事は、勿論高等な事でも何でもない。が、自分は相手の下等さによつて、自分も亦その下等な事を、しなくてはならない所まで押しつめられたのである。さうして、した。したと云ふ意味は市兵衞と同じ程度まで、自分を卑くしたと云ふのに外ならない。つまり自分は、それ丈墮落させられた譯である。

ここまで考へた時に、彼はそれと同じやうな出來事を、近い過去の記憶に發見した。それは去年の春、彼の所へ弟子入りをしたいと云つて手紙をよこした、相州朽木上新田とかの長島政兵衞と云ふ男である。この男はその手紙によると、二十一の年に聾になつて以來、廿四の今日まで文筆を以て天下に知られたいと云ふ決心で、專ら讀本の著作に精を出した。八犬傳や巡島記の愛讀者である事は云ふまでもない。就いてはかう云ふ田舍にゐては、何かと修業の妨になる。だから、あなたの所へ、食客に置いて貰ふ譯には行くまいか。それから又、自分は六冊物の讀本の原稿を持つてゐる。これもあなたの筆削を受けて、然るべき本屋から出版したい。——大體こんな事を書いてよこした。向うの要求は、勿論皆馬琴にとつて、餘りに蟲のいゝ事ばかりである。が、耳

の遠いと云ふ事が、眼の悪いのを苦にしてゐる彼にとつて、幾分の同情を繋ぐ楔子になつたのであらう。折角だが御依頼通りになり兼ねると云ふ彼の返事は、寧彼としては、鄭重を極めてゐた。すると、折返して來た手紙には、始から仕舞まで猛烈な非難の文句の外に、何一つ書いてない。自分はあなたの八犬傳と云ひ、巡島記と云ひ、あんな長たらしい、拙劣な讀本を根氣よく讀んであげたが、あなたは私のたつた六冊物の讀本に眼を通すのさへ拒まれた。以てあなたの人格の下等さがわかるではないか。――手紙はかう云ふ文句ではじまつて、先輩として後輩を食客に置かないのは、鄙吝の爲す所だと云ふ攻撃で、僅に局を結んでゐる。馬琴は腹が立つたから、すぐに返事を書いた。さうしてその中に、自分の讀本が貴公のやうな輕薄兒に讀まれるのは、一生の恥辱だと云ふ文句を入れた。その後杳として消息を聞かないが、彼はまだ今まで、讀本の稿を起してゐるだらうか。さうしてそれが何時か日本中の人間に讀まれる事を、夢想してゐるだらうか。

……………

馬琴はこの記憶の中に、長島政兵衛なるものに對する情無さと、彼自身に對する情無さとを同時に感ぜざるを得なかつた。さうしてそれは又彼を、云ひやうのない寂しさに導いた。が、日は

無心に木犀の匂を融かしてゐる。芭蕉や梧桐も、ひつそりとして葉を動かさない。鳶の聲さへ以前の通り朗である。この自然とあの人間と——十分の後、下女の杉が晝飯の支度の出來た事を知らせに來た時まで、彼はまるで夢でも見てゐるやうに、ぼんやり縁側の柱に倚りつゞけてゐた。

十

獨りで寂しい晝飯をすませた彼は、漸く書齋へひきとると、何となく落着がない、不快な心もちを鎭める爲に、久しぶりで水滸傳を開いて見た。偶然開いた所は豹子頭林冲が、風雪の夜に山神廟で、草秣場の燒けるのを望見する件である。彼はその戲曲的な場景に、何時もの感興を催す事が出來た。が、それが或所まで續くと反て妙に不安になつた。

佛參に行つた家族のものは、まだ歸つて來ない。内の中は森としてゐる。彼は陰氣な顏を片づけて、水滸傳を前にしながら、うまくもない煙草を吸つた。さうしてその煙の中に、ふだんから頭の中に持つてゐる、或疑問を髣髴した。

それは、道德家としての彼と藝術家としての彼との間に、何時も纏綿する疑問である。彼は昔

から「先王の道」を疑はなかつた。彼の小説は彼自身公言した如く、正に「先王の道」の藝術的表現である。だから、そこに矛盾はない。が、その「先王の道」が藝術に與へる價値と、彼の心情が藝術に與へようとする價値との間には、存外大きな懸隔がある。從つて彼の中にある、道德家が前者を肯定すると共に、彼の中にある藝術家は當然又後者を肯定した。勿論此矛盾を切拔ける安價な妥協的思想もない事はない。實際彼は公衆に向つて此煮切らない調和說の背後に、彼の藝術に對する曖昧な態度を隱さうとした事もある。

しかし公衆は欺かれても、彼自身は欺かれない。彼は戯作の價値を否定して「勸懲の具」と稱しながら、常に彼の中に磅礴する藝術的感興に遭遇すると、忽ち不安を感じ出した。――水滸傳の一節が、偶彼の氣分の上に、豫想外の結果を及ぼしたのにも、實はこんな理由があつたのである。

この點に於て、思想的に臆病だつた馬琴は、默然として煙草をふかしながら、強ひて思量を、留守にしてゐる家族の方へ押し流さうとした。が、彼の前には水滸傳がある。不安はそれを中心にして、容易に念頭を離れない。そこへ折よく久しぶりで、崋山渡邊登が尋ねて來た。袴羽織に

紫の風呂敷包を小脇にしてゐる所では、これは大方借りてゐた書物でも返しに來たのであらう。

馬琴は喜んで、この親友をわざ〳〵玄關まで、迎へに出た。

「今日は拜借した書物を御返却旁、御目にかけたいものがあつて、參上しました。」

崋山は書齋に通ると、果してかう云つた。見れば風呂敷包みの外にも紙に卷いた繪絹らしいものを持つてゐる。

「御暇なら一つ御覽を願ひませうかな。」

「おゝ、早速、拜見しませう。」

崋山は或興奮に似た感情を隱すやうに、稍わざとらしく微笑しながら、紙の中の繪絹を披いて見せた。繪は蕭索とした裸の樹を、遠近と疎に描いて、その中に掌を拊つて談笑する二人の男を立たせてゐる。林間に散つてゐる黃葉と、林梢に群つてゐる亂鴉と、――畫面のどこを眺めても、うそ寒い秋の氣が動いてゐない所はない。

馬琴の眼は、この淡彩の寒山拾得に落ちると、次第にやさしい潤ひを帶びて輝き出した。

「何時もながら、結構な御出來ですな。私は王摩詰を思ひ出します。食隨鳴磬巢烏下、行踏

空林落葉聲と云ふ所でせう。」

十一

「これは昨日描き上げたのですが、私には氣に入つたから、御老人さへよければ差上げようと思つて持つて來ました。」

崋山は、鬚の痕の青い顋を撫でながら、滿足さうにかう云つた。

「勿論氣に入つたと云つても、今まで描いたものゝ中ではと云ふ位な所ですが――とても思ふ通りには、何時になつても、描けはしません。」

「それは有難い。何時も頂戴ばかりしてゐて恐縮ですが。」

馬琴は、繪を眺めながら、呟くやうに禮を云つた。未完成の儘になつてゐる彼の仕事の事が、この時彼の心の底に、何故かふと閃いたからである。が、崋山は崋山で、やはり彼の繪の事を考へつゞけてゐるらしい。

「古人の繪を見る度に、私は何時もどうしてかう描けるだらうと思ひますな。木でも石でも人物

でも、皆その木なり石なり人物なりに成り切つて、しかもその中に描いた古人の心もちが、悠々として生きてゐる。あれだけは實に大したものです。まだ私などは、そこへ行くと、子供程にも出來て居ません。」

「古人は後生恐るべしと云ひましたがな。」

馬琴は崋山が自分の繪の事ばかり考へてゐるのを、妬ましいやうな心もちで眺めながら、何時になくこんな諧謔を弄した。

「それは後生も恐ろしい。だから私どもは唯、古人と後生との間に挾まつて、身動きもならずに、押され〳〵進むのです。尤もこれは私どもばかりではありますまい。古人もさうだつたし、後生もさうでせう。」

「如何にも進まなければ、すぐに押し倒される。するとまづ一足でも進む工夫が、肝腎らしいやうですな。」

「さやう、それが何よりも肝腎です。」

主人と客とは、彼等自身の語に動かされて、暫くの間口をとざした。さうして二人とも、秋の

日の靜な物音に耳をすませた。

「八犬傳は不相變、捗がお行きですか。」

やがて、崋山が話題を別な方面に開いた。

「いや、一向捗どらんで仕方がありません。これも古人には及ばないやうです。」

「御老人がそんな事を云つては、困りますな。」

「困るのなら、私の方が誰よりも困つてゐます。併しどうしても、之で行ける所迄行くより外はない。さう思つて、私は此頃八犬傳と討死の覺悟をしました。」

かう云つて、馬琴は自ら恥づるものゝやうに、苦笑した。

「たかが戲作だと思つても、さうは行かない事が多いのでね。」

「それは私の繪でも同じ事です。どうせやり出したからには、私も行ける所までは行き切りたいと思つてゐます。」

「御互に討死ですかな。」

二人は聲を立てて、笑つた。が、その笑ひ聲の中には、二人だけにしかわからない或寂しさが

流れてゐる。と同時に又、主人と客とは、ひとしくこの寂しさから、一種の力強い興奮を感じた。
「しかし繪の方は羨ましいやうですな。公儀の御咎めを受けるなどと云ふ事がないのは何よりも結構です。」
今度は馬琴が、話頭を一轉した。

十二

「それはないが——御老人の書かれるものも、さう云ふ心配はありますまい。」
「いや、大にありますよ。」
馬琴は改名主の圖書検閲が、陋を極めてゐる例として、自作の小説の一節が役人が賄賂をとる箇條のあつた爲に、改作を命ぜられた事實を擧げた。さうして、それにこんな批評をつけ加へた。
「改名主など云ふものは、咎め立てをすればする程、尻尾の出るのが面白いぢやありませんか。自分たちが賄賂をとるものだから、賄賂の事を書かれると、嫌がつて改作させる。又自分たちが猥雜な心もちに囚はれ易いものだから、男女の情さへ書いてあれば、どんな書物でも、すぐ誨淫

の書にしてしまふ。それで自分たちの道徳心が、作者より高い氣でゐるから、傍痛い次第です。云はばあれは、猿が鏡を見て、歯をむき出してゐるやうなものでせう。自分で自分の下等なのに腹を立ててゐるのですからな。」

崋山は馬琴の比喩が餘り熱心なので、思はず失笑しながら、

「それは大きにさう云ふ所もありませう。しかし改作させられても、それは御老人の恥辱になる譯ではありますまい。改名主などが何と云はうとも、立派な著述なら、必ずそれだけの事はある筈です。」

「それにしても、ちと横檗すぎる事が多いのでね。さう〳〵一度などは獄屋へ衣食を送る件を書いたので、やはり五六行削られた事がありました。」

馬琴自身もかう云ひながら、崋山と一しよに、くす〳〵笑ひ出した。

「しかしこの後五十年か百年經つたら、改名主の方はゐなくなつて、八犬傳だけが殘る事になりませう。」

「八犬傳が殘るにしろ、殘らないにしろ、改名主の方は、存外何時までもゐさうな氣がします

よ。」

「さうですかな。私にはさうも思はれませんが。」

「いや、改名主はゐなくなつても、改名主のやうな人間は、何時の世にも絶えた事はありません。焚書坑儒が昔だけあつたと思ふと、大きに違ひます。」

「御老人は、この頃心細い事ばかり云はれますな。」

「私が心細いのではない。改名主どものはびこる世の中が、心細いのです。」

「では、益々働かれたら好いでせう。」

「兎に角、それより外はないやうですな。」

「そこで又、御同様に討死ですか。」

今度は二人とも笑はなかつた。笑はなかつたばかりでない。馬琴はちよいと顔を堅くして、崋山を見た。それ程崋山のこの冗談のやうな語には、妙な鋭さがあつたのである。

「しかしまづ若い者は、生きのこる分別をする事です。討死は何時でも出來ますからな。」

程を經て、馬琴がかう云つた。崋山の政治上の意見を知つてゐる彼には、この時ふと一種の不

安が感ぜられたからであらう。が、崋山は微笑したぎり、それには答へようともしなかつた。

十三

崋山が歸つた後で、馬琴はまだ殘つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿をつぐべく、何時ものやうに机へ向つた。先を書きつゞける前に、昨日書いた所を一通り讀み返すのが、彼の昔からの習慣である。そこで彼は今日も、細い行の間へべた一面に朱を入れた、何枚かの原稿を、氣をつけてゆつくり讀み返した。

すると、何故か書いてある事が、自分の心もちとぴつたり來ない。字と字との間に、不純な雜音が潜んでゐて、それが全體の調和を至る所で破つてゐる。彼は最初それを、彼の癇が昂ぶつてゐるからだと解釋した。

「今の己の心もちが惡いのだ。書いてある事は、どうにか書き切れる所まで、書き切つてゐる筈だから。」

さう思つて、彼はもう一度讀み返した。が、調子の狂つてゐる事は前と一向變りはない。彼は

老人とは思はれない程、心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうだらう。」

彼はその前に書いた所へ眼を通した。すると、これも亦徒らに粗雜な文句ばかりが、糅然としてちらかつてゐる。彼は更にその前を讀んだ。さうして又その前の前を讀んだ。

しかし讀むに從つて拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。そこには何等の映像をも與へない敍景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又、何等の理路を辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書き上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に、心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これは始めから、書き直すより外はない。」

彼は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向うへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で、弓張月を書き、南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎭、蟇の形をした銅の水差し、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の

筆立て――さう云ふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦しみに、久しい以前から親しんでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が、彼の一生の労作に、暗い影を投げるやうな――彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌はしい不安を禁じる事が出來ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると、人並に已惚れの一つだつたかも知れない。」

かう云ふ不安は、彼の上に、何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜である事を忘れるものではない。が、それ丈に又、同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に飽迄も不遜である。その彼が、結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたと云ふ事を、さうして更に厭ふ可き遼東の豕だつたと云ふ事は、どうして安々と認められよう。しかも彼の強大な「我」は「悟り」と「諦め」とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横へた儘、親船の沈むのを見る、難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜に絶望の威力と戰ひつゞけた。もしこの時、彼の後の襖が、けたゝましく開放されな

かつたら、さうして「お祖父樣唯今。」と云ふ聲と共に、柔かい小さな手が、彼の頸へ抱きつかなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、何時までも鎖されてゐた事であらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

「お祖父樣唯今。」

「おゝ、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顏には、別人のやうな悅びが輝いた。

十四

茶の間の方では、癇高い妻のお百の聲や內氣らしい嫁のお路の聲が賑に聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から伜の宗伯も歸り合せたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましでもするやうに、わざと眞面目な顏をして天井を眺めた。外氣にさらされた頰が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋附を着た太郎は、突然かう云ひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。――それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日?」

「御勉強なさい。」

馬琴はとう〳〵噴き出した。が、笑の中ですぐ又語をつぎながら、

「それから?」

「それから――え丶と――癇癪を起しちやいけませんつて。」

「おや〳〵、それつきりかい。」

「まだあるの。」

太郎はかう云つて、糸鬢奴の頭を仰向けながら自分も亦笑ひ出した。眼を細くして、白い齒を

出して、小さな靨をよせて、笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間の人間のやうな憐れむべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんな事を考へた。さうしてそれが、更に又彼の心を擽つた。

「まだ何かあるかい？」

「まだね。いろんな事があるの。」

「どんな事が。」

「えゝと——お祖父様はね。今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから？」

「ですからね。よくね。辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」馬琴は思はず、眞面目な聲を出した。

「もつと、もつとよう〳〵辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事を云つたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ？」

「さうさな。今日は御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から、半分腰を擡げながら、顋を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音樣がさう云つたの。」

かう云ふと共に、この子供は、家内中に聞えさうな聲で、嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛び退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに小さな手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは、この時である。彼の脣には幸福な微笑が浮ん

だ。それと共に彼の眼には、何時か涙が一ぱいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所ではない。この時、この孫の口から、かう云ふ語を聞いたのが、不思議なのである。

「觀音様がさう云つたか。勉强しろ。癇癪を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

十五

その夜の事である。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へははいつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

始め筆を下した時、彼の頭の中には、かすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と、筆が進むのに從つて、その光のやうなものは、次第に大きさを増して來る。經驗上、その何

であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起す事を知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ。……

「あせるな。さうして出來る丈、深く考へろ。」

馬琴はやゝもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に囁いた。が、頭の中にはもうさつきの星を碎いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。

彼の耳には何時か、蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼にも、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上を辷りはじめる。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつゞけた。

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに、滾々として何處からか溢れて來る。彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして、緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

「根かぎり書きつづけろ。今己が書いてゐる事は、今でなければ書けない事かも知れないぞ。」

しかし光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。反つて目まぐるしい飛躍の中に、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つて來る。彼は遂に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのは、唯不可思議な悅びである。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戲作三昧の心境が味到されよう。どうして戲作者の嚴かな魂が理解されよう。こゝにこそ「人生」は、あらゆるその殘滓を洗つて、まるで新しい鑛石のやうに、美しく作者の前に、輝いてゐるではないか。………

× × × × × ×

その間も茶の間の行燈のまはりでは、姑のお百と、嫁のお路とが、向ひ合つて縫物を續けてゐる。太郎はもう寢かせたのであらう。少し離れた所には尫弱らしい宗伯が、さつきから丸藥をまろめるのに忙しい。

「お父様はまだ寝ないかねえ。」

やがてお百は、針へ髪の油をつけながら、不服らしく呟いた。

「きつと又お書きもので、夢中になつていらつしやるのでせう。」

お路は眼を針から離さずに、返事をした。

「困り者だよ。碌なお金にもならないのにさ。」

お百はかう云つて、倅と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをして、答へない。お路も默つて針を運びつゞけた。蟋蟀はこゝでも、書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。

（大正六年十一月）

西郷隆盛

これは自分より二三年前に、大學の史學科を卒業した本間さんの話である。本間さんが維新史に關する、二三興味ある論文の著者だと云ふ事は、知つてゐる人も多いであらう。僕は昨年の冬鎌倉へ轉居する、丁度一週間ばかり前に、本間さんと一しよに飯を食ひに行つて、偶然この話を聞いた。

それがどう云ふものか、この頃になつても、僕の頭を離れない。そこで僕は今、この話を書く事によつて、新小説の編輯者に對する僕の寄稿の責を完うしようと思ふ。尤も後になつて聞けば、これは「本間さんの西郷隆盛」と云つて、友人間には有名な話の一つださうである。して見ればこの話も或社會には存外もう知られてゐる事かも知れない。

本間さんはこの話をした時に、「眞僞の判斷は聞く人の自由です」と云つた。本間さんさへ主張しないものを、僕は勿論主張する必要がない。まして讀者は唯、古い新聞の記事を讀むやうに、

漫然と行を追つて、讀み下してさへくれゝば、よいのである。

彼是七八年も前にもならうか。丁度三月の下旬で、もうそろ〳〵清水の一重櫻が咲きさうな——と云つても、まだ霙まじりの雨がふる、或寒さのきびしい夜の事である。當時大學の學生だつた本間さんは、午後九時何分かに京都を發した急行の上り列車の食堂で、白葡萄酒のコップを前にしながら、ぼんやりM・C・Cの煙をふかしてゐた。さつき米原を通り越したから、もう岐阜縣の境に近づいてゐるのに相違ない。硝子窓から外を見ると、どこも一面にまつ暗である。時々小さい火の光りが流れるやうに通りすぎるが、それも遠くの家の明りだか、汽車の煙突から出る火花だか判然しない。その中で唯、窓をたゝく、凍りかかつた雨の音が、騷々しい車輪の音に單調な響を交してゐる。

本間さんは、一週間ばかり前から春期休暇を利用して、維新前後の史料を研究かた〴〵、獨りで京都へ遊びに來た。が、來て見ると、調べたい事もふえて來れば、行つて見たい所もいろ〳〵

ある。そこで何かと忙しい思をしてゐる中に、何時か休暇も殘少なになつた。新學期の講義の始まるのにも、もうあまり時間はない。さう思ふと、いくら都踊りや保津川下りに未練があつても、便々と東山を眺めて、日を暮してゐるのは、氣が咎める。本間さんはとう〳〵思ひ切つて、雨が降るのに荷拵へが出來ると、俵屋の玄關から俥を驅つて、制服制帽の甲斐々々しい姿を、七條の停車場へ運ばせる事にした。

所が乘つて見ると、二等列車の中は身動きも出來ない程こんでゐる。ボオイが心配してくれたので、やつと腰を下す空地が見つかつたが、そこではどうも眠れさうもない。さうかと云つて寢臺は、勿論皆賣切れてゐる。本間さんは暫く、腰の廣さ十圍に餘る酒臭い陸軍將校と、眠りながら齒ぎしりをするどこかの令夫人との間にはさまつて、出來るだけ肩をすぼめながら、青年らしい、とりとめのない空想に耽つてゐた。が、その中に追々空想も種切れになつてしまふ。それから強隣の壓迫も、次第に甚しくなつて來るらしい。そこで本間さんは已むを得ず、立つた後の空地へ制帽を置いて、一つ前に連結してある食堂車の中へ避難した。

食堂車の中はがらんとして、客はたつた一人しかゐない。本間さんはそれから一番遠いテエブ

ルへ行つて、白葡萄酒を一杯云ひつけた。實は酒を飲みたい譯でも何でもない。唯、眠くなるまでの時間さへ、つぶす事が出來ればよいのである。だから無愛想なウエエタアが琥珀のやうな酒の杯を、彼の前へ置いて行つた後でも、それにはちよいと脣を觸れたばかりで、すぐにM・C・Cへ火をつけた。煙草の煙は小さな青い輪を重ねて、明い電燈の光の中へ、悠々とのぼつて行く。本間さんはテエブルの下に長々と足をのばしながら、始めて樂に息がつけるやうな心もちになつた。

が、體だけはくつろいでも、氣分は妙に沈んでゐる。何だかかうして坐つてゐると、硝子戸の外のくら暗が、急にこつちへはひつて來さうな氣がしないでもない。或は白いテエブル・クロオスの上に、行儀よく並んでゐる皿やコツプが、汽車の進行する方向へ、一時に辷り出しさうな心もちもする。それがはげしい雨の音と共に、次第に重苦しく心をおさへ始めた時、本間さんは物に脅されたやうな眼をあげて、われ知らず食堂車の中を見まはした。鏡をはめこんだカツプ・ボオド、動きながら燃えてゐる幾つかの電燈、菜の花をさした硝子の花瓶、——そんな物が、いづれも耳に聞えない聲を出して、ひしめいてでもゐるやうに、慌しく眼にはひつて來る。が、それ

らのすべてよりも本間さんの注意を惹いたものは、向ふのテエブルに肘をついて、ウヰスキイらしい杯を嘗めてゐる、たつた一人の客であつた。

客は斑白の老紳士で、血色のいい兩頰には、聊か西洋人じみた疎な髯を貯へてゐる。これはつんと尖つた鼻の先へ、鐵縁の鼻眼鏡をかけたので、殊にさう云ふ感じを深くさせた。着てゐるのは黑の背廣であるが、遠方から一見した所でも、決して上等な洋服ではないらしい。――その老紳士が、本間さんと同時に眼をあげて、見るともなくこつちへ眼をやつた。本間さんはその時、心の中で思はず「おや」と云ふかすかな叫び聲を發したのである。

それは何故かと云ふと、本間さんにはその老紳士の顏が、どこかで一度見た事があるやうに思はれた。尤も實際の顏を見たのだか、寫眞で見たのだか、その邊ははつきりわからない。が、見た覺えは確にある。そこで本間さんは、慌しく頭の中で知つてゐる人の名前を點檢した。

すると、まだその點檢がすまない中に、老紳士はつと立上つて、車の動搖に抵抗しながら、大股に本間さんの前へ歩みよつた。さうしてそのテエブルの向うへ、無造作に腰を下すと、壯年のやうな大きな聲を出して、「やあ失敬」と聲をかけた。

本間さんは何だかわからないが、年長者の手前、意味のない微笑を浮べながら、鷹揚に一寸頭を下げた。
「君は僕を知つてゐますか。なに知つてゐない？ 知つてゐなければ、ゐなくつてもよろしい。君は大學の學生でせう。しかも文科大學だ。僕も君と似たやうな商賣をしてゐる人間です。事によると、同業組合の一人かも知れない。何です、君の專門は？」
「史學科です。」
「はゝあ、史學。君もドクタア・ジョンソンに輕蔑される一人ですね。ジョンソン曰、歷史家は almanac-maker にすぎない。」
老紳士はかう云つて、頸を後へ反らせながら、大きな聲を出して笑ひ出した。もう大分醉がまはつてゐるのであらう。本間さんは返事をしずに、唯にやにやほゝ笑みながら、その間に相手の身のまはりを注意深く觀察した。老紳士は低い折襟に、黑のネクタイをして、所々すりきれたチヨツキの胸に太い時計の銀鎖を、物々しくぶらさげてゐる。が、この服裝のみすぼらしいのは、決して貧乏でさうしてゐるのではないらしい。その證據には襟でもシャツの袖口でも、皆新しい

白い色を、つめたく肉の上に硬ばらしてゐる。恐らく學者とか何とか云ふ階級に屬する人なので、完く身なりなどには無頓着なのであらう。

「オールマナツク・メエカア。正にそれにちがひない。いや僕の考へる所では、それさへ甚だ疑問ですね。しかしそんな事は、どうでもよろしい。それより君の特に研究しようとしてゐるのは、何ですか。」

「維新史です。」

「すると卒業論文の題目も、やはりその範圍內にある譯ですね。」

本間さんは何だか、口頭試驗でもうけてゐるやうな心もちになつた。この相手の口吻には、妙に人を追窮するやうな所があつて、それが結局自分を飛んでもない所へ陷れさうな豫感が、この時ぼんやりながらしたからである。そこで本間さんは思ひ出したやうに、白葡萄酒の杯をとりあげながら、わざと簡單に「西南戰爭を問題にするつもりです」と、から答へた。

すると老紳士は、自分も急に口ざみしくなつたと見えて、體を半分後の方へ扭ぢまげると、怒鳴りつけるやうな聲を出して、「おい、ウヰスキイを一杯」と命令した。さうしてそれが來るのを

待つまでもなく、本間さんの方へ向き直つて、鼻眼鏡の後に一種の嘲笑の色を浮べながら、こんな事をしやべり出した。

「西南戰爭ですか。それは面白い。僕も叔父があの時賊軍に加はつて、討死をしたから、そんな興味で少しは事實の穿鑿をやつて見た事がある。君はどう云ふ史料に從つて、研究されるか、知らないが、あの戰爭に就いては隨分誤傳が澤山あつて、しかもその誤傳が又立派に正確な史料で通つてゐます。だから餘程史料の取捨を愼まないと、思ひもよらない誤謬を犯すやうな事になる。君も第一に先、そこへ氣をつけた方が好いでせう。」

本間さんは向うの態度や口ぶりから推して、どうもこの忠告も感謝して然る可きものか、どうか判然しないやうな氣がしたから、白葡萄酒を嘗め嘗め「えゝ」とか何とか、至極曖昧な返事をした。が、老紳士は少しも、こつちの返事などには、注意しない。折からウエエタアが持つて來たウヰスキイで、ちよいと喉を沾すと、ポケツトから瀬戸物のパイプを出して、それへ煙草をつめながら、

「尤も氣をつけても、あぶないかも知れない。かう申すと失禮のやうだが、それ程あの戰爭の史

料には、怪しいものが、多いのですね。」

「さうでせうか。」

老紳士は默つて頷きながら、燐寸をすつてパイプに火をつけた。西洋人じみた顏が、下から赤い火に照らされると、濃い煙が疎な鬚をかすめて、埃及の匂をぷんとさせる。本間さんはそれを見ると何故か急にこの老紳士が、小面憎く感じ出した。醉つてゐるのは勿論、承知してゐる。が、いゝ加減な駄法螺を聞かせられて、それで默つて恐れ入つては、制服の金釦に對しても、面目が立たない。

「しかし私には、それ程特に警戒する必要があるとは思はれませんが――あなたはどう云ふ理由で、さうお考へなのですか。」

「理由？ 理由はないが、事實がある。僕は唯西南戰爭の史料を一々綿密に調べて見た。さうしてその中から、多くの誤傳を發見した。それだけです。が、それだけでも、十分さう云はれはしないですか。」

「それは勿論、さう云はれます。では一つ、その御發見になつた事實を伺ひたいものですね。私

なぞにも大に參考になりさうですから。」

老紳士はパイプを銜へた儘、暫らく口を噤んだ。さうして眼を硝子窓の外へやりながら、妙にちよいと顏をしかめた。その眼の前を横ぎつて、數人の旅客の佇んでゐる停車場が、くら暗と雨との中をうす明く飛びすぎる。本間さんは向うの氣色を窺ひながら、腹の中でざまを見ろと呟きたくなつた。

「政治上の差障りさへなければ、僕も喜んで話しますが――萬一祕密の洩れた事が、山縣公にでも知れて見給へ。それこそ僕一人の迷惑ではありませんからね。」

老紳士は考へ考へ、徐にかう云つた。それから鼻眼鏡の位置を變へて、本間さんの顏を探るやうな眼で眺めたが、そこに浮んでゐる侮蔑の表情が、早くもその眼に映つたのであらう。殘つてゐるウヰスキイを勢よく、ぐいと飮み干すと、急に鬚だらけな顏を近づけて、本間さんの耳もとへ酒臭い口を寄せながら、殆ど嚙みつきでもしさうな調子で、囁いた。

「もし君が他言しないと云ふ約束さへすれば、その中の一つ位は洩らしてあげませう。」

今度は本間さんの方で顏をしかめた。こいつは氣違ひかも知れないと云ふ氣が、その時咄嗟に

頭をかすめたからである。が、それと同時に、ここ迄追窮して置きながら、見す見すその事實なるものを逸してしまふのが、惜しいやうな、心もちもした。そこへ又、これ位な嚇しに乘せられて、尻込みするやうな自分ではないと云ふ、子供じみた負けぬ氣も、幾分かは働いたのであらう。本間さんは短くなつたM・C・Cを、灰皿の中へ抛りこみながら、頸をまつすぐにのばして、はつきりとかう云つた。

「では他言しませんから、その事實と云ふのを伺はせて下さい。」

「よろしい。」

老紳士は一しきり濃い煙をパイプからあげながら、小さな眼でぢつと本間さんの顔を見た。今まで氣がつかずにゐたが、これは氣違ひの眼ではない。さうかと云つて、世間一般の平凡な眼とも違ふ。聰明な、それでゐてやさしみのある、始終何かに微笑を送つてゐるやうな、朗然とした眼である。本間さんは默つて相手と向ひ合ひながら、この眼と向うの言動との間にある、不思議な矛盾を感ぜずにはゐられなかつた。が、勿論老紳士は少しもそんな事には氣がつかない。青い煙草の煙が、鼻眼鏡を繞つて消えてしまふと、その煙の行方を見送るやうに、靜に眼を本間さん

から離して、遠い空間へ漂せながら、頭を稍後へ反らせて殆獨り呟くやうに、こんな途方もない事を云ひ出した。

「細かい事實の相違を擧げてゐては、際限がない。だから一番大きな誤傳を話しませう。それは西郷隆盛が、城山の戰では死ななかつたと云ふ事です。」

これを聞くと本間さんは、急に笑ひがこみ上げて來た。そこでその笑を紛せる爲に新しいM・C・Cへ火をつけながら、強ひて眞面目な聲を出して、「さうですか」と調子を合せた。もうその先を尋きたゞすまでもない。あらゆる正確な史料が認めてゐる西郷隆盛の城山戰死を、無造作に誤傳の中へ數へようとする――それだけで、この老人の所謂事實も、略正體が分つてゐる。成程これは氣違ひでも何でもない。唯、義經と鐵木眞とを同一人にしたり、秀吉を御落胤にしたりする、無邪氣な田舍翁の一人だつたのである。かう思つた本間さんは、可笑しさと腹立たしさと、それから一種の失望とを同時に心の中で感じながら、この上は出來る丈早く、老人との問答を切り上げようと決心した。

「しかもあの時、城山で死ななかつたばかりではない。西郷隆盛は今日までも生きてゐます。」

老紳士はかう云つて、寧ろ昂然と本間さんを一瞥した。本間さんがこれにも、「はゝあ」と云ふ氣のない返事で應じた事は、勿論である。すると相手は、嘲るやうな微笑をちらりと脣頭に浮べながら、今度は靜な口ぶりで、わざとらしく問ひかけた。

「君は僕の云ふ事を信ぜられない。いや辯解しなくつても、信ぜられないと云ふ事はわかつてゐる。しかし――しかしですね。何故君は西鄕隆盛が、今日まで生きてゐると云ふ事を疑はれるのですか。」

「あなたは御自分でも西南戰爭に興味を御持ちになつて、事實の穿鑿をなすつたさうですが、それならこんな事は、恐らく私から申上げるまでもないのでせう。が、さう御尋ねになる以上は、私も知つてゐるだけの事は、申上げたいと思ひます。」

本間さんは先方の惡く落着いた態度が忌々しくなつたのと、それから一刀兩斷に早くこの喜劇の結末をつけたいのとで、大人氣ないと思ひながら、かう云ふ前置きをして置いて、口早やに城山戰死說を辯じ出した。僕はそれを今、詳しくここへ書く必要はない。唯、本間さんの議論が、いつもの通り引證の正確な、如何にも論理の徹底してゐる、決定的なものだつたと云ふ事を書き

さへすれば、それでもう十分である。が、瀨戸物のパイプを銜へた儘、煙を吹き吹き、その議論に耳を傾けてゐた老紳士は、一向辟易したらしい氣色を現さない。鐵縁の鼻眼鏡の後には、不相變小さな眼が、柔な光をたゝへながら、アイロニカルな微笑を浮べてゐる。その眼が又、妙に本間さんの論鋒を鈍らせた。

本間さんの議論が一段落を告げると、老人は悠然とかう云つた。

「成程、或假定の上に立つて云へば、君の說は正しいでせう。」

「さうしてその假定と云ふのは、今君が擧げた加治木常樹城山籠城調査筆記とか、市來四郎日記とか云ふものゝ記事を、間違のない事實だとする事です。だからさう云ふ史料を始めから否定してゐる僕にとつては、折角の君の名論も、徹頭徹尾ノンセンスと云ふより外はない。まあ待ち給へ。それは君はさう云ふ史料の正確な事を、いろいろの方面から辯護する事が出來るでせう。しかし僕はあらゆる辯護を超越した、確な實證を持つてゐる。君はそれを何だと思ひますか。」

本間さんは、聊か煙に捲かれて、ちよいと返事に躊躇した。

「それは西鄉隆盛が僕と一しよに、今この汽車に乘つてゐると云ふ事です。」

老紳士は殆ど嚴肅に近い調子で、のしかかるやうに云ひ切つた。日頃から物に騒がない本間さんが、流石に愕然としたのはこの時である。が、理性は一度脅されても、この位な事でその權威を失墜しはしない。思はず、M・Cの手を口からはなした本間さんは、又その煙をゆつくり吹ひかへしながら、怪しいと云ふ眼つきをして、無言の儘、相手のつんと高い鼻のあたりを眺めた。

「かう云ふ事實に比べたら、君の史料の如きは何ですか。すべてが一片の故紙に過ぎなくなつてしまふでせう。西郷隆盛は城山で死ななかつた。其證據には、今此上り急行列車の一等室に乘り合せてゐる。此位確な事實はありますまい。それとも、やはり君は生きてゐる人間より、紙に書いた文字の方を信頼しますか。」

「さあ――生きてゐると云つても、私が見たのでなければ、信じられません。」

「見たのでなければ？」

老紳士は傲然とした調子で、本間さんの語を繰返した。さうして徐にパイプの灰をはたき出した。

「さうです。見たのでなければ。」

本間さんは又勢を盛返して、わざと冷かに前の疑問をつきつけた。が、老人にとつては、この疑問も、格別、重大な效果を與へなかつたらしい。彼はそれを聞くと依然として傲慢な態度を持しながら、故らに肩を聳かせて見せた。

「同じ汽車に乘つてゐるのだから、君さへ見ようと云へば、今でも見られます。尤も南洲先生はもう眠てしまつたかも知れないが、なにこの一つ前の一等室だから、無駄足をしても大した損ではない。」

老紳士はかう云ふと、瀬戸物のパイプをポケツトへしまひながら、眼で本間さんに「來給へ」と云ふ合圖をして、大儀さうに立ち上つた。かうなつては、本間さんも兎に角一しよに、立たざるを得ない。そこでM・Cを銜へた儘、兩手をズボンのポケツトに入れて、不承々々に席を離れた。さうして蹌踉たる老紳士の後から、二列に並んでゐるテエブルの間を、大股に戸口の方へ歩いて行つた。後には唯、白葡萄酒のコツプとウヰスキイのコツプとが、白いテエブル・クロオスの上へ、うすい半透明な影を落して、列車を襲ひかゝる雨の音の中に、寂しくその影をふるはせてゐる。

　それから十分ばかりたつた後の事である。白葡萄酒のコツプとウヰスキイのコツプとは、再無愛想なウエエタアの手で、琥珀色の液體がその中に充された。いや、そればかりではない。二つのコツプを圍んでは、鼻眼鏡をかけた老紳士と、大學の制服を着た本間さんとが、又前のやうに腰を下してゐる。その一つ向うのテエブルには、さつき二人と入れちがひにはひつて來た、着流しの肥つた男と、藝者らしい女とが、これは海老のフライか何かを突ついてでもゐるらしい。滑かな上方辯の會話が、纏綿として進行する間に、かちやかちや云ふフオオクの音が、しきりなく耳にはひつて來た。

　が、幸ひ本間さんには、少しもそれが氣にならない。何故かと云ふと、本間さんの頭には、今見て來た驚くべき光景が、一ぱいになつて擴がつてゐる。一等室の鶯茶がかつた腰掛と、同じ色の窓帷と、さうしてその間に居睡りをしてゐる、山のやうな白頭の肥大漢と、――あゝ、その堂堂たる相貌に、南洲先生の風骨を認めたのは果して自分の見ちがひであつたらうか。あすこの電

燈は、氣のせゐか、こゝよりも明くない。が、あの特色のある眼もとや口もとは、側へ寄るまでもなくよく見えた。さうしてそれはどうしても、子供の時から見慣れてゐる西郷隆盛の顏であつた。……

「どうですね。これでもまだ、君は城山戰死説を主張しますか。」

老紳士は赤くなつた顏に、晴々した微笑を浮べて、本間さんの答を促した。

「…………」

本間さんは當惑した。自分はどちらを信ずればよいのであらう。萬人に正確だと認められてゐる無數の史料か、或は今見て來た魁偉な老紳士か。前者を疑ふのが自分の頭を疑ふのなら、後者を疑ふのは自分の眼を疑ふのである。本間さんが當惑したのは、少しも偶然ではない。

「君は今現に、南洲先生を眼のあたりに見ながら、しかも猶史料を信じたがつてゐる。」

老紳士はウヰスキイの杯を取り上げ乍ら、講義でもするやうな調子で語を次いだ。

「しかし、一體君の信じたがつてゐる史料とは何か、それから先考へて見給へ。城山戰死説は暫く問題外にしても、凡そ歷史上の判斷を下すに足る程、正確な史料などと云ふものは、どこにだ

つてありはしないです。誰でも或事實の記錄をするには自然と自分でディテエルの取捨選擇をしながら、書いてゆく。これはしないつもりでも、事實としてするのだから仕方がない。と云ふ意味は、それだけもう客觀的の事實から遠ざかると云ふ事です。さうでせう。だから一見當になりさうで、實は甚當にならない。ウォルタア・ラレエが一旦起した世界史の稿を廢した話なぞは、よくこの間の消息を語つてゐる。あれは君も知つてゐるでせう。實際我々には目前の事さへわからない。」

本間さんは實を云ふと、そんな事は少しも知らなかつた。が、默つてゐる中に、老紳士の方で知つてゐるものときめてしまつたらしい。

「そこで城山戰死說だが、あの記錄にしても、疑ひを挾む餘地は澤山ある。成程西鄕隆盛が明治十年九月二十四日に、城山の戰で、死んだと云ふ事だけはどの史料も一致してゐませう。しかしそれは唯、西鄕隆盛と信ぜられる人間が、死んだと云ふのにすぎないのです。その人間が實際西鄕隆盛かどうかは、自ら又問題が違つて來る。ましてその首や首のない屍體を發見した事實になると、さつきも君が云つた通り、異說も決して少くない。そこも疑へば、疑へる筈です。一方さ

う云ふ疑ひがある所へ、君は今この汽車の中で西郷隆盛――と云ひたくなければ、少くとも西郷隆盛に酷似してゐる人間に遇つた。それでも君には史料なるものの方が信ぜられますか。」

「しかしですね。西郷隆盛の屍體は確かにあつたのでせう。さうすると――」

「似てゐる人間は、天下にいくらもゐます。右腕に古い刀創があるとか何とか云ふのも一人に限つた事ではない。君は狄青が濃智高の屍を檢した話を知つてゐますか。」

本間さんは、今度は正直に知らないと白狀した。實はさつきから、相手の妙な論理と、いろいろな事をよく知つてゐるのとに、惱まされて、追々この鼻眼鏡の前に一種の敬意に似たものを感じかかつてゐたのである。老紳士はこの間にポケツトから、又例の瀬戸物のパイプを出して、ゆつくり埃及の煙をくゆらせながら、

「狄青が五十里を追うて、大理に入つた時、敵の屍體を見ると、中に金龍の衣を着てゐるものがある。衆は皆これを智高だと云つたが、狄青は獨り聞かなかつた。『安んぞその詐りにあらざるを知らんや。寧ろ智高を失ふとも、敢て朝廷を誣ひて功を貪らじ』これは道德的に立派なばかりではない。眞理に對する態度としても、望ましい語でせう。所が遺憾ながら、西南戰爭當時、官軍

を指揮した諸將軍は、これ程周密な思慮を缺いてゐた。そこで歷史までも『かも知れぬ』を『である』に置き換へてしまつたのです。」

愈どうにも口が出せなくなつた本間さんは、そこで苦しまぎれに、子供らしい最後の反駁を試みた。

「しかし、そんなによく似てゐる人間がゐるでせうか。」

すると老紳士は、どう云ふ譯か、急に瀨戸物のパイプを口から離して、煙草の煙にむせながら、大きな聲で笑ひ出した。その聲があまり大きかつたせゐか、向うのテエブルにゐた藝者がわざわざふり返つて、怪訝な顏をしながら、こつちを見た。が、老紳士は容易に、笑ひやまない。片手に鼻眼鏡が落ちさうになるのをおさへながら、片手に火のついたパイプを持つて、咽を鳴らし鳴らし、笑つてゐる。本間さんは何だか譯がわからないので、白葡萄酒の杯を前に置いた儘、茫然と唯、相手の顏を眺めてゐた。

「それはゐます。」老人は暫くしてから、やつと息をつきながら、かう云つた。

「今君が向うで居眠りをしてゐるのを見たでせう。あの男なぞは、あんなによく西郷隆盛に似て

ゐるではないですか。」

「ではあれは――あの人は何なのです。」

「あれですか。あれは僕の友人ですよ。本職は醫者で、傍南畫を描く男ですが。」

「西郷隆盛ではないのですね。」

本間さんは眞面目な聲でかう云つて、それから急に顏を赤らめた。今まで自分のつとめてゐた滑稽な役まはりが、この時忽然として新しい光に、照される事になつたからである。

「もし氣に障つたら、勘忍し給へ。僕は君と話してゐる中に、あんまり君が青年らしい正直な考を持つてゐたから、ちよいと惡戲をする氣になつたのです。しかしした事は惡戲でも、云つた事は冗談ではない。――僕はかう云ふ人間です。」

老紳士はポケツトをさぐつて、一枚の名刺を本間さんの前へ出して見せた。名刺には肩書きも何も、刷つてはない。が、本間さんはそれを見て、始つて、この老紳士の顏をどこで見たか、やつと思ひ出す事が出來たのである。――老紳士は本間さんの顏を眺めながら、滿足さうに微笑した。

「先生とは實際夢にも思ひませんでした。私こそいろ〳〵失禮な事を申し上げて、恐縮です。」

「いやさつきの城山戰死說なぞは、中々傑作だつた。君の卒業論文もあゝ云ふ調子なら面白いものが出來るでせう。僕の方の大學にも、今年は一人維新史を專攻した學生がゐる。――まあそんな事より、大に一つ飮み給へ。」

霙まじりの雨も、小止みになつたと見えて、もう窓に音がしなくなつた。女連れの客が立つた後には、硝子の花瓶にさした茶の花ばかりが、冴え返る食堂車の中にかすかな匂を漂はせてゐる。本間さんは白葡萄酒の杯を勢よく飮み干すと、色の出た頰をおさへながら、突然、

「先生はスケプティツクですね。」と云つた。

老紳士は鼻眼鏡の後から、眼でちよいと頷いた。あの始終何かに微笑を送つてゐるやうな朗然とした眼で頷いたのである。

「僕はピルロンの弟子で澤山だ。我々は何も知らない、いやさう云ふ我々自身の事さへも知らない。まして西鄕隆盛の生死をやです。だから、僕は歷史を書くにしても、噓のない歷史なぞを書かうとは思はない。唯如何にもありさうな、美しい歷史さへ書ければ、それで滿足する。僕は若

い時に、小説家にならうと思つた事があつた。なつたらやつぱり、さう云ふ小説を書いてゐたでせう。或はその方が今よりよかつたかも知れない。兎に角僕はスケプティックで澤山だ。君はさう思はないですか。」

（大正六年十二月十五日）

首が落ちた話

上

何小二は軍刀を抛り出すと、夢中で馬の頸にしがみついた。確かに頸を斬られたと思ふ――いや、これはしがみついた後で、さう思つたのかも知れない。唯、何か頸へずんと音を立てゝ、はいつたと思ふ――それと同時に、しがみついたのである。すると馬も創を受けたのであらう。何小二が鞍の前輪へつつぷすが早いか、一聲高く嘶いて、鼻づらを急に空へ向けると、忽ち敵味方のごつたになつた中をつきぬけて、滿目の高粱畑をまつしぐらに走り出した。二三發、銃聲が後から響いたやうに思はれるが、それも彼の耳には、夢のやうにしか聞えない。

人の身の丈よりも高い高粱は、無二無三に駈けてゆく馬に踏みしだかれて、波のやうに起伏する。それが右からも左からも、或は彼の辮髪を掃つたり、或は彼の軍服を叩いたり、或は又彼の頸から流れてゐる、どす黑い血を拭つたりした。が、彼の頭には、それを一々意識するだけの餘

裕がない。唯、斬られたと云ふ簡單な事實だけが、苦しい程はつきり、腦味噌に焦げついてゐる。斬られた。斬られた。――から心の中に繰返しながら、彼は全く機械的に、汗みづくになつた馬の腹を何度も靴の踵で蹴つた。

十分程前、何小二は仲間の騎兵と一しよに、味方の陣地から川一つ隔てた、小さな村の方へ偵察に行く途中、黄いろくなりかけた高粱の畑の中で、突然一隊の日本騎兵と遭遇した。それが餘り突然すぎたので、敵も味方も小銃を發射する暇がない。少くとも味方は、赤い筋のはいつた軍帽と、やはり赤い肋骨のある軍服とが見えると同時に、誰からともなく一度に軍刀をひき拔いて、咄嗟に馬の頭をその方へ立て直した。勿論その時は、萬一自分が殺されるかも知れないなどと云ふことは、誰の頭にもはいつて來ない。そこにあるのは、唯敵である。或は敵を殺す事である。だから彼等は馬の頭を立て直すと、いづれも犬のやうに齒をむき出しながら、猛然として日本騎兵のゐる方へ殺到した。すると敵も彼等と同じ衝動に支配されてゐたのであらう。一瞬の後には、

やはり齒をむき出した、彼等の顏を鏡に映したやうな顏が、幾つも彼等の左右に出沒し始めた。さうしてその顏と共に、何本かの軍刀が、忙しく彼等の周圍に、風を切る音を起し始めた。

それから後の事は、どうも時間の觀念が明瞭でない。丈の高い高粱が、まるで暴風雨にでも遇つたやうにゆすぶれたり、そのゆすぶれてゐる穗の先に、銅のやうな太陽が懸つてゐたりした事は、不思議な位はつきり覺えてゐる。が、その騷ぎがどの位つづいたか、その間にどんな事件がどんな順序で起つたか、かう云ふ點になると、殆、何一つはつきりしない。兎に角その間中何小二は自分にもまるで意味を成さない事を、氣違ひのやうな大聲で喚きながら、無暗に軍刀をふりまはしてゐた。一度その軍刀が赤くなつた事もあるやうに思ふがどうも手答へはしなかつたらしい。その中に、ふりまはしてゐる軍刀の欛が、だん／＼脂汗でぬめつて來る。さうしてそれにつれて、妙に口の中が渇いて來る。そこへ殆、眼球がとび出しさうに眼を見開いた、血相の變つてゐる日本騎兵の顏が、大きな口を開きながら、突然彼の馬の前に跳り出した。赤い筋のある軍帽が、半ば裂けた間からは、いが栗坊主の頭が覗いてゐる。何小二はそれを見ると、いきなり軍刀をふり上げて、力一ぱいその帽子の上へ斬り下した。が、こつちの軍刀に觸れたのは、相手の軍

帽でもなければ、その下にある頭でもない。それを下から刎ね上げた、向うの軍刀の鋼である。その音が煮えくり返るやうな周圍の騷ぎの中に、恐しくかんと冴え渡つて、磨いた鐵の冷かな臭を、一度に鋭く鼻の孔の中へ送りこんだ。さうしてそれと共に、眩く日を反射した、幅の廣い向うの軍刀が、頭の眞上へ來て、くるりと大きな輪を描いた。――と思つた時、何小二の頸のつけ根へは、何とも云へない、つめたい物が、ずんと音を立てゝ、はいつたのである。

馬は、創の痛みで唸つてゐる何小二を乘せた儘、高粱畑の中を無二無三に駈けて行つた。どこまで駈けても、高粱は盡きる容子もなく茂つてゐる。人馬の聲や軍刀の斬り合ふ音は、もう何時の間にか消えてしまつた。日の光も秋は、遼東と日本と變りがない。

繰返して云ふが、何小二は馬の背に搖られながら、創の痛みで唸つてゐた。が、彼の食ひしばつた齒の間を洩れる聲には、唯唸り聲と云ふ以上に、もう少し複雜な意味がある。と云ふのは、彼は獨り肉體的の苦痛の爲にのみ、呻吟してゐたのではない。精神的な苦痛の爲に――死の恐怖

を中心として、目まぐるしい感情の變化の爲に、泣き喚いてゐたのである。

彼は永久にこの世界に別れるのが、たまらなく悲しかつた。それから彼をこの世界と別れさせるやうにした、あらゆる人間や事件が恨めしかつた。それからどうしてもこの世界と別れなければならない彼自身が腹立しかつた。それから——こんな種々雜多の感情は、それからそれへと縁を引いて際限なく彼を虐みに來る。だから彼はこれらの感情が往來するのに從つて、「死ぬ。死ぬ。」と叫んで見たり、父や母の名を呼んで見たり、或は又日本騎兵の惡口を云つて見たりした。が、不幸にしてそれが一度彼の口を出ると、何の意味も持つてゐない、嗄れた唸り聲に變つてしまふ。それほどもう彼は弱つてでもゐたのであらう。

「私ほどの不幸な人間はない。この若さにこんな所まで戰に來て、しかも犬のやうに譯もなく殺されてしまふ。それには第一に、私を斬つた日本人が憎い。その次には私たちを偵察に出した、私の隊の上官が憎い。最後にこんな戰爭を始めた、日本國と清國とが憎い。いや憎いものはまだ外にもある。私を兵卒にした事情に幾分でも關係のある人間が、皆私には敵と變りがない。私はさう云ふいろ〳〵の人間のおかげで、したい事の澤山あるこの世の中と、今の今別れてしまふ。

あゝ、さう云ふ人間や事情のするなりにさせて置いた私は、何と云ふ莫迦だらう。」

何小二はその唸り聲の中にこんな意味を含めながら、馬の平首にかじりついて、何處までも高粱の中を走つて行つた。その勢に驚いて、時々鶉の群が慌しくそこここから飛び立つたが、馬は元よりそんな事には頓着しない。背中に乘せてゐる主人が、時々ずり落ちさうになるのにもかまはずに、泡を吐き〳〵駈けつゞけてゐる。

だからもし運命が許したら、何小二はこの不斷の呻吟の中に、自分の不幸を上天に訴へながら、あの銅のやうな太陽が西の空に傾くまで、日一日馬の上でゆられ通したのに相違ない。が、この平地が次第に緩い斜面をつくつて、高粱と高粱との間を流れてゐる、幅の狹い濁り川が、行方に明く開けた時、運命は二三本の川楊の木になつて、もう落ちかゝつた葉を低い梢に集めながら、嚴しく川のふちに立つてゐた。さうして、何小二の馬がその間を通りぬけるが早いか、いきなりその茂つた枝の中に、彼の體を抱き上げて、水際の柔な泥の上へまつさかさまに抛り出した。

その途端に何小二は、どうか云ふ聯想の關係で、空に燃えてゐる鮮な黃いろい炎が眼に見えた。子供の時に彼の家の廚房で、大きな竈の下に燃えてゐるのを見た、鮮な黃いろい炎である。「あゝ

火が燃えてゐる」と思ふ――その次の瞬間には彼はもう何時か正氣を失つてゐた。………

中

馬の上から轉げ落ちた何小二は、全然正氣を失つたのであらうか。成程創の疼みは、何時か殆、しなくなつた。が、彼は土と血とにまみれて、人氣のない川のふちに横はりながら、川楊の葉が撫でてゐる、高い蒼空を見上げた覺えがある。その空は、彼が今まで見たどの空よりも、奥深く蒼く見えた。丁度大きな藍の瓶をさかさまにして、それを下から覗いたやうな心もちである。しかもその瓶の底には、泡の集まつたやうな雲がどこからか生れて來て、又どこかへ倏然と消えてしまふ。これが丁度絶えず動いてゐる川楊の葉に、かき消されて行くやうにも思はれる。

では、何小二は全然正氣を失はずにゐたのであらうか。しかし彼の眼と蒼空との間には實際そこになかつた色々な物が、影のやうに幾つとなく去來した。第一に現れたのは、彼の母親のうすよごれた裙子である。子供の時の彼は、嬉しい時でも、悲しい時でも、何度この裙子にすがつたかわからない。が、これは思はず彼が手を伸ばして、捉へようとする間もなく、眼界から消えて

しまつた。消える時に見ると、裙子は紗のやうに薄くなつて、その向うにある雲の塊を、雲母のやうに透かせてゐる。

その後からは、彼の生まれた家の後にある、だだつ廣い胡麻畑が、辷るやうに流れて來た。さびしい花が日の暮を待つやうに咲いてゐる、眞夏の胡麻畑である。何小二はその胡麻の中に立つてゐる、自分や兄弟たちの姿を探して見た。が、そこに人らしいものゝ影は一つもない。唯色の薄い花と葉とが、ひつそりと一つになつて、薄い日の光に浴してゐる。これは空間を斜に横ぎつて、吊り上げられたやうにすつと消えた。

するとその次には妙なものが空をのたくつて來た。よく見ると、燈夜に街をかついで歩く、あの大きな龍燈である。長さは凡そ四五間もあらうか。竹で造つた骨組みの上へ紙を張つて、それに青と赤との畫の具で、華やかな彩色が施してある。形は畫で見る龍と、少しも變りがない。それが晝間だのに、中へ蠟燭らしい火をともして、彷彿と蒼空へ現れた。その上不思議な事には、其の龍燈が、どうも生きてゐるやうな心もちがする、現に長い鬚などは、ひとりでに左右へ動くらしい。――と思ふ中にそれもだんだん視野の外へ泳いで行つて、そこから急に消えてしまつた。

それが見えなくなると、今度は華奢な女の足が突然空へ現れた。纏足をした足だから、細さは漸ぐ三寸あまりしかない。しなやかにまがつた指の先には、うす白い爪が柔く肉の色を隔ててゐる。小二の心にはその足を見た時の記憶が夢の中で食はれた蚤のやうに、ぼんやり遠い悲しさを運んで來た。もう一度あの足にさはる事が出來たなら、——しかしそれは勿論もう出來ないのに相違ない。こゝとあの足を見た所との間は、何百里と云ふ道程がある。さう思つてゐる中に、足は見る／＼透明になつて、自然と雲の影に吸はれてしまつた。

その足が消えた時である。何小二は心の底から、今までに一度も感じた事のない、不思議な寂しさに襲はれた。彼の頭の上には、大きな蒼空が音もなく蔽ひかかつてゐる。人間はいやでもこの空の下で、そこから落ちて來る風に吹かれながら、みじめな生存を續けて行かなければならない。これは何と云ふ寂しさであらう。さうしてその寂しさを今まで自分が知らなかつたと云ふ事は、何と云ふ又不思議な事であらう。何小二は思はず長いため息をついた。

この時、彼の眼と空との中には、赤い筋のある軍帽をかぶつた日本騎兵の一隊が、今までのどれよりも早い速力で、慌しく進んで來た。さうして又同じやうな速力で、慌しくどこかへ消えて

しまつた。ああ、あの騎兵たちも、寂しさはやはり自分と變らないのであらう。もし彼等が幻でなかつたなら、自分は彼等と互に慰め合つて、せめて一時でもこの寂しさを忘れたい。しかしそれはもう、今になつては遲かつた。

何小二の眼には、とめどもなく涙があふれて來た。その涙に濡れた眼でふり返つた時、彼の今までの生活が、如何に醜いものに滿ちてゐたか、それは今更云ふ必要はない。彼は誰にでも謝りたかつた。さうして又、誰をでも赦したかつた。

「もし私がこゝで助かつたら、私はどんな事をしても、この過去を償ふのだが。」

彼は泣きながら、心の底でかう呟いた。が、限りなく深い、限りなく蒼い空は、まるでそれが耳へはいらないやうに、一尺づつ或は一寸づつ、徐々として彼の胸の上へ下つて來る。その蒼い灝氣の中に、點々としてかすかにきらめくものは、大方晝見える星であらう。もう今はあの影のやうなものも、二度と眸底は横ぎらない。何小二はもう一度歎息して、それから急に脣をふるはせて、最後にだん／＼眼をつぶつて行つた。

下

日清兩國の間の和が媾ぜられてから、一年ばかりたつた、或早春の午前である。北京にある日本公使館内の一室では、公使館附武官の木村陸軍少佐と、折から官命で内地から視察に來た農商務省技師の山川理學士とが、一つテエブルを圍みながら、一碗の珈琲と一本の葉卷とに忙しさを忘れて、のどかな雜談に耽つてゐた。早春とは云ひながら、大きなカミンに火が焚いてあるので、室の中はどうかすると汗がにじむ程暖い。そこへテエブルの上へのせた鉢植ゑの紅梅が時々支那めいた匂を送つて來る。

二人の間の話題は、暫らく西太后で持ち切つてゐたが、やがてそれが一轉して日清戰爭當時の追憶になると、木村少佐は何を思つたか急に立ち上つて、室の隅に置いてあつた神州日報の綴ぢこみを、こつちのテエブルへ持つて來た。さうして、その中の一枚を山川技師の眼の前へひろげると、指で或箇所をさしながら、讀み給へと云ふ眼つきをした。それがあまり唐突だつたので、技師はちよいと驚いたが、相手の少佐が軍人に似合はない、洒脫な人間だと云ふ事は日頃からよ

く心得てゐる。そこで咄嗟に、戰爭に關係した奇拔な逸話を豫想しながら、その紙面へ眼をやると、果してそこには、日本の新聞口調に直すとこんな記事が、四角な字ばかりで物々しく掲げてあつた。

――街の剃頭店主人、何小二なる者は、日淸戰爭に出征して、屢々勳功を顯したる勇士なれど、凱旋後兎角素行修らず、酒と女とに身を持崩してゐたが、去る――日、某酒樓にて飮み仲間の誰彼と口論し、遂に摑み合ひの喧嘩となりたる末、頸部に重傷を負ひ卽刻絕命したり。ことに不思議なるは同人の頸部なる創にして、こはその際兇器にて傷けられたるものにあらず、全く日淸戰爭中戰場にて負ひたる創口が、再、破れたるものにして、實見者の談によれば、格鬪中同人が卓子と共に顚倒するや否や、首は俄然喉の皮一枚を殘して、鮮血と共に床上に轉び落ちたりと云ふ。但、當局はその眞相を疑ひ、目下犯人嚴探中の由なれども、諸城の某甲が首の落ちたる事は、載せて聊齋志異にもあれば、該何小二の如きも、その事なしとは云ふ可らざるか。云々。

山川技師は讀み了ると共に、呆れた顏をして、「何だい、これは」と云つた。すると木村少佐は、ゆつくり葉卷の煙を吐きながら、鷹揚に微笑して、

「面白いだらう。こんな事は支那でなくつては、ありはしない。」
「さうどこにでもあつて、たまるものか。」
山川技師もにやくしながら、長くなつた葉巻の灰を灰皿の中へはたき落した。
「しかも更に面白い事は――」
少佐は妙に眞面目な顏をして、ちよいと語を切つた。
「僕はその何小二と云ふやつを知つてゐるのだ。」
「知つてゐる？　これは驚いた。まさかアツタツシエの癖に、新聞記者と一しよになつて、いい加減な噓を捏造するのではあるまいね。」
「誰がそんなくだらない事をするものか。僕はあの頃――屯の戰で負傷した時に、その何小二と云ふやつも、やはり我軍の野戰病院へ收容されてゐたので、支那語の稽古かたぐ二三度話しをした事があるのだ。頸に創があると云ふのだから、十中八九あの男に違ひない。何でも偵察か何かに出た所が我軍の騎兵と衝突して頸へ一つ日本刀をお見舞申されたと云つてゐた。」
「へえ、妙な緣だね。だがそいつはこの新聞で見ると、無賴漢だと書いてあるではないか。そん

なやつは一層その時に死んでしまつた方が、どの位世間でも助かつたか知れないのだらう。」

「それがあの頃は、極正直な、人の好い人間で、捕虜の中にも、あんな柔順なやつは珍らしい位だつたのだ。だから軍醫官でも何でも、妙にあいつが可愛いかつたと見えて、特別によく療治をしてやつたらしい。あいつは又身の上話をしても、中々面白い事を云つてゐた。殊にあいつが頸に重傷を負つて、馬から落ちた時の心もちを僕に話して聞かせたのは、今でもちやんと覺えてゐる。或川のふちの泥の中にころがりながら、川楊の木の空を見てゐると、母親の裙子だの、女の素足だの、花の咲いた胡麻畑だのが、はつきりその空へ見えたと云ふのだが。」

木村少佐は葉卷を捨てゝ、珈琲茶碗を脣へあてながら、テエブルの上の紅梅へ眼をやつて、獨り語のやうに語を次いだ。

「あいつはそれを見た時に、しみ〴〵今までの自分の生活が淺ましくなつて來たと云つてゐたつけ。」

「それが戰爭がすむと、すぐに無頼漢になつたのか。だから人間はあてにならない。」

山川技師は椅子の背へ頭をつけながら、足をのばして、皮肉に葉卷の煙を天井へ吐いた。

「あてにならないと云ふのは、あいつが猫をかぶつてゐたと云ふ意味か。」

「さうさ。」

「いや、僕はさう思はない。少くともあの時は、あいつも眞面目にさう感じてゐたのだらうと思ふ。恐らくは今度も亦、首が落ちると同時に（新聞の語をその儘使へば）やはりさう感じたらう。僕はそれをこんな風に想像する。あいつは喧嘩をしてゐる中に、醉つてゐたから、譯なく卓子と一しよに抛り出された。さうしてその拍子に、創口が開いて、長い辮髮をぶらさげた首が、ごろりと床の上へころげ落ちた。あいつが前に見た母親の裙子とか、女の素足とか、或は又花のさいてゐる胡麻畑とか云ふものは、やはりそれと同時にあいつの眼の前を、彷彿として往來した事だらう。或は屋根があるのにも關らず、あいつは深い蒼空を、遙か向うに望んだかも知れない。あいつはその時、しみ〳〵又今までの自分の生活が淺ましくなつた。が、今度はもう間に合はない。前には正氣を失つてゐる所を、日本の看護卒が見つけて介抱してやつた。今は喧嘩の相手が、そこをつけこんで打つたり蹴つたりする。そこであいつは後悔した上にも後悔しながら息をひきとつてしまつたのだ。」

山川技師は肩をゆすつて笑つた。

「君は立派な空想家だ。だが、それならどうしてあいつは、一度さう云ふ目に遇ひながら、無頼漢なんぞになつたのだらう。」

「それは君の云ふのとちがつた意味で、人間はあてにならないからだ。」

木村少佐は新しい葉巻に火をつけてから、殆、得意に近い程晴々した調子で、微笑しながらかう云つた。

「我々は我々自身のあてにならない事を、痛切に知つて置く必要がある。實際それを知つてゐるもののみが、幾分でもあてになるのだ。さうしないと、何小二の首が落ちたやうに、我々の人格も、何時どんな時首が落ちるかわからない。――すべて支那の新聞と云ふものは、こんな風に讀まなくてはいけないのだ。」

（大正六年十二月）

袈裟と盛遠

上

夜、盛遠が築土の外で、月魄を眺めながら、落葉を踏んで物思ひに耽つてゐる。

その獨白

「もう月の出だな。何時もは月が出るのを待ちかねる己も、今日ばかりは明くなるのがそら恐しい。今までの己が一夜の中に失はれて、明日からは人殺になり果てるのだと思ふと、かうしてゐても、體が震へて來る。この兩の手が血で赤くなつた時を想像して見るが好い。その時の己は、己自身にとつて、どの位呪はしいものに見えるだらう。それも己の憎む相手を殺すのだつたら、己は何もこんなに心苦しい思をしなくてもすんだのだが、己は今夜、己の憎んでゐない男を殺さなければならない。

己はあの男を以前から見知つてゐる。渡左衛門尉と云ふ名は、今度の事に就いて知つたのだが、男にしては柔しすぎる、色の白い顔を見覺えたのは、何時の事だかわからない。それが袈裟の夫だと云ふ事を知つた時、己が一時嫉妬を感じたのは事實だつた。しかしその嫉妬も、今では己の心の上に何一つ痕跡を殘さないで、綺麗に消え失せてしまつてゐる。だから渡は己にとつて、戀の仇とは云ひながら、憎くもなければ、恨めしくもない。いや、寧、己はあの男に同情してゐると云つても、よい位だ。衣川の口から渡が袈裟を得る爲に、どれだけ心を勞したかを聞いた時、己は現にあの男を可愛く思つた事さへある。渡は袈裟を妻にしたい一心で、わざわざ歌の稽古までしたと云ふ事ではないか。己はあの生眞面目な侍の作つた戀歌を想像すると、知らず識らず微笑が脣に浮んで來る。しかしそれは何も、渡を嘲る微笑ではない。己はさうまでして、女に媚びるあの男をいぢらしく思ふのだ。或は己の愛してゐる女に、それ程までに媚びようとするあの男の熱情が、愛人たる己に或種の滿足を與へてくれるからかも知れない。

しかしさう云へる程、己は袈裟を愛してゐるだらうか。己と袈裟との間の戀愛は、今と昔との二つの時期に別れてゐる。己は袈裟がまだ渡に緣づかない以前に、既に袈裟を愛してゐた。或は

愛してゐると思つてゐた。が、これも今になつて考へると、その時の己の心もちには不純なものも少くはない。己は袈裟に何を求めたのか、童貞だつた頃の己は、明に袈裟の體を求めてゐた。もし多少の誇張を許すなら、己の袈裟に對する愛なるものも、實はこの欲望を美しくした、感傷的な心もちに過ぎなかつた。それが證據には、袈裟との交渉が絶えたその後の三年間、成程己はあの女の事を忘れずにゐたにちがひないが、もしその以前に己があの女の體を知つてゐたなら、それでもやはり忘れずに思ひつゞけてゐたであらうか。己は恥しながら、然りと答へる勇氣はない。己が袈裟に對するその後の愛着の中には、あの女の體を知らずにゐる未練が可成混つてゐる。さうして、その悶々の情を抱きながら、己はとうとう己の恐れてゐた、しかも己の待つてゐた、この今の關係にはいつてしまつた。では今は？ 己は改めて己自身に問ひかけよう。己は果して袈裟を愛してゐるだらうか。

が、その答をする前に、己はまだ一通り、嫌でもかう云ふいきさつを思ひ出す必要がある。――渡邊の橋の供養の時、三年ぶりで偶然袈裟にめぐり遇つた己は、それから凡そ半年ばかりの間、あの女と忍び合ふ機會を作る爲に、あらゆる手段を試みた。さうしてそれに成功した。いや、成

功したばかりではない、その時、己は、己が夢みてゐた通り、袈裟の體を知る事が出來た。が、當時の己を支配してゐたものは、必しも前に云つた、まだあの女の體を知らないと云ふ未練ばかりだつた譯ではない。己は衣川の家で、袈裟と一つ部屋の疊へ坐つた時、既にこの未練が何時か薄くなつてゐるのに氣がついた。それは己がもう童貞でなかつたと云ふ事も、その場になつて、己の欲望を弱める役に立つたのであらう。しかしそれよりも、主な原因は、あの女の容色が、衰へてゐると云ふ事だつた。實際今の袈裟は、もう三年前の袈裟ではない。皮膚は一體に光澤を失つて、目のまはりにはうす黒く暈のやうなものが輪どつてゐる。頰のまはりや顋の下にも、以前の豐な肉附きが、噓のやうになくなつてしまつた。僅に變らないものと云つては、あの張りのある、黒瞳勝な、水々しい目ばかりであらうか。――この變化は己の欲望にとつて、確に恐しい打擊だつた。己は三年ぶりで始めてあの女と向ひ合つた時、思はず視線をそらさずにはゐられなかつた程、強い衝動を感じたのを未にはつきり覺えてゐる。……

では、比較的さう云ふ未練を感じてゐない己が、どうしてあの女に關係したのであらう。己は第一に、妙な征服心に動かされた。袈裟は己と向ひ合つてゐると、あの女が夫の渡に對して持つ

てゐる愛情を、わざと誇張して話して聞かせる。しかも己にはそれが、どうしても或空虚な感じしか起させない。「この女は自分の夫に對して虛榮心を持つてゐる。」――己はかう考へた。「或はこれも、己の憐憫を買ひたくないと云ふ反抗心の現れかも知れない。」――己は又かうも考へた。さうしてそれと共に、この嘘を暴露させてやりたい氣が、刻々に強く己へ働きかけた。唯、何故それを嘘だと思つたかと云はれゝば、それを嘘だと思つた所に、己の己惚れがあると云はれゝば、己には元より抗辯するだけの理由はない。それにも關らず、己はその嘘だと云ふ事を信じてゐた。今でも猶信じてゐる。

が、この征服心も亦、當時の己を支配してゐたすべてではない。その外に――己はかう云つただけでも、己の顏が赤くなるやうな氣がする。己はその外に、純粹な情欲に支配されてゐた。それはあの女の體を知らないと云ふ未練ではない。もつと下等な、相手があの女である必要のない、欲望の爲の欲望だ。恐らくは傀儡の女を買ふ男でも、あの時の己程は卑しくなかつた事であらう。

兎に角己はさう云ふいろいろな動機で、とうとう袈裟と關係した。と云ふよりも袈裟を辱めた。

さうして今、己の最初に出した疑問へ立ち戻ると、――いや、己が袈裟を愛してゐるかどうかなどと云ふ事は、いくら己自身に對してでも、今更改めて問ふ必要はない。己は寧、時にはあの女に憎しみさへも感じてゐる。殊に萬事が完つてから、泣き伏してゐるあの女を、無理に抱き起した時などは、袈裟は破廉恥の己よりも、より破廉恥な女に見えた。亂れた髮のかゝりと云ひ、汗ばんだ顏の化粧と云ひ、一つとしてあの女の心と體との醜さを示してゐないものはない。もしそれまでの己があの女を愛してゐたとしたなら、その愛はあの日を最後として、永久に消えてしまつたのだ。或は、もしそれまでの己があの女を愛してゐなかつたとしたなら、あの日から己の心には新しい憎みが生じたと云つても亦差支へない。さうして、ああ、今夜己はその己が愛してゐない女の爲に、己が憎んでゐない男を殺さうと云ふのではないか！

それも完く、誰の罪でもない。己がこの己の口で、公然と云ひ出した事なのだ。「渡を殺さうてはないか。」――己があの女の耳に口をつけて、かう囁いた時の事を考へると、我ながら氣が違つてゐたのかとさへ疑はれる。しかし己は、さう囁いた。囁くまいと思ひながら、齒を食ひしばつてまでも囁いた。己にはそれが何故囁きたかつたのか、今になつて振りかへつて見ると、どうし

てもよくはわからない。が、もし強ひて考へれば、己はあの女を蔑めば蔑む程、憎く思へば思ふ程、益々何かあの女に凌辱を加へたくてたまらなくなつた。それには渡左衛門尉を、――袈裟がその愛を衒つてゐた夫を殺さうと云ふ位、さうしてそれをあの女に、否應なく承諾させる位、目的に協つた事はない。そこで己は、まるで悪夢に襲はれた人間のやうに、したくもない人殺しを、無理にあの女に勸めたのであらう。それでも己が渡を殺さうと云つた、動機が十分でなかつたなら、後は人間の知らない力が、(天魔波旬とでも云ふが好い。)己の意志を誘つて、邪道へ陷れたとでも解釋するより外はない。兎に角、己は執念深く、何度も同じ事を繰返して、袈裟の耳に囁いた。

　すると袈裟は暫くして、急に顔を上げたと思ふと、素直に己の目ろみに承知すると云ふ返事をした。が、己にはその返事の容易だつたのが、意外だつたばかりではない。その袈裟の顔を見ると、今までに一度も見えなかつた不思議な輝きが目に宿つてゐる。姦婦――さう云ふ氣が己はすぐにした。と同時に、失望に似た心もちが、急に己の目ろみの恐しさを、己の眼の前へ展げて見せた。その間も、あの女の淫りがましい、凋れた容色の厭らしさが、絶えず己を虐んでゐた事は、

元よりわざわざ云ふ必要もない。もし出來たなら、その時に、己は己の約束をその場で破つてしまひたかつた。さうして、あの不貞な女を、辱しめと云ふ辱しめのどん底まで、つき落してしまひたかつた。さうすれば己の良心は、たとへあの女を弄んだにしても、まださう云ふ義憤の後に、避難する事が出來たかも知れない。が、己にはどうしても、さうする餘裕が作れなかつた。まるで己の心もちを見透しでもしたやうに、急に表情を變へたあの女が、ぢつと己の目を見つめた時、——己は正直に白狀する。己が日と時刻とをきめて、渡を殺す約束を結ぶやうな羽目に陷つたのは、完く萬一己が承知しない場合に、袈裟が己に加へようとする復讐の恐怖からだつた。いや、今でも猶この恐怖は、執念深く己の心を捕へてゐる。臆病だと哂ふ奴は、いくらでも哂ふが好い。それはあの時の袈裟を知らないもののする事だ。「己が渡を殺さないとすれば、よし袈裟自身は手を下さないにしても、必、己はこの女に殺されるだらう。その位なら己の方で渡を殺してしまつてやる。」——涙がなくて泣いてゐるあの女の目を見た時に、己は絶望的にかう思つた。しかもこの己の恐怖は、己が誓言をした後で、袈裟が蒼白い顏に片靨をよせながら、目を伏せて笑つたのを見た時に、裏書きをされたではないか。

ああ、己はその呪はしい約束の爲に、汚れた上にも汚れた心の上へ、今又人殺しの罪を加へるのだ。もし今夜に差迫つて、この約束を破つたなら——これも、やはり己には堪へられない。一つには誓言の手前もある。さうして又一つには、——己は復讐を恐れると云つた。それも決して嘘ではない。しかしその上にまだ何かある。それは何だ？ この己を、この臆病な己を追ひやつて罪もない男を殺させる、その大きな力は何だ？ 己にはわからない。わからないが、事によると——いやそんな事はない。己はあの女を蔑んでゐる。恐れてゐる。憎んでゐる。しかしそれでも猶、それでも猶、己はあの女を愛してゐるせゐかも知れない。」

盛遠は徘徊を續けながら、再、口を開かない。月明。どこかで今樣を謠ふ聲がする。

げに人間の心こそ、無明の闇も異らね、
たゞ煩惱の火と燃えて、消ゆるばかりぞ命なる。

下

夜、袈裟が帳臺の外で、燈臺の光に背き乍ら、袖を嚙んで物思ひに耽つてゐる。

その獨白

「あの人は來るのかしら、來ないのかしら。よもや來ない事はあるまいと思ふけれど、もう彼是月が傾くのに、足音もしない所を見ると、急に氣でも變つたではあるまいか。もしひよつとして來なかつたら――ああ、私はまるで傀儡の女のやうにこの恥しい顏をあげて、又日の目を見なければならない。そんなあつかましい、邪な事がどうして私に出來るだらう。その時の私こそ、あの路ばたに捨ててある死骸と少しも變りはない。辱められ、踏みにじられ、揚句の果にその身の恥をのめのめと明るみに曝されて、それでもやはり啞のやうに默つてゐなければならないのだから。私は萬一さうなつたら、たとひ死んでも死にきれない。いやいや、あの人は必、來る。私はこの間別れ際に、あの人の目を覗きこんだ時から、さう思はずにはゐられなかつた。あの人は私を怖がつてゐる。私を憎み、私を蔑みながら、それでも猶私を怖がつてゐる。成程私が私自身を賴みにするのだつたら、あの人が必、來るとは云はれないだらう。が、私はあの人を賴みにしてゐる。あの人の利己心を賴みにしてゐる。いや、利己心が起させる卑しい恐怖を賴みにしてゐる。

だから私はかう云はれるのだ。あの人はきつと忍んで來るのに違ひない。……

しかし私自身を賴みにする事の出來なくなつた私は、何と云ふみじめな人間だらう。三年前の私は、私自身を、この私の美しさを、何よりも亦賴みにしてゐた。三年前と云ふよりも、或はあの日までと云つた方が、もつとほんとうに近いかも知れない。あの日、伯母樣の家の一間で、あの人と會つた時に、私はたつた一目見たばかりで、あの人の心に映つてゐる私の醜さを知つてしまつた。あの人は何事もないやうな顏をして、いろいろ私を唆かすやうな、やさしい語をかけてくれる。が、一度自分の醜さを知つた女の心が、どうしてそんな語に慰められよう。私は唯、口惜しかつた。恐しかつた。悲しかつた。子供の時に乳母に抱かれて、月蝕を見た氣味の惡さも、あの時の心もちに比べれば、どの位ましだかわからない。私の持つてゐたさまざまな夢は、一度にどこかへ消えてしまふ。後には唯、雨のふる明け方のやうな寂しさが、ぢつと私の身のまはりを取り圍んでゐるばかり――私はその寂しさに震へながら、死んだも同樣なこの體を、とうとうあの人に任せてしまつた。愛してもゐないあの人に、私を憎んでゐる、私を蔑んでゐる、色好みなあの人に。――私は私の醜さを見せつけられた、その寂しさに堪へなかつたのであらうか。さ

うしてあの人の胸に顏を當てる、熱に浮かされたやうな一瞬間にすべてを欺かうとしたのであらうか。さもなければ又、あの人同樣、私も唯汚らはしい心もちに動かされてゐたのであらうか。さう思つただけでも、私は恥しい。恥しい。恥しい。殊にあの人の腕を離れて、又自由な體に歸つた時、どんなに私は私自身を淺間しく思つた事であらう。

私は腹立たしさと寂しさとで、いくら泣くまいと思つても、止め度なく涙が溢れて來た。けれども、それは何も、操を破られたと云ふ事だけが悲しかつた譯ではない。操を破られながら、その上にも卑められてゐると云ふ事が、丁度癩を病んだ犬のやうに、憎まれながらも虐まれてゐると云ふ事が、何よりも私には苦しかつた。さうしてそれから私は一體何をしてゐたのであらう。今になつて考へると、それも遠い昔の記憶のやうに朧げにしかわからない。唯、すすり上げて泣いてゐる間に、あの人の口髭が私の耳にさはつたと思ふと、熱い息と一しよに低い聲で、「渡を殺さうではないか。」と云ふ語が、囁かれたのを覺えてゐる。私はそれを聞くと同時に、未に自分にもわからない、不思議に生々した心もちになつた。生々した？　もし月の光が明いと云ふのなら、それも生々した心もちであらう。が、それはどこまでも日の光の明さとは違ふ、生々した心もち

だつた。しかし私は、やはりこの恐しい語の爲に、慰められたのではなかつたらうか。ああ、私は、女と云ふものは、自分の夫を殺してまでも、猶人に愛されるのが嬉しく感ぜられるものなのだらうか。

私はその月夜の明さに似た、寂しい、生々した心もちで、又暫く泣きつづけた。さうして？　さうして？　何時、私は、あの人の手引きをして夫を討たせると云ふ約束を、結んでなどしまつたのであらう。しかしその約束を結ぶと一しよに、私は始めて夫の事を思出した。私は正直に始めてと云はう。それまでの私の心は、唯、私の事を、辱められた私の事を、一圖にぢつと思つてゐた。それがこの時、夫の事を、あの內氣な夫の事を、――いや、夫の事ではない。私に何か云ふ時の、微笑した夫の顏を、ありあり眼の前に思ひ出した。私のもくろみが、ふと胸に浮んだのも、恐らくその顏を思ひ出した刹那の事であつたらう。何故と云へば、その時に私はもう死ぬ覺悟をきめてゐた。さうして又きめる事の出來たのが嬉しかつた。しかし泣き止んだ私が顏を上げて、あの人の方を眺めた時、さうしてそこに前の通り、あの人の心に映つてゐる私の醜さを見つけた時、私は私の嬉しさが一度に消えてしまつたやうな心もちがする。それは――私は又、乳母

と見た月蝕の暗さを思ひ出してしまふ。それはこの嬉しさの底に隱れてゐる、さまざまの物の怪を一時に放つたやうなものだつた。私が夫の身代りになると云ふ事は、果して夫を愛してゐるからだらうか。いや、いや、私はさう云ふ都合の好い口實の後で、あの人に體を任かした私の罪の償ひをしようと云ふ氣を持つてゐた。自害をする勇氣のない私は。少しでも世間の眼に私自身を善く見せたい、さもしい心もちがある私は。けれどもそれはまだ大目にも見られよう。私はもつと卑しかつた。もつと、もつと醜かつた。夫の身代りに立つと云ふ名の下で、私はあの人の憎しみに、あの人の蔑みに、さうしてあの人が私を弄んだ、その邪な情欲に、仇を取らうとしてゐたではないか。それが證據には、あの人の顏を見ると、あの月の光のやうな、不思議な生々しさも消えてしまつて、唯、悲しい心もちばかりが、忽ち私の心を凍らせてしまふ。私は夫の爲に死ぬのではない。私は私の爲に死なうとする。私の心を傷けられた口惜しさと、私の體を汚された恨めしさと、その二つの爲に死なうとする。ああ、私は生き甲斐がなかつたばかりではない。死に甲斐さへもなかつたのだ。

しかしその死甲斐のない死に方でさへ、生きてゐるよりは、どの位望ましいかわからない。私

は悲しいのを無理にほほ笑みながら、繰返してあの人と夫を殺す約束をした。感じの早いあの人は、さう云ふ私の語から、もし萬一約束を守らなかつた曉には、どんなことを私がしでかすか、大方推察のついた事であらう。して見れば、誓言までしたあの人が、忍んで來ないと云ふ筈はない。――あれは風の音であらうか――あの日以來の苦しい思が、今夜でやつと盡きるかと思へば、流石に氣の緩むやうな心もちもする。明日の日は、必、首のない私の死骸の上に、うすら寒い光を落すだらう。それを見たら、夫は――いや、夫の事は思ふまい。夫は私を愛してゐる。けれど、私にはその愛を、どうしようと云ふ力もない。昔から私にはたつた一人の男しか愛せなかつた。さうしてその一人の男が、今夜私を殺しに來るのだ。この燈臺の光でさへさう云ふ私には晴れがましい。しかもその戀人に、虐まれ果ててゐる私には。」

袈裟は、燈臺の火を吹き消してしまふ。程なく、暗の中でかすかに蔀を開く音。それと共にうすい月の光がさす。

（大正七年三月）

蜘蛛の糸

一

或日の事でございます。御釋迦樣は極樂の蓮池のふちを、獨りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極樂は丁度朝なのでございませう。

やがて御釋迦樣はその池のふちに御佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覽になりました。この極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つて居りますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るやうに、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多と云ふ男が一人、外の罪人と一しよに蠢いてゐる姿が、御眼に

止りました。この犍陀多と云ふ男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ惡事を働いた大泥坊でございますが、それでもたつた一つ、善い事を致した覺えがございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を擧げて、踏み殺さうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違ひない。その命を無暗にとると云ふ事は、いくら何でも可哀さうだ。」と、かう急に思ひ返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやつたからでございます。

御釋迦樣は地獄の容子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出來るなら、この男を地獄から救ひ出してやらうと御考へになりました。幸、側を見ますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をかけて居ります。御釋迦樣はその蜘蛛の絲をそつと御手に御取りになつて、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まつすぐにそれを御下しなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一しよに、浮いたり沈んだりしてゐた犍陀多でございます。何しろどちらを見ても、まつ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと云つたらございません。その上あたりは墓の中のやうにしんと靜まり返つて、たまに聞えるものと云つては、唯罪人がつく微な嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちて來る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございませう。ですからさすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかつた蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

所が或時の事でございます。何氣なく犍陀多が頭を擧げて、血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるやうに、一すぢ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて參るのではございませんか。犍陀

多はこれを見ると、思はず手を拍つて喜びました。この絲に縋りついて、どこまでものぼつて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと、極樂へはいる事さへも出來ませう。さうすれば、もう針の山へ追ひ上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございません。

かう思ひましたから犍陀多は、早速その蜘蛛の絲を兩手でしつかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、かう云ふ事には昔から、慣れ切つてゐるのでございます。

しかし地獄と極樂との間は、何萬里となくございますから、いくら焦つて見た所で、容易に上へは出られません。稍しばらくのぼる中に、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなつてしまひました。そこで仕方がございませんから、先一休み休むつもりで、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼつた甲斐があつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもう暗の底に何時の間にかかくれて居ります。それからあのぼんやり光つてゐる恐しい針の山も、足の下

になつてしまひました。この分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。犍陀多は兩手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ來てから何年にも出した事のない聲で、「しめた。しめた。」と笑ひました。所がふと氣がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、數限もない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へ一心によぢのぼつて來るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、暫くは唯、莫迦のやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさへ斷れさうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へる事が出來ませう。もし萬一途中で斷れたと致しましたら、折角ここへまでのぼつて來たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら、大變でございます。が、さう云ふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まつ暗な血の池の底から、うようよと這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼつて參ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに斷れて、落ちてしまふのに違ひありません。

そこで犍陀多は大きな聲を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たち

は一體誰に尋いて、のぼつて來た。下りろ。下りろ。」と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下つてゐる所から、ぷつりと音を立てて斷れました。ですから、犍陀多もたまりません。あつと云ふ間もなく風を切つて、獨樂のやうにくるくるまはりながら、見る見る中に暗の底へ、まつさかさまに落ちてしまひました。

後には唯極樂の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございます。

三

御釋迦樣は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をぢつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうな御顏をなさりながら、又ぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出さうとする、犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまつたのが、御釋迦樣の御目から見

ると、淺間しく思召されたのでございませう。

しかし極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のやうな白い花は、御釋迦様の御足のまはりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極樂ももう午に近くなつたのでございませう。

（大正七年四月十六日）

630

（大森製本）

昭和九年十月十日印刷
昭和九年十月十五日發行

芥川龍之介全集第一卷

著作者　芥川龍之介

發行者　岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋通町三番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十七番地

印刷所　精興社印刷所
東京市神田區錦町三丁目十七番地

發行所　岩波書店
東京市神田區一ツ橋通町三番地
電話九段(33)二一八七・一八八八番
二一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番